

リリカルなのは S E E D

機械天使

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

CE71 9月27日 ある一機の機体が戦艦を守るためにポロポロの体で受け止めて爆散をした。

その機体の名前は「ストライクガンダム」

そして彼は目を覚ましたのはある屋敷の家だった。

出会う魔法少女たち果たして彼の第二の人生？は。

ガンダムSEEDのストライクガンダムが自我に目覚めてリリカルなのはの世界で行動をするお話。

目次

新たな世界にて	1
新たなストライカー　メイドストライカーとクリーンストライカー	6
ストライク　異世界での初の戦い	9
ジュエルシード探し	13
新たな魔導士フェイト	19
温泉旅行へ	23
時空管理局	26
中へ突撃、ストライクが見たものとは	32
再会の機体	36
襲われるなのは。	40
事情聴取	48
なのは目を覚ます／ナンバーズ起動。	53
現れた敵について。	59
特訓開始	63
ブリッツ気配に気づく。	65
囲む時空管理局	71
レッドフレーム	76
インパルス対エクシア	82
目を覚ました青年たち。	86
再会の機体。	93
闇の書の管理者との戦い　はやてを救えストライク!!	100
ストライク奮闘!!	108
平和な日々	113

ストライク新たな姿

120

温泉旅行へ

127

すずかたちを追いかける。

133

翼が生えたガンダム。

140

ストライクの新たなストライカー生成 インパルスたちの日常

145

なのはたちの特訓 アークエンジェル発進。

153

翠屋に住む男性二人。

161

ストライクたちミッドチルダへ。

166

雪の中での戦い。

171

ビルドストライク対アジーの模擬戦。

177

昭弘とラフタの結婚式。

182

白い戦艦の正体。

188

ティーダの移動

194

迫りくるMS隊

200

襲撃されたインパルス。

207

ストライクたちメンテナンスへ

213

倒れている人物。懐かしい再会

217

リボーンズキャノン現る。

224

インパルスの考え

231

ストライクとアジーとリインフォース

238

流派東方不敗は王者の風よ!!

244

ガンダムとシャア アリサの家へ

249

ガンダムとシャアの実力

255

インパルスたちのメンテナンス

258

ダークアクシズの幹部！	262
戻れない（・ω・）	268
二体のMS	273
自由の翼	278
アークエンジェル	281
ジャンク屋	287
ストライク調べる	292
さらばガンダムフォース	296
インパルスの思い	301
ストライクの日	305
ストライクメイド行きまーす!!	308
ドクロのガンダム	311
またやってきた人物	314

新たな世界にて

CE71 9月地球連合軍はプラントに対して核ミサイルを使ったピースメーカー隊を出動させてプラントを破壊するために出撃する。

一方のザフトは新兵器「ジェネシス」を使い地球連合軍のMSや戦艦などを撃破していく中、一機の機体が戦艦の方へと帰還をしようとしていた。

右手と左足は攻撃を受けてなくなっており、その機体は戦艦の方へ戻るために移動をしていた。

機体名はGAT-X105「ストライクガンダム」だ、彼はザフトの新型ガンダム『プロヴィデンスガンダム』との戦いで中波をしてみまいパイロットのムウ・ラ・フラガは戦艦アークエンジェルへと帰還するために動いていた。

白い戦艦アークエンジェルは同型艦の黒い戦艦ドミニオンと戦っていた、お互いボロボロの状態になっておりドミニオンから脱出艇が発射される中陽電子砲『ローエン格林』が動いていた。

ムルタ・アズラエルはアークエンジェルを沈めるためにローエン格林を照準をつけていた。

そして放たれたローエン格林はアークエンジェルには当たらなかった、その前にストライクガンダムが立ちその砲撃を受けるが……そのまま爆散をしまう。

こうしてストライクガンダムは船を守るために爆散をしたのであった。

場所は変わり地球のある屋敷にて。

「うわー綺麗な星空!!」

紫の髪をした女の子は屋敷の窓から星を見ていた、今日は流れ星が流れており綺麗な夜空だからだ。

「すずか様今日はお休みになられた方がいいですよ?」

「えーフアリンお願い。」

「うとう私が後で怒られてしまうじゃないですか!!」

「あ!!綺麗な流れ星!!ってあれ?」

「どうしたのですかさすがさま?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「さすがと呼ばれた少女は突然部屋を飛びだして走っていき屋敷を出ていく、ファリンは追いかけていく。

「お嬢様ああああああ!!待ってくださいいいいいいい!!」

「はあ・・・・・・・・・・はあ・・・・・・・・・・」

彼女は疲れていても流れ星が落ちた場所へ走っていく、ファリンも後ろから彼女を追い駆けながらそこ場所へとやってきた。

「ここに何かあるのでしょうかお嬢様。」

「ファリンあれ!!」

「あれ?」

「さすががさした方角を見る、そこには灰色の機体が五体満足で倒れていた、何も装備されていないがファリンはすぐにこれが機械だということがわかる。

(でもこんなロボットは見たことがありません・・・・・・・・)

「とりあえず運ぼう!!ファリン!!」

「えっと了解です!!」

ファリンはその機体を背負ったが予想よりも軽かったので屋敷の方へと向かうのであった。

彼女とすずかは勝手に家を出ていったことに怒られたが背中に背負ってきたのを見て彼女の姉は怒るのをやめてメンテナンスルームへ運ぶように指示を出すのであった。

???
side

「ここはどこだろうか?戦いはどうなった!!アークエンジェルは無事なのだろうか・・・・・・・・俺は爆散をってしまったからわからないけどフリーダムガンダムやジャスティスガンダム、バスターたちが頑張っているから問題ないか・・・・・・・・」

「は!!」

俺は目を覚ました、だが見たことがない場所だなど思いつつ俺は腕などを見た。

「右手と左足がある？馬鹿な……プロヴィデンスとの戦いでなくなつたはずなのに……」

「あらしゃべるロボットだなんて驚きだわ。」

俺は声をした方を見ると紫の髪をした女性が座っておりその隣にはメイド服を着た人物がいた。

「……ここはどこだ？戦いはどうなったんだ!!」

「落ち着きなさい、まずここは私たちの屋敷。それで戦いとはいったいどういうことかしら？」

「何？」

屋敷の中なのか？おかしい俺の通常の大きさでは家の中には入れないはずだ。それなのになぜ？俺は鏡の方を見ると全高17・72mの大きさだった俺の全高が小さくなっている。

そして俺の色はフェイズシフト装甲が落ちているため灰色の状態だ、このままじゃ悪いなと思ひ俺はフェイズシフト装甲を展開をする。

「色が変わりました!？」

「ああこれが俺の本来の色なんだ。(おかしいエネルギーゲージが減らない？いったいどうなっているんだ?)」

先ほどフェイズシフト装甲を展開をさせてみたがエネルギーが減らない状況になつていた、それよりもまずは情報が知りたい。

「すまないがここがどこなのか教えてもらってもいいか？」

「ここは海鳴市の月村家の屋敷でございます。」

「海鳴市？」

聞いたことがない地名だ、俺の中にあるコンピューターでもエラーが発生をしている。俺をここまで運んでくれたのは月村忍さんの妹の月村すずかという少女と今いないメイドのファリンという人物が俺を見つけて運んでくれたそうだ。

その時は機能が停止しており先ほど目を覚ました時に情報が流れてきた。

「さて次はこちらがあなたに質問をする番ね？あなたは一体何者なの？」

「俺はG A T—X105『ストライクガンダム』という名前だ。」

「G A T—X105?」

「ストライクガンダム?」

(この反応、ここは俺が知らない世界で間違いないだろうな……ストライカーパックもなんでか知らないが俺の中に収納されているみたいだ。状況によって出すことができるみたいだが……)

俺は月村忍からこのことを聞かされて彼女たちは人間と違うことも聞いた、彼女たちは吸血鬼という存在らしい、吸血鬼などコーデイネーターやナチュラルとあまり変わらん気がするのだが……

次は俺の説明となり、俺自身は元は地球連合軍が作り出したG兵器と呼ばれる存在だ。当時はOSもまだ未完成で俺に搭乗をしたキラ・ヤマトによって俺のOSは適正になり彼がしばらくはパイロットを務めて色んなザフトのMSと戦ってきた、宇宙から始まり砂漠、海中など戦い撃破してきた。

「以上がこの世界にやってくる前までの俺だ。」

「けれどあなたは自分で動いているのよね?通常のあなたはパイロットが乗らないと動けないのにどうして動けるのかしら?」

「……わからない、気づいたら俺自身の意思で動いていた。さて……」

俺は立ちあがり部屋を出ようとした。

「どこに行くのかしら?」

「ここから出ようと思う、俺は兵器だ。巻き込むわけにはいかないからな。」

「でもあなたは戦争とは離れたところに暮らしているのよ?それにあなたの体は珍しいから人々にどう説明をする気よ?」

「……」

確かにそのとおりだ、だがいつまでもここにいるわけにはいかないと思うのだが?

「大丈夫よ、ノエル。」

「ストライクさま、私はあなたと同じといえばよろしいのでしょうか?」

「？」

俺は彼女が言っている意味がわからない、彼女は自身の右手を外したそこには機械などが見えていた。

「これは……………」

「彼女は戦闘機人と呼ばれている存在といえばいいかしら？」

「なるほど……………（サイボーグと同じなのか？）」

「それであなたはどうするかしら？ここにいればあなたが修理する時に便利だと思っけど？」

俺は少しだけ考えてから彼女に答えを出す。

「よろしく頼む。」

「よろしく頼むわね？ストライクガンダム。」

こうして俺ことストライクガンダムは戦争がないこの世界で月村忍及び月村すずかの護衛件メイドとして働くことになった。

新たなストライカー　メイドストライカーとクリーンストライカー

ストライクside

月村家にやってきて一週間が立った、俺は現在何をしているかというかと？

「……………」

右手に掃除機を持ち背中には吸い取ったゴミを回収するのがついているストライカーを装備をしていた。こいつの名前はクリーンストライカー……非戦闘ストライカーでこの右手に装備をしている掃除機で俺ができる範囲の掃除をしていた。

「そういえばそろそろすずかお嬢様が帰ってくるな？さてクリーンストライカーを外してメイドストライカーを装着するか。」

俺はクリーンストライカーを外して大きなストライカーを背中に接続をする。サブアームなどが装備されておりこれにより色々と運ぶことが可能となったメイドストライカーだ。

玄関の方へ行くと扉が開いた。

「ただいまー」

「おかえりなさいませすずかお嬢様……………」

「へえーこれがすずかが言っていた新しいメイド型ロボットなのね？」

「にやーすごい!!」

おや？すずかお嬢様の後ろに二人の人物がいますね、彼女たちは誰なのでしょうか？

「ストライク紹介をするね？こっちがアリサ・バニングスちゃんであちらが高町　なのはちゃん。二人とも私のお友達なんだ。」

「そうでしたか、では初めまして私はここでメイドをしています。GAT-X105ストライクガンダムと申します。以後お見知りおきを。」

俺はノエルさんから学んだ挨拶を二人に披露をして二人は俺を見

て驚いている。

「すごいわね……おつと私はアリサ・バニングスよ。」

「私は高町　なのはです!!」

「アリサさまになのは様ですね?インプット完了をしました。ではお嬢様私はお茶を入れてまいりますのでお部屋の方でお待ちください。」

「わかったわ、二人とも私の部屋でまっついていよ?」

三人が行った後、俺はファリンがいる場所へやってきた。

「ストライクさんじゃないですかどうしたのですか?」

「ああお嬢様たちにお茶を入れたいのだが……俺は味覚などないからファリンに入れてもらおうかと思って。」

「なるほど、わかりました。今すぐに用意をしますね?」

俺はその間にサブアームを使いトレーを回収をしてファリンが来るのを待っていた。数分後ファリンが持ってきたので俺はトレーに乗せてメイドストライカーに装備されたローラーを展開して移動をする。これはこれで便利だなと思いつつお嬢様のお部屋に到着をしてドアをコンコンと叩く。

「ずずかお嬢様ストライクです、お茶をお持ちしました。」

『ありがとうストライク、今開けるね?』

ずずかお嬢さまが開けてくださったので私は中に入りお茶を三人に置いていく、なのはさまたちも俺の姿を見て驚いている。

「しかし、あんたって機械なのよね?どうなっているのかしら?」

「……といわれましても自分自身何もわかっておりませんから。」

「え?記憶がないの!?!」

「ええここで目を覚ますまでの記憶がありませんので……」

まあここは嘘を言っておくでしょう、実際は自身が戦ってきたことや自身の最後のことまで覚えている、だがこの世界では無意味なことだからな、あえてウソを言わせてもらった。

彼女たちを見送った後は俺はメイドの仕事を終えてある場所へ来ていた、これは対迎撃マシンを俺用にしてもらった特訓訓練だ、元は侵入者撃退だったのだがすっかり忘れていたみたいで俺に反応を

して俺はシールドでガードをした後ビームライフルを持ちそれを撃破した。

そこから俺用に改良をしてもらい俺は回避の訓練などをするようにしている、今回の装備はランチャーストライカーだ。

「……………」

久々にランチャーストライカーを装着をしたな、俺はスイッチを押すとビームが飛んできた、俺は回避をしてアグニを構えているが別の方角から来るのでアグニをしまい方のガンポットのガトリングを回転させて迎撃マシーンに攻撃をする。

次の攻撃を回避をして構えているがやはり数が多いのでアグニを放ち撃破した、もちろん威力はかなり抑えてはなっているためマシンを破壊したただけでおさまっている。

「ん？」

俺は片づけをしていると何かの音が聞こえてきたような気がした、辺りを見てエールストライカーを装着をして声のした方へと飛んで行く。

ストライク 異世界での初の戦い

エールストライカーを装着をしたストライクは空を飛んでいた、夜のため人の数が少ないので彼は公園の方へ急いで飛んで行く。空からでも何かが見えてきたので右手に持っているビームライフルを構えてトリガーを引き緑色の弾が謎の物に命中をしてストライクは着地をする。

「ストライクさん!?!」

「え?」

ストライクは声をした方を振り返る、そこには茶髪のツインテールをしている少女がいた、彼のメモリーにインプットされている人物だ。

「なのはさま!?!こんな夜中に何をしていますか!?!」

彼はなのはの方を振り返り話しているとビームライフルを受けた敵がストライクに触手のようなものを出して彼を吹き飛ばした。

「ぐ!!」

ストライクはPS装甲が展開されており相手が放った攻撃は効かないが衝撃は受け止められないのだ。

「ストライクさん!!」

するとフェレットは赤い宝石を彼女に出していた、なのははそれを受け取りフェレットがいう言葉を続けていく。

ストライクは起き上がりストライカーをソードストライカーへと変えてシユベルトベゲールを構えて化け物を切り裂く!!だが……:「そんな!?!」

切りつけた場所から再生をしていき彼はいったいどうしたら倒せるのかとほかに弱点がないのかとサーチャーをしてると後ろの方からまぶしい光が発生をした。

「これは……」

光が収まるとなのはの姿が変わっており彼女自身も驚いている。

「なにこれええええええええええええええええ!!」

「なのはさま!!」

「ストライクさんって何かいつもと違う気が……」

「話は後で!!あなたならこの化け物をどうにかできるのでしょうか?」

「はい、彼女ならできます!!」

「……わかりました、ガンバレルストライカー!!」

ストライクのバックパックが変わりメビウス・ゼロのが装備されて合体をする。これこそ本来はストライクに装着されるはずだったストライカー、ガンバレルストライクの姿だ。

ストライクはビームライフルとシールドを装備をして背中ofブースターを起動させて白を飛ぶ。本来は地上では使えないガンバレルだが……

「いつけー……!!」

Gジェネレーションみたいに使えることが可能となっていた!!背中のガンバレルが発射されてケーブルが動いている。

そこからレールガンが現れてストライクはビームライフルと同時に攻撃で化け物に攻撃をしていく。

『ぐおおおおおおお!!』

化け物はストライクが放つ連続した攻撃を受けながらも前へと進もうとしている、だがそれもストライクの作戦だった。フェレットからあれはジュエルシードと呼ばれるものがある限りは再生などを繰り返すとだからこそストライクはジュエルシードがある場所を集中攻撃をして現れたらどうするかを考えている。

(光が発生をしている!?あれがジュエルシードって奴か!!)

ガンバレルを戻した後はストライクは再びソードストライカーへと変わり左手のロケットアンカー『パンツァーアイゼン』を放ちジュエルシードをがしつとつかみなのはの方へと投げる。

「今です!!レイジングハートを!!」

「わかったなの!!レイジングハートジュエルシード封印!!」

『ジュエルシード封印』

レイジングハートから光が発生をしてジュエルシードは封印されて中へと収納される。ストライクはソードストライカーのまま彼女

の方へと歩いていく。

「ストライクさん……えっとその……」

「今はここから撤退をしましょう、サイレンなどが聞こえて来ましたし。」

ストライクが言う通りにサイレンなどが聞こえてきた、彼はエールストライカーを装着をして彼女を連れて撤退をする。戦闘をした場所から離れた所に着地をしてフェレットを見ていた。

(このフェレット、僕が見たものとはデータが違う気がするな……：：：
いったい何者なんだ?)

ストライクは眠っているフェレットを見ながらなのはの方を見ていた、彼女に自身が戦う姿を見せてしまったのはまずかったなどストライクは思っていた。忍には自分がかつて戦いをしてきた兵器ということは言っているがすずかには話していないことを……

「あの!!……え?」

ストライクとなのはは同時に何かを話そうとしていたので同時にしゃべってしまいお互いにどうぞどうぞとなってしまう。

数分後

「とりあえずなのはさま、今回の私のことは内緒でお願いします。」

「う、うんわかったなの……」

「では!!」

ストライクはエールストライカーを装着をして月村家の方へと飛んで行きこっそりとうろうとしたが……

「随分遅い帰りなのね?」

「ッ!!」

ストライクは体をびくらせて声をした方を見ると忍が立っていた、どうやら彼が出ていったのを見てからずっと待機をしていたみたいだ。

「忍さま!?!どうしてここに。」

「あなたが何かを感じて出たのは知っていたわ、さーて話してもらおうかしら?」

ストライクは冷汗は書かないのだが彼女にどうやって説明をすれ

ばいいのか考えていた、嘘をつくのは行けないと思った彼は正直に話す為に彼女の部屋にお邪魔をした。

忍side

「以上です。」

ストライクから話を聞いたけど正直言っただけ驚くばかりだわ……なののはちゃんが魔法という者を使ってジュエルシードと呼ばれる石を封印をしたことに……. だけどストライクがウソを言っているとは思えないわ。

「なるほどね、それでなのはちゃんがその魔法少女って言えばいいのかしら？ それになつてジュエルシードと呼ばれるものを集めるってことでいいのかしら？」

「一応そうなりますね。まだ詳しい話はしておりませんので……. どうするかは…….」

確かにその通りね、ストライク曰くその石を封印できるのはなのはちゃんだけだということがわかった。いずれにしてもストライクにはなのはちゃんの助けをしてもらわないといけないわね……. 「ストライク、あなたはなのはちゃんを助けてあげなさい。」

「ですがその間にすずか様のお世話などはどうするのですか？」

「ええその間はファリン達に任せるとするわ。ストライク……. あなたに任せるってことになつてしまうけど…….」

「わかりました。なのはさまの手伝いの方に入りますね？」

私は首を縦に振り彼のために何か手伝えないかと考えた、それは新たなストライカーを作ることにする。でもいったいどのようなのがストライクのためになるのか考える必要があった。

ジュエルシード探し

ストライク side

忍さまの命令でなのはさまと一緒にジュエルシードを集めることになり現在俺は翠屋のほうへとやってきた。

「あらストライク君じゃない。」

「おはようございます桃子さま。」

俺が挨拶をしたのは高町なのはさまのお母様、高町桃子さま……若そうに見えるが実は3人もお子様を産んでなさっているお方でもある。

「今日もごめんね?」

「いいえなのはさまにもユーノ殿のお世話をお願いされているので。」

そう俺がここにやってきたのはユーノ殿のお世話をする……それは建前で本当は彼と一緒になのはさまが学校に行っている間にジュエルシードを探しておくのが使命だ。

俺はユーノ殿を連れて外へ行く。

「ストライクさんはその体で街を歩いて大丈夫なのですか?」

「ああ問題ないさ。これはこれは〇〇のおばさまじゃないですか。」

「あらストライク君今日はメイドの仕事はいいの?」

「ノエル殿たちがおられますので大丈夫ですよ、それで今日のおすすめのスーパーはどの辺になりますか?」

「そうね……今日だったら△△スーパーがいいと思うわ、あそこが今日の午後16時頃にやすくなるらしいのよ。」

「なるほど、△△スーパーですね?ありがとうございます。」

俺は挨拶をしてユーノ殿はポカーンとしていた。

「ストライクさんって顔が広いのですか?」

「まあ買い物をしたりするからな、それで色々困っている人たちを助けていたら皆さまに色々教えてもらったりしていますよ。」

「なるほど……」

「それでユーノ殿、ジュエルシードの形は丸いもので間違いないですよね?」

「ええ間違いないです。」

「……………あそこに光っているのはジュエルシードで間違いないであろうか?」

指をさした方をみてユーノは目を光らせる。

「間違いありません!!あれはジュエルシードです!!」

「了解した、なら回収をしようか。」

俺は走りだしてジュエルシードを拾おうとしたとき……………

「それを渡してくれませんか?」

「!!」

俺とユーノ殿が振り返ると金髪のツインテールをした女の子が立っていた。

(ユーノ殿あの子は……………)

(はいなのはとは別の魔力を感じます!!)

なるほど、別の魔導士か……………俺はジュエルシードをしまい後ろの方へと下がろうとしたが……………

「おつとここからはとうせんぼだよ!!」

いつの間にか女性が立っており前からは金髪の女の子が、後ろには女性が俺たちの周りに立っていた。

(ストライクさんどうしましょう!!)

(落ち着けユーノ……………チャンスはあるからな……………)

「あなた、なんのキャラなんだい?」

「俺はロボットだ、悪いがこれを渡すわけにはいかない!!エールストライカー!!」

俺はエールストライカーを装着をして空へと飛び立つ。

「飛んだ!?アルフ!!」

「結界は張っているさ!!」

「バルディッシュセツトアップ!!」

『セツトアップ』

彼女はなのはと同じようにセツトアップをして空を飛んできた、ま
ずいな……………ユーノ殿が入っているのを持ちながら戦うのは正
直言ってつらいな……………相手は二人に対してこちらは一人……………

俺はビームライフルを構える。

「警告をしておく、これは脅しじゃない……………」

「……………」

ビームライフルを構えても相手は警戒を解かないか……………仕方がない……………なのはさまと同じぐらいのお年の子に攻撃をするのは正直つてつらいが……………俺はトリガーを引いた。

ストライク side 終了

「くる!!」

金髪の女の子はストライクから放たれたビームライフルをかわした。マントの部分がかすつてしまい燃えている。

「!!」

彼女はマント部分が燃えるなんてと思いながら見ると彼は接近をして背中中のビームサーベルを抜いて彼女に振り下ろした。

「ぐ!!」

彼女はバルディッシュと呼ばれるものでガードをしたが……………元々兵器であるビームサーベルはバルディッシュで受け止められるはずがない。

「まずい!!」

「フェイト!!」

だがそこにアルフと呼ばれた女性が接近をしてストライクを殴ろうとした。彼はすぐにエールストライカーのブースターを起動させて彼女を吹き飛ばした。

「が!!」

「アルフ!!」

ストライクはユーノに声をかける。

「ユーノ殿どの辺が結界を破るにはいいと思う?」

「え!? 結界をですか……………壊せるのですか?」

「問題ない。」

ストライクはエールストライカーを外して着地をしてI W S P ストライカーを装着をして左手のコンバインシールドにレールガン、単装砲を構えて一斉射撃を放ち結界を壊して脱出をした。

フエイトside

「アルフ大丈夫？」

「あああたしは平気だけど……なんだいいいつ!!突然背中に装着したら空を飛んでフエイトのバリアージャケットをも焦がすほどの威力。さらにはバルディッシュにもダメージを与えるなんて……」

「……………」

確かにあのロボットさんは自我を持っていた、でも威力は手加減をしていたと分かる。あの武器だって本来だったら私ごと切ることが可能なのに……やらなかったのはどうしてだろうか……とりあえずアルフと一緒にまたジュエルシードを集めよう。まだあるからね。

フエイトside終了

ストライクside

I W S Pストライカーを外した俺は回収をしたジュエルシードを見ていた。

「これがジュエルシードと呼ばれるものなのですね？」

「ええ今は暴走をしていない状態なのでストライクさんでも持つことができます。後はなのはが封印魔法をしてレイジングハートの中に収納をしましょう。なのはも今こちらに向かっているそうです。」

「わかりました。」

それから数分後なのはさまが到着をした。

「ストライクさん、ユーノ君お待たせなの!!」

「なのは、ストライクさんが一個手に入れたよ!!早速ジュエルシードを封印をしよう!!」

「うん……そういえばどうやってセットアップするんだっけ?」「ずこ!!」

『私にお任せください。』

レイジングハートが光りだして彼女はバリアージャケットというものに姿を変えてジュエルシードが封印されてレイジングハートの中へ収納される。

「ありがとうレイジングハート。」

『どういたしましたマスター。』

俺は彼女の様子を見ながら先ほど謎のデータが入ってきた。

「なんだこれ………デステイニーストライカー？」

俺はこのストライカーが現在では使用不可となっているのといった
何が原因で作動をするのか不明だなど思いながら現在あるストラ
イカーを確認をしていた。

「エール、ランチャー、ソード、I W S P ストライカーにマルチプルア
サルトストライカー、ガンバレルストライカーが改良されたものにラ
イトニングストライカー。とつペルホルン連装無道反動砲にジエツ
トストライカー、バスターストライカーにマガノイクタチストライ
カーにバズーカストライカー、さらにはシールドストライカーにドラ
グーンストライカーにノワールストライカーにオオトリか………
後半のは知らないのばかりだ。ドラグーンストライカーってプロ
ヴィデンスガンダムと同じ装備の奴か？」

ストライカーがこんなにも生産されていたとは知らなかったな。
てかこのデータなども俺にはないものが多い。

ジエツトストライカーなどは名前も聞いたことがないストライ
カーだ。せつかくなので装備を試してみた。

「………ビームサーベルはないのね？」

ジエツトストライカーはエールストライカーを改良をしたものみ
たいで背中のジエツト噴射で空を滞空できることが可能みたいだ。

「ストライクさん何をしているの？」

「いいえ、私のストライカーがどれくらいあるかなと思ひまして背中
のジエツトストライカーというのを装着をただけですよ。」

私はストライカーをしまい、ユーノ殿と先ほどの女の子のことは内
緒にすることにした。

「ですね、今なのはに教えるのは………とりあえず僕はなのはに
魔法などを教えていきます。」

「了解した。なら俺はジュエルシードを見つけ次第………連絡を
したいが………そうだ!!」

俺は彼女たちにあるものを渡した。

「なんですかこれは？」

「通信機です、それで俺と連絡を取れるようにしたものです。それで俺と連絡をしてください。」

「わかりました!!」

そういつて俺は忍さまたちの家へ帰るのであった。

新たな魔導士フェイト

ストライク side

あの魔導士と出会ってから数日、俺はなのはさまたちと一緒にジユエルシードを集めていた。もちろんメイドの仕事をこなしながらである。

ある日ずかさまが俺に声をかけてきた。

「ストライクさん、実は今日なのはちゃんたちがうちでお茶会をすることになったの。それで……」

「わかっております。いつもの机などを用意をしておきますのです。ずかさまは学校に向かう準備をしておいてくださいませ。」

「わかったありがとうストライクさん。」

「いえいえ。(ということは今日のジユエルシード集めはないかな?)」

俺はずかさまが学校に向かわれたのを見てメイドストライカーへと換装をしてサブアームなどを使い窓を拭いていた。

背中のブースターを起動させて空中に浮かんで拭いていく。

「シューシュー窓を綺麗にふきましょーっと。」

窓を綺麗にした後クリンストライカーへと換装をして掃除機を起動させて綺麗にごみを吸い込んでいく。

昼過ぎとなり俺はそろそろ準備をしていこうとメイドストライカーへと変えて準備をしていく。すると周りにずかさまに飼われている猫たちが集まってきた。

俺は膝について猫たちと触れ合っている。彼らは最初は警戒をしていたが今はこうやって近づいて触らしてくれる。

「ストライクさん、そろそろお嬢様たちが帰ってきますよ?」

「ありがとうございますノエル殿。」

俺はノエル殿にお礼を言ってから準備を完了させてずかさまお嬢様たちが戻ってくるのを待つことにした。

数十分後ずかさまお嬢様たちが帰ってきた、アリサさまなのはさまも一緒にユーノ殿も一緒だ。

「おかえりなさいませすずかお嬢様にアリサさまとなのはさまいらつしやいませ。」

俺はお辞儀をすると彼女たちも挨拶をしてくれてから俺はお茶を入れていく。

「それにしてもストライクの背中のもつてなにかしら?」

「これは私のメイドストライカーと呼ばれるものです。これにはサブアームに護身用としてナイフなどがセットされています。ほかにもキッチン道具としてフライパンなどが常時装備をしております。」

まあ言えばメイドストライカーは臨時キャンプができるだけ言っておこう。その間もなのはさまたちはユーノ殿をおもちやのようになっていると動いたみたいですね。なのはさまも追いかけていたので私も行くとしましよう。

「すずかお嬢様とアリサさまはここでお待ちしてくださいませ、お二人は俺が探してきますので。」

私は二人の後を追うように追いかけていく。

アリサ side

「怪しい……」

「アリサちゃん?」

「怪しいわよ!!いくら何でもすずか行きましよう!!」

「え!?!ちよつとアリサちゃん!!」

最近なのはがボーっとしていることが多い、そして今回で完全に怪しいと思った私は行動をすることにした。

いったい何を隠しているのかはつきりさせてやろうじゃないの!!

アリサ side 終了

一方でストライクはメイドストライカーの姿のままなのはたちの後を追いかけていた、リーダーなので彼女たちの場所はわかっていたので到着をすると……

「にゃああああああん。」

「猫?」

「ストライクさん、見てください!!」

「猫だな……しかもでかいし。」

三人で見ていると猫に向かって魔法が飛んできた、ストライクはすぐに背中のブースターを起動させてサブアームから取り出したのは。

「フライパン返し!!」

「ええええええええええええええええええ!!」

フライパンで放たれた攻撃をはじき返したのだ。

「嘘………フォトンランサーをフライパンで?」

放ったフェイト自身もフライパンで跳ね返されるとは思ってもいなかったで驚いている。

ストライクは着地をして飛んできた方角を見ている。そこにはフェイトがバルディッシュを構えておりなのは驚いている。

「私と同じ魔導士!」

「バルディッシュと同じのを………」

お互いに空を飛びストライクは見ていた。彼女はもしかして猫が持っているジュエルシードを狙っているじゃないかと………なら自分がすることはジュエルシードを確保しておくことが事実。彼は背中のブースターを起動させて猫の方へ向かおうとしたが。

「なによ巨大猫?!」

「え!?!」

ストライクは驚いている。そこにいたのはアリサとすずかの二人だからだ。なのはの方も驚いていた。だがフェイトはハーケンセイバーが放たれてなのはは吹き飛ばされてしまう。

「なのはさま!!」

ストライクはサブアームを展開をしてなのはをキャッチをしてフェイトはジュエルシードを回収をして撤退をしていく。

「………逃げられてしまいましたね。」

「うん………」

がしがし。

「え?」

「ストライク………」

「ストライクさん。」

「えつとアリサさま、すずかさま?」

「説明をしてくれるわよね？」

ストライクは二人の圧倒的な二人の気迫に……

「はい……」

負けてしまったという。

温泉旅行へ

ストライク side

現在私ことストライクとなのは様は苦笑いしております。その理由は目の前で仁王立ちをしておりますアリサ様とすずか様のことです。前回現れた魔道士との戦いでなのは様が魔法を使っている姿を見られたからです。そのため現在私たちは2人の前で星座をしております。

「さてストライク。」

「なんでございましょうか？」

「いつから知っていたのかな？」

「なのは様が魔法を使っていた姿のことでしょうか？」

「色々とね？」

すずか様はオーラをまとつており流石の私も驚くばかりです。というわけで私はおふたりに説明をする。21個のジュエルシードのことや忍様からなのは様をサポートをするようにと支持を命令されたことを……………

「そう……………お姉ちゃん走っていたんだね……………」

「さてストライク、これからは私達も協力するわよ!!」

「ですが「なにか?」いいえなんでもありません……………」

言おうとしたのですが、2人の目から光が消えていたので断れませんでした。こうしてアリサ様とすずか様という仲間を得てから数日が経ちました。

ある日私は忍様に呼ばれてお部屋に入りました。

「来たわねストライク。実は今度温泉旅行に行くことになったのよ。」

「では私はお留守番ですか？」

「いいえあなたにも着いてきてもらうわ?あなただつて家族なのよ?」

「ありがとうございます。」

今度の祝日に行くことが決まり日にちがたち私たちは温泉旅行の旅館へ到着をして私は温泉に入らないのでジュエルシードを探すた

めに裏山へとやってきました。

「おそろくここら辺から発信されているようだな……………」

歩いていくと金髪の女の子と出会った。あの時胎児をした女の子で間違いない……………」

「あなたは!!」

彼女はこちらにセットアップをしようとしたけど手止める。

「おやめなさい。あなたは震えていまあすよ?」

そう彼女は震えているのを見た。おそろくこの間の戦いでの思い出したんだろうな?なにせこちらは兵器武装だからな……………」それに俺は人を殺すつもりはないからな。

「あなたがいるってことはもうひとりもいますね?まあこちらとしても襲いかかってくるなら遠慮なく攻撃をしますとだけ行っておきま

す。」
僕は振り返りそのまま旅館の方へと戻っていき部屋に到着。なお部屋はなのは様たちとおなじにされていた。現在はメイドストライカーを装着をして背中サブアームからマグコップなどを出して紅茶を入れていた。

「本当にストライクって紅茶を入れるのって上手いね?」

「お褒め頂いて恐縮ですすずか様。それとアリサ様先程から不機嫌なのはなにかあったのですか?」

「あー実は。」

なのは説明中

なるほどあの狼のような人がなのは様達に警告をしたのですね。さて夜中となりました私となのは様は旅館をぬけて裏山へと到着をしました。そこには二人の人物が降りました。私はネオエグザストライカーを装着をしてビーム砲を放ち攻撃をする。

「げ!?あなたは!!」

ビーム砲を交わした狼の人は私の顔を見て嫌な顔をしていますね。まあ仕方がないですね、

「なのは様魔導師の方はお任せします。使い魔の方は私がい相手をし

ます。」

アルフと呼ばれる狼にビームライフルを放ち彼女を誘き寄せさせる。
彼女は私に豪腕を振るってきましたがそんなものは体で受け止める
!!

「おおおおおん

「いつてえええええええ!!なんだよあんたの体!!」

「なんだよと言われましても……」

ガンダムですとしか言えませんよ。おや?向こうの方は決着が着いたみたいですね。さっすがフェイトだねと言っておりますが……

「あなたもしかして私の事使い魔と勘違いしておりますか?」

「え?違うの?」

「……答えはNOです。」

やれやれどうやら勘違いされているので困りましたね。彼女たちは撤退をしていきなのは様が(・ω・)としていた。おそらく負けてしまったみたいでショックを受けていますね。

ユーノ殿が励ましているので私は彼女たちのことを気になりながらも次のジユエルシードを見つけることにした。

時空管理局

ストライクside

温泉旅行から戻ってきました私たちは探索をするためにジュエルシードを探しております。アリサさまとすずか様には私が用意をしたものを装着してもらおうことにしました。

「ストライクこれってなんなの？」

「はいお二人も戦うことになりましたら使えるようにと思いましたが用意しました。なのはさまがレイジングハートを起動させるように私の中にありました戦闘データをベースにアリサさまとすずか様に合わせております。」

「えつと名前はジャステイス？」

「フリーダム？」

そう二人に渡したのはかつて俺と共に戦った機体 ジャステイスガンダムとフリーダムガンダムのデータをベースになのはさまが装着をするバリアージャケットみたいな感じにしている。

武装なども再現などはされておりアリサさまの性格などを考えますとジャステイスがお似合いかなとおもい、逆にすずかさまはフリーダムのような射撃が得意な感じがしたので作ったものです。

二人は装着をしますと確認をしているみたいですね。

「これがジャステイス……」

「フリーダムって言うんだ。」

『ああよろしく頼む。』

『よろしくねすずかちゃん。』

「しやべった!？」

まあキラとアスランをベースに作ったAIですから。彼女達の戦闘サポートにはいいかなと思いいりました。

さてなのはさまと合流をして私たちはジュエルシードを探しております。ちなみに私はメイドストライカーを装着しております。アームで二人をあげて探させていますですがなかなか見つかりませんね。

それにこの間邪魔をしたあの二人のことも気になります。確か

フェイトとアルフと呼ばれていましたね。

僕のメモリーもインプットされているので名前を間違えることは
ありませんね。と考えていますとまさかの出会ってしまったとは。

アルフさんがこちらに攻撃をしてきたので私は……………

「ストライクフライパン!!」

「二「ええええええええええええええええええ」二」

「ぶっ!!」

いつも通りのフライパンを出してアルフと呼ばれた女性の頭に命
中させてしまう。ついつい普通の癖でフライパンを出してしまっ
た……………ついついいつも通りのフライパンを出して攻撃をして
いるが忍さまが作ったものにしては硬すぎるような……………

「あ、アルフ?」

「うっごおおおおおおおおお……………」

「えっと大丈夫ですか?」

「ストライク……………あんた……………」

「やり過ぎだよ……………」

えっと今自分が怒られているのでしょうか?ただフライパンで攻
撃しただけなのですが……………っておや?誰かがこの結界を破っ
てこちらに入ってきたのですが男の子でしょうか?

「そこまでだ!!双方ともデバイスを収納するんだ!!」

「あれは時空管理局!?フェイト逃げるよ!!」

アルフと呼ばれた女性はフェイトを連れて逃げようとした。男の
子は彼女達を逃がさんのか魔法を発動をさせようとしていた。私は
持っていたフライパンを彼に向けて投げつけた。

「うっ!!」

それが見事に命中をして彼は落下をして倒れた。戻ってきたフラ
イパンをキャッチをして背中の中のメイドストライカーに収納すると
なのは様達が苦笑いをして降りました。なぜでしょうか?

「二「ストライクやり過ぎ」二」

「やり過ぎでしょうか?」

それから彼の上司であろう女性が通信をしてきたので私たちは魔

法陣に乗り船の中へと入ります。

なお気絶させた男の子はすぐに医務室に運ばれて行くのを私はちらっと見ながら案内をされて行き扉が開きました。そこには着物を着た女性がお茶をたてています。

「始めまして私はリンディ・ハラオウンといいます。」

「えつと高町　なのはです。」

「アリサ・バニングスよ。」

「月村　すぐかです。」

「GAT-X105　ストライクガンダムといいます。」

「ストライクガンダム……あなたは次元漂流者となるのかしら？」

「どういうことですか？」

リンディさんは説明をしてくれた。どうやら自分は本来の世界とは違う世界に来てしまったことそれが次元漂流者ということになるらしい。まあ確かに目を覚ましたら本来の大きさよりも小さくなっているし、何よりもデータが違っていることでの世界が自分が知っている世界とは違うってことも判明できる。

それから彼らの協力を得て自分たちのジュエルシード集めは順調に進んでいた。私はアースラと呼ばれる場所でお茶などを出していました。

「リンディさんお茶をお入れしました。」

「ありがとうございます。あーおいしいわね。」

「エイミーさんもお疲れ様です。」

「ありがとうございますストライク君。」

これぞストライク流の皆さまの中に入ってしまえばいいのさ作戦です。さてアリサさまとすぐか様もお帰りなっただのですがどうやらフェイトさんが六つのジュエルシードを解放させるために魔力を注入しているみたいです。なのはさまたちは出ようと思いました。クロノ殿に止められているようですからここはストライクが一肌つけて口ポットですけど脱ぐとしましょう。

ストライク行きまーす!!

ストライク side 終了

外ではフェイトが六つのジュエルシードを無理やり力を解放させた、だが彼女はその魔力注入に力を注いだため魔力が消耗をしているのだ。

暴走をしたジュエルシードは龍のようになりフェイトに襲い掛かろうとした。彼女は構えたが魔力が消耗をしているのでピンチになった。

彼女は目を閉じて攻撃を耐えようとしたがいつまでたっても攻撃がこない。

「どうやら間に合ったみたいですね？」

「あ、あなたは……」

「ストライクガンダムです。」

ストライクだ。彼はエールストライカーを装着をして彼女を救い着地をした。彼は暴走をしている竜の姿を見ていた。ビームライフルと盾を構えて彼は再び浮上をして暴走をしている龍にビームライフルを放った。

「やはりジュエルシードの暴走の影響でまずい状態ですか……なら接近をして!!」

ビームサーベルを抜いて彼は襲い掛かる龍を切断した。だが再生をされて彼は驚きながらもジュエルシードの恐ろしさを知る。

「やはり魔力を使わない自分にとっては不利な相手ですね。なら装備を変えてランチャーかソード？」

ストライクが考えていると後ろから龍が襲い掛かってきた。だがそれを砲撃が相殺をしてストライクはおや？と上を見るとさすがとアリサが現れる。

「全くストライク……勝手に行くじゃないわよ!!」

「そっだよストライク!!」

「アリサさま……すずかさま……申し訳ございません。ですが助かりました。」

ストライクは振り返りなのはたちも到着をしたので武器を構え直す。彼はならばといいマルチアサルトストライカーへと姿を変える。

「ごっつちやませ?」

「エール、ランチャー、ソードストライカーが一つになった姿。名前はパーフェクトストライク!!行きますよ!!」

ストライク背中のスラスターを展開させて突撃をしていく。その後ろをアリサがついていき腰部のラケルタビームサーベルを抜いて襲い掛かる龍たちを攻撃をしていく。

「援護をするよアリサちゃん!!なのはちちゃんとあなたは今のうちにチャージをしておいて!!」

すずかも背中中の翼のスラスターを展開してビームライフルを構えてトリガーを引きビームが放たれる。

ストライクはアグニをとりだして砲撃をする。だがジュエルシードの効力もあり次々に再生をされて行く。

「ストライク!!」

「離脱する!!」

三人は二人の声を聞いて上空へ飛ぶと黄色い砲撃とピンクの砲撃が命中をして六つのジュエルシードが浮いていた。

「ジュエルシード封印!!」

二人の力でジュエルシードが次々に封印されて行き、ストライクは嫌な予感がしていた。彼女達はジュエルシードをとろうとしたとき砲撃が放たれた。

「そこまでだ!!確保させてもらう!!」

(やはりですか……)

ストライクは背中中のスラスターを起動させて彼女たちの前に入りクロノが放つステインガースナイプをシールドでガードをする。

「ストライク!?なぜ邪魔した!!」

「今あなたがすることは確保ではなく落とすことでしたので止めさせてもらいました。大丈夫……おそろく次が最後の戦いになるでしょう……少しだけ黒幕のところへといってきます。」

「「え?」」

突然のストライクの言葉に全員が驚いていると彼は座標を固定をしたのか姿が消えた。

「消えた!?!」

『ストライク君は!!』

『LOSTしました!!レーダーも反応ありません!!』

「ストライク……」

すずかは心配をしながら空を見上げる。

中へ突撃、ストライクが見たものとは

ストライク side

自分は新しいストライカーマガノイタチストライカーを装着をしてミラージュコロイドを展開してフェイトさんたちがどこかに転移するのを見つけてそこに便乗して一緒に行きどこかの屋敷に転移しました。

さて家の中に入り探索をすることにしました。忍さまの家に比べましたらそこまで広いとは感じがしないが、けど何か生命反応が僅かながらレーダーに探知をしているみたいなのでそこに行くことにしました。どこかの扉を破壊して会談を見つけて降りていきだいたい場所でしたが光が見えてきたので歩いていき到着をする。

「フェイトさん？」

液体のカプセルの中にいた人物に自分は驚いている。その中で眠っているのはフェイトよりも幼い子供が眠っているからだ。

「まさか……彼女はクローン……ラウ・ル・クルーゼみたいなのか彼女は。」

「誰!!」

声が出たので振り返ると黒い紙をした女性が持っているデバイスをこちらに向けていた。自分はマガノイタチストライカーに装備されていた右手のトリケロスを構えていた。ブリッツガンダムの武器を装備しておりいつでもトリガーを引く準備はしている。

「まさかアリシアを狙っている!?!私の可愛いアリシアを!?!」

「アリシア?」

そうか彼女の名前はアリシアというのか、俺は彼女が魔法を使ってきたので背中マガノイタチストライカーから武器を飛ばしてケール上のクナイが発射されて彼女が放つ魔法を相殺させてストライカーを解除をして腰のアーマーシユナイダーを抜いて彼女の首元に突きつける。

「!?!」

「動くな……今から俺が言う質問に答えてもらおうか。あの子

フェイトはクローンで間違いないか？」

「ええその通りよ。あいつはアリシアをベースに作りだした存在。」

そういうことか……あのアリシアって子はある事件で植物人間に近い状態で今も生かされているわけか。そしてその代わりとして生まれたのがフェイトということ……まさかジュエルシードを集めるために彼女に彼女に命令したのはアリシアという子を蘇らせるためにか……ん？通信が来ている……だが今はこいつのことを先決にしようとした時音が聞こえた。

「あはははは数は足りないが仕方がないわ。」

彼女の手にはジュエルシードが現れた。もしや2人に何かがあったのか？さらに音が聞こえてきて数人の人達が入ってきた。

「ストライク殿!？」

「あれは!!」

「私のアリシアに近づくな!!」

「まずい!!」

このままでは管理局員の人達がやられてしまうと考えた自分はシールドを出して彼女が放った魔法をガードをしたがあまりの威力に吹き飛ばされてしまう。

「ぐ!!」

「ストライク殿!!」

「すまない。全員撤退!!」

管理局員たちの指示が飛び彼らは撤退をしたが俺は撤退をせずにビームライフルを構えていた。

ストライク side 終了

一方でアースラのモニターではストライクがビームライフルを突きつけている場面が映し出されていた。

「ストライク!!」

「あいつ何をやる気だ。」

全員がみている中プレシア・テストロツサは呟いていた。それはフェイトの正体などを言っていた。それを聞いていたフェイトは嘘だどずっと言っていた。

『私はね、あなたのことがずっと大嫌いだったのよ!!』

するとプレシアの横をビームが放たれた。トリガーを引いたのはストライクだ。

『いい加減に前を見やがれ!!その子はもう助からないのがまだわからないのか!!』

『黙れロボット風情が!!』

『確かに俺はロボットだ。人みたいに涙を流すことなどはない、けどなせめて最後を見届けることは出来る。その子が最後をな。』

「ストライク駄目!!そんなことをしたらあなたは!!」

『……. ずか様は優しいですね。ですが俺は戦闘兵器なんです。忍様には話しましたが俺は戦闘兵器として生まれてきたのです。そして記憶がないってのは嘘です。だから……. ずっと騙していたのです。』

「ストライク…….」

「ずか行くわよ!!」

「アリサちゃん。」

「私も行くの!!」

場面が変わりストライクはスラストを展開させてアリシアが入っているカプセルに近づこうとした。だがその前にプレシアがたち彼女を守るようにガードをする。

「ちい」

ストライクは後ろに下がりどうするか考えているとプレシアは血を吐いた。

「まさか…….」

「そうよ……. 私に残っている時間はわずかしかない。だからこそジュエルシードの力を使い私はアルハザードに向かう!!」

彼女は残っている魔力を使いジュエルシードを起動させる。ストライクも強大な魔力に吹き飛ばされてしまう。

「ぐ!!」

壁にめり込んだストライクはダメージを受けてしまうがなんとか抜け出した。そこになのはたちが駆けつける。

「ストライク!!」

「すずか様、アリサ様、なのは様たちも……」

「大丈夫かストライク、あの後ろの穴は!!」

フェイトがプレシアに本当のことを言うがプレシアたちがいる所から罅が入っていき彼女たちは穴の方におちていことした。

「母さん!!」

フェイトは叫ぶがその彼女の隣を何かが通過をしていき誰かが投げられる。それはプレシアだった。

「え?スト……ライク?」

彼女が見たのはエールストライカーを装着をしたストライクがプレシアを投げた姿だった。だが彼は戻ろうとしたがすでに戻れない状態になっていた。

「ストライク!!ストライクううううううううううう!!」

すずかは涙を流しながらストライクの所へ行こうとしたがアリサとクロノに止められていた。

「すずか!!」

「駄目だあの空間は魔法を使うことが出来ない。」

「そんな!!」

ストライク side

さてこれでいいでしょう。俺はアリシアさんが入っているカプセルのところまで座り込んだ。次元を超えている感じがしているの自身は感じていた。

「……すずか様……申し訳ございません。」

彼はそのまま目を閉じて機能停止をした。

再会の機体

ストライクとアリシアが次元の穴に落ちて数日がたった。フェイトはプレシアと共にミッドチルダに行き事情聴取を受けるためにだったが、ストライクが密かにリンディにあるデータを渡しておりそれを見たリンディが驚くほどの内容だったと書いておく。

そして現在　なのはとユーノたちはフェイトたちが行くのを見送るためにやって来ていた。

「ねえ。」

「なに?」

「私、友達つての知らないからどうしたらいいのかわからないの……」

「なら名前を呼んでほしいな。」

「名前?」

フェイトはしばらく黙っていたが顔を上げてなのはを見ていた。

「なのは。」

「うん。」

「なのは、なのはなのは!!」

「フェイトちゃん!!」

一方でアリサとすずかは来ていたが離れた場所で見ている。

「よかったのかしら?」

「なのはちゃんが最初だからね、それにフェイトちゃんはこっちの来たら一緒に学校の学校に通えるんだからね?」

「……そうね、ここにストライクがいたらね。」

「大丈夫だよアリサちゃん。ストライクは帰ってくる……私は信じている必ず帰ってくるって……」

「そうね。」

2人は晴天の空を見ながらストライクガンダムが帰ってくるのを信じて待つことにした。一方のストライクは?

「……」

彼は起動をして目を覚ました、どこかの家の天井が見えた。彼は起

き上がり状況を確認をしようとした時声が聞こえてきた。

「目を覚ましたみたいだなストライク。」

彼は声をした方を見るとそこには赤い機体が立っていた、だがストライクはその機体のことを知っていた。

「イージス?」

「ああ久しぶりだなストライク。」

そこに立っていたのはストライクと同じくG兵器として作られた機体G A T - X 3 0 3 イージスガンダムがそこに立っていたからだ。

「お前どうしてここにうぐ。」

「おいおい無理するなってお前ここに来た時傷が酷かったからな。それでここで寝かせていた。」

「とところでここは?」

「ああここはアルハザードと呼ばれる場所だ。」

イージスの言葉にストライクは驚いていた。

ストライク side

なんだと、アルハザードに俺たちは来てしまったのか、そういえばアリシアの姿が見えない。

「イージス、聞いたことがある。カプセルの中に入っていた少女を見なかったか?」

「カプセルの中にいた少女なら安心をしろこつちに着いてきてくれ。」

俺は布団から起き上がりイージスの後をついて行くとカプセルの中にいたアリシアが寝かされていた。

「大丈夫だ。時期に目を覚ますさ。」

「そうか・・・イージスはいつからここに?」

「俺が目を覚めたのはだいぶ経っているがこの管理を任せられるほどになっているぐらいだ。だがこの世界に人間なんてのはいなかった。」

「なに?」

「ここはアルハザードはそういうところだ・・・だがMSは俺だけしかいないのは事実。」

「そうか・・・技術なども俺たちが使っているものよりも高性能

みたいだな。」

お互いに色々あつたから話をしたりするのがどうもな……。イージスたちはザフトに奪われて俺たちの敵として何度も戦ってきた。最後はイージスは自爆をして俺もローエン格林からアークエンジェルを守るために爆さんをしたからな。

「ううーん」

「どうやら目を覚ましたみたいだぞ?」

イージスの言葉に俺は顔を動かすとアリシアがこちらの方を見ていた。

「あなたたちはガンダムって呼ばれる存在なの?」

「!!」

俺たちはお互いに顔を見合わせてしまう、アリシアがなぜ俺たちのことを知っているのか……

「私が植物人間になって数年がたつていてお母さんがフェイトを作つて……。それで私とストライクはここに流れ着いたってことかな?」

「……………」

「あ、今バカにした感じがしたよ?そりゃあ姿は5歳児みたいな子がこんなことを言うなんておもってもいなかっただでしょ?でもね死んでからずっとあなたたちの記憶などを覗かせてもらったの。あなたたちが異世界からやってきたことや兵器だつてことも……………」

「まあそうだな、さてとりあえずイージス。服などはあるか?」

「あああるぞ。」

「?」

「お前裸だからだよ。」

アリシアは——、——チラツと自身の体を見てから真っ赤になつていく。

「忘れてたああああああああああ(〃▽〃)母さん私を保存するためとはいえ裸だったのを忘れていた!!」

俺とイージスはアリシアに下着や服などを渡して部屋を出る。外でドサという音が聞こえてきたのでおれとイージスはビームライフ

ルを持ち構えながら外へ出るとそこには量産型のような機体が倒れていた。

「青い胴体の機体だけど、ストライクダガーとは姿が違うな。俺たちのデータにはない機体ってことはその後には作られたので間違いない。」

「…………やはり戦いは続いていたのか……………」

俺とイージスはとりあえずこいつを背負って中へはいるとアリシアが着替えてきたのか降りてきた。

「さっきの音は？」

「こいつだった、おそらく流れ着いただろうな。五体満足で倒れていた。」

「みたいだね、それでストライクはどうするの？」

アリシアが俺に聞いてきた。俺か…………正直いえずるか様たちの所へと戻りたいだけだな。

「あるぞストライク、ここから出る方法が。俺もここをそろそろ出ようと思ってな今地下室で建設をしているんだよ。まあ着いてこい。」

俺とアリシアはイージスのあとについて行き地下室へとやってきた。

「これはアークエンジェル!？」

そうそこにあつたのは俺が搭乗をしていた戦艦アークエンジェルがそこにはあつた。

「ああアークエンジェルだ、装置的には海なかも潜水可能となっている他単独で大気圏突破などもできるように改良をしている。武装なども同じだ。だがまだ完成はしていないから手伝ってもらえないか？」

「ああもちろんだよ。」

こうして俺たちはアルハザードから出るための準備を進めるのであつた。

襲われるのは。

ストライクside

今俺達はアルハザードの地下室でアークエンジェルを作っていた。イージスが一人で作ったとなるとすごいなと思いつながら俺は目を覚ました量産型MSウインダムというMSも手伝ってくれている。

「ストライクさんこれはどちらに？」

「それはそっちだな、イージスこっちは？」

「それはそっちに装着をしてくれ。アリシアも悪いな手伝ってもらって。」

「気にしないで、二人が私にこの力をくれたんだもん!!アビスセットアップ!!」

彼女に装甲が纏っていきウインダムの中にあつたデータの高火力を持つ三機のガンダムの力を彼女のデバイスとして使うように付けたのがこのアビス、カオス、ガイアの三機である。

「あー早く試したいよーねえイージスまだかかる？」

「いやあともう少しで完成だ。出力なども安定をしているからな。」

「そうか……」

アルハザードでそんなことが起こっている中ある一つの家。黒い機体が両手の武器を解除をして包丁を持ち切っていた。

「ふあああああ……」

「おはようございますはやて殿。」

「おはようやでブリッツ。」

彼の名前はGAT-X207ブリッツガンダムだ、彼はどうしてこの家にいるかというと半年前になる。

彼女の6月2日の夜に彼女達は出会った。この主八神 はやては家の前で星を見ていると何かが家に接近してきた。

そして庭に落ちてきたのがブリッツだったのだ。彼は起動をしてはやての家に居候として住んでいる。

彼がこの家にやってきた二日後のはやての誕生日に本が開いて四人の人物たちが現れた。

「おはようブリッツ君。」

「ふあああああ……」

「ヴィータ殿まずは顔を洗ってください、ご飯はまもなく完成をしますので。」

「わかったぜブリッツ。」

「うむ今日はブリッツのご飯か。」

「ははシグナム殿朝の鍛錬お疲れ様でござる。」

彼はタオルを投げてシグナムはキャッチをする。彼女はフウといながら椅子に座りブリッツはご飯などを持ってきて自分のおいでしている。

「では皆。」

「……いただきます!!」

それがブリッツガンダムがここ八神家にいる理由でもあり、彼らがこの家に住んで半年は経っている。

その裏ではストライク達がジュエルシードを集めたりすることや戦っている中、ブリッツたちが過ごしているがある日のこと、はやてが突然として倒れた。

シグナムやほかの面々はなぜ彼女が倒れたのかを知っていた。ブリッツは病院に運んだあとの彼女達の行動を見るためにミラージュコロイドを展開をして様子を見るのであった。

シグナム side

主はやてが倒れた、その理由は闇の書の蒐集をしていなかったのが原因だ、だがそれは主はやてとの約束を破ることになるが、彼女が倒れてしまった以上これしか手がない。ほかのメンバーたちも決意を固めて私たちはその夜から蒐集をしようとしたとき針が飛んできた。私はレヴァンティンを発動させて放たれた槍をはじめさせる。

「何者だ!!」

私たちが構えていると姿が現れた人物を見て驚いている。

「ぶ、ブリッツ!」

私たちに攻撃をしてきたのはブリッツなのか!?

「やはりか、あなたたちを見張っていて正解でした。あなた方が何か

をするのは目でわかっていた。なら拙者がするのは……止めよう。最初は思った。」

ブリッツは構えていた右手を降ろす。

「それがはやてちゃんのためとなら僕も協力をします。」

「だがブリッツお前は……」

「……戦いは嫌いです。ですがこれは人を殺すためじゃないから僕は遠慮なく協力をしますよ。はやてちゃんを救うためなら……」

「ブリッツ殿。」

「ブリッツ君。」

「ありがとうブリッツ……行こう!!」

私たちは転移魔法を発動をさせて蒐集をするために異世界へと向かった。

シグナム side 終了

一方でアルハザードではアークエンジェルの完成をしたが新たなMSがここにやってきていた。

「アークエンジェルか……」

緑のMSザクウオーリアと呼ばれる機体にM1アストレイ、赤い機体と青い機体が仲間になっていた。

「まさかお前たちがここに来るとは思ってもいないぜ？フリーダムにジャステイス。」

「それはこっちの台詞だ。まさかイージスガンダムがいるとは思ってもいないよ。」

「けどストライクがここにいるなんて思ってもいなかった。そしてアークエンジェルを再び見ることになるなんて思ってもいなかった。」

ストライクは最初は驚いていたのは音がしたので来たらM1アストレイとザクウオーリア、そして二体のガンダムの姿を見て驚いたのがフリーダムガンダムとジャステイスガンダムの姿だった。

彼らから話を聞くとジャステイスガンダムはジェネシスを爆発させるために自爆、フリーダムガンダムは修復されて再び戦いをしたが

自身のシステムと同じシルエットシステムを持った機体インパルスガンダムとの戦いで撃破されたということ………

「そうか………お前らも色々とおったんだな。」

「ストライクは確かアークエンジェルを守った後爆散をしたってのは知っていたけどどうしていたの?」

「俺はこの世界じゃないところで目を覚ましてメイドさんをしてた。」

「「え?メイド!?!」」

彼は実際にメイドストライカーを出してメイドキャップなどをかぶった。二体の機体は驚きながらも平和な世界で過ごしているだなど感じていた。そして彼らの協力もありアークエンジェルは完成をした。

「さて皆アークエンジェルは完成をしたぞ!!」

「「おおおおおおお!!」」

量産型MSウイングダムとザクウォーリア、M1アストレイは声をあげてフリーダムとジャスティスとストライクは見ている中アリシアは目を光らせていた。

「ねえねえはやく行こうよ!!」

「だなイージス!!」

「ああ皆搭乗をしてくれ!!」

イージスの言葉に全員がアークエンジェルの中へと入り、エンジンなどが始動をしていく。

「目標管理外97惑星「地球」アークエンジェル発進!!」

アークエンジェルのエンジンが始動されてアルハザードからアークエンジェルは飛びたった。

一方で12月の地球。高町 なのはは家の方へと走っていた。

「遅くなっちゃった。ってあれ?」

彼女は家の方を走っていたが突然として人の姿などが見えなくなった。

『マスターこれは結界が張られております。』

なのははレイジングハートを構えてセットアップをして上空へと

びビルの上につくと赤い帽子をかぶった女の子がいた。

「まさかあなたが……」

「そういうことだ。悪いがお前の魔力をもらうぜ!!」

彼女は持っているハンマーを振り回してなのはに攻撃をしてきた。彼女は回避をして後ろの方へと下がりデイバインシユートを放った。

「甘いんだよ!!」

「人の話を聞きなさい!!デイバインバスター!!」

「ちい!!」

彼女は回避をしたがかぶっていた帽子がこげたのを見て怒り狂う。

「てめえ……アイゼン!!」

『了解』

がしゅんと音がして彼女のハンマーが大きくなった。

「いくぜ!!轟天爆砕!!」

大きくなったハンマーをなのはめがけて振り回して彼女はプロテクションでガードをしようとしたがその勢いがすぐく彼女は地面の方に叩きつけられる。

「が!!」

「おらああああああああああ!!」

さらに追撃をしようと彼女めがけて振り下ろしてバリアージャケツトを破壊してしまう。

「あう……」

「さーて手こずらせてくれたな。さて……ちい!!」

突然として砲撃が来て彼女が回避をした。

「なのは!!」

「大丈夫!？」

「アリサちゃんにすずかちゃん……どうして?」

「私たちだけじゃないよ来たの。」

「ほらみなさい!!」

金髪の髪をツインテールにした女の子がこちらにやってきた。

「フェイトちゃん?」

「なのはごめん遅れて。」

「ちいてめえらはなんだ!!」

「私たちは彼女の友達!!」

「そういうこと!!行くわよ!!」

アリサはラケルタビームサーベルを連結させて突撃をしてヴィータに切りかかる。

「くそ!!」

ヴィータはアイゼンでガードをしたがそこにバラエーナプラズマビーム砲が放たれてさらに回避をするがそこにフェイトが接近をして振り下ろしてきた。

「くそ!!（こいつらを倒すわけにはいかねーしどうしたら!!）」

「これで終わりよ!!」

アリサは振り下ろそうとしたとき。

『アリサ下がれ!!』

デバイスのジャステイスから警告を聞いて彼女が下がると蛇腹剣が放たれてアリサの目の前を通過していきすずかたちも構え直す。そこには二人の人物が援軍として現れた。

「援軍?」

「こんな時に!!」

すると針が飛んできてフェイトはガードをすると足にワイヤークローが現れて彼女の足をがしつとつかまれて振り回された。

「きやああああああああ!!」

「フェイト!!」

アルフはフェイトをキャッチをして着地をする。

「ありがとうアルフ。」

すると姿が現れてブリッツガンダムが現れた。

「ガンダム!?!」

「どうして……………」

「ヴィータ殿これを。」

「サンキューブリッツ。」

彼女はブリッツから受け取った帽子を再びかぶり構える。一方で外ではもう一人シャマルが結界の外にいた。

「さてヴィータちゃんたちが色々としている間につて……え？」
彼女は上を見ると時空の穴が開いて白い戦艦アークエンジェルが現れた。だがすぐにアークエンジェルは透明化状態へと変わりそこから何かが飛びだして結界の中へと突入をしていた。

「いったい何が……」

一方では戦いが行われようとしていた。シグナムはフェイトに斬撃をふるっていた。

アリサとすずかはザファイラと交戦、ヴィータとブリッツは残っているアルフとユーノに襲い掛かろうとしていた。

シグナムがガートリツジを発動させてフェイトが持っているバルデイツシュゴと切り裂いた。

「きゃああああああああああ!!」

「フェイト!!」

「よそ見をしている場合か!!」

「な!!」

「うわ!!」

すずかとアリサも吹き飛ばされた。さらにアルフとユーノも苦戦をしている。

「み、皆……」

戦えないのは目をつぶっていた。誰でもいい自分の友達を助けてほしいと……その願いは一つのビームが放たれる。

「なに!？」

「なんだ!!」

「ビームライフル……」

「ねえすずか……今のライフルは!!」

「うん間違いないよ!!」

そしてすずかとアリサの前に一体の機体が着地をした。その姿を二人は知っていた。

「アリサ様。すずか様。ご無事ですか?」

その声は間違はなく自分たちが知っている機体で間違いないと二人は確信をしていた。

「全く遅いわよ!!」

「そうだよ!!」

「ストライク!!」

ストライクは二人の無事を確認をした後ヴィータたちの方を見ていた。

「ストライク!!」

さらにイージスにフリーダムとジャスティスが到着。さらによいしよつとウインダム、ザクウォーリア、M1アスト例も到着をした。

「イージス殿!」

「……………ブリッツ!?お前がどうして!!」

「……………今は言えないでござるごめん!!」

ビームライフルを地面に放った。その煙が発生をしている中。

「あが!!」

「!!」

全員がなのはの方を見ているとなのはの胸から手が現れてリンカーコアを握っていたのだ。

「ちい!!」

ストライクは急いで彼女のところへと行きその手に向かってチョップをする。その手はリンカーコアを外してなのはは倒れてしまいがキヤッチをした。

「ストライク、私の出番はないの?」

「ああすまないアリシア。」

「え!?アリシア!」

フェイトはアリシアという単語を聞いて驚いている。アリシアの方はフェイトの姿を見てあーという声を出してしまふ。

「まあ色々あってよみがえったのよ。」

ストライクはとりあえずアークエンジェルの方に彼女を運ぶことにして全員がついていく。

事情聴取

ストライク side

「……………」

いきなり正座をしているなか失礼する、僕の名前はストライクガンダムといいます。さて今現在アークエンジェルの中で僕は正座をしているのは前の二人が怖いからなのです。

「さてストライク話をしてもらおうよ?」

「そうだね、この半年間何をしていたのかを……………」

すずか様とアリサ様の気迫にMSである自分が恐怖に襲われています、てかイージスやほかのMSたちもこちらを見ているけど助けてくれない……………」

「ストライク!!」

「わかりましたお話をいたしますのでどうか落ち着いてください。」

というわけでストライクの簡単な半年まとめ!!

ストライク説明中

「なるほど……………あの次元の穴がアルハザードってところにつながっていてその赤い奴とかたちと一緒に帰ってきたわけね?」

「そういうことです。」

そして扉が開いてM1アストレイが入ってきた。

「えっと大丈夫ですかストライクさん?」

「ああありがとう、えっとなのはさまは?」

「今は眠っておりますがリンカーコアって奴ですか?それが消耗をしているのが確認できました。」

「ほ……………」

無事だつてことがわかってすずか様たちはほっとしていた、わたしも忍さま達にあやらないといけないですね。

ストライク side 終了

一方でアリシアとフェイトはフリーダムとジャステイスがそばにいた。

「えっと……………その……………」

「あーそこまで気にしなくてもいいよフェイト、あなたが私のクロンだつてことは見ていたから……ずっと……」

「死んでいてもね魂だけはそこに残っていたって感じかな？ママがフェイトに鞭でばしんばしんとしているところも見ていただけしかできなかったけどね……自分がどれだけ無力だつて感じたよ……」

「アリシア……」

「そういえばママは……」

「……」

「その様子だとママは病気で入院をしている感じかな？」

「うん。」

二人の会話を聞きながらフリーダムとジャステイスは話を聞いていた。

「二人は色々と事情があるみたいだね？」

「ああ……」

「ジャステイス。」

「どうした？」

「また君に会えて僕は嬉しいよ。」

「……俺もだ。こうしてお前とまた一緒に戦えるから……」

「うん!!」

こちらの二体の機体もかつてのこともあり再会を喜ぶのであった。

一方で八神家

「……」

ブリッツは先の戦闘で共に戦った機体イージスが現れたときは驚いている、さらに自身を倒したストライクや見たことがないガンダムまでいたので驚くばかりであった。

「ブリッツどうした？」

「シグナム殿……いいえ何でもないです。」

現在 はやてはシャマルとヴィータと共にお風呂の方へと入っておりここにいるのはシグナムとザフィーラとブリッツの三人しかい

ない。

「もしかして先ほど戦ったやつらの中にお前が知っている奴がいたのか?」

「……ええその通りです。ストライクとイージスという機体です。」

「その二機はお前にとつてはどういう関係だ?」

「……元々ストライクと僕、イージスは同じところで作られた機体なんです。ですがザフトによって僕とイージスはストライクと戦うことになったんです。」

「……そんなことがあったのか……」

「ええ……まあ終わってしまったことなんですけどね?」

彼は机を吹いていたのを終わらせてから絞って干すのであった。彼はふうとため息をつきながらシグナムに聞いた。

「シグナム殿、蒐集はどうでした?」

「ああシャマル曰くあの子の魔力を吸い取ったら20ページほど埋まったといっていた。」

「かなりの魔力つてことか……」

「これなら順調に集まっていく、ブリッツすまない……またお前の力を借りることになる……」

「ええ僕がかまいませんよ。」

さて場所は変わりミッドチルダのどこかにある研究所。

「……」

「……」

紫の髪をした男性、ジェイル・スカリエツティは目の前に現れた機体に見開いている。

「えつとなんだその……」

「素晴らしい!!」

「うわ!!」

突然としてジェイルが叫んだので機体は驚いていしまう。

「私も色んな研究をしているが自我を持った機械を見るのははじめてだ!!」

「はあ……」

「さて改めて自己紹介させてもらってもいいかい？ 僕の名前はジェイル・スカリエツティという。」

「ZGMF-X56S インパルスガンダムだ。それでジェイル聞きたいことがあるのだが？」

「なんだね？」

「この培養液に入っている女の人たちは誰だ？」

「ああ彼女達は私が今作ろうとしている戦闘機人と呼ばれる存在だ。私は彼女達をナンバーズと呼んでいる。」

「ナンバーズね……」

インパルスはその人物たちを見ながら今自分が装備できるシルエットを確認をしていた。

「フォース、ソード、ブラストにデステイニーか……」

「そういえば気になったのだがインパルス君は先ほどからガンダムという単語を聞いたが……」

「そういうことか、俺は戦闘兵器つて奴かな？ あんたたちにわかりやすく言えば……」

彼は自分がザフトに作られた機体であることなどの説明をしてジェイルはふむふむと聞いていた。

「なるほどね、インパルス君お願いがあるのだが……私が生み出すナンバーズのうちトールレとチンクを鍛えてくれないかい？」

「一号機と二号機、四号機は戦えないのか？」

「ああウーノはほかメンバーに比べたら秘書官みたいな感じだからね、クアットロも逆に言えば戦闘に向かないんだ。ドゥーエは逆に言えば潜入型とっておくかな？」

「なら俺のデータの中にある潜入を得意とした機体があるからそのデータを見るか？」

「いいのかい？」

「ここでお世話になるからな、なら提供ぐらいいいかなって。」

「ありがとうインパルス君。」

彼はインパルスにお礼を言い彼の戦闘データなどを集めることに

した。

なのは目を覚ます／ナンバーズ起動。

アークエンジェル医務室

「うーん……あれ？」

なのはは目を覚ました、そのそばにはザクウオーリアとウィンダムの二人がいた。

「あ、目を覚ましました。」

「よし俺が呼んでくる!!」

ザクウオーリアは医務室を出ていきストライクたちを呼びに行く中なのははそばにいたウィンダムを見て驚いている。

「えつと？」

「あ、自分はGAT-04ウィンダムと申します。ストライクさんをベースにした量産型MSになります。」

「あ、えつと高町 なのはです。」

二人が挨拶をしていると医務室が開いてフェイトたちが入ってきた。

「なのは!!」

「フェイトちゃんこんなさいかいになっちゃったね？」

「うん。」

「なのは様お久しぶりです。」

「ストライクさん……よかった無事だったんですね？」

「ええなんとか無事でした。とりあえずなのは様……当分は魔法は控えてください。」

「え？」

「先ほど調べたのですが、リンカーコアが縮小されておりました。おそらく魔法は回復するまでは使えないと思ってください。」

「わかりました……とりあえずここはどこですか？」

「ここはアークエンジェルの船内だ。」

「赤いガンダム？て何か増えていますか？」

「あー僕はフリーダムガンダムです。」

「俺はジャスティスガンダムだ。」

「そして俺はイービスガンダムだよろしくな。」

「えつと高町なのはといています。」

お互いに挨拶をしてからイービスはとりあえずと考えていた。

「アークエンジェルをどこかに収納ができたらいいいけどな、今はミラージュコロイドを展開して姿などを隠しているが……」

「だったらうちならどうか？お姉ちゃんも地下室みたいなのを作っていたからそこに収納可能だと思っから。」

「わかった、月村邸に向かってアークエンジェル発進!!」

アークエンジェルは透明のまま月村邸へと飛び立つのであった。場所が変わり異世界にて。

「はああああああああ!!」

ブリッツはグレイプニールを放ち相手を足を絡ませて相手を倒してから蹴りを入れて気絶させた。

「シヤマル殿今でござる!!」

「ええ!!」

シヤマルは闇の書を開いて蒐集をする。だけど苦い顔をしていた。

「うーん4ページだけ……この間の女の子の方が魔力がかなりあったわ。」

「それはしょうがないです。さあ次の獲物を探しましょう。」

二人は移動をして次の敵を収集をするために移動をするのであった。

さて今度は場所が変わりジェイル・スカリエツティの研究室。

「さてインパルス君。いよいよだよ……私の最高傑作のナンバーズたちが完成をしたといっても一部だけどね?」

「そうだな……」

二人はウーノからチンクまでの五体のナンバーズたちが完成をしたので起動させるために彼らは前に立っていた。格好は全裸のためインパルスは見ている。

(てかなんで全裸なんだろう？俺はロボットだからそんなことは感じないからな……)

「では起動!!ぽちつとな。」

音が聞こえてウーノからチンクまでの培養液がなくなり彼女たちは目を覚ます。そして扉が開いて一人ずつ降りてきた。

「やあ目を覚ましたみたいだね我が娘たちよ。」

「はい博士。」

「……博士気になったのですがそのお隣にいるかたは？」

「俺はインパルスガンダムだ。お前らよりは先に起動をしているよろしく頼む。」

「つてことは兄上つてことか？」

「なるほどでも私たちと違って機械のお兄様つてことですわ。」

クアットロはそういいながらインパルスを見ている。チンクたちもじーっと彼を見ている。

「まあまあ皆そこまでだ、とりあえずインパルス君から託された機械のデータをベースにドゥーエの装備をパワーアップさせている。それとチンクやトーレはインパルス君が鍛えてもらうことになっているから。」

「わかりました。」

「兄上よろしく願います。」

「ああこちらこそな。とりあえず服などあるのか？」

「あああるよ。とりあえず今日からスタートでいいかな？」

「ああ構わない。」

全員がナンバーズスーツを着てトーレとチンクたちは固有武装などを装着をして早速インパルスが鍛えることになる。

「えつとお兄様どうして私も？」

「ああドゥーエ。お前は潜入型なのは聞いているけどもし戦闘となつたら戦うことになるからな。さて。」

インパルスは機動防楯を出してただけだ。

「さて遠慮はいらん、トーレからでいいか？」

「兄上……それはなめているのですか？」

「そうじゃない、お前たちはまだ起動をしたばかりだ……遠慮はするなよっ。」

「では遠慮なく参ります!!はああああああああああ!!」

トーレは固有武装「インパルスブレード」を展開させてインパルスに攻撃をする。振るわれたエネルギー刃がインパルスに襲い掛かる。だが彼は冷静に彼女が放つ攻撃を回避をして盾でガードをしている。

「ほーう……だがまだまだだな？」

「どあ!!」

彼女は後ろに倒れてインパルスは腰のフォールディングレイザー対装甲ナイフを出して彼女の首元につきつける。

「ッ!!」

「これが実戦だったらお前は死んでいる……」

「参りました……」

彼はナイフを腰に収納させてインパルスは次の相手であるチンクに構えているがやはり盾だけである。

「お前の武器はそのナイフと爆発させるだったな……」

「はい兄上。」

「さあ始めよう。」

始まったらチンクはスローイングナイフを投げつけてきた。インパルスは回避をしていき地面にナイフが刺さっていく。チンクは指をぱちんと鳴らすと爆発していき彼は驚きながらもスラスタを展開させてチンクに接近をする。

「ッ!!」

彼女は回避をしてナイフをインパルスに投げつけるが彼の装甲ヴァリアブルフェイズシフト装甲には効かないのではじかれる。

「な!!ナイフが!!」

「そういう敵が出てくる可能性があるから!!気を付けろよ!!」

彼は接近をしてチンクの手をつかんで背負い投げをして地面に叩きつける。

「あう!!」

そのままトーレと同じようにナイフを出してつきつけて勝利をする。

「まあ最初だから……お前たちがレベルアップしたら武装

を増やすとしよう……」

「なんと兄上はそれ以上に武器があるのですか？」

「ああこれでも基本的な姿で射撃武器は使っていないからな……だがはつきり言えばお前たちは強くなると俺は思っているさ。」

インパルスははつきりとそういつて今日はここまでといいドゥーエに関しては装備の確認をしていた。

「なんかでかいわねこの武器……」

「それはブリッツガンダムという機体が装備をしている攻防盾だ、ラインサーダートを始めビームライフルとビームサーベルが装備されていると聞いている。」

現在ドゥーエの右手にはインパルスのデータにあったブリッツガンダムの武器トリケロスが装備されている。彼女が使えるように小回りができるようにしているみたいだ。左手はいつもの爪が装備されている。

「とりあえずドゥーエはその武器が使えるようになるまでだな……基本的なことはトレレたちと同じようにするさ……」

インパルスはそう考えながら彼女達の訓練を考えることにした。

さてさて場所が変わりミッドチルダにある家にて三機の機体が二人の子どもと遊んでいた。

「カラミティローラー」

「ったくなんで俺達が……」

「でもしようがないじゃん、俺達を拾ってくれたクイントおばさんやゲンヤおじさんの頼みだしローラー」

「……そうそう。」

「まったくほらギンガとスバル遊んでやるから大人しくしてろ。」

「うん!!」

さて今登場をした機体を紹介しておこう。

青い機体は砲撃型機体でGAT-X131 カラミティガンダム。

そしてそばにいる黒い機体はGAT-X370 レイダーガンダム。

そして最後の緑の機体はGAT-X252 フォビドウンの三機である。

なおカラミティはモードチェンジでソードカラミティに姿を変えられることが可能となっている。

現在彼らは武装を解除をしておりカラミティはシユラークなども外しており彼女達と接するためでもある。

「ほら待たせたな。」

「で何をするの?」

「ゲームなら俺は楽しいけどな。」

「てかゲームだったらお前が勝つだろうが。」

「そうそう。」

カラミティとレイダーは首を縦に振り、フォビドゥンはえーつとつまらなそうにつぶやいた。

「ならどうするの?」

「」「うーうーん。」「」

五人は考えるのであった。

現れた敵について。

ストライク side

今俺達は月村家へと向かっていた。連絡はすでにしており地下ドックの入り口を見つけたアークエンジェルはそこに収納されて俺達は地下ドックに降りたつた。

「なんかオーブを思いだすよ。」

「だな。」

フリーダムとジャステイスは懐かしそうに見ているとこちらに走ってくる人物がいた。

「ストライク!!」

彼女こそ俺を拾ってくれたすずか様の姉であり、月村家当主の月村忍さまだ。彼女はそのまま勢いよく自分に抱き付いてきた。

「ストライク……ストライク!!よかった……よかったわ。」

「忍さま……」

どうやら俺は心配をさせてしまっていたようだ。彼女は涙を流しながら俺を抱きしめていた。

「申し訳ございません忍さま、ストライク半年という期間ですがただいま戻りました。」

「本当にすずかから話を聞いたときは嘘だと思いたかった。でもあなたがいないとわかってからこの屋敷も寂しくなったわ……あなたがいたからこそその家族だったから。」

「……家族……」

「ストライク、どうやらお前はいいところで拾ってもらえたな?」

「あなたたちは?」

「失礼、俺はイージスガンダムといいます。まあストライクとは色々あったですけどね?」

「エツト僕はフリーダムガンダムといいます。」

「俺はジャステイスだ。」

「僕はウインダムです。」

「ザクウオーリアだ。」

「M1アストレイです!!」

　　っとほかの人物たちも自己紹介をしており、まあしばらくはここで過ごすことになった。なおなのは様とフェイト様はアースラの方へと行かれるようなので自分もついていくことにした。

　　転移魔法に乗りアースラへとやってきた自分はアリシアと共に来ていた。指令をする場所へ行くとクロノ殿が立っていた。

「ストライク．．．．久しぶりだな。」

「クロノ殿もお久しぶりです。」

「まさかアリシアを連れて帰ってくるとは思ってもいなかったよ。いったい君達はどこにいたんだい？」

　　ストライク説明中。

　　自分が説明をするとクロノ殿は頭を抑えていた。

「まさか実際にアルハザードが存在をしていたとは．．．．まあアリシアがいる時点で察していたが．．．．だがストライク、あの時飛び込んだ後フェイトは落ち込んでいたんだ。」

「え？」

「自分のせいでストライクがって．．．．彼女はずっと君に謝りたいと言っていたんだ。」

「そうでしたか．．．．」

　　僕はクロノ殿と一緒になのは様達のデバイスがある部屋へと到着をするとボロボロのレイジングハートとバルディッシュがいた。

「ごめんねレイジングハート。」

「．．．．バルディッシュ。」

　　二人とも相棒を心配そうに見ていた。相棒か．．．．僕はコクピットがある場所に手を置いていた。

　　今の自分には誰も乗っていない、かつて乗っていたキラ・ヤマト、そして最後は無事でいてほしいと思ったムウ・ラ・フラガ．．．．僕はこうして五体満足で異世界へとやってきて暮らしている。

「．．．．」

「ストライクどうしたの？」

「アリシアさま、いいえ何でもありません。」

自我を持つてから考えてしまうな、悲しい方向にな……
ストライクside終了

一方でブリッツは今日は家にいた、シグナムたちが蒐集しているの
で彼は留守番をしてはやてと共にいる。

「皆忙しいんやな？」

「そうですね。」

「でもブリッツと二人きりなのは久々やな？」

「最初は僕とはやて殿しかおられませんでしたから……ですが
はやて殿には感謝をしています。このような自分を受け入れてくれ
て……」

「何言っているんやそれは撃ちの台詞や、ブリッツがいなかったらう
ちは一人で寂しく誕生日を迎えていたんや、だからお礼を言うのはう
ちの方やおおきに……」

二人は笑いながらご飯を食べるのであった。

一方でここはジェイル・スカリエツティのアジト。

「ほらできたぞ。」

インパルスがご飯を作っていた。彼らの食生活をインパルスが徹
底をしてドゥーエとトーレに買い物の指示を出して彼はチンクらに
協力してもらって料理を手伝ってもらっている。

「インパルス兄上これはどっちに？」

「それはあっちだ。クアットロそれはあっちに運んでくれ。」

「はいはい。」

「ウーノはそのまま野菜を切ったのを皿に盛ってくれ。」

「わかりました。」

彼の指示を聞いてナンバーズたちはせつせと働いているとドゥー
エとトーレが帰ってきた。

「兄上頼まれていたのはこちらでいいですか？」

「おうありがとうな。さてそろそろ完成をするからお前らは机に座つ
ておいてくれ。」

インパルスの言葉を聞いて全員が椅子に座った。そしてインパル

スは自身が作ったご飯を提供をする。

そして彼らは全員が座つたことを確認をして手を合わせた。

「いただきます。」

「「「？」」」」

インパルスの行動にウーノたちは首をかしげていた。

「お前たちもやるんだぞ？」

と色々と説明をしてからナンバーズたちはご飯を食べる。

しているがガンバレルは追い詰めるように彼女に攻撃をしていく。

「ちよ!!数が多いつてげふううふううふう」

よそ見をしていたアリシア様は1個のガンバレルに激突をして落下をした。とりあえず彼女のところに歩いていき声をかけることにした。

「大丈夫ですか?」

「(ノ#、口、)イタイ」

「ですよー」

やれやれこれは大変だな。

ストライク side 終了

一方でクロノはデバイス室にやってきた。

「おうクロノの坊ちゃんじゃないかどうしたんだ?」

1機のモビルスーツが彼のところに降りてきた。

「レッドフレーム久しぶりですね。」

「まあなだがお前さんのデバイスは前に調整したはずだけど?」

レッドフレームとはアストレイと呼ばれる機体の1機でジャンク屋のロウ・ギユールが発見をして以降は彼の愛機として戦ってきた。この世界で目を覚ました彼はジャンク屋としての機械類などの修理をしていた時に時空管理局のデバイス作成者として働いている。

「実は……」

クロノ説明中

「なるほどな、そのデバイスたちはカートリッジシステム搭載をね……それで俺のところに来たということか……」

レッドフレームは少し考え事をしてから荷物をまとめていた。

「レッドフレーム?」

「直接見に行く。決めるのはそれからだ。」

こうしてレッドフレームはレイジングハートたちを見るために向かうのであった。

ブリッツ気配に気づく。

デバイス室に一人のMSがやってきた。アストレイレッドフレーム本人だ……。彼はレイジングハートたちを見ていた。

「これはひどい状況だな。フレームも破損……。さらに必要なパーツとしてカートリッジシステムか……。」

「レッドフレームできるかい？」

「簡単に言ってくれるなクロノの坊ちゃん。インテリジェントデバイスにカートリッジシステムを搭載することがどれだけ大変かわかっているのかい？お前さん達もそれをわかっけてこのパーツを搭載をしてくれというのかい？」

『はいその通りです。私たちが未熟なばかりにマスターを……。』
『だからこそ私たちはカートリッジシステムの搭載をお願いをしたいのです。』

『お願いします!!』

レッドフレームは両手を組んでデバイスたちの言葉を聞いてかつての彼に乗っていたパイロットのことを思いだしていた。本当にこのデバイスたちはマスター想いなことだなと思いつつ彼の閉じていた両目を開ける。

「わかった。お前たちのマスターを思う心は十分に伝わった。俺が直接お前たちの改良をしてやる。クロノの坊ちゃんお金はいいぞ？」

「ですが!!」

「これは俺個人が引きうけるってことだよ。だからお金は必要ないってことだ……。お前さん達のマスターたちがボロボロにならないよう俺たちがしっかりと改良をしてやる!!」

『ありがとうございます!!』

こうしてレッドフレームを筆頭にレイジングハートたちの改良計画が始まった。一方で海鳴市ではブリッツが買い物をして帰るところだ。

「色々と買い込んで良かったかもしれない……。だがその前に……」
彼はトリケロスを出して後ろを振り返りビームライフルを放つ。

すると仮面を付けた男が現れた。

「なぜわかった。」

「僕も潜入型MSですから気配を消すことはできるんですよ。だからこそあなたたちがはやてちゃんの家の周りでガジェットを飛ばして見ていたのを破壊したのは僕ですよ。あんなものわかっていましたからね。」

「なら貴様をここで「動くな!!」なに!?!」

仮面の男は攻撃をしようとしたがブリッツはミラージユコロイドを展開をしてひそかに後ろに回ってビームサーベルをつきつけていた。

「馬鹿な……貴様はさつきまで……」

「あれは幻影ですよ。ミラージユコロイドを応用させて姿を見せているかのようにね……僕はあなたを殺したりはしません。ですがもし邪魔をするというなら……命をとります。」

「く!!」

仮面の男は転移をしてブリッツも武器を解除をしてはやてが待っている家へと向かうのであった。

さて場所が変わりドクタージェイルの研究所では？

「はああああああああああ!!」

「……」

インパルスは左手に持っている盾でトーレが放つインパルスブレードを受け止めている。彼の背中にはソードシルエットが装備されており彼女たちは第二段階状態になっていた。

その様子を見ているのは最近生まれたディエチとセインの二人だ。

「すごいねインパルスにいつて。」

「うん……ドクターも驚いていたって私が放ったイノーマスカノンをあの盾でふさがれたからね。」

「それにインパルスにいがくれたこの武器だつていのデータに会った機体の武器を私たち用にしてくれたものだっけ?」

「そうそう私のこのオルトロスもその一つだよ?」

「私は背中に装備されたゲイツって機体が使っているアンカーって武

器だね。そこからビーム刃が付いたアンカーを飛ばしたりすることが可能だつて。」

二人が話しているとインパルスは背中フラッシュエツジを投げつける。トーレはそれを蹴りではじかせるがインパルスはそれを読んでいたのかエクスカリバーを抜いて彼女に振り下ろしていく。

(当たれば私はやられてしまう。なんて武器なんだ兄上のは……)(あいつらもだいたい慣れてきたな……これなら次のシルエツトを出してもいいかな?今度はお前たちが苦手な遠距離からの攻撃だけだな。)

そして数分後インパルスは突然としてエクスカリバーをしまった。

「さてここまでだ。トーレお疲れ様。」

「はあ……はあ……はあ……」

「あ、兄上……」

「これなら第三段階に上げてもいいな。デイエチとセインはこれからになるけどな。」

「第三段階……」

「ああ次はこいつだブラストシルエツト。」

インパルスが言うのと今度は緑色のシルエツトが現れてソードシルエツトを外してブラストシルエツトが装着される。するとインパルスの色が赤から緑に変わりブラストインパルスへと姿を変える。

その様子はジェイルたちも見ていた。

「ほーうインパルス君の第三の姿か……」

「高軌道型のフォース、接近型のソード、そして最後は形状的に砲撃用ですわ。」

「そのとおりだよクアットロ。私も彼から聞いたときは驚いているさ。ナンバーズたちの装備も彼のデータからとらせてもらってデイエチはガナーザクウオーリアという機体のオルトロスと呼ばれる砲撃ユニット。セインはゲイツと呼ばれる機体の武器を使わせてもらっているよ。さらにはマシンガンという武器も装備させているさ。」

ジェイルたちは訓練場を見て彼がああの装備をしたらどのような戦

いをするのかデータをとることにした。

「では兄上今度は遠距離からの攻撃に対応をするってことですか？」

「そうだ。今までは中距離や接近の攻撃しかしてなかった。お前たち二人にはこれをデータを送らせてもらおう。」

インパルスからデータが送られて二人に武器が装備された。

「これは……」

「トーレに送ったのはカオスガンダムが使用をしているビームライフル。逆にチンクのは連合軍が使っていたビームカービンと呼ばれるライフルだ。そいつはトーレが装備をしているものよりは威力などが少ないがその代わり小型だから狭いところなどでも使えるさ。まずはお前たちには射撃にも対応してもらおうぞ？そのために今回は射撃形態をとらせてもらう。戦いはお前たちが思っているほど甘くない。状況によつて接近できない戦いがあるかもしれない。」

「確かに兄上の言う通りです。」

「だからこそ武器を使用できるようにしているわけですね？」

「そうだ。セインは潜入型だから武器が必要ないかもしれないが潜るだけじゃ戦えないからな……その為に武器を用意してもらったさ。さあ始めるとしよう。」

こうしてインパルスによるナンバーズ強化計画が始まっていたのを知らないのであった。

一方で陸上訓練上

「……」

一体の青い機体が両手を組んで立っていた。彼はシールドとマシンガン装備をして構えている。

「教官行きます!!」

「はい……遠慮はいらん。」

青い機体の周りにデバイスを持った人物たちが攻撃をしてきた。彼は冷静に左に回避をしてマシンガンを使ってデバイスをもっている人物たちの手に攻撃をする。

「う!!」

「……」

彼は次のターゲットをロックをして背中ブースターを展開をして接近をして蹴りを入れてライフルを構える。

「うう………」

「ここまでだな……まだまだ手が甘いとだけ言っておくぞデュータ・ランスター。お前たちもだ相手はどのように動くのかわからない。俺のような奴と戦うこともあると思うがこうやって接近されたとしてもデュータ俺の手をつかめ。」

「はい!!」

「そうだそのまま投げ飛ばせ。」

「えつと……いきます!!」

指示を受けたデュータは彼を投げ飛ばして彼は地面に叩きつけられる。

「そうだ。今のように相手がナイフで攻撃をした際はこうして相手を無力化するんだいいな?」

「二はいブルーフレーム教官!!」

「さて今日はここまでだ。」

「二ありがとうございます!!」

ブルーフレームは生徒たちが帰った後も片づけなどをして彼も帰る準備をしていると音が聞こえてきた。

「ん?」

彼は覗いているみると自身が受け持っている生徒が銃を持ちながらターゲットをロックをして攻撃をしていた。だが焦りのあまりにターゲットが彼にロックオンをしていた。

「しま!!」

すると光弾が飛んできてターゲットが撃破された。

「え?」

「ランスター二等兵、訓練後は舎に戻れと俺は言ったはずだが?」

「ぶ、ブルーフレーム教官!」

「……椅子に座れ。」

「え?」「いいから座れ!!」は、はいいいいいいいいいい!!」

彼は椅子に座るとブルーフレームは肩をもんでいく。

「いでででででで!!」

「やはりな……毎回か？」

「え？」

「毎回夜にここで練習をしているのかと聞いている。」

「……その通りです。自分はほかの奴らよりも才能などがありません……」

「それは違うぞディータ、確かにお前はほかの奴らに比べると低いかもしれない。だがお前には射撃があるじゃないか。」

「え？」

「この間のターゲットメーカー訓練の際、お前は冷静にターゲットを撃って撃破したのを俺は知っている。ほかの者たちは手間取っている中だ……まあ接近などは二が手みただけだな。」

「あはははは……ごもつともです。」

「お前は何を焦っている……すぐにでも仕事につかないといけない感じだが……」

「そ、それは……俺には妹がいるんです。」

「妹か……」

「はい、名前はティアナとってお兄ちゃんお兄ちゃんというぐらいかわいいんですよ……両親が死んで俺はなんとかティアナを育てながら我流で撃ち方などを学んできました。そしてあなたに出会いましたブルーフレーム教官。」

「……」

「あなたの噂は聞いております。通称サーペントテール……と呼ばれているお方だと……昔に呼ばれていただけだ。」

彼と話をしながら舎へとディータが戻っていく。ブルーフレームは彼を見ながら夜空を見る。

「……何もなければいいが……」

囲む時空管理局

ストライク side

クロノ殿から連絡が来ましてレイジンググハートたちの改良が完了をしたという連絡を受けてなのは様たちはアースラの方へと向かっていきました。私はイー吉斯達にメイドとしての仕事を教えています。

「ストライクはいつもこんなことをしていたのか？」

「これってどう使えばいいの？」

「それはそのスイッチで起動をするので。」

　　つとジャステイスたちはおろおろしながら仕事をしていたので僕は苦笑いしながらザクウォーリア達にも教えていると通信機が鳴りだした。

「はいストライクです。」

『ストライクかい丁度良かった。すまないが君達にも援護要請を頼みたい。』

「わかりました。」

「出動か？」

「ええクロノ殿たちが苦戦をしているってことです。アリシアさま行きますよ。」

「了解ー！ー！ー！！」

　　なのは様たちもレイジンググハートたちをもらったら合流をするってことでアリサさま達と一緒に出動をする。

ストライク side 終了

　　一方で結界の中では。

「でああああああああ！！」

ブリッツが左手のグレイプニールを発射させて一人の管理局員の手をつかんでそのまま振り回してほかの人物たちに当てていた。

「なんて力だ!!」

　　そうヴィータがさっきの蒐集の時にけがをしていたのをブリッツは知っていたのでザフィーラに彼女を任せて一人で相手をしている。

「くそ!!」

「駄目だヴィータ。」

「ザフィーラだがブリッツが!!」

「だからこそだ。ブリッツはけがをしているお前に無茶をさせないために動いている……」

「くそ……」

だが多勢無勢でブリッツは苦戦をしている。人間を殺さないように戦っているためビームライフルなどは当てないように攻撃をしておりサンダーサートは使用できない。

「であああああああ!!」

ビームサーベルを使ってデバイスに当てて戦闘不能などにしていくがブリッツは疲れていた。

すると彼に両手にバインドがかかる。

「ぐ!!」

さらに両足などにバインドがかかりブリッツは動きを止めてしまふ。

「ブリッツ!!」

(ここまでか……)

クロノがそこにあらわれる。

「時空管理局だ。君達を連行させてもらう。」

クロノが構えていると突然としてビームライフルが飛んできてブリッツを捕まえていたバインドが解除される。

「どうして……」

「でええええええええええい!!」

突然としてビームサーベルを抜いてクロノに切りかかる機体が現れた。クロノも愛用のデバイスでそれを受け止める。

そこにミサイルが飛んできてクロノたちは回避をしてブリッツの前に立つ。

「え!？」

「貴様!!こんなところで何をしている!!」

「まあまあ落ち着けていいじゃないか久々の再会じゃないの。」

「デュエルにバスター!?二人ともなんで!!」

そこに現れたのはかつて地球連合軍によって作られてザフトに奪われたG兵器の一つデュエルガンダムとバスターガンダムだった。

「なーに目を覚ましたらお前の反応があつてな、それでデュエルを叩き起こして今に至るわけよ。」

「貴様!!だからといってガンランチャーを合体させた砲塔で俺に放つてどういう神経をしている!!」

「いいじゃないの、ほら敵があんなにいるぜ?」

「みたいだな。それでブリッツあの男と女はお前の仲間ってことではないか?」

「はい。」

「OKさっさと片付けようか!!」

バスターは両方の砲塔を構えているとビームライフルが放たれて三機は回避をする。そこに現れたのはストライクたちだ。

「あれは!!」

「ストライクううううううううううううううううううう!!」

デュエルはビームサーベルを抜いてストライクに襲い掛かってきた。彼は盾でデュエルのビームサーベルをガードをした。

「デュエル!!ちい!!」

「まさかお前がそっちにいたとはな。」

「バスター!?!」

イージスは驚きながらバスターの放つ攻撃をガードをしているとフリーダムたちも到着をした。

「まさかお前たちまでこっちに來ているとはな。」

「バスター!?!」

ストライクはデュエルの攻撃をガードをしながらどうしようかなと考えていると砲撃が飛んできた。

「じゃじゃーん!!アリシアちゃん参上!!」

「貴様ああああああ!!いきなり砲撃をするとはどういう神経をしている!!」

「ええええええええええ!!」

いきなりデュエルに怒られたのでアリシアは戸惑ってしまおう。そこに

「レイジングハートエクセリオン!!」

「バルディッシュユアサルト!!」

「セットアップ!!」

なのはたちも駆けつけてデュエルたちは撤退をすることにした。

「ストライク!! 今日のところはここままでしておく!! 覚えていろ!!」

「おいおいそれ完全に悪い奴が言う台詞じゃん。」

バスターは高エネルギーライフルを前につけて砲撃をして結界を破壊して脱出をする。なのはたちは何もできなかったなど思いながら新しいセットアップをしたバリアージャケットを見ているとアリスたちが近づいてきた。

「それがなのはたちの新しい姿?」

「そうだよ!!」

「すごいね!!」

「うん・・・前よりも力を感じるよ。」

「当たり前だ僕の知り合いの人に君達の直接改造をしてもらったんだ。まあとりあえずアースラに来てほしい彼もそこに居るから。」

「わかりました。」

ストライクたちはアースラへと向かっていくことにした。

一方でナンバーズのところにも新しいMSが現れていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「まったくここはどこだ?」

「ヴェーダと連絡がつかない。」

「いったいここは?」

「・・・・・・・・ガンダム?」

インパルスは今日の前にいる機体を見ていた。

(青い機体は接近型、緑の機体は狙撃型、黄色機体は可変型で最後のかいのは砲撃型か・・・・・・・・)

「兄上!! 今の音は何ですか?・・・・・・・・」

「増えていないか?」

「ああ俺も音に気づいてここに来たらガンダムがいた。」

「俺はソレスタルビーングガンダムエクシアだ。」

「悪いねー俺はガンダムデユナメス。狙った獲物は外さない。」

「えっと僕はキュリオスです。」

「ヴァーチエだ。すまないがこの情報を求める。」

「俺はインパルスガンダムだ。だがお前たちのような機体はデータはないぞ?」

「それは俺たちも同じだ……お前のようなガンダムは知らないからな……」

「とりあえずお茶をどうぞ。」

「「すまない。」」

四人はインパルスを入れて呉れたお茶を飲みながらこれからどうするか話をしていた。

「ならここを使えばいいじゃないかな?」

「ジェイル……」

「インパルス君だけじゃナンバーズたちの世話などが大変だからね。」

「ナンバーズか……」

「なるほど俺達に鍛えてほしいってことか。OKOKなら俺のスナイパー技術を教える時が来た!!」

「デユ……デユナメスが目を輝かせている。」

「まあ私も砲撃なら教えることが可能だ。」

「助かる。」

インパルスのところに新たなMSたちが入ってきたことを……

レッドフレーム

新たなカレイジングハートたちを手に入れてなのはたちは到着をしたがブリッツたちを助けるためにデュエルとバスターが現れてヴォルケンリッターたちは撤退をしてストライクたちはアースラに帰投をする。

「よう待っていたぜ。」

レッドフレームが彼らの前に現れてM1アストレイは驚いている。

「れ、レッドフレームさん!？」

「おやお前さんはM1アストレイじゃないか。それと……」

レッドフレームはストライクの方を見ていた、ストライクも彼の姿を見て驚いている。

「あなたは確かキラを助けてくれたパイロットが乗っていた機体だ难道？」

「ああレッドフレームってのが俺の名前だ、それとお嬢ちゃんたちどうだった？」

「すごい力を感じたの……」

「そりゃあ俺が改良などをしているからな。まあ一番はお前さん達の相棒の絆つてのを見させてもらった。こいつらはカートリッジシステムを搭載するのはお前さん達やデバイスにもダメージを負ってしまう可能性がある。けれどこいつらはお前たちのためならと積ませてくれと言った。だからこそ俺自らが改良をしたつということだ。」

レッドフレームの言葉を聞いてなのはとフェイトはお礼を言う中クロノはストラクとイージスに今回現れた機体のことを聞いていた。「ストライク、さつき僕たちの前に現れたガンダム達を君は知っているね？」

「もちろんです。」

「あいつらは俺たちと同じG兵器と呼ばれる……言えれば兄弟機だ。」

「そうだね……けれどまさか彼らまでこちらの世界に来ている

とは思つてもいなかっただよ……」

「それで彼らの戦い方を教えてもらつてもいいかい？」

「ああまずはデュエルだな……。あいつの装備はアサルトシユラウドという装備をしているため装甲が厚くなっている。武装はビームライフルにグレネードやレールガンにミサイル、接近武器にビームサーベルが装備されている。」

「そうだね。デュエルはパイロットの影響かなビームサーベルを抜いてこつちに攻撃をしてくるのが多いね。」

「次はこの砲撃の機体だね？」

「バスターガンダム、主に遠距離からの射撃での援護にミサイルで攻撃するのが特徴だね。ほかには二つの砲塔を連結させることで高エネルギーランチャーと拡散弾のばらまきを放つ高範囲の攻撃を可能としているかな。」

「なるほど……」

ストライクたちの話を聞いてクロノは彼らの対応を考えることにした。一方でデュエルたちはというど？

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおお!!」

掃除機をもってはやての家を掃除をしていた。バスターはガンランチャーを構えていた。

だがそこから出ていたのは水を発射させて窓を洗っていた。ブリッツは料理をしながら二人の様子を見ていた。

「ブリッツ!! 次の掃除場所はどこだ!!」

「えっと次ですか? シグナムさんと買い物に出てください。足りないものを買ってもらいたいなと思ひまして。」

「わかった行くぞおおおおおおおおおおおお!!」

「おい待て!!」

シグナムはデュエルを追いかけるために走っていく。

「おいおいあいつあんなんかよ?」

「まあいいじゃねーか、てかヴィータ窓を吹いてくれ。」

「へいへい。」

バスターの言葉を聞いてヴィータは窓を吹いていく、そして現在ブリッツは料理を作ろうとしたが止めていた。

「シヤマル殿ははやてちゃんの相手をお願いします!!料理は僕だけで大丈夫ですから!!」

「なんで止めるのおおおおおおおおおお!!」

と乱闘をしかけていたのであった。

さて場所が変わりミッドチルダの夜ブルーフレームは歩いている。

今日の彼は教える仕事は休んでおり仕事についていた。

「ここだな………」

彼の姿はブルーフレームセカンドサードの装備をしており両腕にはロングブレードが装備されており彼は何かをうかがっている感じだ。

「………」

彼は準備をして動きだす、その動きは音を立てずに近づく忍者の如く……そしてロングブレードの後端部からアンカーユニットが発射されてターゲットをグルグル巻きにしていく。

「なんだ!?!」

「そこまでだ。サーペントテールだ……大人しくしてもらおうぞ?」

「な!!サーペントテールだと!?!」

突然現れたブルーフレームに驚いているが何人かは逃れておりデバイスを起動させて攻撃をしようとしたが突然としてデバイスはじかれる。

見るとブルーフレームがライフルを二丁持っておりそれを放ちデバイスをはじかせていた。

「ヴァンセイバー!!」

「おうよ!!」

後ろから現れたヴァンセイバーが残っていたメンバーを気絶させてブルーフレームのところへとやってきた。

「終わったみたいだな？」

「ああ……俺達がやることは今までと変わらないな。」

「まあな、とりあえずこいつらを……」

「誰だ!!」

「ブルー？」

突然としてライフルを構えたブルーフレームを見てヴァンセイバーもビームライフルを構えて辺りを見ている。

だが現れることなくブルーフレームはライフルをしまう。

「いったいどうしたんだ？」

「誰かがこちらを見ていた気がしてな……」

「まじかよ。」

「とりあえずこいつらをさっさと渡してしまおう。」

ブルーフレームたちは管理局に犯人を渡してる中三機のガンダムが見ていた。

「ちえ、あいつらに取られちまったな兄貴。」

「仕方があるまい……ツヴァイ、ドライ撤退をする。」

「あいよ」

「了解アインにい。」

三機の機体はそのまま撤退をしていく。一方でインパルスたちのところでは新たなナンバーズが誕生をしていた。

「あたしはナンバー9ノーヴェだ。」

「ナンバー1 ウエンディっす!!」

「ジェイル一応確認させてくれノーヴェはトーレと同じ戦い方か？」

「あちよつとだけ違うね。彼女の場合はエアライナーと呼ばれるライオンを出すこととリボルバーを使った戦い方だね。ヴェンディの方はライディングボードというのを使った攻撃がメインになるね。」

「なるほど……俺はインパルスガンダムだ。お前たちを鍛えるため頑張ってもらおうぞ?」

「うっす兄貴。」

「よろしくお願いするっす!!」

「チンク案内を頼む。」

「了解した兄上。」

チンクが出ていったのを確認をして後のナンバーズの様子を見ている。

「ジェイル予定では後何体だ？」

「後3体だよ。ナンバーズ7 セツテ、ナンバーズ8オットー、ナンバーズ12ティードだよ。」

「ISはオットーがレイストームと呼ばれる攻撃や拘束に使えるものか自身に装備する武器として俺のビームライフルとナイフだな。」

「ほう……」

「セツテの方は高軌道型を考えてフォースシルエットをベースにしたシルエット装備、ティードはソードシルエットだな。」

「それだけでわかるものかい？」

「ただいだけどな。まあ今はエクシア達のデータもあるからな……それに俺も彼らのデータから新しいシルエットが完成をしたからな。」

インパルスは後ろを振り返ると四つのシルエットとチェストフライヤーにレッグフライヤーがあった。

「二つはエクシアシルエット、脚部のレッグフライヤーにはロングブレードとショートブレード、背中のバックパックにはGNソードやGNサーベルたちを装備するバックパックに脚部にも装備されている左手には専用の盾を装備つと。」

次にあったのは緑色のバックパックにチェストフライヤーとレッグフライヤーがある。

「これはデユナメスパック、主に遠距離型の狙撃タイプだな。武器としてもGNスナイパーライフルやGNピストル背部にも同じくGNピストルが装備されているな。脚部にはGNミサイルを装備とまあ太陽炉がない代わりだけどな。」

「次はキュリオスパック、こちらはセイバーガンダムのデータとキュリオスのデータを使って作った感じだな。こちらは変形ができない代わりにセイバーのはフライトユニットとして改良。もちろんプラズマビーム砲などは使用可能にしている。武器はGNツインライフ

ルとシールドクローとキュリオスの武器を搭載脚部はGNソードが
発生をする機能が装備されている。カオスガンダムみたいだな?」

「そして最後の機体がヴァーチェシルエツト背部にはGNキャノンが
装備されており武装もGNバズーカにビームライフルだな。こちら
にはフィールド発生装置を搭載をしているから盾は不要となった。
GNサーベルも脚部に搭載されている。」

「作ったねインパルス君……………」

「まあな、この世界では三つのシルエツトだけで戦えるかは不明だか
らな……………それにお前さんを作った奴の存在も気になるから
な……………」

「そこまで気にする必要はないと思うけどな……………」

「そうか?」

インパルスとジェイルが話をしていると扉が開いた。

「……………」

「エクシア君じゃないかどうした?」

「インパルス俺と戦ってくれないか?」

「俺と?」

「ああ異世界のガンダムの力を見たくてな……………」

「わかった。装備はお前に会わせてソードできたほうがいいか?」

「いやお前が普段使っているので構わない。」

「フォースか……………わかった。」

エクシアはそういつて出ていきインパルスも準備をするために部
屋を出ることにした。

「何よりも戦争がない方が俺たちのような兵器の出番はなかったかも
しれないな……………」

「インパルス君……………」

そう呟いたのをジェイルは聞こえていた。

インパルス対エクシア

ジェイルの研究所にある訓練ルームではガンダム同士の模擬戦が始まろうとしていた。一人はここで過ごしているインパルスガンダム、もう一人は最近入ってきたエクシアだ。

彼らは武器を装備をしてお互いに準備を完了をしてブザーが鳴るのを待っていた。クアットロが二人に声をかけていた。

『お兄様にエクシアさん準備はよろしいですか？』

「いつでもいいぞ？」

「こちらもだ。」

その様子はナンバーズたちやほかの機体たちも見ていた。クアットロは二人の準備が完了をしたとみてブザーを鳴らすと先に動いたのはエクシアだ。彼は右手のGNソードを展開をしてインパルスに振り下ろす。

「.....」

彼は冷静に後ろの方へと下がり彼が振り下ろしたGNソードをかわしてビームライフルを構えていたがすぐにエクシアは左腰のGNロングブレイドを抜いてインパルスに切りかかる。

彼はライフルを撃とうとしたがすぐにやめて後ろへ後退をしてライフルを発射させるがエクシアは回避行動をして右手のGNソードの刀身が下の方へと移動をしてライフルモードとなり攻撃をする。

「その武器.....そんな風になるのかよっておっと!!」

放たれるGNソードライフルモードの攻撃をかわしながらインパルスはビームライフルで反撃をして彼はきりがないなど思い左手に持っている盾を投げつけてビームライフルを発射させる。

エクシアも彼が突然として盾を投げってきたので驚いているがビームライフルを発射させてきたので何をするかと思ったら突然として左肩の装甲が当たっていることに気づいた。インパルスは持っている盾を投げてライフルの弾を反射させてエクシアの左肩の装甲に命中させた。

彼は左手にビームサーベルを持ち接近をしてきた。エクシアは腰

部につけているGNダガーを投げつける。

インパルスはビームライフルでダガーを破壊をしてそのまま接近をして振り下ろす。彼は左手のGNシールドを使い彼が振り下ろすビームサーベルをふさぐ。

「でえええええええええええい!!」

エクシアはチャンスとばかりにGNソードを横に振りインパルスのコクピット部分を狙ったが突然としてインパルスの上半身と下半身が分離をした。

「な!!」

エクシアは分離をしたインパルスに驚いているがほかのメンバーたちもインパルスの体が分離をしたことに驚いていた。

「兄上の上半身と下半身が!?!」

「インパルスにい大丈夫なの?」

『あーおれの説明をするのを忘れていたな……俺は上半身のチェストファイヤーとレッグファイヤーとコアスプレnderで構成されたMSなんだ。例えば三機の戦闘機みたいな感じだ。』

そのまま再び合体をして着地をした。エクシアも地面から立ちあがった。そしてGNソードをしまう。

「あれ?」

「ほかの異世界のガンダムの方見させてもらった。お前の力はまだまだある感じだな?」

「それはお互い様だろ?お前だって隠している機能があるだろ?」

お互いに機能などを明かしていないのでインパルスとエクシアはお互いに見てから武器などを収納をして素の状態に戻る。

「さてとりあえず終了だ。」

「だな。今日の飯担当は?」

「俺だったな……とりあえずすぐに準備をするでしょう。」

インパルスはそのまま調理場の方へと向かっていきエクシアも彼の手伝いをするために歩いていく。

一方海鳴

ストライクは買い物から帰る途中であった。忍からの命令で足り

ない食材などを買うために街へと出てそれが終わって屋敷の方へと帰還する途中だった。

「さーて後は帰るだけだから問題ないかな？」

ストライクはエールストライカーを出して帰投をしようとしたが……レーダーが反応を起こしていた。

「レーダー反応？人？しかも四人ほど……この近くだな。」

彼はレーダー反応があつた四人の人物がいる場所へと向かつていくと四人の人物が倒れていた。

「四人の人物を発見をしたけど一人じゃ無理ですね、イージス、フリーダム。ジャスティス悪いですけど手伝ってもらってもいいですか？ええ場所は今から送りますのでは。」

ストライクは通信を切り眠っている四人を見ていた。

「二人は白い髪の男の人……後は黒い髪をした男の子……女性は金髪の髪をツインテールにした人……そして最後はどうやったらここまで鍛えられるのでしょうか？」

ストライクは倒れている人物たちを見るとイージス達がやってきた。

「ストライク……」

「こつちですよ。」

「この人たちが？」

「ええ倒れていたのので屋敷の方へと連れていきましよう。忍さまの許可は得ておりますので。」

「了解したすぐに運ぶとしよう。」

四機のガンダムは彼らを運ぶために屋敷の方へと向かうのであった。

さて場所が変わりアースラではなのはたちが砂漠でヴィータたちと戦っていた。アリサとすずかは家の方で待機をしており暇をしていた。

「暇だねアリサちゃん。」

「しょうがないわよ、さすがに砂漠となると私たちはそこまで実戦経験がないんだからね。」

「そうだね……あれ？ストライクたちだ。」

「本当ね誰かを背負っているわ？」

二人はストライクたちが帰ってきたのを見て走っていく。

「これはアリサ様とすずか様。」

「ストライクどうしたの？」

「ええ実は買い物から帰る途中で倒れている四人の方々を保護をいたしまして私一人では不利と思ひましてイージス達に手伝ってもらったんです。」

「なるほどーお姉ちゃんは知っているの？」

「はい忍さまの許可を得て今からお部屋の方へと運ぶところです。現在フアリン殿とノエル殿に部屋の準備はしてもらっていると思ひますので。」

ストライクたちは部屋の方へと歩いていきすずかたちも気になったのでついていくことにした。

目を覚ました青年たち。

???
side

俺はいつたいたいどうしたんだ？確かライドたちをかばって……そうだ、思いだした。ノブリス・ゴルドンの部下たちが現れてライドをかばって、ミカから借りた銃であいつらを撃退をしたったな……『俺は止まんねえからよ、お前らが止まんねえかぎり、その先に俺はいるぞ！だからよ……止まるんじやねーぞ……』

「は!!」

俺は目を覚ました、だがおかしい……俺はなぜ布団で寝ているんだ？俺はあたりを見てどこかの屋敷の布団に寝かされていることがわかり辺りを見る。

「ミカ!? 昭弘!? ラフタさん!」

そこに眠っていたのは俺の仲間鉄華団のメンバーで三日月・オーガスと昭弘・アルトランド……そしてもう一人はタービンのメンバーで兄貴と呼んでいた名瀬・タービンの奥さんだった人でラフタ・フランクランドだ。

だがなぜ俺達は……

「あ、目を覚ましたのですか?」

「な!! ガンダム!」

「え……なんでガンダムのことを知っているのですか……」
だがガンダムにはおかし……なにせ大きさが人と同じ大きさだからだ。これは夢だろうか？俺はつねってみるが痛い……これは夢じゃないってことがわかった。

「えっと落ち着きましたか?」

「ああすまない……ここはどこか教えてもらえるか?」

「ここは海鳴市と呼ばれる場所で月村 忍さまのお屋敷です。俺はここでメイドをして降りますストライクガンダムといます。」

「ストライクガンダム?」

名前的にバルバトスと同じと考えたらいいのか？だが、ガンダム・フレームにしては変わっている姿をしているな……

「えつとあの？そんなじーつと見られましても困るのですが……」
「ああすまない……」

「とりあえずほかの皆さんはまだ起きていないですね……」
「だな……」

「えつと……あなたさまはなんてお呼びをすればよろしいですか？」

「ああそういえば名乗っていなかったな……俺は鉄華団団長……」
オルガ・イツカだ。」

「オルガさまですか、とりあえずほかの皆さまが起きるまではどうしまししょうか？」

「そうだな……あんたのことも知りたいからな……」

俺はこのストライクと共に屋敷の中を案内をしてもらうことにした。ミカや昭弘、ラフタさんと再会をできただけでも良かった。けどほかの奴らも気になるが……

オルガ side 終了

「……あれ？」

次に目を覚ましたのはラフタだった、彼女は辺りを見て隣のベットに眠っている人物を見て目を見開く。

「あき……ひろ？」

彼女は涙目になり彼が眠っている布団の方へと入っていき彼を抱きしめる。

「暖かい……本当に昭弘……なんだね。」

すると昭弘は目を開ける。

「俺は……」

「昭弘……」

「ラフ……タ……ラフタ!!」

彼はラフタを確認をするとそのまま抱きしめた。彼女は苦しくなりタツプをしている。

「ちよつと昭弘!! 苦しいから!!」

「す、すまない……だがどうしてだ……なぜ俺は生きてる??」

「それは私も思ったわ。確か私はあいつらの部下によって撃たれて死んだはずなのに……」

「それは俺だつてそうだ……確か俺はイオク・グジャンを倒して……そこから記憶がない。」

「え……それって昭弘も死んだつてことなの？」

「……おそらく。」

二人は暗い顔をして話をしているとドアが開いてオルガとストライクが入ってきた。

「団長!!」

「よう昭弘にラフタさん。」

「あなたも？」

「まあそんな感じだ。それで倒れていた俺達をこの屋敷に運んでくれたのがここにいるストライクガンダムって奴だ。」

「えーと初めましてストライクガンダムといます。」

「ガンダム!?!」

「とりあえずあともう一人の方も起きているみたいですね？」

「「え?」」

三人が見ると三日月が起き上がっていた。彼は両手などを動かしており辺りを見ていた。

「オルガにラフタに昭弘じゃん。」

「ミカ……」

「三日月……」

「えつと再会を喜んでいるところ申し訳ございません、忍さまがあなた方をお呼びですので案内させてもらいますね?」

ストライクの言葉に四人は立ちあがり忍が待っている部屋へと向かっている途中でアリサたちが走ってきた。

「ストライク!!」

「アリサさまにすかさずかさまどうしたのですか?」

「大変なのよフェイトがやられたの!!」

「フェイトさまが!?!」

「うん、突然として電波が発生をして映像が途絶えて次についたら

フエイトちゃんがリンカーコアを収集されていたの!!」

「おいストライク。この子たちは?」

「えっとですね紹介させてもらいます。こちらの紫の髪の少女はここ
の主人忍さまの妹のすずか様、そしてお隣の方は友達のアリサ様で
す。」

「えっと月村 すずかです。」

「アリサ・バニングスよ。」

「俺はオルガ・イツカだ。」

「三日月・オーガス。」

「昭弘・アルトランドだ。」

「ラフタ・フランクランドよろしくね?」

「えっとよろしくお願いします。」

「とりあえず今は私は忍さまのところへと案内をしている途中ですか
らね困りました。」

「あらストライク。」

「忍さま……」

「お客様は私が話しをしておくからあなたはすずかたちと一緒に行く
てきなさい。」

「了解です。アリサさま、すずかさま!!」

「うん!!」

三人は走っていきオルガ達は気になっていた。

「あの子たちはいったいどこへ?」

「そうね……あなたたちは魔法つてものを信じるかしら?」

「魔法?」

「そう、あの子たちが関わっていることだけどね。」

「魔法ねーそんなものあるのかしら?」

「わからん……」

「さてお話をしましょうか?あなたたちもストライクたちと同じよう
に異世界から来たって感じね?」

「異世界ですか?」

「おそらくね。ノエル案内をお願い。」

「わかりました。皆さまごちらになります。」

ノエルと共にオルガ達は移動をするのであった。

一方でアースラへ到着したストライクたちは司令室へと行くとア
リシアが立っていた。

「ストライクに皆……………」

「アリシアちゃん、フェイトちゃんは？」

「うん……………リンカーコアがとられた影響でなのはちゃんみたい
になっているって……………それにしてもあの仮面の奴なんなの？
まるで二人いるような感じがした。」

「二人いるような感じ？」

アリシアの言葉に三人は首をかしげてしまう。クロノも両手を組
んで考え事をしていた。いったいヴォルケンリッターたちの主人で
ある闇の書をもっている人物はいつどこにいるのかと……………
ストライクはとりあえずフェイトが眠っている部屋へ行くとすでに
イージス達が彼女を見ていた。

「イージス、どうだい？」

「ああリンカーコアをとられている以外は問題ない。」

「ストライクさん。」

「なのはさま、大丈夫ですよ……………あなたも魔法が再び使えるよ
うになったのですからフェイト様も使えるようになりますって。」

「うん、そうだね!!」

なのはは笑顔になりストライクもいったい誰が夜天の書をもつて
いるのだろうかと考えていた。だがいずれにしても答えが今現在見
つかっていないので困っていた。

「いずれにしてもフェイトはリンカーコアが回復をするまでは魔法は
使えないな……………」

一方でオルガたちは忍からギャランホルンなどの組織はこの世界
にないこと知り自分たちは完全に異世界へとやってきたことに驚い
ていたところであった。

「……………これが事実よオルガ君。この世界はあなたたちが言ってい
た戦争などは起こってもいないしコロニーなんてものもない。さら

にMSと呼ばれる兵器だってストライク君たちぐらいよ知っているのは。」

「…………あのストライクって呼ばれている機体もMSってこと?」「ええ彼はそう言っていたわ。けど彼曰くあの大きさもなんでかこの世界で目を覚ましたらアーなっていたといっていたわ。」

三日月と昭弘はその話についていけておらず混乱をしていた。ラフタはため息をついて二人に簡単に説明をしているところだった。「それでどうするかしら?この世界は先ほども言った通りにあなたたちが知っている世界とは違うわ。暮らしていくにしても家などもないからどうするのかしら?」

「…………忍さん、俺達をここで働かせてもらえませんか?」

「ここがかしら?まあ確かにストライク君やノエルたちだけじゃ無理なところもあるからね。それに人数が多いのも悪く無いわね。いいわよ…………あなたたち四人をここで雇ってあげるわ。仕事に関してはストライク君が帰ってから相談ね。」

数十分後ストライクたちが帰投をした。なのはやアリスアも一緒に魔法陣から降りてきた。

「とりあえずフェイトさまは魔法は使用をしないでくださいね?」

「わかっているよストライク。」

「あらおかえりなさいストライク。」

「ただいま戻りました忍さま。」

「あれ?後ろの人たちは?」

「今日からここで一緒に暮らす家族よ?」

「オルガ・イツカだ。」

「三日月・オーガス。」

「昭弘・アルトランドです。」

「ラフタ・フランクランドよろしくね!!」

「えつと高町 なのはです。」

「アリスア・テストアロッサだよー」

「フェイト・テストアロッサです。」

「イージスガンダムだ。」

「僕はフリーダムガンダムです。」

「ジャスティスガンダムだよろしく頼む。」

「僕はM1アストレイです。」

「僕はウインダムです。」

「俺はザクウオーリアだ。」

「へえー異世界のガンダムってこんなにもいるんだ。俺が乗っていたバルバトスとかと違う感じだね。」

「バルバトス？すまないがどんな機体か教えてもらえないか？」

「俺が最後に乗っていた機体はバルバトスルプスレクス。超大型メイスやテイルブレードなどを装備をした機体だ。」

「……もしかしてあれのことか？」

「イージス？」

イージスは少しだけ考えてから何かを決意をしたのかオルガたちの方を見ていた。

「実はアークエンジェルを作っている際に四機の機体がアルハザードで見つけたんだ。だがそれらは俺の中にあつたデータにはない機体だったからな……。それで起動をするかと思つたが起動はせずアークエンジェルのカタパルト付近に置いてあるんだ。」

「わかつた行ってみよう。」

イージスの後についていくようにオルガ達とストライクたちはアークエンジェルへ。

再会の機体。

イージスの案内で月村家地下ドックへ到着をしたオルガ達はそこに鎮座をしている白き戦艦アークエンジェルを見て驚いている。

「おいおいまさか戦艦まであるとはな……………」

「しかもかなりの武装がついているな……………」

オルガと昭弘はアークエンジェルを見ながらつぶやいているのはたちも改めてアークエンジェルを見ている。白い大戦艦は地下ドックで待機をしておりイージスはロックを解除をしてアークエンジェルの中へと入っていきその後ろを全員がついていく。最後のM1アストレイが入って扉が閉まり彼らは中へと入っていく。

「こつちが格納庫になっている、確か四機はあつちに置いているはずだ。」

イージスの案内で彼らはアークエンジェルの中を見ていた、食堂に温泉ブリッジなどなのはたちも改めてアークエンジェルの中はアースラにも負けない設備をもっているんだなと感じた。

「まあ元々が戦闘母艦だからな……………娯楽系などはこれから導入をしていく予定にしているさ。」

イージスはなのはたちに申し訳なさそうに頭を下げてから目的地である格納庫へ到着をしたがストライクたちは武器を構えていた。

「そこに居るのは誰ですか!!」

「ああアークエンジェルに侵入者がいるとは思ってもいなかったけどな。出て来い!!」

ストライクたちはビームライフルをつきつけていると声が聞こえてきた。

「ま、待ってくれ!!俺達は敵じゃねーよ!!」

現れたのは一人の男性と二人の女性だ。だがオルガ達は彼らの姿を見て目を見開いている。

「シノ!!」

「クーデリア?」

「嘘……………アジ?」

オルガ達が彼らの名前を呼んだのを見て向こうの方も驚いている。

「オルガ!? 昭弘!? 三日月!？」

「三日月!!」

「ら．．．ラフ．．．タ?」

彼らは再会を喜んでおりその様子をみたストライクたちは武器を消してみていた。

「仲間．．．．．か。」

「彼らの絆はとてつもなく強いってわかるよ。」

数分後彼らはどうしてアークエンジェルの中にいるのか説明をしていた。

「私は仕事疲れでそのまま眠っていました。ですが次に起きたときはこの中で起きました。そばにシノさんとアジーさんがいたので驚きました。」

「私も同じような感じだ．．．．．」

「俺は確か特攻をして．．．．．悪いそこからの記憶がねえ．．．．．」
「なるほど．．．．．あなた方は何らかの影響でこの世界へ来てしまったと言った方がいいですね。」

ストライクたちはとりあえず彼女たちと共に奥の方へと行きイージスが見つけた機体のところへと行き鎮座をしている機体が6つあった。

「あれ? 二つ増えている。」

「おおおお流星号!!」

「まさか．．．私たちが乗っていたMSがあるなんて．．．．．」

「ええびつくりだわ。」

三日月は鎮座をしている愛機のところへと行き手を振れる。

「久しぶりバルバトス．．．．．お前もこの世界へと来ていたんだな?」

「グシオン．．．．．」

オルガも白い獅電のところへと行きラフタたちも同じように獅電のところへと行くとMSたちが光りだして全員が目を閉じてしまうが光が収まると鎮座をしていたMSたちの姿はなく三日月たちが

立っていた。

「MSは!？」

「大丈夫だよ。俺達の手に戻っているよ。」

彼らの手には先ほどまでしていなかったブレスレットが装着されていた。ストライクたちは愛機たちも相棒に合えてよかったなど思いながらかつて自身達に乗っていたパイロットたちはどうしているのかなと気になっていた。

アジー side

愛用の獅電がなっているブレスレットを見ながら私は忍さんの屋敷にあるガデージから街の方を見ていた。

ここは私が過ごしていた世界とは違い火星の方は人が住んでおらずコロニーなどもない。MS同士の戦闘などもない世界……か。

「はあ………」

「アジーさん、夜は冷えますので中へお入りください。」

私は声が出たので振り返るとバルバトスと同じガンダムであるストライクが立っていた。

「ああすまない。」

「どうですか海鳴は綺麗ですよね?」

「ああ綺麗だ……本当の意味でな………」

「アジーさん、この世界では我々のようなMSは本来は必要ない世界です。ですがなぜこの世界へ私たちが来たのか今もわからない状態です。」

「ストライク?」

「ですが今ならわかるかもしれません。忍さまやすずかさま、なのはさまにフェイト様、アリシアさまにすずか様、アリサさまにそして鉄華団の皆さんを守るためじゃないかって………」

「………」

不思議なガンダムだ、星空を見ながら彼は自身手を見ていた。おそらく彼はMSとして使命で戦っていたから。

「さてそろそろ中へと戻りましょう。明日は皆さまをご案内をしない

と行けませんので。」

「わかった。ストライクお世話になる。」

「いえいえ皆さまは家族ですから当然ですよ(笑)ではお休みなさいませ。」

ストライクはそのまま中へと入っていき私も用意されたお部屋の方へと行く、中ではラフタが待っていたかのようにベットに座っていた。

「あ、どうだった？」

「ああとでもきれいな星空だったよ……ラフタ。」

「何？」

私は彼女に抱き付いた。彼女は驚いているが今はこうさせてくれ……

「アジー？」

「良かった……また……あなたとこうして会えたんだから……私……私……私……私……私……」

「謝るのは私だよアジー。あなたに後を任せて私は殺されたんだから……でもこれからは一緒だから。」

「ええその通りよ。」

もう失いたくない親友を仲間を……だから今度は絶対に守って見せるさ。

アジーside終了

次の日となりオルガ達はおそろおそろとテーブルに座っていた。

「あなたたちそんなに緊張をしなくてもいいのよ？」

「えつとすみません。」

「ここはあなたたちの家でもあるんだからね？」

「あ、はい。」

全員が座つたのを確認をしてストライクたちがご飯などを持ってきて食べることにした。

「すずかさまは今日は修行式でしたね？」

「うん、それで今日は友達が入院をした病院に行くことになったから遅くなるね。」

「わかりました。」

ストライクはさすが遅くなることをインプットしてからオルガ達のご飯が食べ終わるのを待ちながら行く準備などをしていた。

彼らの食事などが終わりノエルさん達が残るので案内をするために海鳴市の街を探索をする。

「お金などは心配しないでください。あなた方の服などを買ってきなさいと忍さまからお金はもらっておりますので。」

「すみません……」

「お気になさらず。ではまずは……喫茶店に行きましようか？」

「喫茶店？」

「ここ海鳴では有名な喫茶店ですよ。名前は翠屋です。高町夫妻が店を開いている場所です。」

「あれ？高町って確か……なのはちゃんの。」

「ラフタさん正解ですよ。ここはなのはちゃんの両親が開いている喫茶店ですから。」

フリーダムが答えてストライクが先頭に喫茶店の中へと入っていく。

「いらっしやいストライク君おはよう。」

「おはようございます士郎さんと桃子さん。」

「わ、若い……」

ストライクから三人の子どもを産んでいること聞いていたオルガ達は初めてみた桃子の姿を見て驚いている。

「あらあら嬉しいわねってあなたたちは？」

「あ、俺はオルガ・イツカです。」

「俺はノルバ・シノつていいいます。」

「昭弘・アルトランドです。」

「三日月・オーガス。」

「ラフタ・フランクランドよ。」

「アジー・クルミンです。」

「クーデリア・藍那・バーンスタインといいます。今は忍さんのところでお世話になっております。」

「あらあら忍ちゃんのところでは高町　桃子よ、向こうにいるのが私の夫の。」

「高町　士郎だよろしくね?」

「さて次の場所へと案内をしますね?」

ストライクたちは案内をしてデパートやコンビニなどを寄ってお昼ご飯などを食べてから買い物などを終わらせた。なお荷物の方は配達をもらうことになり月村家に届くようお願いをした。

彼らは街の方へと歩いていると突然として人の姿などが見えなくなった。

「これはいったい……」

ストライクは空の方を見ると景色などが変わっていることに気づいてこれは何かがすぐにはわかった。

「結界……しかも魔法の結界を張っていますね。」

「魔法だって!?!」

シノたちが驚いていると突然として砲撃が飛んできた。ストライクとイージスはシールドでガードをするが反動で吹き飛ばされる。

「うわ!!」

「ストライクさん!!イージスさん!!」

「いったい何が!!」

ザクウオーリアたちもそれぞれで武器などを構えていると上空で光が見えた。銀髪の髪をした女性を周りをなのはたちが攻撃をしている姿を。

「いたたた……」

「大丈夫か?」

「何とか……とりあえずオルガさん達はザクウオーリアたちと一緒にまっついていてください。」

「だな。俺達はなのはたちに合流をするぞ。」

イージスの言葉にストライクたちは空へと飛んで行きオルガ達はなのはたちの姿を見る。

「あれって。」

「なのはたちだ。」

「あれが魔法って奴か……」

全員が見ていると銀色の髪をした女性はオルガ達の存在に気づいて攻撃をするために接近をしてきた。

「おいこつちに来ていないか!!」

フリーダムたちが追い駆けてビームライフルを構えて放とうとしたが……

「駄目だ撃ったらオルガさんたちに当たってしまう!!」

銀色の髪をした人物はオルガ達に攻撃をしようとしたが三日月がその前に入る。

「オルガ達はやらせない、力を貸せよバルバトス!!」

三日月が光りだすと彼を纏うかのようにバルバトスの持っている大型メイスが銀色の髪の人を吹き飛ばした。バルバトスルプスレクスが今この世界で復活をした。

「ストライクさん!!」

なのはたちがストライクたちのところへ到着をしてさらに三日月がバルバトスを纏った姿を見てシノたちも俺達もやれるかと思えばレスレットが光りだして彼らの愛機の姿へと姿を変える。

「あれにはやてちゃんが!!」

「はやて?」

ブリッツたちがボロボロの姿になって到着をした、彼らは話をする。彼女達は病院で話をしていると仮面の男が現れてボロボロにされたシャマルたちがいた。なんと奴は彼女達のリンカーコアを使い闇の書を覚醒をさせるためにデュエルたちも戦ったが彼女達のコンビネーションにやられたということさらにはやての目の前でヴォルケンリッターが消滅をした結果誕生をしたのが管理者ということ……

「なんてことを……」

ストライクたちは銀色の髪をした女の人を見ながらはやてをどうにかして戦えるかを考える。

闇の書の管理者との戦い はやてを救えストライク
!!

ストライクたちはなんとかして中にいるはやてを助けるためにバルバトスを纏った三日月達という新しい戦力と共に管理人格者をどうにかして動きを止めるために攻撃をする。

ストライクはガンバレルストライカーを装着をしてガンバレルを展開をしてビームライフルの射撃と共に弾丸を発射させて管理人格者に攻撃をする。

「……………」

管理人格者はストライクが放った攻撃をふさいでいるとアリサとジヤステイスがラケルタビームサーベルを構えて切りかかる。

「……………放てプラズマランサー。」

フェイトが使っている魔法プラズマランサーが放たれて二人は攻撃を中止をして回避行動に入りフェイトが後ろからサイズモードのバルディッシュを振り下ろす。

「ぐ!!」

だがフェイトが振り下ろしたサイズは管理人格者が張る防御壁にふさがれてガードされる。

ガンダム・フラウロスは上部にセットをしているレールガンを構えていた。

「くらいやがれ!!ギヤラクシーキャノン!!」

「は!!」

「この野郎!!」

フリーダムとガンナーウィザードを装備をしたザクウオーリアはバラエーナプラズマビーム砲とオルトロスを構えてガンダム・フラウロスと共に同時発射をする。

「……………ディバインバスター……………」

彼女が放ったのはなのはの技ディバインバスターだ。だがその威力は三機の機体が放った砲撃を相殺をした。

アリシアはガイアガンダムへと姿を変えてMA形態へと変身をしてビーム砲を放ち攻撃をしていく。

「アクセルシューター!!」

「いくわよアジー!!」

「ええ!!」

「俺も行く!!」

なのはのアクセルシューターに合わせてラフタとアジーの二人の獅電のライフルと昭弘のグシオンのレールガンが放たれて攻撃をしていきイージスがMA形態へと変形をしてスキュラを発射させる。

爆発をして全員が警戒をしている中煙がはれるが……

「嘘でしょ……あれだけの攻撃を無傷!」

アリサの言葉に全員が驚いている中彼女はぶつぶつと何かを呟いているとダガーがたくさん発生をして全方位に放ってきた。

「くそ!!」

フリーダムはラケルタビームサーベルでブラツティダガーを破壊している。ストライクは接近をしてエールストライカーへと変えてビームサーベルを抜いて彼女に切りかかる。

だが管理者はシグナムが使うレヴァンティンを出してストライクのビームサーベルをふさいでから彼の頭をつかんだ。

「!!」

「お前も眠るがいい……」

ストライクが光に包まれて彼女に取りこまれてしまう。バルバトスは接近をして大型メイスを叩きこんでいくが彼女はグラーファイゼンでバルバトスのメイスをガードをする。

「ち……」

バルバトスは地上に着地をしてオルガ達が近づく。するとミサイルなどが飛んできて管理人格者に命中をする。放った方角を見るとバスター達が放った。

「つたくなんて堅さだよ。」

「あきらめるな!!はやてを助けるためにな!!」

「その通りです!!僕たちはまだ戦えます!!」

デュエルたちも参戦をして管理人格者へと攻撃をする。はやてを助けるために……。一方で中へと取りこまれたストライクは中へ移動をしていた。

「黒いもの……。これはバッグ？なんてひどい状況なんだ……。彼は移動をしながら何かの光を見つけた。その場所では倒れている少女の近くに銀色の髪をした女の人がいた。」

「お、お前は……。どうしてここに？なぜ夢を見ないのだ？」
「夢？……。そういうことか。俺は完全な機械だからな……。だからお前の効力は聞いていないみたいだ。さて、この子ははやてちゃんか……。とりあえず起こすとしてしよう。」

「無理だ。私の力で主は……。」

管理人格者が言う前にストライクはメイドストライカーを装着をして背中からフライパンを出していた。

「なぜフライパン。」

「……。……。」

ストライクは一旦落ち着いてから……。思いつきフライパンにお玉を使って叩くとびしゃああああああああああああああああああああんといい大きな音が響いた。

「ひゃあああああああああああああああ!!」

はやては飛びあがり辺りをキョロキョロしていた。

「えつとここはどこや？」

「ふう……。どうやら目を覚ましたみたいですね？」

「あなたはブリッツたちみたいなき感じやけど？」

「始めまして八神 はやて様、私は月村家のメイドをしていますストライクと申します以後お見知りおきを。」

ストライクはメイドストライカーのまま挨拶をして管理人格者は驚いているがストライクはさてといいながらI W S Pストライカーを装着をして辺りを見ていた。

「とりあえずこの辺のバッグを確認をした。はやて殿は目を閉じておいてください。」

ストライクははやてにそういつてから左手のコンバインシールド

を回転させてガトリングがバグに当たっていき撃破していく。ストライクはこの中に入ってからこの闇の書と呼ばれるのがバグがあるのではないかと考えていた。

「……………ところで管理人格者さん。」

「なんだ？」

「とりあえずこの辺のバグの排除は確認をした。ここから出るにはどうしたらいい？」

「外から強力な一撃でも与えてくれれば管理者管轄が使えるはずだ……………」

「はやてさま、あなたには念話を使えるはずです……………それで外にいるなのは様たちに連絡をお願いします。」

「わかったで!!」

一方で外ではイージス達が戦っていたが彼らも疲れが出ていた。

「全くこいつ……………全然疲れる様子ないじゃない!!」

「確かに……………」

「お前ら……………まだいけるか？」

「正直言つてつらいかも!!」

「確かに……………俺達は初めてMSを纏って戦っているから……………」

「てか俺達の攻撃聞いてなさすぎるだろ!!」

シノが叫んでいると声が聞こえてきた。

『えーつとうちの声聞こえていますか!!』

「この声は!!」

「はやてちゃん!!」

『すずかちゃんかいな!!よかった……………今うちらは彼女の中に折るねん。それでそつちで一撃でも与えてくれれば何とかなるんやけど……………」

「……………わかった。」

ハルバトスは一気に飛びたっていく。

「おいミカ!!」

オルガは止めようとしたが彼はテイルブレードを発射させて管理

人格者に攻撃をしたがガードされるが彼は大型メイスを出して横から叩きつけて吹き飛ばした。

一方で中では。

「どああああああああああああああああ!!」

突然として勢いよく揺れたので彼らはバランスを崩してしまうが管理人格者は今ですといったのではやてはそうやと管理人格者に振りかえる。

「名前決めたで!!リインフォース・・・・祝福の風や!!」

「リインフォース・・・・我が主!!」

「あのー俺も忘れないで!!」

光包まれていきストライクもついていく。一方で外では突然として管理人格者の動きがとまりブリッツたちも様子を見ていた。

「一体何が?」

「おい見ろ!!」

バスターが指をさすと魔方陣が現れてはやてが現れた。さらにストライクもエールストライカーを装着をして登場をした。

「ストライク!!」

「はやてちゃん!!」

「さあ目覚めよ我が騎士たちよ。」

はやての周りにヴォルケンリッターたちが現れてそれぞれで再会を喜んでいたがストライクの方は嫌な予感がしていた。

「・・・・来る!!」

『ぐおおおおおおおおおおおおお!!』

するとはやてたちが抜けた管理人格者は暴走態へと姿が変わっていき全員が驚いている。

「ぬお!!」

「なんだよあれ!!」

「わお・・・・でか!!」

「だけどやるしかないね?」

バルバトスたちは武器を構えているとクロノが到着をした。

「皆!!」

「クロノ殿。あれが……」

「あああいつを倒すにはアースラに搭載されたアルカンシエルを使えばいい。」

「ならアークエンジェルも使おう。アークエンジェルに装備されている陽電子砲ローエン格林なら大火力を出すことができる。」

「わかった。だが問題は地上で撃つたら大変なことになるんだが……」

「ならコアだけでも宇宙で破壊できないかな？そこにアークエンジェルとアースラのローエン格林とアルカンシエルを使えばいいじゃない？」

「そうだな。よし、アークエンジェル発進!!」

イージスの言葉を受けてアークエンジェルはオートコントロールモードで地下ドックから発進をしていき宇宙の方へと上がっていく。

暴走をする闇が襲い掛かってきた。バスターはガンランチャーを先頭に連結させて各散弾の弾を放ち触手を攻撃をしていきグシオン達もレールガンなどで攻撃をしていきブリッツ、デュエル、イージス、ストライクはビームサーベルで触手たちを切っていく。シグナムを筆頭にアリサ、ジャステイスとアリシアが接近をしていきアビスモードへとなったアリシアは一斉射撃を放ちその間に三人が次々に攻撃をしていき切っていく。

「すずかちゃん!!」

「はい!!」

二人はハイマツトフルバーストを放ち闇の書の暴走態に放たれて行き上空ではなのは、フェイト、はやてが構えていた。

その間にザフィーラがガードをしてヴィータが一気に接近をして振り下ろす。

「ラケーテンハンマー!!」

ストライクはパーフェクトストライクへとなりシュベルトベゲールを抜いてヴィータと共に切って斬撃をお見舞いさせてからなのはたちの方をみていう。

そこにクロノがデュランダルを構えてエターナルコフィンを発動させて暴走態を凍らせていく。ストライクはチャンスと思い叫ぶ。

「今です!!なのはさま!!フェイト様!!はやてさま!!」

「うん!!全力全開!!」

「いくよバルディッシュ!!」

「ごめんな・・・安らかに眠ってな?」

三人がカートリッジシステムなどを解放させていきエネルギーがたまっていく。

「いくよ!!スターライト」

「ジエツトザンパー」

「ラグナロク」

「二」ブレイカああああああああああ!!」

三人が放った砲撃を見て鉄華団は驚いている。

「おいおい・・・あれが魔法なのか?」

「ねえ昭弘?」

「なんだ?」

「あんなのが魔法なんだねーわーい私あれをくらった死んじやうわー」

「ラフタ!」

その一方でストライクたちも苦笑いをしていた。

「なんといいいますか・・・あの威力・・・ローエン格林以上じゃないですか?」

「わからないが俺達もくらえばただでは済まないだろうな・・・」

そしてシャマル、ユーノ、アルフによってコアがロックされて転移魔法で宇宙へと転送されてアークエンジェルとアースラはすでに構えていた。

「これで因縁を終わらせます!!アルカンシエル発射!!」

アースラから放たれたアルカンシエルとアークエンジェルが放ったローエン格林がコアめがけて放たれてそれが命中をして爆散をする。

『コアの破壊を確認!!』

「作戦終了ですね。」

「そうだねストライク。」

すずかが彼の隣に行きそう呟いたときはやてが落下をしていく。彼女をリインフォースが支えて悲しい瞳で見ている。

ストライク奮闘!!

ミッドチルダにあるバーにてレッドフレームは2人の人物に会っていた。

「あんたが用意をしてくれたパーツが届いたおかげで嬢ちゃんたちのデバイスの改造ができたよ。」

「何気にするなって俺とお前の仲だろ?」

「まあレッドフレームがいきなり連絡を受けた時は驚くことばかりだよ。」

「はっはっはすまんなアミダさん、だが名瀬のおかげでもあるのは事実だ。」

レッドフレームとともに飲んでいるのは名瀬タービンとアミダ・アルカの二人だ。彼らは戦死した後ミッドチルダに流れて着いて今と同じような仕事をしている。レッドフレームとは長い付き合いでこうして報告をしている状況だ。さらにレッドフレームはその時アースラの中から見たことがないMSを見たと言い彼女たちに見せると二人は目を見開いている、

「オルガに三日月たちじゃねーか……………」

「それにアジーとラフタまで……………」

「2人の知り合いか……………確かあいつらは地球と呼ばれる場所で暮らしていると聞いたな。」

「そうか……………」

暫くはほっておいた方がいいなと判断をしたレッドフレームであった。

場所が変わりアースラ内にあるデバイス室ではストライクがパソコンの前でプログラムなどを作成などをしていた、その理由は闇の暴走隊を倒した後になる。

ストライクはリインフォースと二人でいた。彼女は暗い顔をしていたのでストライクは何かあったのかと聞いた。

「ああ実はな……………私の中にあるプログラムなどが色々と破損をされていてな。もしこのまま私は生きいてもまた闇が生まれてせつか

く治る主はやての足がまた動けなくなってしまう。」

「まさか……」

「その通りだ。小さい勇者たちに私を消滅をするようにお願いをしたんだ。」

「リインフォースさんはそれでいいのですか？はやてちゃんはずっと悲しまれますよ。」

「いいんだ。私の笑顔を教えてくれた人に出会えただけでも……」
「……」
「リインさん、別に移したらどうなるのですか？」

「なに？」

「あなたのプログラムを別の場所に移すことは可能ですか？」

「可能だと思うが……」

「もう誰も失いたくないですから……あなたの命を僕に預けてください。」

そこからストライクはアースラのデバイス室に籠ってリインフォースがその中に入りプログラムなどを作成などをしていた。

一方でイージスたちはストライクのことを心配をしながらはやてが起きるのを待っていた。ブリッツたちも心配で仕方がない。

「こうして4機で集まっているとウエザリウスの中にいた頃を思い出すな。」

「ですね。」

「だな。」

「ふん、だがまさか別世界でお前らと再会をするとは思ってもいなかったがな。」

4機のガンダムは楽しそうに話をしている中鉄華団の皆は疲れていた、初めてモビルスーツをまとったこともありクーデリアはお水を持ってきていた。

「はい皆さん。」

「ありがとう。」

「ああ悪いな……」

水などを飲んですずかはストライク大丈夫かな？と言っているの

を聞く。

「ストライクは今デバイス室と呼ばれる場所に籠っていると聞いているが……」

「まあ大丈夫っしょ。ねえ昭弘？」

「わからん」

そしてストライクは大事なプログラムを再び生成をしていき夜天の書を元の状態にしていくのに時間がかかっていた。彼女の言うとおりメインのところがほとんどが破損をしていたのでストライクはその作成などをしていきリインフォースの調整も同時に進行をしていた。

ストライクが籠ってから1週間がたった。はやてたちはデバイス前にいて扉が開いた。彼女たちは中へとはいるとリインフォースが立っていた。

「リインフォース？」

「主はやて……もう大丈夫です。私はあなたの前から消えることはありません。」

「ほ、ほんま!!」

「はい。」

はやては涙を流しながら彼女に抱きついた、ストライクは良かったと思えば彼女たちの方へ近づこうとしたが突然として体に力が入ってこなくなりそのまま後ろに倒れてしまう。

「ストライク!!」

すずかたちが走って彼の所へ行くが彼は眠っているようでリインフォースは彼のところへと行き彼を抱きしめる。

「ありがとう……私を救ってくれた勇者よ……あなたのおかげで私は主たちと共に過ごすことが出来る、本当にありがとう……」

リインフォースはそのまま彼の頬にキスをする。眠っているため彼は気づかないと思うがこれは彼女なりのお礼である。

こうして1つの闇の書の事件は魔導師たちとガンダムたちによって事件は終わった。

さて場所は再びミッドチルダにある家。

「ふああああ……」

カラミティたちはクイントの手伝いを終えてのんびりしていた。レイダーはゲームをしおりフォビドウンはイヤホンをして音楽を聴いておりカラミティは欠伸をして本を読んでいた。

「それにしてものんびりしているね俺たち。」

「別にいいじゃん？戦い無い方がいいじゃん？」

「俺たちの体訛っちゃまうけどな……けどクイントのおばさんにギンガたちと共に拾われてこの家に来たのどれくらいだったけ？」

「あいつらがもつと小さい時だからよ。戦闘機人か……」

カラミティたちはギンガたちが自分たちのような存在なのは知っている。彼らとは違いギンガやスバルには生身の部分があるため完全な兵器じゃない。

「あいつらが戦わないように俺たちがもつとクイントのお婆さんの手伝いをしないとな。」

「まあね、そういえば今ゼスト隊って誰を追いかけているっけ？」

「確かジェイル・スカリエツティじゃなかった？」

「確かそんな名前だ。」

さてその話をしているジェイルたちの基地では新たなナンバーズたちが目を覚ます。

「ナンバーズ7 セツテです。」

「ナンバーズ8のオットーだよ。」

「ナンバーズ12のティードです。」

「ああよろしく俺の名前はインパルスガンダムだ。お前たちを鍛える役目でもある。まずは俺が基本的なことを教えていく、それからセツテはトーレがティードはエクシアが教えてくれる。」

「あのー兄さん僕は？」

「オットーに関しては俺が引き続いて鍛えることになる。武装もジェイルによって作成をしてもらったデータを見て決めて欲しい。それで教えることがあれば他のナンバーズたちに聞いたり俺たちにも聞いても構わん。」

「はいお兄ちゃん」

「……………」

「ふふモテモテですねお兄様。」

「クアットロかお前の方は慣れたか？」

「ええ慣れましたわ、ライフルビットとシールドビットの操作など簡単ですわよ。後はこのGNピストルⅡに慣れればいいですわ。それとドゥーエ姉様から連絡がありましたわ。どうやら博士を逮捕しようとしている部隊がいると……………」

「ふーむ…………あまりお前たちを人殺しをさせたくないからな…………まあここがバレることは無いと思いたいが一応ジェイルの所へと行くでしょう。」

インパルスとクアットロはジェイルがいる部屋へとはいる。

「やあインパルス君。」

「ジェイル第2研究所の移動の準備などは出来ているのか？」

「ああ一応ねエクシアくんたちが先に整備などをいってくれてるおかげでね。」

「ここにやってくる可能性はあるのか？」

「奴ならこここの場所を知っているから攻めてくるね。」

「わかった。警戒はしておこう。」

平和な日々

闇の書事件が解決をして一週間が立った。月村家庭ではなのはたちが集まってお茶を飲んでいた。

はやてもヴォルケンリッターたちやブリッツたちと共に歩けるようにリハビリを続けている。そこにストライクがお茶を持ってきた。

「皆さまお茶になります。」

「ありがとうございます。」

「いえいえこれもメイドとして当然のことですから。」

ストライクが入れてくれたお茶を飲みながら庭を見ている。庭ではMS同士で模擬戦をしており今現在ウィンダム対ザクウォーリアの二機が戦っていた。その周りにはジャステイスたちが座りながら模擬戦を見ていた。

ウィンダムはビームサーベルを抜いてザクウォーリアに振り下ろす。ザクは肩のシールドでガードをしてタックルをお見舞いさせる。

「ぐ!!」

ウィンダムはバランスを崩すがすぐに態勢を立て直してシールドからミサイルを発射させる。

「何の。」

腰のグレネードを投げて爆発させてお互いにトマホークとビームサーベルをぶつけあっていた。

さてさて場所が変わり海鳴の街に歩いている二人がいた。

「うふふふん。」

「ラフタどうした?」

「ううんやっと二人きりになれたんだなと思ってね。」

「……………すまんラフタ。」

「どうしたの?」

「あの時俺が止めていたら……………お前を……………」

「昭弘……………」

「だから……………その今度こそ守らせてくれ俺の傍から離れるな!!
好きだ!!」

「私もだよ昭弘!!」

「……あの?」

「え?」

二人は振り返るとM1アストレイが顔を赤くしながらたっていた。彼は丁度二人を見かけたので声をかけようとしたがまさか告白をするとは思ってもいなかったので顔を赤くしている。

「えっとおめでとうございます……」

「す、すまない……」

「いいえ、何も知らずに声をかけた僕もそうでしたから……とりあえず帰ったらお祝いしましょうか（笑）」

「あ、いやその……」

「ちよつとM1君!!」

「ストライクさん、M1です……はいはいではお願いします。皆さんも二人を祝いたいそうなので僕はこれでお幸せにいいいいいいいいい。」

彼は走っていき取り残された二人……

「……えつと昭弘?」

「……シノがからかってるのが目に見える。けど……」

昭弘はラフタを見て彼女を抱きしめる。

「こうしてまたラフタに会えたから俺は嬉しい。だから今度こそお前を守る。」

「うん守って……もう離れたくないから……」

二人は抱きしめあってから手をつないで街を歩くことにした。一方で屋敷の方ではM1アストレイから連絡が来たストライクは笑っていたのですが声をかけた。

「ストライクどうしたの?」

「いいえただおめでたい報告を受けただけですよ。すずか様私はこれから買い物に出かけて来ますね?今日は豪勢にしますので……」

「え!」

ストライクは忍に声をかけてからノエルと共に買い物をするために外にいたフリーダムたちも一緒に買い物についていくことになっ

た。

「へえーラフタさん達がね。」

「ああしかもM1は丁度二人を見かけた時に告白をしたのを聞いてしまったからな。顔が真っ赤になったそうだ。」

「だよな俺もそこにいたら真っ赤だぞ?」

イージスはそういながらデパートへとやってきて食材などを入れていく。フリーダムとジャステイスは肉コーナーへと行き色々を探していた。

ストライクは買い物カートを引きながら声をかけていた。

「すみませんアジーさん手伝ってもらって。」

「気にしないでくれ、ラフタと昭弘の二人が付き合うことを聞いて嬉しいからな……だからこういふときしか手伝えないから。」

「それでも助かります。ふう……」

「ストライク少し休んだらどうだ?」

「大丈夫だよイージス。」

「馬鹿言うな、お前はリインフォースの生命を救ったときから一睡もしていないだろうが……そのまま仕事をしているから驚くばかりだ。」

「あはは……ばれていたの?」

「当たり前だ。動きが堅いからな……」

「といつてもここで寝るわけにはいかないよ。帰ってから少しだけ休ませてもらうよ。」

ストライクは苦笑いをしながらカートを押して動いている。なのはたちも参加をするってこともありどうしようかなと考えながら動いた。

買い物を終えて月村家へと戻ったストライクは用意された自分の部屋へと戻って料理などはノエル達がやるってことで彼は布団に寝転がっていた。

「ふう……今では普通にベッドに入っているけど最初のころはベッドに初めて寝たときはまさかここまで慣れるとは思ってもしなかったな……」

彼は上に寝転がり天井を見ていた。

「……平和だな……今まで戦っていたのがウソのようにこの世界は平和だ。といつても一部を除いてになるけど……」
彼はジュエルシード事件を始め、闇の書事件などを解決してきた。だがそれ以外は普通に過ごしており楽しいことなどもある。

だからこそ今回のような幸せになる昭弘とラフタの二人を見ていたアジーの顔を見て前世……つまり前の世界では二人は死んでしまったことになる。あの時に涙目になっていたのをストライクは見ていた。

「良かったなアジーさん。」

「ストライクいるかい？」

「アジーさんじゃないですか……もしかしてできましたか？」

「ああそのために呼んだのだが？」

「すみません今起きます。」

ストライクは起き上がりアジーさんの後をついていきテーブルがある部屋へと到着をする。そこには昭弘とラフタの筆頭に全員が座っていた。

「では団長の俺から……昭弘、ラフタさんおめでとうございませす。まあ前は色々とおったがこの世界ではあんたたちを邪魔をする奴はいねー。だからよ……そのとまるんじゃねーぞ？前を向いて生きてほしい。」

「ああそのつもりだ。ラフタは俺が守るさ。」

「昭弘……」

「あー焼けるわね、私も恭也にそんなこと言われてみたいものよ全く。」

忍の言葉に全員が苦笑いをしながらご飯を食べることにした。ストライクたちもなんでかご飯を食べているのに驚かされている。

「お前ら……はん食べれるんだな？」

「ええ俺も最初は驚きましたが普通に食べれることに気づいてからはこうやって調理などをして食べていますね。」

ストライクはそういいながらステーキの肉を自身の口と言える

フェイスのところへとやるとステーキの肉が消えて彼はうまいな—
—といいながら食べている。

「どうなっているのかしらストライクたちの体って。」

「うん不思議なの。」

「そうだね。」

なのはたちは次々に食べているストライクたちを見ながら不思議
だなどと思い自分たちもご飯を食べていた。

そしてご飯が終わりなのはたちは泊まることとなりストライクは
お風呂の準備をしてお湯を入れていた。

それから彼は疲れている体でベランダの方を見るとラフタと昭弘
がキスをしている場面を目撃をした。彼らを見てからストライクは
ぼそりと呟いた。

「お幸せに二人とも……………」

ストライクはふふふと笑いながら自分の部屋の方へと戻っていく
とアジーさんがなんでか自分の部屋にいた。

「あれアジーさん？」

「ああすまないストライク。実はラフタと昭弘を一緒に部屋にしたく
てね。それで忍さんに相談したらストライクの部屋を使えばいい
じゃないといわれてね。本人の許可なく移動をってしまったが申し
訳ない。」

「あーそういうことですか。いいですよ私はかまいません。」

ストライクはよいしょとベットのの上に乗りストライカーパックを
出していた。

「ストライクはその背中に装着などをするタイプってことか？」

「あーそういえば説明をしていなかったですね。僕はほかの機体と
違ってストライカーパックによって戦い方などを変えることが可能
なんです。」

「ほう……………詳しく聞かせてもらってもいいかい？」

「構いませんよ。といよりは実際に装着をした姿を見せたほうがいい
ですね？」

よいしょつとストライクはベットから起き上がって背中にエール

ストライカーが装着される。

「赤い翼つてことは空中とか高機動とみていいかな？」

「そうですねエールストライカーは背中のスラスタで空中を浮かぶことが可能ですね。武器はビームサーベルだけと少ないですがエネルギーを逆に消耗を抑えることが可能ですね。ビームライフルとシールドを装備をして戦う感じですね。」

次はソードストライカーを装着をする。

「今度は接近型だな．．．．ハルバトスが装備などが装備をしているメイスなどに似ているが．．．．」

「あははは．．．．その通りですね。このシュベルトベゲールはMSや船を着ることが可能ですね。まあその分大型なのでかわしやすいですけどね。」

次にランチャーストライカーを装着をしてアジーはじーつと見ている。

「ふむ今度は砲撃型か、その背中の砲撃ユニットはかなりの威力を持つっているとみた。」

「ええその通りです。このアグニはコロニーを破壊をしてしまうほどの威力を出してしまうので．．．．それに強大な威力を持つているというのは．．．．エネルギーの消耗が激しいんですね．．．．」
「確かにな．．．．ふむこれがストライクのストライカーってことか？」

「いやまだありますけどな．．．．」

「まだあるのか!!」

「ええ実は俺自身も知らないストライカーがまだあつてですね。データなどでは確認ができているのですが．．．．実際に運用をしていないんですよ。」

「ふむ．．．．なら明日はストライクお前のそのまだ使っていないストライカーのチェックをするでしょう。」

「いいのですか？」

「ああ構わないだろう？それに三日月達は異世界のガンダムの方とやらを見てみたいじゃないかな？」

ストライク新たな姿

ストライクside

昨日同室になったアジーさんに言われて、俺は新しいストライカーパックを使うために模擬戦をすることになった。

その相手を三日月さんがバルバトスという機体を纏って待機をしていたその周りにはすずか様を始めみなさんが見ていた。

「……………」

「ねえ昭弘。今あなたが何を考えているのか当ててあげようか？」

「なんだ？」

「なんで俺じゃないかって思っていない？あんたもストライクって機体と戦ってみたいと思っているじゃない？」

「……………そうだ。異世界のガンダムを俺も見たいからな。そういうラフタもだろ？」

「ええそうね。そういえば、アジーは彼と同じ部屋になったから色々知っているじゃないの？」

「いや、私も三つのストライカーしか教えてもらっていない。彼自身もどれだけ使えるのかわかっていないからな……………それで三日月を使って試すということだ。」

アジーさんの言う通り俺は現在エール、ランチャー、ソード、I W SP、マガノイタチストライカー、ジェットストライカーのみしかまだ使っていないのだ。あとはついでにマルチプルアサルトストライカーである。

ガンバレルも忘れていたよ。さて現在はライトニングストライカーを装着をして右手に70-31式電慈加農砲を装着をしており三日月さんが纏っているバルバトスと対峙をするために準備をしていた。

通常はハンドガンタイプのようにそれに砲身などを装着することで長距離狙撃型になるようだ。現在はハンドガンタイプにしており三日月さんの準備が完了をしたのでこちらもOKサインを出す。

「では始め!!」

アジーさんのスタートを聞いて三日月さんが纏うバルバトスが大型メイスを振り回してきた。こちらは後ろの方へ回避をして右手に装着されたハンドガンを放つ。

「甘い……………」

交わされたのを見てそのままメイスでこちらに攻撃をするが俺は長距離の砲塔を装着をして三日月さんに向けて放つが彼は回避をしてこちらに振り下ろす。

「ぐ!!」

砲身でメイスをガードをするがその重い一撃に砲身がダメージを受けてしまいこちらはライトニングストライカーを解除をして次のストライカーを装着をする。

次に装着をしたのはシールドストライカーだけど何か知らないけど腰部にアーマーシュナイダーの部分が変わっていたことに気づいた。

「なにこれ……………」

僕は腰の武器を抜いて実体剣みただけけど見たことがないなと思いつながら二刀流にして構える。

「なにそれ?」

「知りません、僕自身も初めて使いますから。はああああああああ!!」

背中のスラスタを起動させて接近をして武器を振り降ろす。バルバトスはこちらが振り下ろした剣を受け止めてから攻撃をしようとしたが蹴りを入れてメイスを吹き飛ばす。

「この!!」

背中のテイルブレードを発射させるがこちらは上部の盾をアームで移動させてテイルブレードをガードをしていく。

「なるほどな……………先ほどのライトニングストライカーは長距離狙撃型だからバルバトスとの相性は不利だな。あのシールドストライカーは接近型で腰の武器で攻撃をすることが可能となっている他肩部も変化をしているな。」

わおアジーさんすげ……………とりあえず三日月さんとの戦い

はこれで終わりにしてつと次の装備を試してみるかな？

バスターストライカーね。背部にバスターガンダムが装備をしている武器が装着されていた。

「ふむ……これはバスターと同じ装備だな。」

「確かにね。つてことは連結をして放つことが可能じゃないかな？」

「……やってみる。」

そういつて砲身を連結させて構えているが地上だとやはり抑えないと反動を抑えることが難しいな……

「ふう射撃だから普段は二つに分割をして攻撃をしてやるしかないね。」

バスターストライカーが解除しようとしたとき攻撃が飛んできた。

ストライクはバスターストライカーのライフルを放ち相殺をした。

そこには百里を纏ったラフタの姿があった。アジーもいきなり攻撃だったので驚いている。

「ラフタ!？」

「いいじゃない、さあストライク次の相手は私よ!!」

上空へとび放たれるライフルから弾丸がストライクめがけて飛んできた。ストライクはバスターストライカーのガンランチャーを構えて放ち攻撃をするが百里が光りだして漏影へと姿が変わりストライクは驚いている。

「変わった!?!ならオオトリ!!」

オオトリへとパツクパツクが変わりアジーはデータをとっている。

「武器がたくさんついているな……ミサイルにエネルギー砲にレールガンと……さらに大型剣と色々についている。」

ストライクはビームライフルを放って攻撃をするがラフタは回避をして右手に持っているライフルをストライクに当たるが……がんと音が鳴り響いてストライクは頭をポリポリとしていた。

「嘘!!当たったよね!!」

「ええ、当たりましたよ?」

「なんで効いていないの!?!」

それにはオルガさんたちもじーっと見ていたのでラフタたちに話

悪いがあなたたちをここから通すわけにはいきません。」

「なら仕方がない。いくぞ!!」

インパルスはエクシアパックを装備をして構えている。右手にGNソードを構えて突撃をする。

ゼスト隊の魔導士たちは魔法を唱えてインパルスに攻撃をしていた。一方で第二研究所ではインパルスの姿が映し出されていた。

「博士!!今すぐに私も兄上のところへ!!」

「駄目だ。インパルス君は一人で彼らと戦うと言った。」

「しかし!!」

「心配することはない。」

「エクシア……」

「奴もガンダムだからな……」

インパルスは右手のGNソードを使い次々にデバイスたちに攻撃をして魔導士たちを行動不能にしていく。クイントが接近をしてリボルバーナツクルを構えてインパルスに攻撃をしてきた。

彼は左手のシールドでクイントが放つリボルバーナツクルをガードをしたが吹き飛ばされて腰部のGNダガーを投げつけて脚部のローラーに当てる。

「あう!!」

「クイント!!」

メガーヌが彼女のところへと行きインパルスは着地をしてGNダガーを回収をした、ゼストは剣を構えて突撃をしてインパルスに振り下ろす。彼は冷静に左腰につけているGNショートブレードを抜いて受け止める。

(ぐ!!なんて硬さだ……)

(この男……油断ができないな。)

インパルスはゼストと切りあいながらも隙を見せれていないので苦戦をしていた。彼は一旦下がってからエクシアシルエットを解除をしてフォースシルエットに変わるが脚部だけはそのままだった。ビームライフルを放ちゼストは剣ではじかせていき、彼はこのままではきりがないなと思いき、チラッとカメラの方を見ていた。

「そろそろかな？インパルス君撤退をしてくれ。」
「了解。」

インパルスはゼストに蹴りを入れてからビームライフルを地面に放ちそのままスイッチを押して自爆装置を作動させる。

『自爆装置が作動をしました。あと1分で爆発をします。』

「いかん全員脱出だ!!」

ゼストの言葉に全員が脱出をしてから研究所は爆発をした。ゼスト隊も任務が失敗に終わったが死亡者がいなかったので良かったと思う。

一方で第二研究所へとインパルスは帰還をした。彼は左肩を抑えていた。

(あのわずかの攻撃で肩部を損傷をするとはな．．．．ゼストか．．．．)

「兄上大丈夫ですか!!」

「おうとーレ、肩にダメージを受けただけだから大丈夫だ。」

「そうですか．．．．無事で何よりです。」

「ですが兄上が肩に損傷をするとは．．．．」

「まあな．．．．俺も油断をしたわけじゃない。だがあいつが俺よりも一歩上だということだ。」

インパルスはそういいながら治療をするためにメンテナンスルームへと行くのであった。

一方でツインテールにしているオレンジの髪をした女の子は手に武器を持って放っていた。

「うわ!!」

「大丈夫か?」

黒い機体は女の子を支えて立ちあがらせる。

「大丈夫、ノワール。」

「そうか．．．．」

「まあしようがないわよティアナ、あなたはまだ体が幼いからね?」

「だよな、ディータもティアナを守りたいという気持ちはわかるけどよ。こいつに戦い方を教えるもいいだろ?」

ノワールと呼ばれた機体のそばには二体の機体があった。ブルデュエルとヴェルデバスターの二機のガンダムだ。

ノワールと呼ばれる機体の名前はストライクEで現在はストライクノワールの姿をとっている。

彼らは学校に通っているディータの代わりにティアナのお世話をしている。そのため現在はティアナに戦い方などを教えていた。

彼はビームシューターライフルを回収をして回転させて自身の腰に装着させる。

さて話は海鳴市へと戻り鉄華団は掃除をしていた。ストライクはクリーンストライカーを装着をして掃除機でゴミを吸い取っていた。「ここってかなり広いよな?」

「そうですね。今イージス達も別れて掃除などをしておりますが……これでもだいぶ楽になっていますよ。」

「オルガ、俺楽しいよこれ。」

「まじかよ……」

昭弘とシノはファリンの手伝いをしていた。

「これはどこにやればいい?」

「あーそれはそちらの棚をお願いします!!」

「嬢ちゃん俺の方は?」

「それはあっちにお願いです!!」

一方でラフタとアジー、クーデリアとアトラはなのはたちの勉強の手伝いをしていた。

「そこはこうだろ?」

「にゃ!」

「これはこうですね。」

「ありがとうございます。」

つと勉強を教えているのであった。

温泉旅行へ

鉄華団たちが月村家に住んで年が明けた。

「あけましておめでとうございませす!!」

「「おめでとうございませす。」」

ストライクたちにとつても月村家の初めての正月、オルガ達もオロオロしながらもストライクたちと同じ言葉を言い挨拶が終わり忍はさてどいい本来の目的を話すことにした。

「実はね明日になるけど温泉旅行に行くことにしたのよ。ストライクは一度言っているからわかるわね?」

「はい、もしかしてあそこの温泉ですね?」

「その通りよ、鉄華団のみんなも一緒に来てもらおうわよ?」

「えつと忍さんいいのですか?その……俺達も一緒に。」

「何言っているのよ家族なんだから当然よ。とりあえずあなたたちも服などを買っているのだから準備をしておきなさいね?」

「わかりました。」

解散となりストライクはアジーと共に部屋へと戻った。

「ストライクはその温泉に行ったことがあるのか?」

「はい、ジェルシードというのを集めていた際になりますが……その時に一緒についていきました温泉にも入らせてもらいました。」

「そうなのか。今回は普通の温泉だから楽しみだよ。」

「アジーさんは温泉などは入ったことはないのですか?」

「残念ながらないな……シャワーやお風呂などはあったが……なにせ日本に行ったことがなかったのですね。」

「なるほど……」

ストライクはあつちの世界には温泉などなかっただなど思いながら武装などをチェックをして次の日になり全員が行く準備できたので外で待機をしていた。

車がやってきて高町家とハラオウン家が乗っていた車がやってきた。アリスも一緒なので全員が乗りこんでフリーダムたちも初めての温泉で楽しみにしている。

「いやー温泉なんて久々やな!!」

「主はやてあまり無茶をしないでくださいね?」

「わかっているで!!」

はやても楽しみなのか張り切っているのでストライクたちは苦笑いをしながら乗っていた。鉄華団の皆も温泉というのが初めてなので楽しみにしている感じである。

温泉地に到着をしたのでストライクは懐かしそうに見ていた。

「懐かしいですね。」

「そうなの……………」

「うん……………」

なのはとフェイトはお互いに暗い顔をしているのでラフタがストライクに聞いてきた。

「ねえストライク、なのはちゃんとフェイトちゃんどうして暗い顔をしているの?」

「えつとですね。ジエイルシード事件の時にお互いに取りあっていたときにここへ来ていたので二人はここで激突をしたのです。」

「そんなことがあったのね。」

「まあそれは本人たちに任せたほうがいいだろう?それよりもラフタお前はいいのか?昭弘が行ってしまっぞ?」

「あ!!昭弘待つて!!」

ラフタが言ったのでストライクはよかったですか?と聞いたがアジーはいいのさと答えた。

「あいつらはあの世界では結ばれなかったからな……………だから今はこうして再会ができてよかったですよ。」

「そうですね。戦争なんてなかったら僕たちのような兵器が生まれることはなかったのですが……………」

「ストライク……………」

部屋に行きストライクはフリーダムやほかのMSたちと同じ部屋になっていた。M1アストレイたちは窓の景色を見て綺麗だなと見ている。

「美味しいな……………」

イージス達はお茶を飲みながらストライクは苦笑いをしていた。
(本当に人のような感情を持つてきた気がするよ……そろそろお風呂のところへ向かわないとな。)

ストライクたちは温泉の準備をして士郎たちと合流をして全員で温泉の方へと向かっていき全員が脱いでいく。

「君達は鍛えたりしていたのかい？」

士郎が昭弘の筋肉を見て聞いていた。

「あ、ああ筋トレなどをしていたな。ストライク、頼みがあるのだが？」

「なんででしょうか？」

「筋トレができる場所を提供してもらいたいのだが？」

「はあ……まあ空いているお部屋があるのでそこでしたらよろしいと思いますよ。」

そして全員が脱いでオルガはあることに気づいた。

「おいミカ。」

「何オルガ？」

「お前阿頼耶識はどうした？」

「……そういえばシノたちもないよ。」

「なんだと!？」

「そういえば……ならなんで俺達は普通にガンダムを操れたんだ？」

「わからねえことがあるがいずれにしてもあれがなくても戦えるってことだ。」

(阿頼耶識……聞いたことがないシステムだ。まさか人体実験でもしていたのか向こうの世界では!!)

ストライクは彼らを見ながら静かに怒りを灯していた。おそらくキラたちと同じぐらいの年の人たちが下っ端のように働かされているのをアジーから聞いていたストライク。温泉の中へと入りストライクたちは体を洗ってごしごしと洗っていたフリーダムは翼などがあるがジャステイスはフロントムー01を外しており普通に背中などを洗っていた。

ストライクも普通に洗っておりそれから全員で温泉に入る。

「「「あーいい湯」」」

「これが温泉か……………」

「いい湯だな。」

「ふうーいい湯だぜ!!」

「ああ……………」

鉄華団の面々も温泉に入って気持ち良かったのか落ち着いていた。一方で女湯のほうでは。

「あーいい湯だわー」

「「「……………」」」

「な、なんだ?」

「えつと?」

アトラの容姿は最終回後の姿をしておりますので大きくなっています。

「ラフタさんやアジーさんはどうしたらそこまで胸が大きくなるんやろうなと思ってな。」

「えつとその……………」

「まだあなたたちは成長途中だから心配することはないと思うわよ?」

「そうですよ。」

「うんうん。」

ラフタを筆頭に胸のことで話をされるとは思ってもいなかった四人であった。さてお風呂から上がりストライクは休憩をしていた。

「ストライクくんなどどこにいたのか?」

「アジーさん?」

ストライクは振り返り浴衣を着たアジーが立っていた。

「どうだ?」

「とても綺麗ですよ。」

「そ、そうか、なにせ浴衣なんてものははじめてだからな……………
そういうえばラフタも今頃昭弘のところへといっていると思うな。」

「ですね。」

「そういえばほかのMSたちはどうしたんだ？」
「ん。」

ストライクが指をさした方角を見るとジャステイスとフリーダムが卓球をしていた。

「そこ!!」

「甘い!!」

ラッシュを続けている二体の機体を見てアジールは苦笑いをしていった。

「あれを先ほどから続けておりましてザクウォーリアたちなんてぽかーんとなってますよ。」

「本当だな。」

ふふと笑いながらアジールはストライクの方を見ていた。

「どうしたのですか?」

「いや何でもない。」

「そうですか。」

ストライクは再び卓球をしているメンバーたちを見ながらやれやれといっていたので、アジールも彼もそういえば戦いで散ったと聞いた。

「なあストライク。」

「なんですか?」

「お前は どうしてこの世界へ来たんだ?」

「……………僕自身は爆散をしたという最後の記憶があります。自身の母艦アークエンジェルを守るためにね。そのあと目を覚ましたら忍さまやノエルさんがいました。しかも無くなっていたはずの右手と左足もありまして五体満足で起動をしたので驚いています。さらに自分が言ったナチュラルやコーディネーター。ザフトに連合軍という単語もヒットもしませんでした。だからここが自分がいた世界とは違うんじゃないかなつと。」

ストライクはそう呟きながらアジールも忍の話はきいていた。最初は嘘じゃないかと思っただがギランホルンにタービンスという名前もヒットせずさらに火星は人が住んでいないことも……………

「まあ今はこうして楽しんだ方がいいですよ？戦争がないってのはいいことですから（笑）」

「そうだな。」

アジーとストライクはそういいながら部屋の方へと戻ることにした。

すずかたちを追いかけろ。

ストライク side

温泉旅行で一泊二日の旅を終えまして私たちは海鳴市へと戻りました。アジーさんとはコンビみたいと一緒にいることが多くなりましたね。メイドとしてもそうですがプライベートでも一緒に気がしますね。

すずか様たちも三学期に入りまして現在は今日は始業式つてことで早めに帰ってくるみたいですが僕はアジーさんと共に買い物をするために街へとやってきました。

「ふむ、必要なものがこれぐらいか？」

「ええその通りですね。」

まあお部屋も一緒ですから気にしませんけど、どうしてアジーさんは僕と同じ部屋にしたのだろうか？確か部屋はまだたくさんあるのにわざわざ自分と同じ部屋にしたのは理由があるのかな？まあそれは気にしないでいいとして買い物しようとしたときすずか様たちの姿を見つけました。

「あれはすずか達じゃない？」

「アジーさん!!」

「黒い車・・・まさか!!」

アジーさんもわかったのか走りましたがアリサさまとすずかさまを乗せた車がどこかに逃走をするかのように逃げていく。

「アジーさんつかまってください。飛びます!!」

「わかった!!」

「エールストライカー!!」

エールストライカーを装着をしてアジーさんが上に乗ったのを確認をして飛びたつ。すずかさま達もうしばらくお待ちください!!必ずお助けします!!念のためにオルガさん達にも連絡をしておきましょう。

ストライク side 終了

一方でさらわれたすずかとアリサは縄で縛られていた本来だった

らフリーダムとジャステイスにセットアップをするが今回二人とも家に忘れてしまったため動けない状態である。

「やれやれやっと思を覚ましたかいな。全く忍ちゃんもいい加減戦闘機人などを渡せばええものを。俺もこんなことをしたくないのにな。」

「安次郎おじさん……………」

「なんなのよあんたは!!」

「まあええわ。お前らが人質ならあいつも考えるやろうな。さーてお前らこいつらで遊んでいいで?」

運次郎の言葉に男達がやっとかといいい二人を襲い掛かろうとしていた。二人はあまりの恐怖に涙を流していた。誰でも言い自分たちを助けてと……………その願いは窓を突き破って現れた。

「アジーさん!!」

「はああああああああああああ!!」

ストライクから降りたアジーが蹴りを入れて男たちを吹き飛ばしてストライク自身も同じく蹴りを入れて男たちは気絶をした。

「な、なんや!!お前は!!」

「ストライク!!」

「助けに参りましたすずか様アリサさま!!」

「無事みたいだな二人とも。」

「な、なんや!?機械みたいなのがしゃべっているやと!」

「私は月村家メイドをしていますストライク!!」

「同じくアジー・グルミン!!悪いが彼女達を返してもらおうぞ!!」

「おのれ……………役立たずどもが!!いでよイレイン!!」

安次郎の言葉を受けてイレインと呼ばれた女性が現れたがストライクはすぐにアジーの方に顔を向けていた。

「アジーさんはすずか様たちをお願いします。自分は彼女の相手をお願いします。」

「わかった。」

「イレイン命令や!!あいつらを殺せ!!」

「あっはっはっは!!やっと思命令を下したね!!」

するとイレインは蹴りを入れて安次郎を吹き飛ばしてストライクに襲い掛かってきた。彼女の左手がブレードになり彼は後ろに下がり回避をした。ストライカーをノワールストライカーへと変えて腰部などが変わり腕部などが変わったことにストライクは気づいたが腰に装着されたビームショーテーターライフルを構えてイレインに攻撃をするがイレインは回避をしてストライクに剣を振り下ろすが彼のPS装甲はイレインの刃をかけさせた。

「な!!」

「ごめん。」

ストライクはアンカーランチャーを発射させてイレインの体に巻き付かせてそのまま壁に叩きつけて機能停止させる。

「な!!馬鹿なイレインが簡単に!?!」

「さーて後はあんただけよ?」

アジーは安次郎に武器だけを出してライフルを構えていた。ストライクは彼女たちのところへと行きフラガツサ3を抜いて彼女達の紐を切ろうとしていた。

「ま、待ちな!!」

「なんだ今頃命乞いか?」

「なーにそっちのバニングス家の嬢ちゃんは見逃してもそっちの月村家の嬢ちゃんを逃がすのな。」

「どういうことだ?」

「だめえええええええええええ!!」

「あんたらあいつらの家に住んでいて何も知らないんか!?!」

ストライクはまさかと安次郎の方を見ていた。ストライクは忍から話はずきいているがアリサやアジーたちは知らない。

「そいつはな吸血鬼なんや!!化け物と同じや!!」

「いやああああああああああああああああああ!!」

すずかの絶叫と涙を流していた。知られたくないことを………親友であるアリサに知られたからだ。

「それがどうしたって言うのよ!!」

「な!!」

「さすがが化け物……それであたしがさすがの友達をやめるつて言うのふざけないで!!」

「あ、アリサちゃん……」

「そういうことだ。残念だったな……」

アジーは手刀をして安次郎は気絶をした。すると倉庫の扉が破壊されてバルバトスたちが現れた。

「あれ?終わっている……」

「さすが!!」

「お姉ちゃん!!」

「ストライク……アジーちゃんありがとう。」

「ああだが……忍さん話してくれますか?」

「わかっているわ。」

ストライクはイレインを運んで行きなのはたちも呼ばれた。忍は彼女達に自分たちの正体などを話した。

「ストライクは知っていたのか?」

「ああ、この家で住むから聞いていたよ。」

イージスの言葉にストライクは答えた。鉄華団も驚いていたが戦争をしていた彼らにとって吸血鬼という単語が簡単に出てこなかった。

「まあいずれにしても忍さんたちは違うってだけでしょ?別に俺達は大丈夫だよ。」

「そうだな……お世話になっている身だしな。」

「そうね。それにしても吸血鬼なんて始めてみたわ。」

「それは俺もだぞ!!」

「全員そうだと思いますけど?」

一方ですずかもなのはたちに謝っていたがなのはたちも友達だよといっていたのですずかは涙を流していた。

ストライク side

「どうやら皆さん納得をしてくれたので良かったですよ。」

「そうだなストライク。」

「アジーさんは良かったのですか?」

「す、済まないストライク……………」

「きにしないでください。」

ストライクはふふと笑いながら自分のベットのの上に座っていた。アジーはお風呂に入ってくるといって部屋を出ていく。

「……………はあ……………」

「あれー？アジーじゃんどうしたの？」

「……………ラフタか。」

後ろから声をかけてきたのはラフタだった。彼女のお風呂の方へと移動をしようとしていたので一緒に行くことにした。

「あれ？涙を流していたのー？」

「少しな……………ストライクに胸を借りた。」

「つてストライクに!?あんたが!？」

「なんだ？」

「いや何でもないわよ。」

ラフタは少しだけ考えてから一緒にお風呂に入ることにした。二人とも服を脱いで月村家のお風呂に入る。

「ふう……………」

二人はお湯に浸かりながら辺りを見ていた。

「ハンマーヘッドよりも広いな……………」

「そうね、まさか異世界に転生みたいな感じになるとはねー」

「私なんか死んでもいないのにな。だがこうしてこの世界へ来て良かったと思っている。ラフタに再び会えたのだからな。」

「そうね……………今度は長生きしたいわ。」

「そうだな……………」

二人は色々と話をして楽しむのであった。ストライクは部屋で残って空を見ていた。

「ん？」

ストライクは何かがこちらに来ているのが見えて急いで庭の方へと走っていく。どごおおおおおおんという音が響いてストライクは庭へと到着をする。

「ストライクさま!!」

「ファリン殿……ここは自分が……」

ストライクは右手にビームライフルを構えながら落下をした場所へと歩いていく。警戒をしながらその落ちた場所に到着をした。そこに倒れていたのは白い翼を持ったガンダムタイプだった。

「ガンダム……だがなぜ？」

「ストライクさま一体何が!!」

「ファリン殿、ガンダムです。とりあえず彼を運ぶのを手伝ってもらえませんか？」

「わかりましたです!!」

ファリンと一緒にストライクは謎のガンダムと一緒に運ぶことにした。果たしてこのガンダムは一体……

翼が生えたガンダム。

ストライク side

突然庭に落ちてきたのはガンダムだった。全員が集まってしまったので事情聴取をされていた。

「ストライク、このガンダムはあなたは知っているのかしら？」

「忍さまその答えですがNOです。自分も翼を生えたガンダムは見たことがありません。」

「僕は？」

フリーダムが指をさしていたがそういえば君も翼のような装備をしていたね忘れていたよ。さて改めて倒れている機体を見る。青い装甲に胸部には丸い球体がついていた。背中についている羽はまるで天使のように綺麗な白い羽だ。

さらに両手に装備されている武器は………なんだろう威力的にアグニ以上かもしれないな………しかもそれが二丁も装備されている。

「ふーむ今は機能停止していますが………っとうお!？」

突然としてガンダムが起き上がったので僕は後ろに下がった。アジーさんたちも彼が起き上がったので警戒をしている。

「………は。」

「目を覚ましたのか？」

「おそらく………僕もあんな感じでしたから。」

「ガンダム………いったいどういうことだ………任務に問題ない………破壊する!!」

ガンダムがこちらに襲い掛かってきた。僕はアジーさんの前に立ちシールドを出して彼が放つビームサーベルを受け止める。

「ぐ!! (なんて力だ!!)」

「ちい!!」

青い機体は後ろへ下がったが突然として膝をついた。やはりまだ体が慣れていない証拠だ。

「うおおおおおおおおお!!」

「ちい!!」

肩部が開いてマシンキャノンを放ってきたがこちらにはPS装甲がある!!そんなもの効かない!!

「マシンキャノンが効いていない?なら!!」

「であ!!」

その前に奴が使おうとした銃に向かって盾を投げつけて銃を使えないようにして蹴りを入れる。

「ぐ!!」

「このまま抑える!!」

両手で奴を抑える。相手は暴れてこちらから逃れようとしたがそうはさせない。

「離せ!!」

「離さない!!戦いをまた繰り返すつもりか!!」

「何……………」

彼は動きを止めた。こちらも彼を抑えていた手を離して彼はあたりを見る。

「……………小さい?なんで俺自身が小さくなっている……………」

「ああそこからみたいだね。」

とりあえず落ち着いたみたいなので話をすることにした。

「君は誰だい僕はストライクガンダムだ。」

「ウイング……………ウイングガンダムゼロだ。」

「ではウイングガンダムゼロって名前が長いからゼロと呼ぶよ。君も戦争をしていた感じだね?」

「ああ……………俺はホワイトフアングやマリーメリア軍と戦ってそれから……………記憶がない。」

「記憶がないね……………」

「ストライクどうだ?」

「アジーさん、どうやらこのガンダム……………ゼロも俺たちと同様な感じですね。」

「では異世界から来たガンダムってことになるのか?」

「そういうことになりますね。」

彼からの口でアフターコロニーという単語を始めて聞いた。こちらにはコスミックイラという単語だからね……。まあいずれにしてもまた新しい……。ってあれ？

「いてててここどこだよ？」

「どこかの家みたいだが……………」

「そうですね。」

「ふんたたとえばこの家だろうとも俺の戦いは終わっていないのだ!!」

うわーなんかガンダムが増えているし……。しかも四機も……

「デスサイズ、ヘビーアームズ、サンドロツク、アルトロン……………」

「君の知り合いかい。」

「ゼロじゃねーか!!」

「ゼロがいるってことは……………やはり俺達はまだ戦わないといけないのか?」

「ですね。」

「ならこいつらを倒せばいいだけだ!!」

「やめろアルトロン!!」

アルトロンと呼ばれる機体が襲い掛かろうとしたがゼロが間合いに入り彼を止める。

「なぜ止めるゼロ!!」

「ここは俺達の世界じゃない。戦いは起こっていないんだ!!」

「なんだと!!」

アルトロンは背中中のウイング閉じて辺りを見ている、デスサイズたちもあたりの様子を見ていた。

「確かに……………ここは俺達が知っている世界じゃない……………か……………」

「なら僕たちはどうしてこの世界に?」

「わからないが……………とりあえずどうする?」

僕はちらつと忍さまの方を見ていた。彼女はため息をしながらうちで過ごすといいわよといい彼らもこの家に住むことになった。

その夜アジーさんと共に彼らの戦闘データを見ていた。

「すごいな……………」

「ええゼロのツインバスターライフルはコロニーを一撃で破壊する威力を持つているとは思っていませんでした。」

次に映し出されたのはデスサイズヘルがツインビームシザーズを持ちMSを切り裂いた後姿が消えた。

「ステルス機？」

「ミラージュコロイドよりも高性能かもしれませんね。」

次に映し出されたのはヘビーアームズ改と呼ばれる機体が両手のダブルガトリングに肩部のマイクロミサイル、脚部のホーミングミサイルを展開をしてさらに胸部のガトリングが展開されて一斉射撃を放つ姿だ。

「すごいな………」

「ああ昭弘のグシオンが放つ滑空砲四丁で放つ攻撃よりも威力が高いな………」

次に映し出されたのがサンドロック改で右手にビームマシンガンを放ちそれからマントが排除されて背中中のヒートショーテールという武器で切り裂いた。これは自分でも当たったらずいいかも………」

「おそらくあの武器がサンドロックの最大の武器かもしれないな。」

最後はアルトロンガンダムだ。彼の背中に装着されているビームキャノンから砲撃が放たれて両手についているドラゴンフアングが放たれてMSを挟み込んで撃破している。

「すごいな……あの両手から放たれる威力がおそらく私たちではすぐにやられてしまうほどだな………」

「ええその通りです。まさか彼らの世界のガンダムはそれぞれで特化した機体が存在をしているみたいですね。しかもビーム兵器を特化をした。」

「私たちの方はビーム兵器よりも実弾が多いな……なにせ私たちのMSの装甲はビーム兵器をあまり効かないようにしているからな。」

「だから模擬戦の時にビームライフルが効いていないように感じたのはそのせいですか……まあさすがに模擬戦では威力を最低にしていますけどね。」

「確かにな。」

「アジーさん気になつていたのですが昭弘さんが乗るグシオンでしたっけ？あの背中のバックパックはどうなつているのですか？」

「あああれはサブアームが装備されているのさ。私たちタービンが改良をしたのがあのグシオンリベイクフルシティというわけだ。」

「……………」

なるほど……………なら彼女にお願いをするのも悪く無いな。

「アジーさんお願いをしてもいいですか？」

「何をだ？」

僕は今考えている新たなストライカーを考えていた。それは彼らとの模擬戦の時に考えていたことを彼女に話をする。

「これは……………グシオンのバックパックじゃないか……………サブアーム付きで武器までも考えていたのか？」

「ええ……………この形態はサブアームを使った形態といえればいいですね。名前はグシオンストライカーですね。それで改良を一緒に手伝つてもらつてもよろしいですか？」

「別にそれはかまわないが。イーجزス達にも声はかけているのか？」

「ええもちろんです。」

「ならやるとしても明日だな材料などはあるのか？」

「ええ忍さまが元々機械を作ったりすることが趣味なのでガラクタなどがたくさんあるんですよ。」

「なるほど……………なら作ってみるとしよう。」

「ええついでもう一つの形態もね。」

こうしてアジーさんたち協力の元僕は新しいストライカーを作ることになった。

ストライクの新たなストライカー生成 インパルス たちの日常

ジェイル第二研究所

「……………なんで姿が変わっているんだ？」

「……………それは俺達に言われてもわからん。」

インパルスははあとため息をしてエクシア達が新たなガンダムに姿を変えていることに……………ジェイルは素晴らしいとしか先ほどから言っていないので余計にため息が出てしまう。

「それでデユナメスは変わっていないのにどうしてガンダムが増えて
いるわけ？」

「ああ悪い悪い。何か知らないけどな……………こうなった。」

「あははは兄さんともどもよろしく俺の名前はケルデймだ。」

「インパルスだ。それでエクシア達は何て名前になったんだ？」

「ああダブルオーガンダムだ。」

「僕はアリオス。」

「僕はセラヴィーだ。」

「インパルス君私は今素晴らしいよ!!彼らがまさか新たな姿に変身をする
ことに今感動をしているよ!!」

インパルスはそんなジェイルを見てため息をついてしまう。ほかの
ナンバーズたちはインパルスが出した課題をクリアするために必
死に勉強をしていた。彼曰く。

「戦いだけではないからな、勉強もした方がいいと思つてなテス
トを出している。」

つと言つて現在彼はシルエットのチェックをしている。

「フォースにソード、ブラストにエクシア、デユナメス、キュリオス、
ヴァーチエと何だから知らないが色々が増えてしまったな。主に
チェストフライヤーとレッグフライヤーは改良型になっているから
な。あとはデステイニーシルエットがあるな……………それにして

もあいつらが改良型になるとはな……俺もなるのかな？ デステイニー……」

よいしょつと言いながらインパルスは座っていたところから立ちあがりシユミレーションを起動させようとしたとき彼は振り返る。そこに立っていたのはダブルオーだ。

「手合わせ頼む。」

「わかった。」

インパルスはエクシアシルエットになり右手にGNソードを構えた。ダブルオーの方もGNソードⅡを構えて突撃をしてお互いの武器が激突をする。その様子をケルティムたちは見ていた。

「あれがインパルスか……」

「ああ僕たちのデータをベースにあの形態を作ったんだよね？」

「そうだな。」

「……」

「どうしたセラヴィー？」

「いや何でもない。」

セラヴィーは見ている中インパルスは新たな武器を使う決意を固めた左手に装着されてダブルオーは一体何をする気なんだ？と見ていると突然として転んだ。彼は一体何がと見ていると右足にロープが絡まっていた。

「シールドアンカーだ。ジェイルに頼んで作ってもらった武器の一つだ。これならデータがないからお前らでも対策などができないと思っつてな。」

「面白いことをする。なら俺も!!」

するとダブルオーが光りだして装備が増えた。彼は左肩についている武器を抜いてシールドアンカーのロープに攻撃をするがはじかれる。

「それにはVPS装甲をつけているから効かないようにしている。」

そのままシールドアンカーを戻してダブルオーはセブンスソードG形態へと変わっていた。インパルスは腰のロングブレイドとショートブレイドを抜いて突撃をしてダブルオーに振るった。

彼は脚部につけられているGNカッターを抜いて受け止めた。そこから連続した斬撃をお見舞いを披露をするがダブルオーは連続してカッターではじかせていきインパルスが持っている武器をはじめせる。

「ッ!!」

「であああああああ!!」

そのままインパルスを切り裂こうとしたが彼の上半身と下半身が別れてそのまま後ろに回って再合体をする。

「忘れていた。お前には分離合体が可能だったことを……だが!!」

そのまま右肩についているGNブラスターIIを構えてトリガーを引く。インパルスは右手にGNソードを構えてスラスターを展開をして突撃をする。ビームがGNソードに命中をしてビームが拡散をしていく。

「でええええええええい!!」

「ちい!!」

ビームがGNソードで貫いてダブルオーはGNブラスターIIでガードをしてインパルスをそらせる。

お互いにGNソードとGNバスターソードIIを構えて止めていた。

「……………」

そのままお互いに武器を収めているとトレーが入ってきた。

「兄上達(ご)におられましたか。ご飯ができましたのでお呼びに参りました。」

「そんな時間か、行こうかダブルオー。」

「ああ。」

ダブルオーと共に食堂がある部屋へと行き彼らは楽しくご飯を食べるのであった。さて場所が変わり海鳴市にある月村家の屋敷。

「ふむふむ、これがこうなっているのね?」

忍を筆頭にストライクが設計をしたグシオンストライカーともう一つは彼のデータにあったドレッツ☒ノートイーターのバックパックを作ることにした。

グシオンストライカーはサブアームに滑空砲やマシンガンなどを装備をするバックパックだ。サブアームが展開されてその後ろにセットされている武器を取り攻撃をするスタイルでもう一つは腰部などもプリティイスが装着されるなどの改良をするストライカーだ。

「これはこうでしょ?」
「だな。」

鉄華団も面々も手伝っておりストライクの新たなストライカーは順々に形になってきている。

「失礼します。皆さまそろそろ夕ご飯なので手を洗ってください。」

「あらもうそんな時間なのね? ふふふ開発をしていると時間を忘れてしまうわ(笑)」

「ですが皆さまの協力でだいぶ形になってきましたよ。」

そこにはグシオンストライカーのバックパックのサブアームなどが作られており、隣にはイーター形態のユニットが作られていたがまだ完成はしていない。だが今回はここまでだと判断をして手を洗ったりして全員が座つたのを確認をして手を合わせる。

「二二いただきます。」

全員がご飯を食べておりウイングゼロ達も一緒にご飯を食べている。ストライクは明日は八神家に行くことにした。

「忍さま私は明日は八神家の方へと行きます。」

「あらどうしたの?」

「ええリインフォースの調整とはやてさまにアインスに変わるユニゾンデバイスを作るつてことになりましたそれで手伝うことになったのです。」

「なるほどね、わかったわストライカーの方は私に任せなさい。」

「ありがとうございます。」

次の日ストライクはウイングゼロとアジールを連れて八神家の方へとやってきた。インターホンを押してはやてが出てきた。

「いらっしやいストライクさんにえつと?」

「俺の名前はウイングガンダムゼロだ。ゼロでいい。」

「ゼロさんなよろしくな。うちは八神はやてというねん。」

三人は中へと入りアインスが迎えてくれた。

「やあストライク。君が来たってことは？」

「ああ調整をするために来た。どこまでできているのですか？」

「まだ起動させるにはあれやけど・・・」

そこには眠っている小さいリインフォースがいた。

「小さいな・・・」

アジーが言うが本の中に今は眠っている状態なので小さいが事実である。

「さーてそれじゃあ始めましょうか？アジーさんはデータの作成の手伝いをお願いしますすゼロもね？」

「了解した。」

「ああできる限りのことをやろう。」

ストライクたちははやての指示を受けてどのようなようにするのかをデータを作っていくはやても助かっている。ストライクはリインフォースを救うために一人でプログラムを一から作って彼女を助けている。

現在は新たなプログラムなどを作成をしていきツヴァイちゃんが起動するために必要なデータを作成をしていく。

その様子をデュエルたちは見ていた。

「なんというか・・・」

「ああストライクがあんな風にプログラム作成をするのを見たのははじめてだ。」

「くそおおおおお!!俺もあんな風にできたら。」

「いや無理だから。」

「貴様らああああああああああ!!」

デュエルが二人を追いかけていくのを見ながらストライクたちは苦笑いをしている。

「ごめんな三人とも。」

「いや気にすることはないさ。ヴァイタたちは？」

「ああヴァイタたちは管理局で仕事をしているで？まあ元の原因はうちだからね・・・」

「はやてさま……」

「だからこそそうちは頑張つてリハビリをしているし何よりも家族が一番や。」

素晴らしいながらもはやてを見てストライクたちは強い子だなと思いつながらプログラムを作成を続ける。だが時間はあつという間にたつた。ストライクたちもそろそろ家に帰らないといけない時間となつたからだ。

「とりあえずこれぐらいですね。」

「ありがとうございますこのまま行けばあと数か月で目を覚ますと思うで。」

「そうだといいけどね?」

三人は家を後にして月村家と帰ってきた。忍がふふふと笑いながら立っていた。

「ストライク完成をしたわよ!!あなたの新しいストライカーが!!」

そこにはグシオンストライカーとイーターストライカーがあつた。まずストライクはイーターストライカーを装着をする。

右手にビームマシンガン、両手にビームシールドなどが装備されて背部はビームソードとビームキャノンになるものが装着される。

「どうかしらストライク?」

「悪くありません。これなら実戦でも使えますね。次にグシオンストライカーを装着をしますね?」

ストライクはグシオンストライカーを装着させて滑空砲やライフルなどが装備をしてサブアームもライフフルが装着される。

「なんかストライクが装着をすると小さく感じるわね?」

「まあグシオンがでかいってのもあるが……」

そしてグシオンが使うシザースをもっているとなんかストライクが外で庭師をしているような感じになっている。

「……」

ストライクは外に行き庭にある木をちよつきんと切っていた。

「これは使えますね。」

「そっちかい!!」

ラフタがツツコミすずかたちは苦笑いをしていた。グシオンスト

ライカーを装着をしたままストライクは料理をして物を運んでいたサブアームには皿などを乗せていた。

「お待たせしました。」

「早速使っているわねグシオンストライカー（笑）」

「ええこれ便利ですから。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「昭弘どうしたの？」

「いやなんかグシオンのが使われているのは嬉しいがなんか複雑な気分だ。」

「あはははまあいいじゃないの。って最近はずアジ―はストライクのことが気になってきているみたいだけどね？」

「そうか？」

「ええわざわざストライクと同じ部屋なんて選ばないわよ。」

つとアジ―の隣に座るストライクを見ながらラフタが言う。

アジ―side

最初はただのガンダムだと思っていた、だけど彼の姿を見た瞬間とても懐かしい気分になった。なんでだろうと思ったとき頭が突然いなくなつた・・・・・・・・それは彼のストライクのプラモデル・・・・・・・・スタービルドストライクに似ていたからだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

私は彼を見てそう思いラフタが昭弘と一緒に部屋のいいと判断をした私は忍さんにストライクと同じ部屋にしてもらえないかとお願いをした。

だからこそこの気持ちはずっと一緒にいたいと思つたからだ。彼は疲れていたのか眠っていたのを見て私は彼のところへと行き・・・・・・・・

「ストライク・・・・・・・・好きだ。」

彼のフェイスマスクにキスをして私は自分の布団へと入る。

アジ―side

「・・・・・・・・ふえ？」

実はストライクは起きていた。何か自分の口に当たっているなど

薄目を開けるとアジの顔が見えた。おそらく自分にキスをしたのかと彼はオーバーヒートになりながら冷静に判断をしていた。

(え!?!え!?!アジさん今好きって言いましたよね?好きってLIKEじゃなくてLOVEの方ですか!?!どうしてなんですかああああああああああ!!)

その日ストライクは眠れないのであった。

なのはたちの特訓 アークエンジェル発進。

新たなストライカーあぐシオンストライカーとイーターストライカーが完成をしたストライクはメイドストライカーを装着をして掃除をしているとなのはたちが困っていた。

「どうしたのですか皆さま?」

「ストライク……いや、私たちの魔法ってあんまりこつちじや戦えないじゃない?それでどこかい場所とかないかなくて思っつね。」

フェイトの言葉を聞いてストライクも確かにと頷いていた。全員で考えているが魔法などを普通に使える場所とかあるのかなと?そこにイージスが入ってきた。

「どうしたんだ?」

「ああイージス実は……」

ストライク説明中。

「なるほどな、ならアークエンジェルを使えばいいじゃないか。」

「アークエンジェルを?」

「ストライク忘れていないか……俺達はどこから海鳴市の方へ行っただんだ?」

「あ……」

そうみなさんも忘れてるじゃないだろうか?ストライクがなのはたちを救うためにアークエンジェルでやってきたとき彼はその時はアルハザードに落ちたことを……そこから彼らはアークエンジェルで脱出をしてなのはたちを助けたことを。

「そういえばアークエンジェルは次元を超えることができたね。すっかり忘れていたよ。」

「なら準備しておくさ。」

イージスはそういってアークエンジェルが置いてある地下ドックの方へと行きストライクたちも準備などをして地下ドックの方へと歩いていく。昭弘とラフタ、アジも一緒に行くことでガンダムの方はウイングゼロ達五人とイージス、ストライクも一緒に行きアーク

クエンジェルの中へと入る。

「よし行く人物たちは乗ったな？進路クリアーアークエンジェル発進！！」

地下ドックからアークエンジェルが飛び立つ、ブリッジにいるのはたちは驚いている。

「すごいわね！！」

「私は二度目だよ！！」

アリシアはアルハザードから行く際に乗っているため二度目の搭乗となる。イージスは誰にも邪魔がならない次元を探して考えていた。

「とりあえず無人の次元があったら場所に到着をするようにセットをしておいた。」

イージスの言葉で各自はそれぞれでアークエンジェルの中を過ごすことにしたがストライクとアジーはお互いにちらっと見てから顔を赤くしてそらしていた。

「なにあれ……」

ラフタはそう呟いていた昭弘はダンベルを持ちながらラフタの問いに答える。

「知らん。」

なのはたちも苦笑いをしながらストライクたちの様子を見ていた。そしてアークエンジェルは次元を移動をしてどこかの場所に着地をした。

「いったいどこかしら？」

「さあな？……なら迷惑をかわらないと思うが。」

イージスの言葉にアークエンジェルから降りてなのはたちは早速セットアップをしていた、なおはやてはリハビリのため来ておりません。

なのはとフェイトはお互いにセットアップをしてアリサとすすかもフリーダムとジャステイスにアリシアはアビスにセットアップをした。

ストライクは早速イーターストライカーを装着をしてその相手を

務めてくれるのはグシオンを纏った昭弘だ。

「準備はいいかストライク？」

「いいですよ……いつでもどうぞ。」

グシオンはライフルを構えてストライクに向かって放ってきた。ストライクは両手に装備されたビームシールドを展開してグシオンが放った弾丸をガードをして右手に装備されたビームマシンガンを使って攻撃をする。

「ぬう!!」

昭弘は回避をして盾からハルバードを抜いて振り下ろす。ストライクは後ろに下がって腰部に装着されたプリティスを飛ばして攻撃をする。

「なんだこれは!!」

「これこそドラグーンの試作兵器といわれたプリティス。ビーム雨を受けてください!!」

「ぐ!!」

彼は回避をしながらサブアームでライフルを持ちプリティスに攻撃をする。ストライクの方はプリティスを戻して背部の装着された武器を使用をする。ビームソード形態へと変えてそれを振り下ろす。

「うおおおおおおおおお!!」

グシオンはハルバードで彼が振り下ろしたビームソードを受け止めていた。

「やるな、お前とは一度戦ってみたかったからな。」

「俺ですよ。三日月さんのバルバトス以外にもあなたの機体も気になっていましたからね!!」

お互いにぶつかっていると突然として光弾が飛んできた。全員が空の方を見ていると騎士のような機体が降りてきた。

「見つけたわよ!! さあお前たち我々の力を見せるのよ!!」

「二はい!! カルタ様!!」

するとスキュラが放たれて二体が吹き飛ばされた。イージスがMAからMS形態へと変形をしてストライクたちの方を見ていた。

「撃つてもよかったよな?」

「ああ……なんかに俺が言ったような気がする。」

「そうねそのあとに当たり前じゃんっていったわ。」

「てかなによあれ?」

「さあ?」

「おのれ!!」

「……………」

ストライクが歩いていくのを見てイージスが止めようとしたがすぐに手を離す。

「どうしたイージス。」

「今ストライクの顔がいつもと違う顔をしていたから恐ろしくなった。」

「?」

グレイリッターたちは剣を構えてストライクに向けていた。

「……………あなたたち?」

「!!??」

ストライクの声がいつもより低くなっているのになのはたちも気づいた。彼の背中にはエールストライカーが装着されているが突然としてソード、ランチャー、エールが出てきて光りだすと装備が新たな姿へと変わった。

「さあショータイムと行きましょうか?サムブリットストライカー装着!!」

彼の背部にランチャーストライカーが進化をしたサムブリットストライカーが装着された。

右肩のトータスブロック改を構えて放った。グレイズリッター達は回避をしたがそこにストライクが接近をして蹴りを入れて二体を行動不能にした。彼はすぐに左側のアグニ改を持ち彼らを薙ぎ払うようにして砲撃をする。

グレイズリッターたちはそのあとを見て冷汗をかいていると一体のグレイズリッターは目の前にストライクが現れたので恐怖に落ちていた。

「ひゃ!!」

「おら!!」

彼はアグ二改で殴った後地面に着地をして装備をソードストライカーが進化をしたキャリバーンストライカーを装着をして右手に装備されたマイルダベツサー改を投げつけて転ばせる。

「どあ!!」

「貴様!!」

カルタは剣を持ちストライクに襲い掛かるが彼はそのまま無言で立っていたのでカルタはニヤリと笑い剣を振り降ろす。

「.....」

だがガキンという音共にグレイズリッター剣の刀身が折れていた。

「な!!どうして!!」

「.....せい!!」

ストライクはシュベルトゲベルを抜いてビーム刃を発生させずに剣として使用をすることにした。

「ひい!!」

「さーて全員そこに正座。」

「「は?」」

「せ・い・ぎ。」

「「は、はい!!」」

「「(。D。)ポカーン」」

なのはたちはグレイズリッターたちがストライクの指示で正座をしている姿を見て開いた口が閉じなくなっていた。それはラフタたちも同じでストライクがMS相手に正座を要求をしているので驚いている。

「だいだいですね、あなたたちはここには子供もいるのに何攻撃をしようとしているんですか大の大人が、ええ?そこにいる鉄華団の方々みたいにMSを装着をする感じですからすぐにわかりましたよ。全員が死なないようにやるのを苦勞をしましたよ!!それをあなたたちはですぬええええええええええええ!!」

「「ご、ごめんなさいいいいいいいいいいい!!」」

ストライクのあまりの気迫にカルタを始め全員がMSを解除をし

て土下座をした。ストライクは黒い笑みで見ている。

「ならこれからは誰が主かってわかりますよね？」

「「イエスマイロード!!ストライク!!」」

「さあ帰りますよ。」

「「イエス!!」」

イージスは苦笑いしながら彼らをアークエンジェルに乗せて友に帰ることになった。帰ってから鉄華団の面々が驚いているがストライクが彼らの方を見ているとガタガタと震えていたのでオルガ達はストライクはいつたい彼らに何をしたんだと首をかしげていた。

ストライク side

「はあ………」

「ストライクお前大丈夫か？」

「あははは大丈夫ですよ………」

「なぜ私の顔をそらしているのだ？」

「あ、当たり前ですよ………キスされたら………」

「んな!!」

アジーさんが顔を真っ赤にしているがもしかして僕が寝ていると思っただろうなと思いましたが。口元に感触がありましたから薄眼で見ましたよ。

「……そうか起きていたのだな。ならば普通に起きている。」

するとアジーさんはこちらに近づいてきて再び僕の近くに来てキスをした。

「?!?!」

「おふふガンダムでも顔を赤くするんだな? (笑)」

「アジーさん………」

「私は二度も大切なものを失っていた、一つは名瀬と姉さん………もう一つはラフタだ。私は何も守れなかった………この世界でラフタと再会をしたときにうれしかった。また彼女と一緒にいれるからだ。」

「それは良かったです。」

「だがそれ以上に君に会えたことだストライク………」

「僕ですか？」

「なぜかはわからないんだ。でも君を見ていると心がドキドキをしている……」

「あ、アジーさん……」

アジーさんはとても綺麗な方だ忍さまもきれいだ。がそれ以上に僕自身もドキドキをしてしまうMSなのにね？

なんか色々と恥ずかしいが僕からアジーさんにキスをする。

「ふふまさかストライクからキスをされるとはな、だが悪く無い。」
アジーさんは顔を赤くしながら笑顔で見ていた。本当にこの人だけはキラ、ムウさんあなたたちが守る人を見つけたように僕も彼女を守りたいと思います。

なにせ僕はMSですから……

一方でミッドチルダ

「さあ武器を捨ててもらおうか？」

「卑怯な……」

データー・ランスターは現在犯人を追い込んでいたが子供を人質にとられてしまい彼は攻撃をすることができない状態だ。

本来の歴史では彼はここで殉職をしてしまうが……犯人にナイフが飛び素早く人質が消えたのを見てデーターはタツクルをして犯人を捕まえる。

彼はあたりを見てデバイスに刺さっているナイフを見る。

「これはブルーフレーム教官の……まさか!!」

「見事に犯人を捕まえたなデーター。」

「ぶ、ブルーフレーム教官!!」

現れたのはブルーフレームだ。彼の現在の姿はセカンドLの姿をしておりアーマーシユナイダーを回収をして人質になっていた子どもを親元に返してきたところだ。

「すみません、ブルーフレーム教官がいなかったら自分は……」

「俺はたまたま通りすがった身だ気にすることはないさ。」

「ありがとうございます。」

データーは犯人を連れて行き一機のMSが現れるヴァンセイバー

だ。

「あれがお前がスカウトをしようとしている奴か？」

「ああそのとおりだ。彼なら射撃タイプだから俺達の部隊サーペントテールのメンバーとして迎え入れる予定だ。」

「楽しみだな。」

「ああ。」

二人は夜のミッドチルダの月を見ながら戻ることにした。さて場所が変わり名瀬タービンズではMSが働いていた。

「おやつさんこれはどっちに?」

「それはあっちにだ。」

「アミダ姉さんこれは?」

「それはあっちに運んでくれダガーたち。」

彼らの周りを走ったりしているのはダガーLやデュエルダガーたちだ。彼らは名瀬タービンズの護衛任務やこうして雑用係でも働いている。名瀬達も彼らがいるおかげで仕事がいぶ楽になっている。

「ただいまー」

「お帰りレイダー。」

帰ってきたのはレイダー制式仕様が帰投をした。彼は名瀬に頼まれて配達を終えて帰投をした。

「おかえりレイダー。」

「ふい大変だよ多いからさ。ダガーたちにも手伝ってもらったから助かったよ。」

後ろからジェットストライカーやエールストライカーを装着をしたダガーLや105ダガーたちが帰投をした。

女性メンバー以外はMSが多い名瀬タービンズであった。

翠屋に住む男性二人。

ストライク side

カルタさん達の部隊を月村家へと連れて帰った私はアジーさんと共に翠屋へとやってきました。すずか様の護衛任務ってやつですね。「あらいらっしやいストライク君にえっと?」

「失礼、私はアジー・グルミンといいます。ストライクと同じと思えばいいです。」

「なるほどね。ってことはあの二人も一緒かしら土郎さん。」

「そうだね……そろそろ帰ってくると思うけど?」

あの二人とはいったいどういうことだろうか?僕たちはなのは様たちがいる場所へ座っており僕とアジーさんはコーヒを頼んでいると扉が開いた。

「ただいま戻りました。」

「ふう暑かったな……」

「相変わらずだなマクギリス……」

「な!!」

アジーさんが突然として立ちあがり驚いているが僕は後ろの方を振り返ると金髪の髪をした男性と青い髪をした男性がいるだけですけど?

「君は確か……タービンズにいた女性……」

「んあ?……って、ガンダムだと!」

「?」

なんでガンダムってわかったのだろうか?あちらの世界にもバルバトスのようなガンダムはいるってことで会っているのでしょうか?

「なんでお前たちがいる!!」

「待て、こちらは戦うつもりはない。」

「そうだな……この世界にギャランホルンも鉄華団も関係ないってことだ。」

「だからといって!!」

「アジーさん抑えてください。」

「ストライク……すまない。」

「ストライクというのか君は……改めて私の名前はマクギリス・フアリドだ。」

「俺はガエリオ・ボードウィンだ。それともう一人も帰ってくるはずだが？」

「ああ彼女だね。」

「彼女？」

すると扉が開いて戻ってきた。

「た、ただいま戻りました。」

「ジュリエッタどうした？また迷子になったのか（笑）」

「迷子になっておりませんガエリオ!!」

「ストライク……すまない私は今頭が痛い。」

「……まあ色々と混乱をしているみたいですね（苦笑）」

僕も苦笑いをしているとなのはたちがマクギリス達に気づいた。

「マクギリスお兄ちゃん、ガエリオお兄ちゃん、ジュリエッタお姉ちゃんおかえりなの!!」

「ああただいまなのはちゃん。」

「つてことはお前がいるつてことはほかの奴らもいるつてことだよな？」

「まあそうなるわね。」

「……ガエリオ、ジュリエッタ……私は彼らと会おうと思っっている。」

「マクギリス殿……」

「俺はお前に従うさ。今のお前は前と違うからな……今度は止めてやるよ。」

「ふ……ではストライクお願いがある。」

「はあ……鉄華団の方々と会うのでしたらアークエンジェルで話しませんか？さすがに月村家でそういう話はあまり……」

「そうだな……私もその意見に賛成だ。さすがに忍さん達にも言えないことである？」

「かもしれないな。」

なのは様たちとお別れをして私たちはマクギリス殿たちを連れて月村家へと戻ってきた。三日月さんがこちらに気づいてみている。

「あれ？チョコレートの人にガリガリじゃん。」

「ガエリオだ!!いい加減人の名前を覚えろ!!」

「まあまあガエリオ殿。とりあえずイージスにアークエンジェルをその必要はないぞストライク。」あ、イージス。

「すでに皆アークエンジェルで待っている。俺はお前たちを迎えに来た感じだ。」

なんとまあ早いことでイージスの案内で僕たちは月村家ドックに置いてあるアークエンジェルへと到着をした。

「これは……………」

「白い……………戦艦?」

「これは美しいな……………私のバエルのような白い機体だ。」

そして中へと入るとオルガさん達が座っていた。

「久しぶりだなマクギリス。」

「ああ君たちもね……………」

「まさかお前らもこの世界へ来ていたとはな……………」

「まあな、んでお嬢ちゃんは?」

「えつとその……………気づいたらこの世界へいまして……………お二人が近くで倒れていましたので……………そうしたらなのはちゃんに声をかけてもらいました……………」

「確か翠屋へ行ったときにはお会いをしなかったような?」

「ああ彼女は学校に普段は通っているんだ。まあ見た目がうご!!」

ガエリオがお腹を抑えて膝をついたのを見て全員が苦笑いをしていますね。私は彼のところへと行き大丈夫ですかと声をかける。

「さてそういえば彼女のことも忘れていました。」

「あああいつか。」

「あいつ?」

「どうしたのですかストライクさま……………マクギリスにガエリオ!？」

「カルタ!?」

「な・・・なん・・・で・・・おま・・・えが・・・」

「ガエリオは何があったのよ?」

「気にしない方がいい・・・だがどうして君が?」

「えつとその・・・」

「カルタ殿は突然としてこちらに攻撃を加えられたので私が成敗させてもらいました。なのはさま達がおられたのに攻撃を加えようとしたので。」

「「何?」」

「え!」

「カルタ・・・まさかなのはちゃんを狙うとはな・・・」

「そうだな・・・妹分のなのはちゃんを狙うとは。」

「許せんせんね。」

「え?え?ええええええええ!」

マクギリスさんとガエリオさん、さらにジュリエッタさんがカルタさんの肩をつかんでいました。

「「さあお話をしようか!!」」

「ちよ!!助けてええええええええええええええええええええええええええええええええええええ!!」

カルタさんが連れて行かれてオルガさん達も苦笑いをしていた。

「あのマクギリスたちが変わるってことはあるんだな?」

「そうじゃない?あいつらもなのはちゃんの家で変わったってこといいじゃない?今はギヤランホルンも鉄華団も関係ないってことよ。」

「そうだな・・・」

数分後

「・・・」

ぐったりをしたカルタさんとなんにかスツキリをしているマクギリスさん達が戻ってきた。彼らもどうやらガンダムやMSを纏うことが可能ってことがわかりました。

「何かあったら連絡をくれたまえ我々も協力は惜しまないさ。」

「ああそうさせてもらうぜ？」

オルガさん達が握手をするのを見てから私とアジーさんで彼らを送ることになりました。

「そういえばずっと気になっていたのだが？」

「なんだ？」

「どうしてお前たちは手をつないでいるんだ？」

ガエリオさんが言われたので私とアジーさんは手の方を見ると繋いでいたのを見てお互いに顔を赤くして離れる、無意識でアジーさんと手をつないでいるとは……

「まあいいじゃないかな？MSと人との共存か……それを私は見てみたいものだな。」

そして翠屋の方へと戻っていき彼らを見送ってから私たちは月村家の方へと戻るのであった。

ストライクたちミッドチルダへ。

ストライク side

マクギリス殿たちと会合をしてから数週間が立ちました。ある日のことクロノ殿からミッドチルダへ遊びに来ないかといわれてアークエンジェルでクロノ殿がいるミッドチルダの方へと行くことになりました。

メンバーは私ストライク、イージス、フリーダム、ジャスティス、M1アストレイ、ザクウォーリア、ウインダム、デュエル、バスター、ブリッツ、なのは様、フェイト様、アリシアさま、はやて様、すずか様、アリサさま、鉄華団の皆さま、マクギリス達ですね。ヴォルケンリッターたちも一緒なのでアークエンジェルに搭乗をする。

「しかし魔法つてのは気がつかなかったなマクギリス。」

「ああ魔法をなのはちゃんが使ってるつてのはすごいな……」

「ええ、それにほかのみんなも使えるのですよね？すごいですよ。」

「それでいいのですが……なんでカルタさんも乗っているんですか？てか屋敷の部下たちおいてきたのですか？」

「ええもちろんよ。あの子たちもノエル殿たちに鍛えてもらっているはずだからね大丈夫だ問題ないわ。」

いや大丈夫なのかな？まあアークエンジェルはクロノ殿が指定をされた場所へと飛んでおり次元を超えていた。

「これが次元を超えるってやつか？」

「すごいなおい!!」

「私初めてです。」

「アトラも!!」

ほかの皆さまは次元のホールを通ってアークエンジェルは現在ミッドチルダと呼ばれる場所へと向かっていた。そして次元ホールを通過してクロノ殿が指定をしたドックへとアークエンジェルは到着をする。

デツキの方を見てここがミッドチルダなんだと思いつながら歩いているとオルガさん達はアークエンジェルの隣にとまっているのを見

て驚いている。

「おいあれ!!」

「どうしたオルガ?」

アジーさんたちも気になったのか覗いている、僕たちも何がいる叶ってみているとハンマーヘッドのような船が止まっていたがアジーさんたちはそれを見て目を見開いている。

「あ、あれは……どうしてあれが……」

「そうよだつてあれは……」

「船ですよ?」

「そうかストライクたちは知らなかったな……あれは私たちが前の世界で住んでいた船……名前はハンマーヘッド……だがあれはダインスレイブで……」

「だが、どうしてあれが……」

「皆さんどうした?ああ名瀬タービンスの船ですね。」

クロノ殿が到着をして隣にあった船のことを話した。

「本当かそれは!!」

「オルガ殿落ち着いてください!!」

「す、すまないストライク……」

僕はオルガ殿を止めているとレッドフレームがこちらの方へ歩いてきた。

「ストライクに皆じやないかどうしたんだ?」

「レッドフレームさんどうしてここに?」

「ああ今からハンマーヘッドに行くところだな、お前さん達はどうか?」

「行ってもいいのか?」

「ああ大丈夫だろう?あいつらは今ハンマーヘッドの方にいるはずだし。」

僕たちはレッドフレームの後をついていきハンマーヘッドの方へと歩いていく。

「名瀬——アミダー——来たぞ!!」

レッドフレームが叫ぶと男性と女性が降りてきた。

「おうレッドフレーム……っておいおい。」
「嘘でしょ……」

二人はオルガさん達の方を見て驚いている。

「姉……さん？」

「兄貴……」

「あー久しぶりだなオルガにラフタにアジー、それに鉄華団の皆。」

「兄貴!! あんたもこっちの世界に来ていたのか!!」

「ああアミダと共にこいつと一緒に。そこで拾ってくれたのがレッドフレームだったわけ。」

「そうそれで二人は前の世界では運び屋をしていると聞いてな、そこでミッドチルダから依頼で飛ぶ運び屋をしているっというわけだ。」

「なるほど……だがまさかレッドフレームからお前らが地球で過ごしていると聞いたときは驚いたぜ？」

「それになんだいこの機体たちは？」

「姉さん彼らもガンダムと呼ばれる存在なんです。」

「なんだって？ バルバトス以外にもガンダムがいるなんてね。そういえばレイダーもガンダムだっけ？」

「レイダー!?!」

僕たちはあの時の黒い機体レイダーがここにいるっことで辺りをキョロキョロしていると青い機体がこちらに降りてきた。

「姉さん呼びました？」

「?」

確かに姿はレイダーに似ているけど僕たちが戦った機体とは違う気がする。

「えっと僕以外にもガンダムっているんですね驚きました。」

「ってことはあんたらとはあったことがないっことでいいんだね？」

「ええその通りですね。見たことはありません。」

レイダー制式仕様タイプと名乗られたので自分たちも名前を名乗る。オルガさん達も兄貴分たちに再会ができたので良かったなと思いつつ僕たちはミッドチルダの方を歩いていた。

街並みなどは海鳴市よりは都市に近い感じですね。やはり魔法を使うことで多いですね……魔導士は……それから歩いていき時間になったのでアークエンジェルに搭乗をしてミッドチルダを後にした。

月村家ドックへと戻り僕はアジーさんと共に自分の部屋へと戻った。

「ふう……」

「まさか姉さんたちに会えるとは思ってもしなかった。二人とも元気そうによかった……」

「なるほどあの人たちがアジーさんが言っていた人たちですか……よかったですね。」

「……そうだな。」

「アジーさん？」

「何でもないわ。それよりもストライクは何を考えているんだ？」

「……えつと少しだけ僕自身の強化ですかね？幸いにも月村家には機材などがありますのでこちらで何とかできる感じかなと……」

そう以前から僕自身の強化を考えていた。ストライカーが進化をしたことで肩部を装着をする必要がなくなったからだ。そのため改良をしようかなと考えていた。

「改良か……いったいどのようにするのか？」

「うーんまだ未定ですね……肩部にサブスラスタを搭載をしてアーマーシユナイダーの位置を足部につけ直す感じですかね？脚部はビームサーベルなどを装備ができる感じにしておいてくださいね。」

「ふーむそれはストライク自身の改良ってことでいいのだな？」

「ええそのつもりです。ですが今はまだいいかなと感じですね。」

「まだいいのか？」

「ええ……」

「わかった。これは私とお前の中で留めておこう。」

「ありがとうございます。」

こうしてひそかに始まった僕ストライクの改良計画が。

雪の中での戦い。

ストライク side

それから色々とありまして二年が経ちました。ミッドチルダの方にたまに行きまして私や三日月さんたちでなのは様たちの手伝いをしたりしています。

ですがこの二年間でなのは様の動きが最近変な感じをしております。それはほかの皆さまもわかっているぐらいに……

「ふーむ……」

「ストライクどうしたの?」

「すずか様、最近のなのは様はどうも皆さまに心配をかけないようにしようと奮闘をしている気がして仕方ありません。正直言つて今のまま続けていたら体に負担がかかります。」

「うん……でもどうしてなのはちゃんをあそこまで仕事などを頑張るんだろうか?」

「とりあえず次の任務際は私も一緒に行きます。」

「そうだね。ストライクお願いするよ。」

「なら俺もいいかな?」

「三日月さんにゼロ。ええお願いします。」

そして僕たちは次の任務でヴァイータ殿と一緒にすることとなり出動することになった。今回の俺はマルチブルストライカーいえばパーフェクトストライク形態で出動しております。

「悪いなストライク、あんたにも手伝ってもらうことになって……」
「気にしないでください。私もなのは様が最近無茶をしているのはわかっておりますから……だからこそ何もなければよろしいのですがと思っていた自分がいました。」

レーダーに反応があり僕たちは散開をして地上の方を見ているとMSがいた。あれはバクウ……まさかこの世界で会うとは思ってもおりませんでした。

「遅い。」

三日月さんは持っているメイスで叩きつけてバクウを撃破した。

ゼロの方もビームサーベルを抜いてバクウを切り爆発させる。

「おらああああああああ!!」

アイゼンを振り回してヴィータさんの攻撃がバクウ達にヒットをして私はシュベルトゲベルを抜いて襲い掛かるバクウ達を切っていく。だがなぜバクウが？私はナノハさまの方を見ていると砲撃などをして撃破しているが疲れている様子だ。

「ここはお任せします!!」

背中のスラスターを起動させてなのは様のところへすると三機の黒いバクウがなのは様めがけて砲撃をしてきた。まずい!!

ストライク side

「砲撃!!きや!!」

なのははプロテクションで砲撃をふさぐが反動で吹き飛ばされてしまう。そして三機のケルベロスバクウハウンドの三機はなのはを殺そうと接近してきた。彼女はなんとか逃げようとしたが体が思うように動かない。

「あ・・・あああ・・・」

彼女は恐怖で目を閉じた。だが彼女に攻撃は来なかった。

「え?」

「ぶ・・・無事ですか・・・な、なのは・・・さま・・・」

「すと・・・らいく?」

彼女の前にストライクが立っていた。だが彼の肩や装甲はビームファンングによって穴を開けられており三機のケルベロスバクウハウンドは離れるとストライクは膝をついた。あちこちから火花を散らしておりボロボロになっていた。

ケルベロスバクウ達はストライクにとどめを刺すために接近をしようとしたが砲撃が放たれて二機が撃破される。

「はああ・・・」

最後の二機もバルバトスルプスレクスのテイルブレードが突き刺さりそのまま引き抜いてメイスで叩きつけた。背中ケルベロスウイザードが無事なので戦利品として持って帰ろうと三日月は思ったが、後ろを振り返りストライクが膝をついたままだ。

「ストライクさん!!ストライクさん!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ストライクの両目は消灯をしておりゼロ達は急いで月村家へとストライクを運ぶことにした。彼の体はビームファンングで貫かれており全体にダメージがひどい状況だ。

月村家へ戻った忍は急いでストライクの手術を行うことにした。彼の体の構造を知っているイージスやフリーダムたちが忍の手伝いをしようとしたときアジーが声をかけた。

「忍の姉さん、実はこれを・・・・・・・・」

忍はアジーからもらった設計書を見て驚いている。そこにはストライク改良計画と書かれたものだからだ。

「これってストライクが?」

「ええもしかしたら強化をしないといけないと言っていたのです。だから今こそじゃないですか?私も手伝います。」

「そうね・・・・・・・・わかったわ。ストライク改良計画を実行をするわ!!」

こうして忍を筆頭にストライク改良計画が開始された。一方でなのは月村家に来ていた。自分のせいでストライクが・・・・・・・・と。

「なのはちゃん。どうして無茶をしてまで魔法を使おうとしたの?」

「そうよ。あんた自分が何をしたのかわかっているの!!」

「・・・・・・・・」

「二人とも落ち着いて・・・・・・・・」

「そうやで、ストライクさんのことも気になるけどなのはちゃん話してくれる?」

「・・・・・・・・」

「すまない、なのはも昨日からこの様子なんだ。実は土郎さんからなのはのことを聞いていたんだ。彼女は小さいとき土郎さんが病院でけがをして入院をしてしまったときに一人で過ごしていたそうだ。兄や姉たちの邪魔をしないように。」

「え?」

「・・・・・・・・私は魔法しか取り柄がないの・・・・・・・・」

だからこれで皆の役に立てるって……」

「なのはちゃん……」

「でも……そのせいでストライクさんを……私は……」
なのはは涙を流してジュリエッタが彼女を抱きしめる。ガエリオたちもストライクのことを気になりながら部屋の外にいた。オルガ達は鍛錬をしていた。それぞれMSを纏い模擬戦をしていた。

ザクウォーリアたちが協力をしてくれているのでグシオンはアルトロンと交戦をしていた。

「うおおおおおおお!!」

「甘い!!」

グシオンが放つハルバードをアルトロンはツインビームトライデントで受け止める。背中の砲塔からビームキャノンが放たれてグシオンは後ろへと下がりサブアームを展開をしてライフルを発射させてアルトロンにめがけて放つ。

一方で中ではストライクの改良を行っていた。腰部のアーマージュナイダーを外して脚部に装着する場所を変えたりしている。

フリーダムたちも肩部に装着をするドラグーンストライカーというデータがあつたが彼の肩部に干渉をしないように装着をする場所を変えたりする。

ドラグーンストライカーをイージス達が改良をすることにした。

「確かプロヴィデンスは背中のドラグーンの装着をする肩部を二個にするか?」

「そうですねストライクの後ろには確かライフルが装備をされていたっけ?これを外しててかドラグーンストライカーを改造をしましょう。」

「そうだな。」

つと魔改造的なことになっていた。それから二週間が立ちストライクの改造が終わつたと聞いてなのはたちはやってきた。

忍が部屋の前に立ち皆はストライクの新たな姿を見るために待っていた。

「では新たなストライクの誕生よ!!かもーん!!」

扉が開いて中からストライクが出てきた。両腰部にはビームサーベルが装着をされており足部の方にアーマーシユナイダーが移動をされており肩部にはサブスラスタが装着されており頭部はイーゲルシユテルが四問になったり胸部装甲が変わっているなどの改良がされていた。

「すごいですね．．．．自分が思っていた以上に改良をされています。」

「えつとストライク名前はどうするの？」

「名前ですか．．．．まあ前のストライクよりも違う形になりましたからね。そうですね．．．．ビルドストライクとこれからは名乗るとしましうかな？」

さらにストライカーが改良をされたのはまずはマルチプルアサルトストライカーの方だ。肩部が装着不能となったので両手にパンツァーアイゼンにマイルダベツサーが装着されたのが二つ両手に装着されて肩部のガンポットなどはサムブリットストライカーのミサイルポットが両方に装着されてエールストライカーもスペキュラムストライカーをベースに改良をされてシユベルトゲベルも改の形態へと姿を変わっておりアグニも改になっているなどの改良をされているビームサーベルは腰部に移動をされているのでサーベル部分がなくなりレールガンが装備されるなどの改良をされている。

ドラグーンストライカーはレジェンドガンダムのように背部が大きくなり腰部には二門のビーム砲が新たに追加されておりというよりはレジェンド三体に改良をされたと言った方が速い。腰部のほうには二つの9問のビーム砲が装備されてさらに両肩部や背中のだらグーンユニットにも装着をされており前肩部に二門ずつ計四問、背部には大型が二門、小型が8問と接続をされている。

言えばレジェンド版ビルドストライクということになる。もちろんメイドストライカーなどはそのまま装備することが可能なのでビルドストライクという姿のままである。

「ストライクさんごめんなさい!!私．．．．」

「なのは様が悪いわけじゃございません。止めなかつた私たちにも責

任があります。」

「ストライクさん……」

「まあビルドストライクという名前に変わってもストライクってのは変わりませんので以後お見知りおきを……」

こうしてストライクは新たな姿ビルドストライクへと変身をして戦うのであった。

ビルドストライク対アジーの模擬戦。

ビルドストライク side

忍さま筆頭に自分の体は現在新たな姿ビルドストライクに改良をされた。色々と武装などが増えており腰部にはビームサーベルが移植されていた。アーマーシユナイダーは足部の方へと移動をされており肩部にはサブスラスタターが装着されていた。

さらに一部のストライカーなども装着場所が変わったりしており現在はライトニングストライカーを確認をしていた。

「肩部に装着をする場所が背中の方へと移動をされているってことですか……」

「ああお前のストライカーに干渉をしないように改造をさせてもらったよ。体の調子はどうか？」

「悪くありません。ですがまだ模擬戦などをしておりませんのでどれくらいの力が出せるのかまだ不明です。」

「……ストライク、明日は私と戦ってほしい……」

「アジーさんですか？」

「ああ、私も自分の愛機で戦わせてもらう。」

「愛機ですか……」

「ああ私がタービンス時代から使っている機体だ。名前は百鍊だ。お前も見ることがあるだろう？」

「ええ……」

「遠慮はするなストライク。」

「……アジーさん。」

お互いにベットに入り僕は目を閉じた。明日はアジーさんと模擬戦をするか……どのストライカーで戦えばいいのか？

そして次の日となり庭にて僕とアジーさんは立っていた。今の自分は何も装着をしていない状態で立っている。

「ストライク行くぞ!!百鍊!!」

アジーさんが百鍊を纏ったのでこちらはライフルとシールドを構える。ストライカーは装着をしていない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

お互いに準備が整ったので審判を務めるイージスが歩いてきた。
「じゃあ確認をする今回は模擬戦だ。このライフがなくなったら負け
だいいいな?」

「ああ構わない。」

「うい」

「では始め!!」

ブザーが鳴りアジーさんが持っているライフルでこちらに撃つて
きた。僕はライフルを使ってトリガーを引きアジーさんが放った弾
に放っていく。

「甘い!!」

アジーさんは回避をして左手にランチャーを装備をして放つてき
た。威力的に高そうだな・・・・・・・・ならイーゲルシュテンで相殺を
する!!

「は!!」

四問となったイーゲルシュテンを放ちグレネードを破壊する。ア
ジーさんは破壊されたのか弾を連続して発射をしてきた。

「ぐ!!」

盾でガードをしてからダッシュをして腰部のビームサーベルを抜
いて襲い掛かる。アジーさんはブレードを出して受け止めていた。

「流石だなストライク。」

「アジーさんも向こうの世界で戦ってきたってわかりますよ。」

お互いにビームサーベルとブレードがぶつかり合い後ろへと下が
り脚部のアーマーシュナイダーを射出させてそれをキャッチをして
投げつける。

「は!!」

アジーさんはそれははじめさせますが僕はビームライフルを放ち
アーマーシュナイダーのナイフ部分に当てて反射させた攻撃をする。

「まさか先ほど投げたナイフを計算にしていたのか!？」

「そういうことですよ!!」

こっちは接近をして太刀を構える。これは三日月さんが使うハルバトスが使っていた太刀を自分用にもらったものです。

「でええええい!!」

「ぐ!!」

アジーさんのブレードを叩き落としてつきつける。アジーさんは両手をあげた。

「降参だ。」

「ふう……………」

太刀を収納をして模擬戦が終わってからクリーンストライカーを装着をして起動させる。

「綺麗にしましょうねー……」

クリーンストライカーやメイドストライカーも改良されておりビルドストライクバージョンという感じだな。それから掃除を終えて時間などはあつという間にたつ。

部屋に戻るとアジーさんがいたが俺の姿を見ると抱きしめてきた。

「アジーさん?」

「スト……ライク……良かった……生きていてくれて……私はまた……大事な人を失うかと思ったから……」

言葉を聞いて僕は黙っているしかできなかつた。前にラフタさんから話はきいていた。

回想

「ねえストライク。」

「なんですかラフタさん?」

「実はねアジーは今はある……しているけど立ち直るまでに時間がかかったの。」

「といますと?」

「前の世界でダーリンとアマダ姉さんがなくなつたと、私も刺客に撃たれて死んでしまったの……アジーは私の死体を見て発狂を……してしまつたらしいの……しばらくは立ち直ることができない……今は安定をしているように見得るけど……」

たぶんあなたが倒れたりしたらおそろく……」

「そういうことだったのですか……ありがとうございます。」

回想終わり。

アジーさんは俺を抱きしめているが力強かった。僕は機械だからあまり強いとは感じないけど失いたくないという気持ちが伝わってきている。

「……アジーさんあなたに涙は似合いません。だから涙を吹いてください。」

ハンカチを渡してアジーさんが流す涙を吹いているが彼女は涙目のまま自分を見ていた。

「嫌だ……嫌だ嫌だ嫌だ!!絶対に離したりするものか!!」

「うええええええええええ!!」

なんか知らないけどアジーさんが離したりしてくれないのですが!?って音が聞こえてきた!?

「どうしたのってアジー何やっているの?」

ラフタと昭弘さんが駆けつけてくれた、二人はアジーさんを僕から離そうとしてる。

「離せないでくれ!!私もう失いたくないんだ!!」

「だからといっていつまでストライク抱き付いているのよ!!昭弘!!見てないで手伝って!!」

「お、おう!!」

二人がアジーさんを引きはがしたがアジーさんはすぐに僕に抱き付いてきたので彼女の胸が当たってしまう。

「ぶふ!!」

「アジー!!」

「ぬおおおおお!!」

そして二人はアジーさんを離れた後に縄でグルグル巻きをしていた。

「わお……」

「ラフタ!!何をするんだ!!」

「あんたがストライクに抱き付いているからよ!!全く大丈夫ストライ

ク？」

「え、ええ……」

とりあえずアジーさんが落ち着いたみたいなので縄を外す。

「す、すまなかつたストライク……」

「い、いいえ……」

アジーさんは顔を真っ赤にして僕の方を見ないようしているがやれやれといいながら僕はベットの方へと移動をする。

「とりあえず寝ましよう？明日も早いですから。」

「そ、そうだなストライクお、お休み。」

「おやすみなさい。」

部屋の電気を消してから僕はアジーさんが眠っているのを確認をする。

「アジーさんごめんなさい、僕が重傷をおつてあなたは僕がいなくなってしまうという恐怖に襲われたんですね申し訳ございません。ですがこれだけは言います。僕はあなたを置いて死んだりしません……こうして直してくれる人がいる限り僕は戦い続けることができますから。」

そういつて僕は布団の方へと入っていき眠ることにした。

ストライク side 終了

「……馬鹿。」

アジーは起きていたビルドストライクの言葉を聞いて真っ赤にしていた。

「あんなこと言われたら私は……絶対に離したりしないからなストライク。」

昭弘とラフタの結婚式。

オルガ side

俺は現在月村家のある部屋に集めていた。忍さんを筆頭にここにいない昭弘とラフタさん以外の全員が集まっている。ミッドチルダにいる兄貴とアミダさんにも来てもらった。

ここにはなのはちゃんたちも参加をしているのには理由がある。

「皆さん忙しい中集まっていたありがとうございます。」

「おうよオルガ、俺たちを集めていったいどうしたんだ？」

「……昭弘とラフタさんの結婚式を行いたいと思ひまして……」

「あーそういうことかい。」

「なんか寂しい気がするがあいつが選んだからな……俺達は結婚式を盛り上げるだけだ。」

兄貴たちの協力得たので俺達は準備を進めていく。忍さんも屋敷を使ってもいいという許可を得たのでストライクたちはおどおどしていた。

「どうしたストライク？」

「あ、いやえつとその……」

「結婚式というのはなんでしょう？」

「俺達名前だけは聞いたことはあるが……何をすればいいんだ？」

そうかストライクたちはMSとして運用をしてきたから結婚式とこのを知らないのか……俺は兄貴の方を見ていた。結婚式しているのは兄貴だからだ。

「まあな色々と準備が必要だからなそれでオルガいつ頃するんだ？ 昭弘とラフタの服でドレスなどはどうやって作る気だ？」

「それなら自分がしましょうか？」

ストライクはメイドストライカーを装着をしてファリンさん達が手伝ってくれるからな。さてそれから料理などは桃子さん達にお願いをするでしょうか？ さあ始めようか鉄華団の結婚式を!!

オルガ side 終了

さて一方で結婚式の準備をしているなど知らないラフタと昭弘の二人は街の方へと買い物しに来ていた。

「ふんふんふふふーん。」

「おい．．．．．まだ買うのか？」

「あらいけない？せつかくの買い物を楽しまないとね!!」

「．．．．．これだけ買っているのにまだ買うのかよ．．．．．やれやれ。」

昭弘の手にはラフタが買った服などを持たされている。彼も筋トレになるからいいかと両手で持っている。

「．．．．．」

突然としてラフタは動きを止めた。彼女が突然止まったので昭弘はどうしたんだろうかと声をかける。

「どうしたラフタ？」

「ツ!!」

突然としてラフタは彼に抱き付いてきた。昭弘は突然抱き付いてきたので驚いている。彼はどうしたと聞こうとしたが彼女が震えているのに気づいた。

「ラフタ？」

「．．．．．ごめん昭弘．．．．．でもこれが夢じゃないかって思っ
てしまうときがあるの．．．．．」

「．．．．．」

「こうして昭弘と一緒に買い物をしたりするなんて夢じゃないかって
思うの．．．．．あの時に叶わなかったことがこうしてできること
が夢だよねと思うぐらいに．．．．．でもこうして昭弘を抱き付い
ていると夢じゃないってわかる。」

「ラフタ．．．．．」

昭弘はラフタを落ち着かせるために抱きしめる。だが力強くじゃなく
てそろつと彼女を包むかのようにして．．．．．さて一方で二人がそんなことを
していることを知らないメンバーは準備を始めていた。

ストライクは背広やドレスなどを考えていた。昭弘に合う大きさ

の背広を考えたり女性の皆さんに聞いてラフタに会いそうなドレスを考えたりするなどビルドストライクとして初めての作業になるな
といいながらアークエンジェルの中で考えていた。

「ストライク少し休め。」

アジーはコーヒーを持ってきた。ストライクはありがとうござい
ますといいコーヒーを飲んでいた。

「どうだ？」

「昭弘さんに背広は大きくしていいのですが……ラフタさんの
ドレスについては色々と考えないといけないのが大変ですよ（笑）」

ビルドストライクはうーんと両手を伸ばして少し休憩をすること
にした。準備などは進められて行きなのはたちも手伝いをして結婚
式の準備などは完成をされていく。オルガはニヤリと笑いながらも
仕事をしておりメイドとして月村家を掃除をしていた。

「オルガこれはどっちに？」

「ああ悪い昭弘、それはあっちに捨てておいてくれ。」

「わかった。」

ウイングゼロ達も掃除などをしながら今回はサンドロックとヘ
ビーアームズがすすずかの迎えを担当となっており6人が仲良く帰っ
ている姿を見る。

「やあすすずかちゃん。」

「サンドロックにヘビーアームズ迎えに来てくれたの？」

「ああ……そういうえば見たことがない人物が一人いるが？」

「ああうちは八神 はやてというねんよろしゅーな。またガンダムが
増えたんか？」

「うん五人もね。」

そういつて一緒に家へと帰っている8人が歩いてそれぞれ家に
戻っていく。すすずかも月村家へと戻りヘビーアームズたちも仕事の
方へと戻っていく。

そして昭弘とラフタの結婚式サプライズ決行日が近づいていた。
準備などに1か月はかかってしまいがその日となり昭弘はオルガ達
にラフタはアジー達に連れられてそれぞれの場所で着替えをさせさ

れた。二人とも目隠しをされたまま色々とされたのでいったいなにをされているんだろうかと考えていた。

そして二人は歩かされていきどこかについたのかと思いきヨロキヨロする。

「二人とも目隠しをとってくれ。」

オルガに言われて目隠しを外すと二人はお互いの格好を見て驚いている。

「ら、ラフタ!？」

「昭弘!? その格好って……」

二人は背広とドレスを着ておりラフタは普段のツインテールも纏められておりお互いに顔を赤くしている。

「ごほん。」

二人は前を向くと牧師の格好をしたビルドストライクが立っていた。周りにはアジーやクーデリア、アトラに高町家、月村家、バニングス家、ハラオウン家が来ており名瀬とアミダやタービーズ所属のMSたちにイージスを始めMSたちも座っていた。

「これって……」

「驚いただろ? お前らのサプライズだ。」

「オルガ……」

「お前らは前世で色々とおあってできなかつただろ? だがこの世界じゃお前らの邪魔をする奴はいねー。だからよこれからもとまるんじやねーぞ?」

「さてこれより昭弘・アルトランドとラフタ・フランクランドの結婚式を行いたいと思います。まずは誓いの言葉から……ごほん。汝昭弘・アルトランド……あなたは隣にいるラフタ・フランクランドを妻として支えていくことを誓いますか?」

「……ああラフタは俺が守る!! もう絶対に失いたくないからな。」

「昭弘……」

「ごほん、えー汝ラフタ・フランクランド……あなたは昭弘・アルトランドを夫としてこれからの人生を支えていくことを誓いますか?」

「誓います。」

「では誓いのキスをお願いします。」

「……………」

「昭弘!!男を見せやがれちくしょおおおおおおお!!」

「ラフタ……………俺はお前を守る……………だから俺の傍にいてほしい。」

「うん私も昭弘から離れないから……………失わせないでね?」

お互いに近づいてキスをしてなのはたちは顔を真っ赤にしてキスをするところを見ていた。

「あら恭也次は私たちかしら(笑)」

「……………かもな。」

二人はラフタと昭弘の結婚式を見てうつとりとしていた。ストライクも首を縦に振りうんうんとよかつたなと思いつつながら結婚式は成功をした。

その夜 ストライクは空を見ていた。綺麗な星空がキラキラと光っていた。

「なんて綺麗な星空なんですか?まるでラフタさんたちの結婚を祝っているかのように……………」

「ストライク……うわー綺麗な星空!!」

「これはさすが様、そろそろ寝ないといけないのじゃないですか?」

「ごめんごめん、でもこうして夜空を見ているとストライクが降ってきたことを思いましたよ。」

「そういえば僕を拾ってくれたのはさすが様でしたね。ありがとうございます。」

「ううん最初は流れ星だと思ったけどでも消えないからそれで気になっただけならストライクが倒れていたの。」

「なるほど……………」

ビルドストライクとさすが空を見ていた。すると何かが落ちてきたのが見えた。しかもたくさん……………ストライクはサムブリットストライカーを装着をしてアグニ改を発射。

「「ぎん」おおおおおおお!!」「」

声が聞こえたので彼らはその場所へ向かう。

「いたいぎこ!!」

「つてここはど(ぎこ)？」

「ザクウオーリア？」

「でも似ているけど違う気が……………」

「ガンダムザコ!」

「ここはネオトピアザコ!」

「ネオトピア?」

白い戦艦の正体。

ビルドストライク side

今僕たちは全員が起きていた。僕が放ったアグニ改の音で目を覚まさせてしまいました。

「こいつらは一体なんだ?」

オルガさんの一言で集まってもらったメンバーたち、相手はザクウォーリアみたいなのがたくさんいたので全員に集まってもらった結果かなりの数がいた。

「俺達も見たことがないぞ?」

「それは僕たちもです。」

「あんたたち一体何なのよ!!」

ラフタさんが彼らに聞くと彼らは笑いだした。

「よくぞ聞いてくださったザコ!!」

「我らは元ダークアクシズで現在はS・D・G所属の。」

「二ザコソルジャーザコ!!」

「つまり雑魚だね?」

「二ザコ!」

三日月さんの一言で全員がガクツとなつてしまいました。三日月さんへ……ストレートに言わないであげて。

「それでそのザコソルジャーと呼ばれるお前たちはなんでこの月村家の庭に?」

「そ、それがザコたちにもわからないザコ。」

「気づいたら空から落下をしてビームを受けたザコ!!」

「あー僕ですねそれはあはははは……」

僕は苦笑いをするしかない、突然降ってきたものに対してアグニ改をはなったからね? ザコソルジャー達にも武器は装備されておりマシンガンとヒートホークをもっているぐらいだとわかった。

「とりあえず……ってなんだ!」

デスサイズが空の方を見ていると白い戦艦がこちらに着地をしてきた。今度はなんだ!?

ストライク side 終了

白い戦艦が月村家庭に着地をしてビルドストライクたちは驚いている。

「今度は戦艦!？」

「あ!?!あれはガンダムサイザコ!!」

「「ガンダムサイ?」」

ビルドストライクはとりあえず中へ入りましょうかといわずかと忍、ファリンにノエル……さらにオルガ達と共にガンダムサイの中へと入る。

彼らは周りを見ながらイージスはガンダムサイの中を見ていた。

「先ほどスキャンを試してみたがこれは我々が使われている技術よりもすごいものだな……」

「ああ俺達の使われていない技術ばかりだ。」

「とりあえず司令室へ行ってみましょう?話はそこからよ。」

オルガ達も念のためにMSを纏い中へと進んでいく、なおアトラとクーデリアはザコソルジャーとザクウォーリアたちに守られて外に待機をしていた。

司令室と思われる場所へ到着をしたビルドストライクたちは右手にビームライフルを構えながら中へと入りオルガ達に異常がないというサインを出そうとしたとき光弾が飛んできた。

「誰だ!!」

ストライクたちはビームライフルを構えていたが一瞬でライフルが切り裂かれた。

「!!」

二人は驚いていると武者のような人物が腰に刀を鞘に戻していた。

「ガンダム?」

「君達は何者だ。ガンダムサイの中へ入り何をする気だ?」

「我々は交戦をする意思はない、ただ家の庭にこんな大きなものが落ちてきたので調査をさせてもらっていた。」

「何?ライミさん。」

『キャプテン、ここはネオトピアでもありません。ラクロアや天宮で

もありません。』

「えええええ!? いやあ僕たち、行世界へ来てしまったの!?!」

「そのようですね。」

「……………あのあなた方は?」

「キャプテンどうする?」

「自己紹介をした方がいいな。私はネオトピアS・D・G所属次元パトロール隊ガンダムフォース隊長キャプテンガンダム。」

「そして僕は特別隊員シュウト!!」

「私は翼の騎士ゼロ。」

「私はラクロアの姫リリジマーナと申します。」

「拙者は天宮の炎の武人! 爆! 熱! 丸! 爆熱丸見山!!」

「そしておいらは元気丸!!」

「なるほどならこちらも自己紹介を私は月村家メイドを務めておりますビルドストライクと申します。」

「俺はイージスガンダムだ。」

「僕はフリーダムガンダム。」

「俺はジャステイスだ。」

「ウイングゼロ。」

「俺は死神のデスサイズだ!!」

「俺はヘビーアームズだ。」

「僕はサンドロックです。」

「俺はアルトロンだ。」

「三日月・オーガス。」

「オルガ・イツカだ。」

「昭弘・アルトランドだ。」

「妻のラフタ・アルトランドよ。」

「アジー・グルミンだ。」

「俺さまがノルバ・シノ様だ!! よろしく!!」

「えっと私は月村 忍でこっちは妹の。」

「月村 すすかです。」

「私はメイドのノエルと申します。」

「私はフェアリンです!!」

キャプテンガンダムあ辺りをセンサーで確認をしていたがすぐに右目におろしていたバイザーを上げた。

「確かにこの世界は私たちが知っている世界じゃないってことはわかった。ラミアさんガンダムサイは?」

『損傷がありしばらく航行ができません、さらにネオトピアの場所もとくていけませんでした。』

「……………困ったな。」

「ならうちの地下ドックにつければいいわよ?そこに戦艦が一隻あるから。」

「よろしいのですか?私たちは……………」

「あなたたちが異世界から来たのはストライクたちでいっぱいよ。でもね家族が増えるってのは悪くないのよ。」

「ご協力感謝をします。」

キャプテンが敬礼をしたのでシユウトを始め敬礼をする。ストライクたちもつい敬礼をしてしまう。

「二二二あ……………」

こうしてキャプテンたちも月村家に滞在をすることとなりビルドストライクは換装リングを見ていた。

「これが……………キャプテン殿が換装をされるリングですか。」

「ああこれで私はモビルシチズンモードから戦闘モードに変えることができる。」

「武器などもあるのですね?」

「ネオトピアの進行に対しての武装許可を得ている。それが我々S・D・Gの役目でもある。」

「そういうことですか。」

一方外では三日月のバルバトスルプスレクスと爆熱丸が模擬戦をしていた。

「ぬおおおおおおおおお!!」

「えい。」

三日月がふるったメイスを爆熱丸は腰の二刀流ではじかせて次の

攻撃へと移るが三日月は両手に装備された弾を発射させる。

「であああああああ!!」

だが爆熱丸はそれをすべて叩き落とした。

「やるなキサマ!!」

「あんたもね。」

その様子を全員で見ている。

「そういえばゼロさんって魔法が使えるのですよね?」

「ああ我々ラクロアの騎士ガンダムは魔法を使うことができる。こういう風に。」

ゼロは手に赤いバラを出した。それをすずかに渡したのであった。一方でシュウトは月村家にある機材などを見ていた。

「うわーすごいや!!こんなにもいっぱい!!」

「ありがとうシュウト君、でもあなたもそれを作ったりしているのでしょ?すごいわよ。」

「ありがとうございます!!」

つとお互いに機械を作ったりしているので意気投合をしていた。次の日になりなのはたちもキャプテンたちを紹介されて驚いている。

「まさか異次元からやってくるなんて思わないわ。」

「でもストライクたちもそうだからね?」

「うーん。」

「どうしたのオルガ?」

「いや俺達をこの世界へ送ったのは誰だろうなと思ってな。」

さてさて場所が変わりここは天界。

「……………ふう……………」

その犯人はここにいた。名前は神エボルト……仮面ライダービルドであり別の世界のリリカルなのは世界で戦っている人物でもある。

鉄華団の人物たちをあの世界へ送ったのも彼でありマクギリスやガエリオなども送ったのは彼である。

「お疲れ様エボルトさん。」

「……………良かったのですかビスケットさん?俺の手伝いでこの天

界に残ってもらっておりませんが本当だったら。」

「いいんだよ、僕が君の仕事を手伝いたいと思っただけで残っているからね。」

「ありがとうございます。」

「エボルトさま次の仕事だ。」

「了解だよ。」

エボルトこと戦兔は部下のガブリエルから書類をもらい仕事を続けていた。オルガ達の幸せを考えて別のリリカルなのは世界へ送ったのは彼である。

だが彼は考えていることがあった。

「いったい誰が戦いを求めている彼らをあの世界へ解き放ったのか……」

彼が持っている書類を見ながら彼はあの世界のことを心配だが彼らを信じることにした。彼の書類に書かれていた危険人物。

『ラウ・ル・クルーゼ』

『アリー・アル・サーシエス』

『イオク・クジャン』つと

ティードアの移動

「はあ……」

ティードア・ランスターはため息をついていた、彼は前の部隊からの転属命令を受けてその場所へと向かっていた。まさかここで転属とは思ってもいなかったのだから彼はため息をつくしかなかった。

「しかし場所だけはかかれていたのに部隊名などがかかれていないなんて……俺ってなんか不幸だわ。」

はあとため息をつきながら地図に書かれていた場所に到着をした。

「ここだよな……俺場違いじゃないよな?」

彼はあたりを見てからふうと息を整えてからコンコンと扉を叩く。

『入ってくれ。』

「失礼します!!」

扉を開けて彼は挨拶をしようとしたがそこにいた人物に驚いている。

「ぶ、ブルーフレーム教官?」

そこにいたのは以前の事件で助けてもらい、さらに自分を鍛えてくれた恩人ブルーフレームがいた。

彼は椅子に座っていたが立ちあがり彼の傍に行く。

「待っていたぞティードア・ランスター。」

「え!? どうして教官が……ちよつと待ってください。もしかして俺の転属した場所ってまさか!!」

「そうサーペントテールによくそつと言っておくさ。」

「ええええええええええええ!!」

ティードアはサーペントテールのことは知っていた、まさか自分がそのサーペントテールの一員になるとは思ってもいなかったのだから驚いている。

「何を驚いている。お前の射撃能力を買って俺はお前をここにスカウトをした。」

「マジですか……」

すると扉が開いて4機のガンダムが入ってきた。

「遅いぞお前たち。」

「悪い悪い。」

「すまない。」

「新しいメンバーが来たってどんな奴なんだと思っただな。」

「今到着をしたところだ。さてまずは自己紹介をした方がいいな？」

「ならまず俺からするぜ。俺の名前はヴァンセイバーだ。」

「俺はロツソイージスだよろしくな？」

「僕はネロブリッツです。」

「俺はドレットノートイータだ。一応よろしくと言っておく。」

「そして俺はサーペントテール隊長をしているブルーフレイムだ。」

「ティータ・ランスターです!!本日よりサーペントテール所属となりましたよろしくお願ひいたします!!」

彼は敬礼をして挨拶をしたのでほかのメンバーも敬礼をして返す。

さて場所は変わり地球

ビルドストライクとアジールは忍に頼まれて買い物に出ていた。

「ストライクにアジール君じゃないか。」

「これはマクギリス殿にガエリオ殿、そしてジュリエッタ殿じゃないですか。」

「お前たちも買い物か？」

「まあな士郎に頼まれて買い物に来たって感じだな。」

「しかし本当にコロニーなどはないんですね……驚いています。」

「……そうだな、私も最初は驚いたが士郎殿や桃子殿のところでお世話になったときに愛情つてのを知った。」

「マクギリス……」

「……なぜあの時士郎殿のような方々に会えなかったのか……」

私は……もう少し変わっていたのかもしれない……
鉄華団の彼らを死なせることやお前やカルタを……」

「……終わってしまったものは仕方がないマクギリス。だが俺達はこうして別の世界だが生きている。それでいいじゃないか……カルタとも再会ができた。」

「そうだな……」

「私もお前たちと戦う理由はない。確かにお前たちを憎いといえぼうそになる。」

「……わかっています。私はあの人と決着がつけなまま終わってしまいましたから……」

「ジュリエッタ殿は誰かと決着をつけたいと思っておるのですか？」

「ああ名前はアミダって人だな。」

「アミダ殿ならたしかミッドチルダの方におられましたよ？」

「本当ですか!!」

「ええ……あちらの世界で配達員をしておりましたし、この間の結婚式にもおられましたし。」

「がああああああん。」

ジュリエッタはショックを受けていた。マクギリス達は苦笑いをしてストライクとアジー達と共に買い物をする。

「そういえばジュリエッタ気になったのことがあるのだが？」

「なんででしょうか？」

「鉄華団たちを追い込んだ際に確かイオク・クジャンがいたはずだが彼はどうしたんだい？」

「……あまり言いたくないですが昭弘さんが乗ったグシオンにプレスされました。」

「え？」

「プレスされました。」

「ぶ、プレスですか？」

ビルドストライクとアジーはお互いに顔を見てプレス？と首をかしげる。ジュリエッタはその時のことを見ていたので詳しく説明をした。

ダインスレイブによってグシオン及びバルバトスは大ダメージを受けてイオクは弱っているグシオンに突撃をして攻撃をしたが、シャーシールドを持ったグシオンの攻撃を受けてそのままコックピットの中でコックピットブロックごと圧縮プレスことぐしやりとコックピットをつぶされてしまった。

「まあ彼らしい最後といえは最後か……」

「そういえばMAが出てきたときもあいつが近づいたから起動したんだよな？てかあいつ無能にもほどがあるだろ。」

「ええすごく無能ですはつきり言つて……」

「……なんといえますか、話を聞いていますと無能過ぎませんか？」

「ああ……私も話を聞いて頭が痛くなってきたよ……」
イオク・クジャンの話聞いて頭を痛くなってきたストライクとアジーであった。

一方でミッドチルダの名瀬タービンスのハンマーヘッド。

「ほい、お待たせしたな。」

「ありがとうレッドフレーム。」

お前が言っていたMS百鍊つてやつ修理がやつと終わったぜ？穴だらけだったから修復に時間がかかっちゃったぜ。」

レッドフレームが持ってきたのはアミダが搭乗をしていたMS百鍊だった。彼女が目覚めた時は百鍊はダインスレイブによってやられたダメージの状態であったためレッドフレームに修理を任せていた。

それが今日やつと終わったみたいで彼女のところへ届けに来たのだ。

「お帰り百鍊。」

彼女は触れると百鍊が光りだして彼女を纏うように装着された。

「これがMSを纏うつてことかい？」

「まあそうじゃないか？俺は知らないけどよ？」

「ならレッドフレーム早速で悪いけどあたしと戦ってくれないかい？」

「おいおい本気かよ。まったくしょうがねーな。」

レッドフレームはいよいよやながらもシールドとビームライフルを装着をして戦うことにした。アミダの方もライフルを持ちお互いに武器を構えていた。

「レイダーあんたが審判をしな!!」

「自分ですか!?わ、わかりましたよ。では………始め!!」

レイダーの合図でアミダはライフルを放ちレッドフレームは盾でガードをする。彼はビームライフルを構えてトリガーを引き弾が放たれる。アミダは素早く回避をして左手に背部からブレードをレッドフレームに切りかかる。彼はライフルをしまつて盾を投げつける。「なに!?!」

アミダはブレードではじかせる。彼は腰部に手を置いて日本刀「ガーベラストレート」を抜いてアミダに切りかかる。彼女は驚きながらも振り下ろされたガーベラストレートをブレードで受け止める。「やるじゃんかあんた!!まさか戦いの方も得意だったなんてね!!」
「色々と戦い続けてきたからな……あんたも同じみたいだけだな!!」

お互いにガーベラストレートとブレードがぶつかり合いレイダーやダガーLと105ダガーたちは見ていた。

「すげーなレッドフレームもそうだけどアミダの姉貴も。」

「ああ……まさか姉貴もMSに乗っていたとはな。」

「おいおい何の騒ぎだつて……おいおいアミダとレッドフレームかよ。お前も見えていないで止めろよ。」

「いやあの勢いを我々では止めるのは一苦労なのですが……」
「だな……」

お互いに見て無理だなと判断をするのであった。

再び海鳴市

ビルドストライクたちは買い物をして月村家のほうへと戻ってきた。外ではサンドロックたちが木などを手入れをしていた。

ザクウオーリアとウィンダムはザコソルジャーたちと共に掃除をしていた。

「ただいま戻りました。」

「おかえりなさいストライクとアジーさん。」

「頼まれていたもの買ってきました。」

「……ええ大丈夫よ。ありがとうね?」

「いえいえどういたしまして。」

ストライクたちは失礼しますといい自分たちの部屋の方へと戻つ

ていた。

「ふう・・・・・・・・」

「疲れたのかストライク？」

「まあ色々MSなどが多いなと思いましたが？」

「確かに。私もガンダム・フレームいやガンダムは色々な世界にいるんだなと思ったよ・・・・・・・・」

二人が話していると警報が鳴りだした。

「なんで警報が？」

「アークエンジェルの方からだな。」

二人は部屋を出てアークエンジェルが収納されているドックへと向かう。

迫りくるMS隊

ストライクたちは警報が鳴ったのでアークエンジェルの方へと来ていた。そこにはすでにイージス達が到着をしており後は彼らを待つのみであった。

数十分後

「すまない遅れてしまったようだ。」

「全く夜は乙女にとってはデリカシーなんですよ!!」

「……お前本当に変わったな。」

「そうですか?」

ガエリオはジュリエッタの変わり具合に驚いている中イージスはすずかやアリサ、なのはたちを待つてから出撃をする。

「すまないみんな、突然としてMS反応が発生をしたんだ。だがこれは現在それを見るために出撃をする。」

「それで私たちにも声をかけたのね?」

「ああ鉄華団の皆さんやマクギリスさんたちを呼んだのはそれが理由なんだ。」

「というと?」

「あなた方と同じようなMS反応が出ているからです。」

「俺たちと同じようなもの?」

「イージスつまり言えば、今回の敵のMSはオルガさん達のいた世界のMSってことか?」

「そういうことになるってうわ!!」

アークエンジェルが揺れたので全員が驚いている。イージスはすぐに被害状況を確認をした。海上にて砲撃が命中をしたということ……するとMS反応が近づいてきた。

「進めええええ!!」

一機のグレイズみたいな機体がレールガンを持ちアークエンジェルに向かって放ってきた。だがその弾丸はあらゆる方角へ飛んで行く。

「……なんだあれ?」

「あれは……レギンレイズ。」

「しかもあの機体って……」

「イオク・クジャン……」

「あれが無能指揮官といわれているイオク・クジャン。」

「ぶふ!!」

ストライクの言葉にシノがぶふと笑ってしまいほかのメンバーも笑ってしまう。

「た、確かにぶふ。」

「って笑っている場合じゃ無い気がするだが？」

ウイングゼロの言葉に全員がはつとなり出撃をする。

「さあ行くわよ我らの力を見せる時!!」

「」「はいカルタさま!!」「」

ビルドストライクはスペキュラムストライカーを装着をして全員が出動をする。なおこの世界では空中に浮かべるためイージス達もグウルがいないのだ。

「しかしレギンレイズとはな……」

「あの野郎の機体で同じだったら今度こそ叩き潰してやる。」

「昭弘!!私のもやらせなさいよ!!」

「ああ今度は二人でな!!」

「いや俺達もやらせてもらうぞ!!」

「……はあ……」

ジュリエッタはため息をついていた。あのバカはこの世界でも何をやる気なんだろうと……なのはたちも敵のMSに気づいた。

「ストライクさんあれが？」

「そうですなのはさま、あれがMSですね。」

「なのは来るよ!!」

「デイベインバスター!!」

なのはが放たれるデイベインバスターがレギンレイズに命中をして爆発をした。なぜなのはたちの攻撃が効くのかというストライクがデバイスに改良を加えてMSでも聞くぐらいに改良をしたから

だ。

レギンレイズたちは驚いているとツインビームサイズを構えたデスサイズが上から降りてきて振り回してレギンレイズたちを切っていく。

「お前たちに正義があるのか!!正義があるのかと聞いている!!」

アルトロンは両手のドラゴンファンクを放ってレギンレイズたちを挟み込んで撃破する。

「サンドロック援護をする。」

「お願いしますへビーアームズ!!」

サンドロックはヒートショーテルを抜いてへビーアームズはツインガトリングを放ちレギンレイズたちに命中をしてサンドロックがヒートショーテルを振り下ろして切り裂く。

「マクギリス・ファリド!!」

レギンレイズが剣を抜いてバエルに切りかかる。バエルはバエルソードで受け止めた。

「やはりあなたかイオク・クジャン公……」

「貴様は私の手で倒す!!これが私があの方ラストル様の忠誠心だ!!」

「マクギリス!!」

ガエリオが纏うキマリス・ヴィタールが右手に持っているドリルランスでレギンレイズに攻撃をして吹き飛ばす。

「おのれ!!」

「よせいオク公、この世界は我々の世界ではない。ラストルもこの世界にはいない!!」

「黙れ!!黙れ黙れ黙れ!!ラストルさまに刃向かった男の言葉を聞くと思うのか!!」

「……あなたは全然変わりませんねイオクさま。」

「貴様はジュリエッタ!?なぜ貴様がここにいる!!その男は!!」

「ラストルさまに刃向かった男といたいいいのですか?確かにその通りです。」

「なら私と共に「前でしたらですけどね?」なに!?!」

「今はこの人を撃つ理由はありませんし、何よりもこの世界にあの方

はおられません。まあいたとしても仕えるかどうかはわかりませんがどね?」

「おのれ!!」

一方で鉄華団たちもレギンレイズを撃破していた。

「はああああああああ!!」

フェイトはハーケンセイバーを放ちレギンレイズたちを撃破していき、ビルドストライクはミサイルを発射させてアジールはヘビークラブで叩きつける。

「くらいやがれ!!ギヤラクシーキャノン!!発射!!」

シノが纏うガンダムフラウロスが変形をしてギヤラクシーキャノンを放ちレギンレイズたちを撃破する。

「ターゲットロック・・・ツインバスターライフルを発射する。」

「いくでラグナロク!!」

はやてとウイングゼロのツインバスターライフルが混ざり合いレギンレイズ部隊を撃破していく。

「さあ行くわよ!!疾風怒濤!!」

「二二うおおおおおお!!」

カルタ率いるグレイズリッター部隊が剣を持ち突撃をしてレギンレイズたちを押ししていた。彼らはストライクたちや鉄華団たちと模擬戦をしていき連携をさらに強めていった結果が今の状況だ。何機かのグレイズリッターはロケットランチャーはライフルを構えて援護をしてほかのメンバーが剣で突撃をして切っていくという連携だ。

「ふふーんいい感じだわ。」

カルタは満足をしていると後ろからレギンレイズが一機攻撃をしてこようとしていた。

「カルタさま!!」

「あら?」

砲撃が飛んできてカルタに迫ろうとしたレギンレイズ及びほかのレギンレイズにも命中をした。カルタは上を見るとフリーダムとすずかがハイマツトフルバーストを使って助けたのだ。

「大丈夫ですか?」

「ええ助かったわすずかちゃん。」

「いつけえええええええ!!」

カオスガンダムになったアリシアは機動ポットを飛ばしてレギンレイズたちを次々に撃破していく。

「お、おのれええええええ!!こうなったらダインスレイヴ隊攻撃用意せよ!!」

「な!!ダインスレイヴだ!!」

「よせこんなどこで使えば大変なことになるんだぞ!!」

「黙れ黙れ黙れ!!お前や鉄華団たちを倒せばいいのだ!!」

「なによそのダインスレイヴって!!」

「我々の世界で言う強力で禁忌の兵器だ。・・・詰まるところ、針金の様に細い専用弾頭のKEP弾を超高速で発射する電磁投射砲だ。・・・その威力は船に穴が空くほどだ。それがこんなところで使われたら・・・街が大変なことになる。」

「させません!!」

「ストライク!!」

アジーがビルドストライクを追いかけていく。ビルドストライクが見たものはダインスレイヴを構えているレギンレイズの姿を見た。

「ストライク!!」

「アジーさんなんで来たのですか!!」

「お前を一人で戦わせるわけにはいかない!!」

「ですがそれであなたの命が失ったら!!」

「目の前で死なれるのだけはごめんだ・・・だから私の命をお前に預けてほしい!!」

「アジーさん・・・」

「ストライク・・・」

二人は戦いの中でなのに近づいてキスをした。すると二人が光りだしてダインスレイヴ部隊は吹き飛ばされてしまう。

その光の現象は全員が見ていた。

「なんだ!?!」

「ストライクとアジーさんがいる方角だ!!」

全員が見ているとそこには一機のガンダムが立っていた。いやガンダムではなく……アジールがストライクを纏っているかのよう立っていた。

「アジール？」

「『今の私はアジールとストライクが一つになった姿、そしてこの姿はただのビルドストライクじゃない。スタービルドストライクだ!!』」

「何だあれは!? ダインスレイヴ隊、撃つ用意を!!」

「『させない!! 皆私にビームを放ってほしい!!』」

「なに!?!」

イージス達は驚いているがスタービルドストライクはいいから早くと言ったのでイージスはスキュラを放ったりした。スタービルドストライクは左手に装備されている盾を構えたすると吸収されて行きスタービルドストライクの力へと変換させる。

「『デイスチャージシステム始動!! いっけええええええええええ!!』」

スタービルドストライクの周りにエネルギーの刃が発生をしてレギンレイズたちを次々に命中させて撃破する。

何機かはダインスレイヴを発射させようとしたがスタービルドストライクはゲートを発生させてその中へと突撃をしてスピードを上げて粒子の翼が発生をして右手にシュベルトベル改を出してそのままレギンレイズたちを切り裂いていく。

「ば、馬鹿な!! おのれええええええええええ!!」

「イオクさまここは撤退を!!」

「くそ全機撤退だ!!」

イオクは撤退命令を出してスタービルドストライクもこれ以上は追いかけていいかと判断をして彼らのところへと戻ると光だしてビルドストライクと漏影に戻った。

「い、今の現象は一体……」

「わからない、だがわかったのはストライクと一つになった感じがした。」

「……」

「マクギリス。」

「まさか彼までこの世界へとやってくるとはな……しかもダイ
ンスレイヴを持つてきているということは嫌な予感がする。」

「ああ俺もだ。」

「なのはちゃん大丈夫ですか？」

「ジュリエッタお姉ちゃん大丈夫だよ。」

「そうですね良かったです。」

フリーダムたちもなんとか退かせることに成功をしたのでほっと
していた。オルガ達も引き締まっていこうと決意をする。

襲撃されたインパルス。

イオク・クジャンのMS部隊との戦いでビルドストライクとアジールが融合をするかのように新たな姿スタービルドストライクへと変身をして彼らのMS部隊を撤退させた。マクギリス達も彼女が変化をしたのを見て驚いていた。

「驚いたな……」

「ああ俺たちのように纏うじゃなく、あの女の体にストライクが合体をした姿をしていたが……さらに変身をしゃがった。」

「すごいですね……」

月村家へと戻った彼らはなぜ奴がこの世界にいるのかと考えていたが、オルガ達も死んでこの世界へと来たんだから当たり前かと考えていたが……

「奴がダインスレイヴをもっていることだ。あのレールガンは強力な兵器だ。」

「厄介なことだな……」

「けどアジールさんとストライクのあの合体はなんですか？」

「さすがストライクとアジールを見るが二人はうーんと両手を組んでいた。」

「すまない、私たちもあの時は必死にだったからな……」

「その覚えていません。自分もアジールさんも……」

「本当なのアジール？」

「ああ……確かに一つになった感覚は体に残っているが……なんでもあの姿になったのかわからないんだ。」

「じゃあとりあえず合体はできるってことかな？」

「簡単にいければですけどね……」

ストライクたちは考えるのは後にしてなのはたちは家へと帰っていく。

一方で場所が変わりジェイル研究所に戻ろうとしていたインパルスは現在交戦をしていた。

「くそ!!」

彼は攻防楯を展開をして放たれたビームをガードをしていた。ビームライフルを放ち攻撃をするが後ろの方からビームが飛んできた。

「ちい!!」

フォースシルエットを装着をして空中に避難をして敵がどこにいるのか探している。突然としてビームが飛んできてインパルスは盾を出してガードをしたが色んな方角からビームが飛んできて苦戦をしていた。

「これはレジェンドみたいな攻撃だな……まさかレジェンドが!?くそ!!」

インパルスは考えていたがビームが色んな方角から放たれて回避に専念をする。するとがしがしと音が聞こえてきたのでインパルスはライフルを放ち回避されたが姿を見つけた。

「あの機体はまさか!!プロヴィデンスガンダム!」

インパルスはそのデータが入っていたのですぐに機体名がわかった。CE71に作られた機体でフリーダム及びジャステイスと同じ核動力炉で動いており特徴としてはドラグーンユニットを装備をしている機体だとわかつている。

その特徴はレジェンドガンダムに継がれた。

「なるほど多方向からのビームを考えたらプロヴィデンスガンダムのドラグーン攻撃なら可能だな……貴様は何が目的だ!!」

「私の目的?簡単だよ……私は世界を破滅させるためによりみが見えたのだよ!!」

「蘇った?どういうことだ!!」

「私はラウ・ル・クルーゼだ!!」

「ラウ・ル・クルーゼだと!!」

インパルスは驚いているとプロヴィデンスガンダムはドラグーンユニットを起動させてインパルスに攻撃をしてきた。

「ちい!!」

ドラグーンから放たれるビームにインパルスは苦勞をしていた。

数はレジェンドよりも多くて9問あるビームがインパルスに襲い掛かる。

「ぐああああああああ!!」

右手と左足に命中をしてインパルスは墜落をしよう。プロヴィデンスガンダムはとどめを刺すために左手の攻防楯からビームサーベルを発生させてインパルスに襲い掛かる。

「まずい!!」

「終わりだ!!」

振るわれたビームサーベルは一機の機体が間に入り受け止めた。

「ダブルオー!？」

「無事かインパルス。でい!!」

「ちい!!」

ダブルオーはダブルオーサンライザー形態へとなっておりGNバスターソードⅢではじかせた。プロヴィデンスガンダムは攻撃をしようとしたが狙撃されて回避をした。

「まだガンダムがいるというのか……」

セラヴィー、アリオス。ケルデイルが駆けつけてインパルスは声をかける。

「気を付ける奴にはドラグーンユニットと呼ばれるビーム兵器を持っている!!」

「ファングみたいなものか!!」

彼らは警戒をしていると砲撃が放たれて四機は回避をした。

「赤いビーム!？」

「疑似太陽炉だ!!」

「行けよファング!!」

「何!？」

ファングはインパルスの残っていた左手と右足をビームで貫いて爆発させる。

「ぐああああああああ!!」

すると赤い機体がプロヴィデンスガンダムの隣に立つ。

「大丈夫かい旦那。」

「君か……助かったよ。」

「貴様はアルケーガンダム!？」

「ちい!!」

「ガンダムがいつぱいじゃねーか!!この俺、アラー・アル・サーシエスが相手をしてやるぜ!!」

「あいつかよ!!」

「だがここは撤退をする。インパルスがまずい!!」

「了解した。」

「ハイパーバーストモード!!」

セラヴィーが放ったハイパーバーストモードを地面に放ち爆発。煙幕を利用して彼らは撤退をした。

「くそ逃がしたか!!」

「まあいいさ。我々も撤退をしよう。」

二機は撤退をしてダブルオーたちは帰還をした。

「インパルス君!!」

「無事だ。よいしょつと。」

大破したチェストファイヤー及びレッグファイヤーを外してコアスプレンドーに変形をする。

そして新たなチェストファイヤーとレッグファイヤーと合体をしてインパルスに戻った。

「便利だねそれ……」

「けどパーツがそろっていないとできないんだよなこれ……それにしてもプロヴィデンスガンダムがいるとはな……」

「俺たちからしたらアラー・アル・サーシエスがいること事態驚いている。奴は……」

「俺が倒したはずなのに……」

ケルデイルが拳を握りしめた、最終決戦で彼が大破させてパイロットもロックオンが殺したから。まさかこの世界にいるとは思ってないなかった。

「いずれにしても娘たちの改良を急がした方がいいね。」

ジェイルは嫌な予感をしてドゥーエを帰還させて改良処置を行っ

ていた。その間はインパルスたちが動いていたのでインパルスは戻ってきた。

「あ、おかえりインパルス。」

「遅かったな。」

「セイバーにカオス達か……」

さらに新たな住人としてセイバーやカオス、アビス、ガイアの四人も加わったので彼らの兵力は大きくなっていった。

「……」

「セイバー?」

「俺に搭乗をしていたアスランの記憶では奴は大罪人というのが記憶されている。」

「『大罪人?』」

「そうだ、まあお前たちが知らないで当然だ。あいつはジェネシスを使い地球を破壊しようとしたのも当然だからな……父パトリック・ザラに言ったのもやつだからな……」

「けどどうして人類を滅ぼそうとしたの?」

アビスが聞いてきたのでセイバーは答える。

「奴はクローンだからさ。アル・タ・フラガの出来損ないと……だからこそ恨み妬み憎んできたんだろうな……」

セイバーはそういうジェイルも無言でいた。彼自身もかつてPR OJECTFというクローン技術の基礎を作っていたからだ。

「……私は……」

「ジェイルどうした?」

「ううんなんてもないよインパルス君。」

「そうか。」

ジェイルが暗い顔をしていたのでインパルスは心配をしたが……彼は何かを隠しているなど判断をしているがのちに彼は話してくれるのを待つことにした。

(ジェイル、あんたがいつか俺達に隠していることを話してくれるのを待つよ。その間に悩んで考えてくれ。それが俺があんたと過ごしてきた答えだ。)

さて場所が変わりサーペントテールの部屋。

「うーうーん。」

ティータは悩んでいた、このサーペントテールの任務について知っているが色々大変で彼自身もフォーメーションを覚えたりと訓練をしたりと大変であるが装備なども色々とチェンジされており格闘戦なども覚えるなど大変である。

「ふう．．．．．」

「苦労をしているかティータ。」

「ブルーフレーム隊長!!いいえそんなことは!!」

「はっはっはっは、フォーメーションを覚えたり格闘戦をしたりと普段ならしないことを一気にしているからな、だがいつか死んでしまうかもしれないからな．．．．．そのためにも死なないように技術を学ばしている。俺たちはお前が死ぬっただけは嫌だからな．．．」

「隊長．．．．．」

ティータは妹であるティアナを残して死ぬわけにはいかない、そのため疲れることもあるがもちろん休みだつてあるので大変なこともあるが充実をしている。

「さて仕事に行くとするか。」

「了解です。」

ティータは愛用のデバイスの銃を持ち出動をするのであった。

ストライクたちメンテナンスへ

海鳴市月村家のある部屋でビルドストライクを始め全員が体をロックされていた。今日はメンテナンスをする日でありビルドストライクたちは一日機能停止の状態になる。

今回メンテナンスに入るのはビルドストライク、イージス、フリーダム、ジャステイス、ザクウォーリア、M1アストレイ、ウインダムである。

ウイングゼロたちはメンテナンスをしなくても大丈夫のため起動をしている。

「では忍さまお願いしますね？」

「わかったわ。あなたたちのメンテナンスを始めろわね？」

忍はストライクたちの電源を切り彼らの両目が消灯をした。忍はさて始めますかというノエルと共に7機の機体のメンテナンスを始めめる。

一方三日月達は翠屋の方へと来ていた。家の方はウイングゼロたちがいるので翠屋でお茶をしていた。

「お前らも大変だな？あそこでの仕事大変じゃねーか？」

「まあ大変なことがあるが……前の時に比べたらましの方だ。」

「君達からしたらそうかも知れないな……」

「マクギリスお代わりもらえるかしら？」

「ちよつと待ってくれ、ガエリオ入れてやってくれ。」

「はいよ。」

ガエリオはコーヒーを入れてカルタのところへと持って行く。

「しかしストライクたちがメンテナンスに入るなんてね。」

「ラフタ、彼らは私たちと違い機械だからね。MSと同じなんだからメンテナンスは必要だぞ？」

「まあそうだけどさ。ストライクたちがいない日って考えたことないなってね。」

「確かにな……いつも私たちと一緒に月村家で仕事をしていたからな……」

アジーたちはコーヒを飲み待つことにした。さて場所が変わりここはミッドチルダ。カラミティたちはギンガとスバルを連れて研究所へとやってきていた。今日は彼女達の調整の日であるため連れてきた。

三機は彼女達が終わるまで座って待つことにした。

「あーあ、それにしても暇だなー。ー。ー。」

「うるせーよレイダー、黙って待つてればいいだろうが。」

「はいはいカラミティはすぐに文句を言うんだから。」

「お前だろうが。．．．．．」

「二人ともうるさいよ、音楽が聞こえない。」

フォビドウンはイヤホンを外して二人に文句を言う。

「なんだと!!」

三機は喧嘩になりかけたが彼らにきちんと頭を殴る人物がいた。クイントがバリアージャケットを纏ってリボルバーナックルで彼らの頭を殴ったのだ。

「二いつてええええええええええええええええ!!」

「全くあんたたちは喧嘩をするじゃないわよ!!」

「二二、二二めんなさい。．．．．．」

三機はクイントに謝り、彼女達の調整が終わったので出てきて帰ろうとしたときギンガが忘れ物に気づいた。

「お母さん忘れ物をしちやったとっってくるね?」

「わかったわ。」

ギンガは走っていき忘れ物を取りに行く。クイントたちはギンガが帰ってくるまで待つことにしたが数十分経ってもギンガが帰ってこないののでどうしたんだろうとなった。

「俺が様子を見てくるぜ?」

カラミティは彼女が向かう場所に走っていく。武器などはいつでも出せるため研究所の中へ入っていきギンガを探す。

「ったくあいつはどこに。．．．．．ん?」

カラミティは耳をすませた。．．．．．泣いている声が聞こえてきてその場所へとやってきたが。．．．．．その場所は女子トイレだっ

た。

「……あいつこんなところで泣いているのかよ……しよ
うがねえまってやるか。」

カラミティはギンガが泣いている理由がわからないが落ち着くま
で待つことにした、だがそれはすぐにわかった。

「全く……人の姿をしても化け物ね……」

「そのとおりだ。いくら人の姿をしても化け物に変わりない。」

「……」

カラミティはまさかと思いながら黙って聞いていた。彼らは先ほ
どギンガとスバルをメンテナンスをしていた人たちの声だったから
だ。カラミティは我慢をしていたが彼らの言葉などがどんどんエ
スカレートをしていき彼はフォビドゥンとレイダーに連絡をした。

『はあ!? そんなことを言っていたのかよ!!』

『まじでありえないな……』

「俺はその近くで聞いているからな……お前らはクイントのお
ばさんにこのことを伝えてくれ、おっとギンガがそろそろ出てくるか
ら切るわ。」

カラミティは通信を切りギンガがトイレから出てきた。

「カラミ……」

彼は無言で彼女の手を握り引つ張る、ギンガもカラミティが突然こ
んなことをするなんて思ってもいなかったので驚いている。

「えっとカラミティ?」

「……何も言うなギンガ、お前が辛いつてのはわかる。」

「え?」

「お前らの悪口を言うやつは俺達が許さない……俺達の大事な
妹にな……」

「か……カラミティ……」

「後で思いつき泣けいいな? 俺達じゃなくてクイントおばさんに
な。あいつらならすぐに首になって新しい奴になる。お前らは化け
もんじゃねーよ……化け物は俺達みたいなのが言うんだよ。」
「……」

カラミティの言葉にギンガは無言で一緒に歩いていった。そして研究所の玄関についてクイントたちが走ってきた。

「……………ギンガ、大丈夫じゃないわね……………」

「カラミティもありがとうね。」

「別に俺達にとつて大事な妹分が悲しむ姿は見たくねえからよ……………」

「ふふそうね。」

クイントは笑いながらさーて帰るわよといい6人で家に帰る。家に戻ってからカラミティはシュラークを装備をしていた。

「なんか久々に武器を装着をした感じだな……………まあ攻撃をするわけじゃないけどよ戦わないと何か落ち着かねえんだよな……………」

そのまま装備を外して部屋に戻ろうとしたときにギンガが彼の手を引っ張り自分の部屋にいれた。

「ぎ……………」

カラミティはギンガに文句を言おうとしたが彼女は彼に抱き付いた。彼は無言で頭を撫でていた。

「ったくこれは俺がやる仕事じゃねーっての……………」

そういいながらもギンガの頭を撫でているため案外言い兄貴じゃないかな?と思ううぷ主であった。

「おら!!」

ぎゃああああああああああああああああああああああ!!

倒れている人物。懐かしい再会

「ふあああああああ．．．．．」

ビルドストライクたちの両目が点灯をする。彼らのメンテナンスが丁度終わり今起動をしたのだ。

「どうかしらストライクたち体の調子は？」

彼らは握ったり首を動かしたりしていた。

「異常ありません忍さま。」

「ああこれはすごいな．．．．．」

「体の調子がいつもよりもいい。」

「ああさすが忍さんだ。」

全員がメンテナンスがいいと言ったので忍は喜んでいた。ストライクたちが起動した頃外ではラフタと昭弘が模擬戦をしていた。オルガ達もその様子を見ていた。

「それにしてもお前らの機体って不思議だよな？」

「何がだ？」

「ビーム兵器があるってことだよ。」

「俺たちからしたらそちらの世界の機体にはラミネートアーマーって奴が装備されているんだろ？ビーム兵器があまり効かなさそうだからな。」

「へビィアームズの武器や僕の武器などなら対応できますね？」

「だが逆に言えばストライクたちとMSと戦うのは苦戦をしそうだな．．．．．」

「ストライクたちはPS装甲って奴で実弾が効きませんからね。」

ウイングゼロたちが話しているとストライクたちが外に出てきた。

「ストライク．．．．．そうか今日が起動だったな。」

「ええメンテナンスがやつと終わりましたので．．．．．さてとりあえず買い物に行きますかな？」

「なら私も行くこう暇だからな。」

「あ、僕も行くよ。」

フリーダムも一緒にストライクたちは月村家を出て外を歩いてい

るとザファイラにまたがっているヴィータが現れた。

「おつすストライクたち。」

「ヴィータ殿じゃないですか、ザファイラにまたがってどこへ？」

「ああおぼあちゃんたちとゲートボールをするんだよ。」

「なるほどな。」

「じゃあな。」

そういつてヴィータは公園の方へと歩いていきストライクたちは歩いていると前からなのはたちが走ってきた。

「ストライクさーん。」

「これはこれはなのは様にフェイト様、アリシア様、アリサ様にすずか様。」

「これからどこに行くんだ？」

「はやてちゃんのところへ行くんです。」

「そういえばはやてちゃんは回復しているとはいえ迎えがいるからね。」

「ストライクたちは？」

「これから買い物って……なんですかあれ？」

「「「「え？」」」」」

上を見ると何かが降ってくるのが見えた、ストライクたちは迎撃をしようと考えたが反応がMS反応を示していた。

「MS!？」

そのまま森の方へと落下をしていくのでストライクたちはそのまま走っていき森の方へと向かう。

「ここってユーノ君がジュエルシードを封印をした場所に似ているの……」

「気を付けてください皆さま。足元が崩れておりますので……」

ストライクたちが先頭に歩いてなのはたちは念のためにバリアージャケットを纏っていた。アジーは百鍊で移動をしている。

「……あそこですね。」

フリーダムたちはビームライフルを構えて落ちた場所に向かって歩いていく。彼らは覗くと驚いていた。

「ストライク？」

アジーたちはストライクたちが驚いているのでいったい何があったのかと覗いていると一人の男性が倒れていた。服装は茶色の服を着ており二人は動揺を隠れていなかった。

「な、なんで……………」

「どうして……………なんで彼がここに。」

「ストライク、フリーダム……………知っているのか？」

「アジーさん前に話をしましたね。僕に搭乗をしていた人の話を……………彼は話をしていたパイロット。」

「まさか!!」

「キラ・ヤマト……………」

ストライクとフリーダムはかつて自分に搭乗をしていた人物を急いで月村家へと運ぶことにした。なのはたちもストライクたちと共についていき月村家へ行くとイージス達が慌てていた。

「どうしたのかイージス達って背中に背負っている人物って……………」

「ああ俺やジャステイスに搭乗をしていた人物、アスラン・ザラだ。」

「そちらもですか……………」

ビルドストライクの背中にはキラを背負っていた、彼らはとりあえず部屋に二人を寝かせてからオルガ達たちも一緒に話をする。

「じゃああの二人はお前たちに乗っていたやつらか？」

「ええ名前はキラ・ヤマト……………ですが容姿的に俺が知っている年齢じゃないですね……………」

「18歳だからね、僕はあの時のキラが搭乗をしていたからわかるよ。」

「そうか……………ならアスランも18歳になっていたってことか。」

フリーダムとジャステイスが見ている中、ビルドストライクはなぜ二人がこの世界へやってきたのか両手を組んでいた。

「ストライク何を考えているの？」

「ああすずか様、いえなぜこの二人がこの世界へやってきたのかなと思ひまして……………」

「あの人たちがストライクに搭乗をしていた人なの？」

「ええへリオポリスの戦いで俺に乗りこんでOSを書き換えたんです。」

「OS?」

「私たちには起動プログラムなどが色々ありましてそれをまとめたのがOSなんです。ですが当時自分のOSは不完全でして動かせるには不十分なんです。ですがキラはマリユールという女性から自分がOSを書き換えて今の自分がいるんです。ですが……。」

「ですが?」

「それはキラじゃないと乗れなくなってしまうんです。言ってしまうえば兵士じゃない彼が戦わないといけないんです。」

「「「あ……。」」」

「なるほどな……俺たちとは違うかんじだな。」

「そうですねオルガさん。キラ自身は望んで戦ってきたわけじゃないです。そこにいた友達を守るために僕に乗りこんでいたんです。」

ストライクたちは話をしていてとうとうーンと声が聞こえてきた。ストライクとフリーダムは彼の近くに行くと目を覚ます。

「こ、ここは?」

「目を覚ましたねキラ。」

「え?」

彼は起き上がり辺りを見るとビルドストライクとフリーダムの姿を見ていた。

「え……フリーダム?それに……スト……ライク?」

「ええ久しぶりですねキラ・ヤマト。」

「どうしてそれにここは?」

「ここは海鳴市という場所です。CEの世界とはまた別の世界なんです。」

「え!?!アスランも!!」

隣に寝ているアスランを見てキラは驚いている。なぜ自分たちがこの世界に来たのか?

「あのキラさんでいいですか?」

「えつとはい。」

「とりあえずは本人たちが落ち着くまでそつとしましょう。キラも落ち着いたら話をしましょう?」

「はい……………」

全員が部屋を出てラフタたちはストライクに話をしていった。

「……………なあフリーダム。」

「何?」

「前に見たときよりも何か知らないがキラが変な感じなのは気のせい
か?」

「……………」

「フリーダム?」

ビルドストライクはキラと話した時に違和感を感じていたのでフ
リーダムに聞いてきた。

「ストライクはローエンダグリンで爆散をしたからわからないけ
ど……………ヤキン・ドゥーエの戦いの後彼の心は限界を迎えたん
だ。」

「え?」

「……………フレイって子を覚えているか?」

「あーあいつか……………それがどうしたんだ?」

「殺されたんだよ。俺とキラの目の前でな。」

「な!!誰に!!」

「プロヴィデンスガンダム。」

「あいつか……………」

プロヴィデンスガンダムとはビルドストライクがストライクの時
に戦って中破させられて負けた機体だ。その機体にフリーダムは
勝ったんだろうなとビルドストライクは思ったがキラはそのあとは
心が壊れてしまったのを聞いてストライクはため息をついていた。

「……………キラ……………そんなことが……………」

「ああそれではらくはオーブで療養をしていたんだ。」

「だがお前は再び戦いに出たか……………」

とりあえずストライクたちは落ち着くまで仕事をすることにした。

ストライク side

まさかキラがやってくるなんて思ってもいなかった．．．．．そして話した時に違和感を感じていたのはあの二年の間に療養をしていたなんて知らなかった。

「ストライク？」

「アジーさん．．．．．」

アジーさんがこちらに来た。彼女は黙って俺の隣に立っていた。

「なあストライク。」

「なんですか？」

「お前にとってキラはどういう関係だ？」

「．．．．．キラがいなかったら自分はあるまで戦うことができなかった。彼と共に戦ったのは俺にとってもいい思い出です。ですが俺は機械だから彼と話すことはできなかった。彼が辛い時．．．．．俺は何もできなかった。彼に操作してもらわないと何もできない自分がそこにいました．．．．．」

「ストライク．．．．．」

「そしてオーブでの戦いの後は修復されてムウさんが搭乗をして戦って最後はアークエンジェルを守り爆散。それが今の自分です。そしてこの世界にやってきてすずか様に拾われてこの月村家でメイドとして働いている。それが今の自分です。」

「そうか．．．．．」

「アジーさんはどのような仕事を？」

「私は．．．．．名瀬達が死んだ後、組織の後を継いで仕事を引き受けたりしていたな．．．．．あいつらがいなくなってしまう後はつらかったがある日私は眠くなってしまう寝ていて目を覚ましたらアークエンジェルの倉庫にいたんだ。」

「なるほど．．．．．」

アジーさんは死んでもいなかったのにこの世界へやってきたのはわからないが、キラやアスランもアジーさんと同じような感じでしょうか？」

「なんだあの光は？」

「え？」

アジーさんが言うとなかの砲撃が見えた。こっちに向かっている!?

「ちい!!」

俺は盾を出してスペキュラムストライカーを装着をして空を飛び放たれた砲撃をガードをする。

「ぐううううううううう!!」

なんて威力をしている。ローエン格林よりも低いが……威力的にイージスのスキュラ以上だ!!なんとかその攻撃を上を流すことではじくことに成功をした。

「ストライク!!」

アジーさんが百鍊を纏ってこちらにやってきた。僕は見たのはMAのような機体がこちらに砲撃をしてきたと思ってもいいでしょう。ビームサーベルを抜いて僕は接近をして振り下ろす。

「何!!」

相手は素早く動いて回避をした。ミサイルポットからミサイルを発射させて相手に攻撃をするが相手はビームキャノンでこちらが放ったミサイルを撃退した。

「まじかよ……」

「ストライク!!」

イージス達が駆けつけてくれた。敵のMAはじーつと見ている。

「お前は何者だ。」

「ほう……異世界のガンダムがこんなにも居るなんて思ってもいなかったよ。だがこの僕、リボーンズキャノンに勝てるかな?」

なのはたちもバリアーシジャケットを纏い登場をする。

「なによあれ!!」

「わかりません。突然として襲い掛かってきたんです。」

「さあ始めようか?」

リボーンズキャノン現る。

月村家に突然として現れた謎のMSリボーンズキャノン、ビルドストライクはその砲撃をふさいでアジータたちも外へ出る。

「あれはいつたい……」

「なのはさま、皆さまお気を付けください。あの砲撃はアリサさまたちは危険すぎます。」

「一体何なのよあんだ!!」

「僕の名前はリボーンズキャノン……さあみせてもらおうぞガンダムを!!」

リボーンズキャノンからGNキャノンが放たれる。フリーダムとジャステイスは家を守るために砲撃をガードをするが二人は後ろの方へと吹き飛ばされる。

「なんて威力をしている!!」

「アクセルシューター!」

「プラズマランサー!」

なのはとフェイトはアクセルシューターとプラズマランサーを放つがリボーンズキャノンは回避をして二人に砲撃を放つ。

「ぐううううう!!」

ビルドストライクとイージスがガードをしているが吹き飛ばされる。リボーンズキャノンは四人にとどめを刺そうとしたがそこにウイングゼロカスタムがビームサーベルを抜いてリボーンズキャノンに切りかかる。

「は!!」

「甘い!!」

すると左側が手となり背部のビームサーベルを抜いてウイングゼロのビームサーベルを受け止める。

「何?!」

「おいおい」

リボーンズキャノンは変形を始めていき最後にガンダム顔が出てきて変形が完了をする。

「ガン・ダム……」

「はっはっはっは!!この僕リボーンズガンダムがすべてを征服をする!!」

「ふーん……だったら俺達の敵だってことだね?」

バルバトスを纏うミカは大型メイスを構えて突撃をする。リボーンズガンダムはメイスを回避するとミサイルが放たれる。

「ちい!!」

彼は右手のGNバスターライフルと大型GNビームサーベルを使ってミサイルをかわしたり攻撃をして撃破していく。

「避けられたか……」

ヘビーアームズカスタムが放ったミサイルを撃破されて地上からウインダムたちがビームライフルを構えてリボーンズガンダムに攻撃をする。

ストライクとイージスがリボーンズガンダムの横に飛びビームサーベルを振るい彼は大型GNビームサーベルを抜いて二人が放つ攻撃をふさいでいた。

「甘いよ、そんなんで僕がやられるとでも?」

「ああそうは思ってもいないさ!!」

「今ですなのはさまたち!!」

「何!?!」

上空でなのはとフェイト、アリサとすずかとアリシアが兵器にエネルギーをためていた。

「いくよ!!スターライトブレイカー!!」

「サンダースマッシュャー!!」

「ハイマツトフルバースト!!」

「一斉射撃だよ!!」

五人が放った砲撃をストライクとイージスはスラストで回避をしてリボーンズガンダムはそれを受けて爆発をする。全員が煙がはれるのを待つとリボーンズガンダムが装甲などがバチバチと火花を出していた。

「やるじゃないか……まさかここまで威力があるとはね……」

驚いたよ。」

「嘘でしょ、あたしたちの攻撃を受けても……」

「いいえアリサさま達の攻撃は効いております。」

「そのとおりだよ。今日のところはここまでするよ。」

「逃がすでも思っているのか？」

「悪いけど僕はここでやられるわけにはいかないんだよ。では……トランザム」

リボーンズガンダムの体が赤くなり姿が消えた。キャプテンガンダムたちが到着をした。

「すまない爆熱丸が爆睡をしていて起こすのに時間がかかった。」

「俺が相手だつて敵は？」

「もう撤退をしましたよ。」

「なぬうううううううううう!!」

「当たり前だ、お前を起こすのにどれだけ時間がかかったと思ってる。」

「す、すまん」

ビルドストライクは両手を組んで考えていた、今回襲ってきたあの機体リボーンズガンダムは自分たちが知らない世界のガンダムだということ……ならばいいあの機体はこの世界から来たんだらうかと考える。

「ストライクどうしたの？」

「すずかさま、いいえあのリボーンズガンダムはどこから来たのかと考えておりました、俺たちの世界にあんな機体は存在をしております。オルガさん達やゼロ達は？」

「俺達の世界にあんなガンダムはいなかったな。」

「俺達もだ。あんな機体なんて俺たちの方も見たことがない。」

「つてことは俺達の知らないガンダムがまだいるってことですね……」

ストライクは両手を組んでリボーンズガンダムやこの間襲ってきたイオク・クジャンのこともあり戦う相手が多いなと思えるのであった。

さて場所が変わりミッドチルダ。

からんからん

「おうまっていたぜ?」

「待たせたなレッドフレーム」

「そこまでまっついていねーよ、ほら俺が奢るからよ。」

「感謝をする。」

ブルーフレームは隣の席に座り彼らはお酒を飲む。

「どうだ新生サーペントテールは?」

「ああディータが入ってくれたおかげで射撃対応ができるのが増えたから楽になったな。」

「そうか……それ今も使ってくれているんだな?」

「ああタクティカルアームズはお前がくれたものだからな。」

「正確に言えばロウだけだな。」

お互いにお酒を飲みながらレッドフレームは話を続ける。

「実はよ地球の方にもガンダムがいることがわかった。」

「ガンダムが?」

「ああ名前はストライクガンダム、お前も聞いたことがあるだろ?」

「ああ聞いたことがある。ヘリオポリスに俺たち以外の機体が運ばれるのをそれがストライクを始めのG兵器。」

「ああ俺も最初は驚いたよ。なにせクロノ坊ちゃんのところへ行くとそのガンダムたちがいたからよ。」

「そうか……」

二人は飲みながらお互いの様子を話をしていきブルーフレームは渋い顔をしていた。

「どうしたブルー?」

「……最近謎のMSが暴れている情報を得ている。俺達もそのMSを相手に戦ったことがある。ジンを始めシグーやゲイツもある……だがその中には見たことがないMSも混ざっていた。」

ブルーフレームはレッドフレームにその時の映像を見せていた。レッドフレームは戦いを見ながらジンやシグーはわかるが、その中には自分自身も見たことがない機体と戦っている姿を見る。

「確かにこのMSは俺も見たことがない。つてことは俺たち以外にもこの世界へ来たやつがいるってことか？」

「わからないがたぶんそうだろう……」

「まさか俺達のようなMSがこの世界へ来たことによつて世界のバランスが崩れ始めてきたのか？」

「……」

レッドフレームの言葉にブルーフレームは黙るしかできなかった。一方でナカジマ家

「……」

カラミティたちは空を見ていた。

「空つてこんなにきれいだっただんだな？」

「そうだね。」

「ああ……俺達はどれだけの奴ら殺してきたか覚えているか？」
「覚えているわけじゃないじゃん。たくさん撃ってきたし撃破してきたしね？」

「そうだな。」

三機はミッドチルダの空を見ているとMS反応を確認ができた。レイダーは変形をしてカラミティはその上に乗リフォビドゥンは背部を纏い空を飛ぶ。

「カラミティ、レイダー、フォビドゥン？」

ギンガが見ているのを知らずに彼女は彼らを追いかけるために外へと行く。カラミティたちは武装を装備をして敵が来るのを見た。

「ねえあれつて。」

「ザフトのMSじゃねー？」

「だな。」

デインはカラミティたちに気づくと攻撃を開始をした。三機は回避をしてツォーンやスキュラを放ちデインを撃破する。

「遅いよ」

フォビドゥンは持っている鎌を振るいデインの胴体を切り裂く。レイダーはカラミティを地上の方へと降ろして変形をして右手に装備されている二連砲を放ちデインを撃破する。

「ちいなんだよこいつら……ん？」

カラミティは二機を援護をするためにシユラークやトーテスブルックを放っているが生命反応がこちらに来ているのに気づいた。

それは空にいた二機も気づいた。

「カラミティ!!」

「ギンガがこの近くに來ている!!」

「なんだと!!あのバカ!!俺たちについてきたのかよ!!」

カラミティはギンガを守るために向かっていく、デインたちもギンガの存在に気づいたのかマシンガンを構えて地上に発砲をする。

「きゃああああああああ!!」

「この野郎!!俺達の妹分に何をしやがるんだゴラああああああああ!!」

カラミティが放ったスキュラとシユラークの砲撃がデイン達に命中をして爆発をする。

「馬鹿野郎!!なんでついでにきた!!」

「だ、だってどこかに行つてしまふじゃないかって思つてしまつて……私……私……私……私……」

「つたくおまえらを置いてどこかにいかねーよ」

カラミティは辺りを見てジンやシグー達が囲んでいるのを見て姿を変える。

「ならギンガ、動くなよ?」

ソードカラミティへとなった彼は背中中のシユベルトベゲールを抜いてフォビドウン、ギンガが着地をする。

「フォビドウン、ギンガを守れよ?」

「わかつてるよ。」

カラミティはダツシユをしてジン一体を縦に真つ二つに切り裂いて横にいたジンを横一閃で切り裂いて爆発させる。フォビドウンは背部を展開をして彼らの攻撃をギンガに通さないようにガードをする。

「そりゃー!!抹殺っ!!」

レイダーは左手の破碎球ミヨルニルを放ち、デインを撃破する。そ

して数十分後敵を殲滅をした彼らはギンガのところへと集まる。

「もう君は心配かけさせるね?」

「ご、ごめんなさい……」

「まあ無事だからいいじゃん。」

「つたく気を付けろよ?」

「……カラムティ、レイダー、フォビドゥン……お願いがあるの」

「なんだ?」

ギンガは今度陸士学校へ通うことになったが、三機には使い魔扱いとしてついてきてほしいということなのだ。

「それって俺達も学校へ行けてことか?」

「そういうことじゃない?」

「えーまじかよ。」

三機はまさか使い魔扱いで学校に行くことになるとは思ってもしなかった。三機は顔を見てからはあとため息をついてギンガの方を向く。

「しょうがねーな。」

「妹分の頼みだからね?」

「つたくこれがクイントおばさんの命令じゃなかったら嬉しいけどな?」

「ふえ?なんでお母さんの名前が出てくるの?」

「え?」

「これは私が個人でお願いをしているの。」

「まじかよ」

こうして三機のガンダムたちはギンガの使い魔という扱いで学校に入るのであった。

インパルスの考え

インパルス side

ここはジェイルの第二研究所にあるラボの中、俺は自分が使っているビームライフルを磨いていた。普段だったらジェイルたちに任せられているがやはり自分が使う武器なので綺麗にするのは悪く無いな。

「……………プロヴィデンスガンダム……………」

その機体のデータは俺の中にある。フリーダムガンダム、ジャスティスガンダムと同様に作られた機体でラウル・クルーゼが搭乗をしていたMSだ。奴の特徴はフリーダムやジャスティスとは違いドラグーンシステムと呼ばれるシステムによってその攻撃力が発揮される。

「どうしたのですかお兄様？」

「セツテか……………」

俺の傍に来たのは最近起動をしたナンバーズ7セツテだ。今現在はトーレが教えているため俺が関わることは少なくなっていたが基本的な動作などは俺が教えたりしているのでこうやって話をするところがある。

「何でもないさ……………お前が気にすることはないよ。」

「そうですか……………」

すまんなセツテ、こればかりはお前たちをあいっと戦わせるわけにはいかないからな……………何せ奴は……………」

「ナンバーズたちを殺してしまうからな……………」

セツテがいなくなったのを見てから俺は言葉を言いビームライフルを磨くことにした。

インパルス side 終了

一方でギンガ・ナカジマは陸士学校に通うこととなり、カラミティたちは普段の大きさよりも小さくなっており使い魔として共にやってきた。

「ここが学校か？」

「なんか狭いね？」

「だな。」

「あははははごめんね三人とも。」

「気にするなよ。さて……………ギンガ、改めて俺達を使い魔として扱うことになるが……………」

「お前にプレゼントがある。」

「え？」

「まあまあ手を出せって。」

「手を？」

ギンガは手を出すとカラミティたちはお互いを見てからギンガの手に自分たちの手を乗せると光出す。

「これって？」

するとギンガのバリアージャケットが変わっていきカラミティのボディのようなバリアージャケットへと姿が変わる。

「成功をしたみたいだな？」

「今俺達の力をお前に託したってこと。」

「そうそう、状況によって俺達三機のモチーフとなった状態になれるってこと。」

「本当!？」

「ああ本当だ。空を飛びたかったんだろ？」

「……………うん。」

ギンガは空を飛びたかった。だが彼女の魔法力だけではなのはたちのように空を飛び得ることはできない。だから何度かレイダーに乗せてもらい空を飛んでもらったことがある。

「ありがとう……………ありがとう……………」

ギンガは涙を流しながら三機に抱き付いた。今の彼らはギンガよりも小さいので彼女の成長をしている胸が当たっており彼らは顔を赤くしていた。

「っておい、まだこれからだろうが……………」

「そうそう。」

「だよね？」

三機は顔を赤くしながらもギンガの頭をなでなでをして陸士学校

で頑張る決意をするのであった。

場所が変わりここは海鳴市ではリインフォースをストライクが見ていた。彼が一度プログラムなどを作成をしているのでこうしてメンテナンスをするために彼はチェックをしている。

「……………」

「どうやストライクさん？」

「異常ありません。リインフォースさんのプログラムは正常に動いております」

「ほんまか……………良かったで……………」

はやてはほつとしておりストライクはさてといい起動させる。リインフォースは目を開けて辺りを見る。

「異常ありませんよりインフォースさん。」

「……………」

「リインフォース？」

リインフォースはストライクをじーつと見ていた。するとそのままぎゅーつと抱きしめる。

「リインフォース!？」

「えへへへパパー……」

「パパ!？」

「パパ？」

「……………ちよつと待つてくてもいいかい？」

「うん!!」

ストライクとはやては彼女から少し離れてひそひそ話をする。

(どういうことやストライクさん!?)

(うーむおそらくバクではないですけど……………ほらリインフォースさんは今まで苦しい思いやつらい思いをしてきたでしょ?おそろくそれが解決をしたと思つたら幼児退化をしてしまった可能性が……………)

(えー……見た目は美人さんなのに中身が子どもってことかいな!!)

「むー……パパー……私も一緒にお話したいよー……」

「……ぶつうぶつうぶつうぶつうぶつうぶつうぶつ!!」

「ストライクさん!？」

リインフォースがストライクに体当たりをしてそのまま一緒に地面にダイブする。すると扉が開いてデュエルたちが帰ってきた。

「お前ら何をしている?」

「てかりインフォースさんどうしたのですか?」

「パパと一緒にいいのー」

「「パパ!」」

夕方となりシグナムたちが戻ってきたがリインフォースの変わりように驚いている。

「パパーパパー」

ストライクは苦笑いをしながら頭を撫でていた姿を見てザフィラは驚いている。

「ストライク、リインフォースに何があった? パパとは?」

「あーザフィラさん聞かないください。自分でもどうしてこうなったのかわかりませんから……」

「てかストライクお前大丈夫なのか帰らなくても?」

「そうですね。」

彼は立ちあがり帰ろうとしたが……

「やだあああああ!! パパと一緒にいい!!」

「こらリインフォース!! あかんで!!」

「いやあああああ!!」

涙を流しながらストライクを絶対に離そうとしないリインフォースにはやてが引つ張るが体的に負けている彼女ではリインフォースを剥がすことができない。シグナムたちも手伝ってやつと離れたが涙を流しながらストライクをパパと呼んでいた。

「……はやてさん、リインフォースさんを連れて帰ってもいいですか? おそらくですが嫌な予感しかしませんので……」

「やな……おそらく夜探しに行きそうやからな。」

はやての許可を得てリインフォースを連れてストライクは月村家に戻ってきた。だがその間もリインフォースはストライクに抱き付いていた。

「ただいまもどりました。」

「お帰りすと……らい……く……」

アジーとラフタが彼らを迎えたがアジーの目からハイライトという者が消えていく。ラフタはワオといいながらストライクの様子を見ていた。

「わおりインフォースちゃん大胆ねーーストライクに抱き付くなんてー」

「えへへりインはパパと一緒になの!!」

「あ?」

「パパ!」

「どうしたのですか?」

イージスやキャプテン達が集まってきたので忍は代表で聞くことにした。

「ストライク、その子って確かリインフォースちゃんよね?どうしてうちに?」

「実は……調整を終えて起動させましたらこうなりました……こうして離れようとしても……」

ストライクは一瞬でリインフォースから離れるとはつとなり彼女はストライクに抱き付いた。

「てわけなんです。」

「あはははなんかリインフォースさん子供みたいですね?」

「すずか様、それなんです。」

「え?」

「パパーこの人たちは誰なの?」

「「「パパ!」」」

一方で後ろではアジーが飛びだしそうにしているのをラフタ、ジャステイス達が止めていた。

「アジー落ち着いて!!」

「落ち着いているさラフタ……あの女を殺したいという思いがあるほどな。」

「それ落ち着いてるって言わねーよ!!」

デスサイズがいい、ラフタとジャステイスが首を縦に振る。だがアジーは全然止まろうとしないのでオルガたちも参戦をすることになったが………

「邪魔をするなあああああああああああああ!!」

「ごふううううううう!!」

「二オルガああああああああああ!!」

彼はそのまま前のめりに倒れて………左手を上げたまま呟いた。

「お前も………止まるんじやねーぞ………」

きーぼーおーのはなーと音楽が流れるかのようにオルガは倒れた。

「うわーオルガが倒れた。」

「てかアジーさんがすごく強くねーか?」

「ああガンダムが二機抑えているのによーどんどん前に行こうとしているぜ?」

「あ、ザコソルジャーたちも止めようとしている。」

「邪魔ああああああああ!!」

「二「ご」おおおおおお!!」

ザコソルジャーたちも吹き飛ばされてシユウト君はあわわと慌てていた。

「どうしようキャプテン!」

「……私の計算では今の彼女に近づくのは100パーセント危険だ。」

「いやキャプテン計算をしなくてもだれでもわかると思うが?」

「うむ女つてのはよくわからん。」

爆熱丸は見ながらアジーはストライクの方へと歩いていく。

「昭弘!!手伝って!!」

「昭弘!!来たらわかるな!!」

「俺はどうしたらいいんだ………」

一方でストライクの方はリインフォースが抱き付いたままなので困っている中ザコソルジャーたちが吹き飛ばされたのを見ていた。

「あらーザコソルジャーさんたちが吹き飛ばされましたねってなんで
すか？」

突然として自分の横に飛んできたのを見ると赤い機体が壁の方に
吹き飛んでいた。

「ジャステイス？」

「ストライクーーーー逃げてーーーーー」

「え？」

「うおおおおおおおおおおおおお！！」

「うわああああああああああああああああ！！」

目の前でアジーが飛び込んできて彼に抱き付いた。彼は驚きなが
らも抱きしめ返す。

「あ、アジーさん？」

「貴様!! パパから離れろ!!」

「なんだと!! 貴様こそ離れろ!!」

二人の女性はにらみ合いながらストライクを挟んでいた。イージ
スとフリーダムはジャステイスと、サンドロックたちはデスサイズを
引っ張っていた。

「忍さま……………」

「頑張りなさいストライク。」

「そ、そんなああああああああああああああああああ」

二人は僕の体を洗っているがなんででしょうか？胸などをわざと当たっているのですか？リインフォースさんは元々の爆乳という感じの胸なのでごく当たるし、アジーさんもリインフォースさんみたいじゃないですが当たっているし……人間だったら間違いなく顔を赤くしている。てかまずい顔が赤い……あれ？僕機械ですよね？

それから二人と一緒にお風呂に入っていました……

「パパー気持ちがいいね!!」

「ええそうですね……」

リインフォースさんが笑顔で言うのはいいのですが……なんで幼児退化しているのでしょうか？私何か変なことしましたっけ？

「……」

私たちはお風呂から上がりリインさんは僕に抱き付いてくるしアジーさんは逆の手に抱き付いてくるから僕の両手は動けない状態である。

「……えっと二人とも離れてもらえますか？両手が動けないので今日は自分がご飯を作る担当になっていますので……嫌だああああああ!!パパと離れたくないよおおおおおとおお!!」

「ですが……」

「ストライクどうしたの？」

「フリーダムにジャステイス……実は……」

ストライク説明中。

「わかった、なら今日のご飯は俺達が作ることにするよ。」

「すまない、今度お前らの時は必ず作るよ。」

「ふふ僕たちは気にしないよ、それよりも大きな娘さんを慰めたら？」

「はいよ。」

フリーダムとジャステイスに今日の食事をお願いをして僕はリインさんを連れて部屋へと戻る。

「えへへへへへ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

頭を撫でながらどうしてこうなったのだろうかと考えてみたけど思いつかない。まあ明日になったら治っていると信じて夜ご飯まで待つことにした。

「ストライクご飯ができたって。」

「わかりましたすずか様。」

すずか様が呼びに来られたので私たちは一緒に移動をして皆が待っている場所へ到着をしてオルガさん達やキラたちは驚いている。

「おいストライク、その人はリインさんだよな？なんでお前に抱き付いているんだ？」

「パパーこの人怖いよー」

「「パパ!」」

「・・・・・・・・もうツツコミはしません。」

「なんとというか大きい子供よね改めてみると・・・・・・・・」

「ええ自分もそう思います。なんでか大きいな子どもを持った感じがすよ・・・・・・・・」

「貴様いい加減ストライクから離れろ!!」

「嫌ああああああ!!」

アジーは我慢ができなくなりリインフォースを無理やり剥がそうとしたが彼女は逆に力を入れてストライクに抱き付いている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ストライク自身は機械の体のため痛くもなんともないので頭の方に手を置いてやれやれという状態でした。

夕方ごろすずかと共にはやてたちもやってきたが・・・・・・・・

「はーなーれーろー」

「いーやー」

「「」。ポカーン」

リインフォースがストライクに抱き付いておりアジーが離させようとしている姿を見てなのはたちは開いた口が閉じれなかった。

「これはこれは皆さまいらっしやいませ。」

「えつとストライク大丈夫?」

「アリシアさま、わたくしは大丈夫でございます」

「ごめんなストライク、ほらリインそろそろ帰るで?」

「嫌です!! 帰りたくありません!!」

「これつてもしかして幼児退化してないかしら?」

「アリサさまその通りでございます。調整をした後にこの状態になったのです。」

「調整をしたときに何か変なことはなかったの?」

「フェイト様、リインのプログラムはストライクが一から作っておりますのでそれはないと思いますが……一応チェックをした方がいいですね? さてリインフォースの一度止めないと行けません……リインフォース、これからチェックをしますので一度眠ってもらえますか?」

「え? もう寝るの?」

「はいその通りです。」

「まだ眠くないよ?」

「大丈夫ですすぐに終わりますから?」

「……わかったなの。」

リインフォースが眠つたのを確認をしてストライクはグシオンストライカーを装着をしてパソコンを開いて開始をする。

「……」

ストライクは画面を見ながらリインフォースの体をチェックをしていた。全ての回路などはOKと異常なしのサインが出ていた。

そして数分後ストライクは画面を閉じてなのはたちの方に振り返る。

「異常ありませんね。すべてOKとサインが出ていました。」

「ならなんでリインは幼児退化をしたんや?」

リインフォースが目を開けて辺りを見ていた。

「うーん」

「リイン目を覚ました?」

「主はやて……」

「戻ったよかったわ!!」

「パパ!!」

「ふっ!!」

抱き付こうとしたがリインはストライクを見て抱き付いた。

「よかったパパ……さつきパパが破壊される夢を見て……それでそれで……」

「リインどういふことや……ストライクさんが破壊される夢つて。」

「主はやて……それはわたしもわかりません。ただ言えるのはパパが何者かに殺されただけです。」

「ストライクを……」

「殺す!？」

全員がリインフォースがストライクが破壊されるという単語を聞いて驚いている。ストライク自身もいったい誰が自分をと思いつける。

(この間襲撃をしてきたリボーンズガンダムだろうか?しかしあいつとは初めてあったしなら誰が俺を?)

ストライクはうーんと考えているが何も思いつかないのであった。ちなみにリインフォースに関してはどうやら自分を助けてくれたストライクの思いが爆発をして今の状態になってしまったとなり忍日くうちが預かるわという扱いでアジ―は不機嫌なオーラを高めるのであった。

「ちなみに部屋はどうしようかしら?」

「パパと一緒にいい!!」

ぶち

「きーきーきーきーきーきーいい加減にしろおとおおとおおとおお!!」

アジ―が完全にブチ切れたのだ!!オルガ達はまずいと思い止めようとしたがリインフォースが立ちあがる。

「お前……ずっと思っていたがお前はパパのなんだ?」

「何?」

「私はパパに助けてもらった。主はやてやみんなと一緒にいれるのはパパが助けてくれたからだ。ずっと考えていた……私はパパがストライクのことを好きだ!!」

「え!?!」

「な!!」

「二」「ええええええええええええええええええええええ!!」「三」

「……貴様!!私だつてストライクのこととは好きだ!!傷ついても立ちあがる彼を見て私は……私は……」

「ストライク……」

「えつとキラ?」

「頑張つてね?」

「いやいや何を!?!つてか、どうしてこうなった!?!」

ストライクは混乱をして全員が苦笑いしながら見てたのであった。

流派東方不敗は王者の風よ!!

ミッドチルダのある山の中

「答えろジークリンデ!!流派東方不敗は!!」

「王者の風よ!!」

「全新!!」

「系裂!!」

「天破!!」

「侠乱!!」

「見よ!!東方は赤く燃えている!!」

黒い髪をした少女とガンダムが拳をぶつかり合っていた。その言葉を言ったガンダムは拳を降ろすと彼女は膝について顔を俯かせている。

「ジーク、お前を弟子入りをして何年経った？」

「はい、師匠に鍛えられましてもう5年経ちました」

「うむお前の中にあるエレミアの神髄を慣れるためにもお前を弟子入りをさせたが……見事に制御をしている」

「これも師匠に教わりし明鏡止水のおかげであります」

「だがお前はまだまだ修行の身だ」

「わかっております。ウチの實力では師匠にはまだ及びません……」

「だがお前は流派東方不敗の技をマスターをしている。さて今日も修行をするでしょうか」

「はい師匠!!」

彼女の名前はジークリンデ・エレミア。そしてその彼女を教える人物の名前はゴッドガンダム。かつてネオジャパンのドモン・カッシュの機体でシャイニングガンダムを上回る力を持ち彼の師匠である東方不敗の搭乗をするマスターガンダムを倒した機体でもある。

彼はジークリンデを弟子にして彼女を鍛えあげていた。射砲撃戦、格闘術戦、つかみ技などの教えていた。彼女は黒い髪を降ろしてゴッドガンダムの課題を苦しみながらも技を取得をしていた。

ミッドチルダの山林で過ごしているがゴツドは彼女の女の子だからなどホテルに泊まっては風呂などに入らせたりしている。もちろん彼も鬼ではなく修行を休みにしたりしてミッドチルダの街へと行き服を買ったりするなどさすがにおしゃれなどを覚えさせないはずだと思うたりしているゴツドである。

一方で場所が変わり海鳴市、ビルドストライクは今日も両手にアジ―とリインフォースが抱き付いていた。

リインフォースの突然の告白にアジ―も負けじと対抗をして今日もお互いに火花を散らしながらストライクに抱き付いていた。

「……あのー」

「なんだ？」

「何？」

「両手に抱き付かれますと私は両手が使用不能なのですが？」

現在ストライクはメイドストライカーを装着をしてサブアームを使用をして掃除などをしている。その様子をオルガ達は苦笑いしながら見ている。

「おいおいアジ―さんとリインフォースさんがすごい火花を散らしているな……」

「オルガ止めないの？」

「冗談を言うなミカ、あの世にまた戻るところだったわ」

オルガは昨日アジ―に殴られてあの世に行きかかったので止めようとしないう。ラフタははあとため息をしてアジ―たちを見ている。

「全くアジ―ったら」

「ふむ……」

そういいながらストライクは掃除をしていき二人を離そうと力を入れていた。このままでは仕事ができないので彼女達がにらみ合っている隙に手からすると抜けて掃除をするために移動をする。

「ストライクどこにいった!!」

「逃がさないよパパ!!」

二人はストライクがいらないのに気づいて彼を追いかける。再び場所が変わりミッドチルダのサーペントテールの部屋。

データはふうと報告書を作成をしていた。彼はこのサーペントールに配属をしてから彼らの援護をしたりするなどの活躍をしている。

「お疲れだなあデータ」

「ヴァンセイバーさん、いいえ……」

「それブルーフレームに見せる報告書か？」

「ええまあ……」

彼はどれどれと報告書を見ていた。彼らしく長い文章を纏めているためヴァンセイバーはなるほどなど見てから報告書を彼に返す。

「まあいいじゃないか、だがお前は最近頑張り過ぎだぞ？」

「そうですね？」

「ああ力を入れ過ぎているところがある。別にサーペントールだからって力を入れる必要はないぞ？」

「は……はあ……」

「じゃあ俺はパトロールに行ってくるからな」

「気を付けてくださいね？」

「おうよ!!」

ヴァンセイバーはパトロールに向かって出動をした。妹のティアナの生活をなんとかしないとないと思いつつも仕事をするデータであった。

ミッドチルダにあるハンマーヘッド内

「へえーあのアジーがね」

『そうなのよ姐さん、アジーったらストライクのことがいっぱいなのかスルーされることが多いのよね？今もリインフォースとストライクをとりあっているし』

「まあ障害が多いほど恋ってのは燃えるもんだよ」

『そういうものかな？』

「そういうもんだよ」

『まあわかったわありがとう姐さん』

ラフタからの通信を切りアミダはふうといいながら百鍊のデバイスを見ていた。

「あんたもこつちに来て直って良かったね百錬」

『全くです。あのダインスレイヴは二度と食らいたくありません』

「ふふふあんたもしやべれるようになったんだねー」

『レッドフレームさんがアミダ姐さんのためにと人工AIを付けてくれました。』

「ふふふそうかいそうかい（笑）」

アミダは笑いながら百錬と話をする。そして場所は戻り海鳴市の月村家の庭。

ストライクは外で訓練をしていると何かが落ちてくるのが見えた。

「なんだ？」

「うわああああああああああああああああああああ!!」

どしーんという音が聞こえてストライクは行ってみると赤い機体と白い機体が地面をめり込んでいた。

「な、何事ですか……」

「いたたた……おい、シヤア大丈夫か？」

「ああ、いてて……ここはどこだ？」

「知るかよ……おや、ストライク？」

「……誰ですか？」

「え？」

「ストライクどうしたのかしら？」

「忍さま、実はまた上から落ちてきました……」

「なーるほどね。また上から落ちてきたのね」

「またとは？」

「とりあえずシヤア、俺達は別の世界に来たってことなのか？」

「おそらくな……しかもガンダムよ、俺たちの体を見てみる」

「ん？」

ガンダムと呼ばれた機体は自分の体を見ていた。

「な、なんじゃこらああああああああ!!SDじゃねえええええええええ!!」

「そう私たちの体はSDじゃなくなっているのだ。少し頭身が長くなっているぞ」

「なーるほどな。」

「あのーあなたたちだけで解決をしてしないでちょうだい」

「すみません」

「とりあえず私の名前は月村 忍。ここ月村家の当主をしているわ」

「私はシヤアザク、シヤアと呼んでくれ」

「俺ガンダム!!」

「シヤアにガンダムね覚えてたわ、さてうちでといたいたいけどうちもいっぱいなのよね……困ったわ」

「だったらうちが預かろうかしら?」

「アリサちゃんいつのまに?」

「お姉ちゃんただいまー」

「あらずかも一緒だったのね。それでアリサちゃんが引き取るってことでいいのかしら?」

「ええその通りよ」

「すまないお世話になる」

「お世話になりまーす!!」

ガンダムとシャア アリサの家へ

月村家に落ちてきたのはガンダムとシャアザクだった。彼らは月村家ではなくアリサが引き取ることとなりアリサの車に乗りこんでいた。

「……………」

二人はアリサの車に乗りこんでからキョロキョロしていた。

「なにキョロキョロしているのかしら（笑）」

「す、すまない……………」

「なんていうかおちつかねーって言うか……………」

「まああなたたちからしたら異世界みたいなものよね？」

「まあな、今頃アレックスやキャノン達は何をしているんだか……………」

「ララア……………」

「まあしょうがないわよ。とりあえず帰れるまではうちで過ごしていからきゃ？」

「感謝をする」

「ありがとう!! そういうえば名前を聞いていなかった気が……………」

「あーあたしの名前はアリサ・バニングスよ」

「改めてアリサ、私はシャアだ」

「俺ガンダム!!」

二人はアリサ家に到着をして二人は降りたつとメイド達が挨拶をしていた。

「二「おかえりなさいませアリサお嬢様」二」

「三「。ポカーン」

シャアとガンダムはメイドの数を見ると一人男性と女性が彼女たちの方へと歩いている。

「おーおかえりアリサ」

「ふふ随分かわいい人物たちを連れてきたのね？」

「は、初めまして俺ガンダムといます」

「私はシャアです」

「ガンダム君にシャア君か、私はデビット・バニングスだ」

「私は妻のエレナ・バニングスによろしくね？」

「すまないお世話になります」

「ふふふまさかうちでもガンダムさん達を引き受けることになるとはおもってもいませんでしたね？」

「ああそうだ、二人にお願いがありまして……………」

「お願いですか？」

「そうですアリサの護衛をお願いをしてもよろしいですか？」

「はあ護衛ですか？」

「うちは会社をしておりますアリサはその令嬢……………」

「なるほど狙われる可能性があるってことですね？」

「それで俺達に護衛か……………よし頑張るぞ!!」

「すでに学校には許可を得ておりますのであなたたちは普通に学校に入れるようにしております」

「感謝をします」

「よっしや!!」

一方で月村家の方でも

「え？ずずかお嬢様の護衛ですか？」

「ええストライク、あなたにお願いをしたいの……………」

「なるほど数年前に誘拐事件がありましたからね……………わかりました。ストライク護衛任務めさせてもらいます」

次の日

「おいアリサ起きろ」

「アリサちゃん朝だよ……………」

「んん」

アリサは目を覚ますとガンダムとシヤアが立っていた。二人はアリサを起こしに来たみたいだ。

「ガンダムにシヤアおはよう」

「おはようアリサちゃん、デビットさんたちから起こしてくるよう言われてきたよ？」

「ああ」

「わかったわ」

二人は先に出ビットさんたちのところへと戻っていきアリサはふぁーと欠伸をしながら制服に着替えていきデビット達がいる食事の間に来る。

「おはようパパとママ」

「おはようアリサ」

ガンダム達も席に座り一緒にご飯を食べてからアリサは学校へと向かう。

「ふむ……」

シヤアとガンダムも一緒に歩いているときーんと音が聞こえて上の方を見るとビルドストライクがスペキュラムストライカーを使って空を飛んでアリサたちのところへと着地をする。

「おはようアリサちゃん」

「あらずか、ストライクがいるってことはあんたのところも？」

「そうだよ。それでストライクに運んでもらったのありがとうストライク」

「いえいえ、すずか様の役に立てるなら光栄です」

ストライクは素晴らしいガンダム達と一緒に歩いていく。

「ではそちらの世界でも俺はいるんですね？」

「ああ、だが君はストライクフリーダムになっているからおかしいなと思っていた」

「だがバージョンダウンができるからなれるのでは？」

「あー確かにウイングもなっていたな（笑）」

ガンダムたちは笑っていると四人の女の子達が前から走ってきた。

「おはようアリサちゃんすずかちゃん!!」

「おはようございます。なのは様、フェイト様、アリシアさま、はやてさま」

「あはははストライクさんやんどうしたんや？」

「すずかお嬢様の護衛です。狙われているってのもありまして忍さまの命令で動いております」

「そういえば気になったけどアリサの後ろにいるガンダムたちは？」

「ああ紹介をするわね？ガンダムとシヤアよ」

「始めましてシヤアだ」

「俺ガンダムよろしくね!!」

「いいなーアリサちゃんところにもガンダムさんがいるんだー」

「なんかいいな・・・ねえすずか、ストライク何日か貸してほし
いな」

「え!?!ストライクを?」

ちらつとストライクの方を見てうーんと考える。

「あのー6人とも学校はよろしいのですか?」

「!?!「あ!!」!?!」

六人は走っていくのでストライクたちも走って追いかける。ちな
みにストライクはストライカーを外して学校に到着をして彼らは教
室まで護衛をしてストライクはメイドストライカーを装着をする。

「何をする気だ?」

「掃除ですよ?いやーほらここら辺汚いので掃除をしないとね?」

ストライクはさーてやりますかといいいガンダム達も暇だったので
掃除をすることにした。音を立てないようにしているので休憩時間
となりストライクたちの姿を見て目を光らせてる人物たちもおり彼
らは気にせずに掃除をしている。

だが彼らは次の授業があるので急いで移動をしたりしていると校
長先生が来た。

「ストライク君にガンダム君にシヤア君」

「あなたは?」

「私はここの校長をしているものですよ。デビット君とは同級生でね
?暇だったら私の校長室にこないかい?」

「よろしいですか?」

「ええ」

三人は校長室へとやってきてお茶をもらった。

「すみません」

「ふふふ気にしないでくれ。しかし君達は機械そのものなのだね?」

「まあそうだな・・・」

「昼休憩になったら大変ですねーおそらく」

「ねえフリーダム」

「なんですか？」

「あの二人はいつもなの？」

「うーんとですね最近になってからです。まあリンさんは本来は消滅をするはずだったですよ。バグなどがひどすぎてでもストライクが全プログラムを一から作り直して彼女はここにいますよね。」

「そうだったんだ」

「うわああああああああああああああああああああストライクうううううううううううううう!!」

「うるさいわああああああああああああ!!」

アジーが切れてリインフォースをつかんでバックドロップを決めた。

「ふん!!」

全員がアジーがふんと決めたのでリインフォースはびくびくしていた。

「すげー」

「ああ………」

そのことが月村家で起こっているのをストライクは知らないのであった。

ガンダムとシャアの実力

ストライク side

いやー昼休みは死ぬかと思いました。生徒たちに囲まれた私たちはなんとか屋上へと逃げることができ、すずか様たちが学校が終わるまでは校長先生の部屋で将棋などをして待つていることにしました。私は暇だったので先生方にお茶を入れてあげたりしておりました。

「お茶になります」

「ありがとうございますストライク君」

「いえいえ……」

やがて時間は放課後になり私たちはすずか様たちを待つことにしました。シャアさんとガンダムさんも共に立っておりすずか様たちがこちらを見て手を振っております。

「ストライクたちお待たせ」

「待ったかしら？」

「いや待つていないぞ？」

「そうそう、さあ戻ろうぜ？」

私たちは家の方角へと歩いていくと突然として結界が張られたのを感じました。

「これって結界!？」

「やけど誰が!!」

「すすめええええええええええええええええええええええ!!」

「あ、あれは!!無能司令官!!イオク・クジャン!!」

「誰が無能だ!!我が親衛隊よ奴らを倒せ!!」

「二〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇!!」

「こうなったら!!」

「待てっガンダム、やれるか?」

「もちろんさ!!」

するとシャアさんの姿が変わりグーンのような姿になりガンダムさんはライフルとシールドを持っていた。

「シャアズゴック」

「いくぞおおおおおおお!!」

私もキャリバーンストライカーを装着をして背中 シュベルトベ
ゲール改を抜いて構える。

イオク・クジャンの部隊が攻撃をしてきたので右手のマイルダベツ
サー改を飛ばしてレギンレイズたちに命中をして爆発をする。

「ふん!!」

シャアさんは爪でレギンレイズたちのコクピットに突き刺して爆
発させる素早いですね・・・ガンダムさんはシールドでガード
をした後ライフルを放ち攻撃をしていきレギンレイズたちが放った
レールガンをあの態勢からかわしていた。

「す、すごい・・・」

「にやあああ・・・」

なのは様たちはガンダムさん達の強さに驚いていますね、私自身も
驚いていますね・・・

「デイバインバスター!!」

「プラズマランサー!!」

「いっけえええええええ!!」

「ハイマツトフルバースト!!」

四人が放ち、アリスさまはラケルタビームサーベルを抜いて切りか
かり撃破してはやてさまも夜天の書を開いていた。

「えっと、どの魔法がええかな?」

はやてさまはどの魔法を考えているのかいいのですが・・・
数が減っているのですよ?僕はサムブリットストライカーに変えて
アグニ改を放ち撃破していき数が減ってきたのかイオク・クジャンは
撤退をしていきました。

「ええええええええええええええええええええええ!!」

「そりゃあはやてちゃん選ぶの遅いんだもん」

「二「うんうん」」

「そうは言ったって色々魔法が多すぎて困っているんや」

とりあえず私たちは結界がなくなり家へと戻っていくことにしま
した。私はさすが様と共に月村家へと帰ってくるとリインフォース

インパルスたちのメンテナンス

ここはジェイル第二研究所。インパルスたちの大掛かりなメンテナンスをするために彼らの機能を一時的に停止させる処置をする。

「ではインパルス君たち準備の方は？」

「といっても準備をするって程でもないけどさ」

「確かにな」

インパルスたちは笑いながらジェイルは機能を停止させて彼らのメンテナンスを開始する。

さて場所が変わりここは陸士学校ではギンガが授業を受けながらも小さくなっているカラミティたちは探索をしていた。

「ここって広いんだよね？」

「ああ俺達も空を飛びながら見ているが……」

「てかさういえばギンガに声をかけていたやついたよな？」

「ああいたな」

「生意気だよね？」

「そうだよね。ギンガはクイントおばさんの遺伝子を継いでいるから綺麗なのは当たり前だけ苦労をしているのかあいつ知らないだろ」

「うたたくそれで俺達がどれだけ苦労をしているのかあいつ知らないだろうな……」

そうギンガはこの学校で通う女性の中で綺麗なので男たちは彼女と話をしようとしていたがいつも何かに邪魔をされてしまい男たちは断念をしてしまうのにはカラミティ達が小さい体を使い妨害をしていたのだ。

大事な妹分を任せられないと彼らなりの行動をしていたのだ。

「さーてとりあえず戻るとするかな？」

「だね」

「授業が終わっているだろうな」

カラミティたちはギンガがそろそろ授業が終わっているだろうと教室へ入りこつそりとギンガのカバンの中へと入りひよこんと顔を出していた。

「あれ？まだみたいだったね」

「まあそういうこともあるさ」

レイダーは暇だったのかゲーム機を出して音を小さくしてピコピコとやり始めた。

「おいおい」

「いいじゃん、俺達が小さくなると物まで一緒に小さくなるみたいだからよ」

そういつてフォビドゥンも音楽を聞き始めたのでやれやれといいながらカラミティは授業が終わるのを待機をしてギンガは終わったのでふうといいながらカバンに教科書などを入れようとしたが。

「「うぐ!!」」

「え?」

彼女はカバンを開けるとカラミティ達が教科書の角が当たったのか三体とも倒れているのを見てギンガはオロオロしていた。

「ぐ、ぐめん」

「いててて終わっていたのか?」

「僕たち夢中でやり過ぎていたね」

「痛い……」

四人は苦笑いをして自身たちの部屋へと戻るのであった。

一方で海鳴市の方では?

「パパー……」

ラインフォースがビルドストライクに抱き付いていた。ストライク自身は慣れてしまったので気にしないことにした。

「きーきーきーきーきーきーきーきー!!」

アジーが切れてラインフォースをつかんでバックドロップをするのもいつものことなのでストライクはあとため息をついていつも通りですねと思いつながら本を読む。今日の彼は休みのためメイドとしての仕事をしていないのだ。

忍からも休みなさいといわれていたので彼は月村家で休んでいたのだ。ちなみに今日はフリーダムにすずかの護衛を任せているのでそのフリーダムは?

「うわああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

「すげーこれ本物の翼!?!」

「かっこいいいいいいいいいいいいいい!!」

「助けてええええええええええええええ!!」

「あーやつぱりストライクもそうだったけどフリーダムもやられているわね(笑)」

「助けないでいいのかな?」

ガンダムは言うが自身も最初の時にやられたのであまり行きたくないのだ。

「仕方がないゲルググ」

シヤア専用ゲルググに変身をして彼は素早く移動をしてフリーダムを回収をした。彼はぜえぜえといいながらゲルググにお礼を言う。

「た、助かりました……」

「礼はいらんぞ」

ゲルググは素晴らしいながら空を見ている。ガンダムも同じようにシヤアの隣に座る。

「どうしたララアさんが気になるのか?」

「お前も妹とか仲間たちが気になるだろ?」

「まあな、帰れないってわけじゃないしよ。それにあいつらだって俺がいなくても大丈夫だよ」

「ガンダム……」

「それにララアさんならすぐに来そうな気がするし」
「確かにな」

二人はそう言っているララアさんは?

「変ねシヤアとガンダムの居場所がわからないなんて」

っと探しているのであった。再び月村家へと戻りストライクはリインフォースとアジーからなんとか抜け出して安心をしていた。

「最近リインさんとアジーさんのこともあるから大変だよ……」
「ただ僕は普通に接していただけなのに……」

ストライクは素晴らしいながらも無視などはできないため自分は何をしているんだろうと考えるのであった。

「本当に僕はどっちを選べば……って何を考えているのですか
僕は機械ですよ……アジーさんも僕なんかよりも人間の人を
選ばないと……」

「あらストライクじゃない」

「ラフタさん……」

ストライクは振り返るとラフタが立っていた。彼女は昭弘と結婚
をしてからもこの家で過ごしている。

「どうしたのよ?」

「なんでアジーさんは自分をと思ひまして」

「……」

「自分は機械です。アジーさんのように人のように暖かくありませ
ん。ならアジーさんは人間の男の人を選んだ方がいいのに……」

「まあそうですね。でもアジーはそれでもいいって言っていたわ?」

「え?」

「あなたがたとえ機械だろうとあいつはあなたから離れるとは思って
もないわ。あんだだけダーリン以外に懐いているのは始めてみたわ」

「そ、そうなんですか」

「ええその通りよだから」

「……」

ストライクはしばらく考える必要があった。ラフタが去った後も
彼はその場所から動くことはなかった。

ダークアクシズの幹部！

月村家の廊下、ラフタと話をした後ストライクは歩いている。リインフォースとアジールの気持ちを考えながらストライクは自分の部屋の方へと戻ろうとしたが殺気を感じてビームライフルを構えて外へと出る。

「……………」

ストライクは警戒をしながら歩いていくとビームが放たれて彼は回避をしてライフルを放つが攻撃が当たった感触がない。だがさらにビームが飛んできてストライクに襲い掛かる。

彼はシールドを出して放たれたビームをガードをするが衝撃は止められなくて吹き飛ばされる。

「が!!」

ストライクは背中のスラスターを展開させてバランスを戻して放たれた方角を見る。

「誰だ!!」

「ほう流石異世界のガンダムのかと言ったところか」
「誰だ!!」

ストライクはライフルを構えるとその敵はゆっくりと着地をしていき姿を現す。ストライクは見たことがないMSタイプだと構える。

「貴様はいつたい……………」

「私の名前はダークアクシズ幹部……………名前はコマンダーサザビー……………」

「コマンダーサザビー?」

「行けファンネル!」

「!!」

ストライクはスペキュラムストライカーを装着をしてファンネルを回避をしていく。ストライクはスペキュラムストライカーに装着されているミサイルポットを展開をして発射させる。

「甘っ!!」

コマンダーサザビーは拡散ビームを放ちストライクが放ったミスイルを破壊した。ストライクは回避をしていくがビームの雨が容赦なく襲い掛かる。

「なんてビームの雨なんだ。プロヴィデンスと同じ……いやそれ以上だ!!」

「これで終わりにしてくれる!!メガキャノンを受けてみるがいい!!」
(まずい俺が交わしたら月村家に!!)

コマンダーサザビーはメガキャノンを放ちストライクは交わすわけにはいかないのでシールドでコマンダーサザビーが放つメガキャノンガードをする。だが、ビームの威力が高いのかストライクのシールドが溶け始めてきた。

(まずいシールドが溶け始めてきている……このままだと!!)
「はっはっはっは!!終わりのようだなガンダム!!」

すると光弾が飛んできてコマンダーサザビーに当たりメガキャノンが消えてストライクは着地をする。

「ストライク!!」

「すぐか達が駆けつけてキャプテンガンダム達は驚いている。

「お前は!!」

「久しぶりだなキャプテンガンダム、そしてガンダムフォースの諸君!!」

「コマンダーサザビー」

「なぜお前が!!」

「ふっふっふっふお前たちガンダムを倒す為に私は蘇ったのだ!!ファンネル!!」

コマンダーサザビーはファンネルを放ちフリーダムたちは攻撃をする。

「甘い!!」

「速い!!」

「でえい!!」

ジャステイスはフォルティスを放ち攻撃をする。ファンネルがアリサたちに襲い掛かる。

「くそ!!」

デスサイズとウイングゼロが前に立ち翼でビームをガードをする。ヘビーアームズはツインガトリングを放ち攻撃をする。

リインフォースはブラッティーダガーを放ちサザビーに攻撃をする。

「お前がパパを!!」

「パパ?なるほどストライクはお前にとって大事なやつってことかならば!!」

コマンダーサザビーは高速移動をしてストライクをつかんで自分の前に向ける。

「!!」

ストライクは何とか脱出をしようとしたがそのパワーに動かすことができない。

「貴様!!」

「動くな!!動けばこいつを殺す!!」

ストライクを人質に取りられてしまい全員が攻撃をすることができない状態になる。

「なんて奴だ!!」

「こらー卑怯者ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!」

「くそストライクがいたら攻撃ができない!!」

「はっはっはっはっは!!」

「.....」

ストライクはちらつとアジーの方を見ている。彼は首を縦に振りアジーもわかったのか首を縦に振る。

するとストライクに装着されていた背中の特キュラムストライカーが外れてコマンダーサザビーに命中をする。

「どあ!!」

つかんでいた力が緩んだのでストライクは脱出をしてアジーは持っているライフルを放ちコマンダーサザビーのメガキャノン発射口を破壊する。

「おのれ!!」

「これでお前のメガキャノンは使用不可能だな？アジ―さんナイスですよっ。」

「当たり前だ。」

ストライクはスペキュラムストライカーが帰ってきたので装着をしてライフルを構える。

「おのれ……フアンネル!!」

「さっせんどコマンダーサザビー!!」

ハイパーキャプテンが持っているビームサブマシンガンを放ちフアンネルを破壊する。

「おのれキャプテンガンダム!!」

コマンダーサザビーはビームを放っていく、全員が回避をしていきイージスたちもビームライフルで攻撃をしていく。

「この!!」

ウインダムたちもビームライフルで攻撃をしていきコマンダーサザビーのビーム砲の砲塔を次々に破壊していく。

「後はどうするの？お前の武器使えないじゃん」

三日月は大型メイスを構えている。だがコマンダーサザビーは笑いだしてビームサーベルを抜いて切りかかる。だがそこにフリーダムが蹴りを入れてコマンダーサザビーにダメージを与える。

「おのれ!!なら見せてやるぞ!!」

コマンダーサザビーは高軌道型へと変わり黒いオーラを纏い突撃をしていく。全員が回避をしていきストライクたちはビームライフルで攻撃をするがコマンダーサザビーは謎のオーラを纏い攻撃をガードをしていく。

「このままでは……」

「パパ!!」

「リイン!？」

「どけ小娘!!」

「どくものか!!パパをストライクをやらせたりしない!!」

「ストライク!!」

アジ―も駆け寄りコマンダーサザビーは突撃をして爆発をする。

「ストライク!!」

「アジール!!」

「馬鹿め．．．．．何!?!」

煙がはれていきそこにはアジールがいた。だが装甲はスタービルドストライクの状態なのだがさらにそこからウイングゼロのような翼が生えており目を開けると赤い瞳をしている。

「な、なんだ!?!その姿は!!」

「．．．．．」

すると一瞬で姿が消えて全員が探している。

「どこに．．．．．」

「見て!!」

シユウトの声で前を向くとコマンダーサザビーの後ろにアジールがおりコマンダーサザビーも驚いている。

「馬鹿な!!」

「．．．．．」

彼女は無言で拳を握りしめてコマンダーサザビーを殴り飛ばす。彼は攻撃をしようとしたがすでにアジールが移動をして両手に持っているのはライトニングストライカーで使用をするレールガンタイプへと構えておりそれを放つ。

「どあ!!」

アジールは連続して放っていきコマンダーサザビーの装甲などが破壊されて行く。アジールはとどめを刺すために構えているのはシユベルトベケール改である。

「でああああああああああ!!」

コマンダーサザビーはビームサーベルを抜いて切りかかるがアジールは目を開いて翼がガードをしていきそのまま彼の胸部装甲を突き刺した。

「があ!!」

「．．．．．」

そのまま蹴りを入れてシユベルトベケール改を抜いてからアグニ改に持ち変えて砲撃をする。

ニゾンシステムだ。本来は主はやるとやる予定だったのを今回私がパパとやるつもりだったがこの女が割り込んでしまい今に至る。まあすぐに解ける。」

するとアジ―が光りだしてストライク、アジ―、リインフォースが現れて全員が驚いている。ストライク自身もふうと腕などを動かしながら辺りを見ている。

「戻ったみたいねストライク。」

「ええリインフォースに組み込んでいましたユニゾンシステムが始動をしてそれが今回のスタービルドストライク形態が生まれたみたいです。」

「つてことはあの姿になるには三人が一つにならないとダメつてこと？」

「え？この女と……」

アジ―とリインはお互いに指を刺しておりストライクは苦笑いをする。ほかのメンバーもよかつたなどストライクに駆け寄る。

ストライク side

やれやれアジ―さんとリインは仲が悪いですね……しかし私は気になることがある。キャプテンガンダムのお話を聞く限りコマンドーサザビーという奴はかつて彼自身が倒したといっていた。なら奴は何者かによつて復活をしたことになる。

「……いったい誰が……」

「気になるのかストライク？」

「ええ気になりますねつてすずか様……申し訳ございません。」
「ううん気にすることはないよストライク、でもそのコマンドーサザビーを復活させた敵つて一体誰なんだろう？」

「わかりません……キャプテンガンダムが苦戦をして倒したという奴を復活をさせるほどです。(つてことは俺が苦戦をした相手といえ……プロヴィデンスガンダムも復活をしているつてことなのか?)」

私はそう考えながらも眠ることにした。いずれにしても今は体の疲れを取るためにすずか様にお休みなさいませといい自分の部屋へ

と戻ろうとしましたが……中ではアジーさんとリインさんが喧嘩をしていたので私はファリン様の部屋に止めらせてもらうことにしました。

ストライクside終了

一方でディータはサーペントテール部隊に慣れてきたのかヴァンセイバーと共に出動をする。

「ヴァンセイバーさん本当に俺でいいんですか？」

「おいおい謙遜をするなってブルーフレームの許可は得ているから気にするなつて」

「で、ですが……」

「さてとりあえず……ディータ……今回の作戦はブルーフレーム達が囷となつてくれていっているうちに俺達は中へと侵入をする。お前は俺の背中に乗り射撃で俺を狙ってくる敵を狙ってくれ」

「わ、わかりました。」

ディータはヴァンセイバーの後ろによいしょと乗り彼も落とさないうように準備などをしていると爆発が起こる。

「さて始まったみたいだな……いくぞ!!」

「はい!!」

ヴァンセイバーは背中のスラスターを起動させてディータは愛用のデバイスを展開させて構える。

敵はヴァンセイバーに気づいたがディータが素早くデバイスを構えて発砲をして敵のデバイスに攻撃をして吹き飛ばす。

「いい攻撃だ!!次も任せる!!」

「はい!!」

ディータはヴァンセイバーに攻撃をしようとしているのを発見をして発砲をして破壊をして彼が侵入しやすいようにする。ヴァンセイバーもビームライフルを使い前方の扉に発砲をして爆発させて中へと入る。

中に入ったらヴァンセイバーは着地をしてディータを降ろして二人は突撃をして司令室へと突撃をする。

「サーペントテールだ!!」

「大人しくしてもらおうぞ?」

「な!!サーペントテールだと!?!」

「どうしますか!?!」

「MDを出せ!!」

「は!!」

一人の人物がスイッチを押すとドアが開いて中へ入ってきたのはトーラスだ。トーラスはビームカノンを構えて攻撃をしてきた。ヴァンセイバーはシールドでガードをしてディータに当たらないようにしている。

「くそ!!容赦なく攻撃をしてきやがって!!」

「どうしたら・・・」

すると突然としてトーラスのメインカメラが貫いて爆発をする。するともう一機のトーラスは構えようとしたが頭部に大剣が刺さりそのまま倒れる。

「ネロブリッツいいぞ?」

ミラージユコロイドが解除されてネロブリッツが姿を現した。

「隊長こちらも任務完了だ」

「ご苦労ロツソとドレットノート」

「お、おのれ!!」

「おつと眠つてもらおうか?」

ヴァンセイバーが逃げようとした司令官を手刀で気絶させてサーペントテールは任務を完了させる。

さて場所が変わりティアナはストライクノワールたちに鍛えてもらっていた。現在ノワールはI W S Pを装備をしているがティアナは走りこんでいる。

ヴェルデーとブルデュエルも一緒に走っておりノワールが監督をしている。

「はあ・・・はあ・・・」

「休憩だな」

「そうだな」

「うん」

ストライクE形態でストライカーを解除をしてジュースを買いに自販機にお金を入れてジュースを手持ちティアナに飲ませる。

「あ、ありがとう……」
「気にするな」

ストライクEはそういいながら辺りを見ている。ヴェルデバスターとブルデュエルも辺りを見ている。

「三人ともどうしたの？」

「……気のせいか……」

「ああ」

「とりあえず今日はここまでね？」

「帰投をする。」

四人は家の方へと帰っていく。一方でナカジマ家に新しいガンダムがいた。

「……ガンダム？」

「おう俺の名前はガンダムDXって言うんだ!!」

「俺はエアマスタースト」

「俺はレオパルトデストロイだ」

「私はスバル・ナカジマ!!よろしくね!!」

「おう!!」

こうしてスバルの新しい家族ができるのであった。

二体のMS

ストライクside

今日はなのは様とヴィータ殿と共に任務に出かけております。今回はアジーさんとリインも一緒です。

「ストライク、本当にリインフォースも連れてきたのかよ……」
「ええ私が行くと行きましたらその……自分も行くと思わなくて……」

「ああーそれでアジーさんも一緒なんですか？」

「ああ……こいつがストライクに何も思わないとは思えないからな……」

「それは私の台詞だ。なぜお前までついてくる!!」

「あ？お前がストライクに何かをするのかわからないからな」

なんでこの二人は任務が終わってまで喧嘩をするのでしょうか……ん？

「四人ともお待ちください。」

「どうしたのですかストライクさん？」

「来る!!」

私は急いで盾を出して放たれた方角へと達シールドを構えると大型ビームが放たれてシールドに命中をする。

(なんてビームの威力なんだ……耐ビームコーティングされている盾がここまでダメージを受けるなんて……)

現れたのは赤いモビルスーツと青いモビルスーツの二機の機体。青い方は放ったであろうキャノン砲を構えており赤い方は盾を構えている。

「なんだてめえら!!」

「……………」

二機のMSはこちらに武器を構えているので私はビームライフルを構える。アジーさんもライフルを構えておりいつでも発砲をする準備ができています。

ストライクside終了

青い機体が構えた砲塔からビームが放たれて五人は回避をする。

「なのは一気に決めてやれ!!」

「うん!!レイジングハートいくよ!!」

『了解です!!』

なのははレイジングハートを構えて必殺技を決めるために構える。

「スターライトブレイカー!!」

カートリッジを装填をしてスターライトブレイカーが放たれる。すると青い機体の前に赤い機体が立ち背部の丸いものが射出される。なのはが放ったスターライトブレイカーがガードされる。

「な!!」

「嘘だろ!？」

「スターライトブレイカーが……防がれた……」

「アジーさん!!」

「ああ!!」

漏影を纏ったアジーはグレネードランチャーを放つ。赤い機体が背部の展開をしてガードをすると青い機体が砲撃をする。

「あの二機はコンビネーションで戦う機体ですか……」

「この野郎!!」

「ヴィータ殿!!」

ヴィータは接近をしてアイゼンを振り下ろす。赤い機体は右手に持っている盾でヴィータが振り下ろすアイゼンをガードをする。

青い機体はそのヴィータに対してビームキャノンを放とうとする。

「「させない!!」」

ストライク、アジー、ラインがヴィータを救いたいという思いが一つになり光りだしてアジーがスタービルドストライク形態へと変身をして二機を蹴る。

「……やっぱりこうなるのか……」

アジーはため息をしているとラインが呟く。

『それは私の台詞だ……なぜお前とまた……だが』

「だが?」

『お前の戦闘経験は期待させてもらおうアジー・グルミン……』

リインの言葉を聞いてアジ―はふつと笑う。

「ああ貴様はストライクに関しては大ライバルだが……お前の魔力などは期待しているさリインフォース……」

ストライクは心の中でふと笑いながら見ている。

『アジ―さん、リイン……先ほどから二機を見ていたのですが……おそらくあの青い機体はビームキャノンしか持っていないですね。赤い方はあの盾以外はビームピストルを持ち長距離ができないですね……』

「確かにな……なら!!」

スタービルドストライクになったアジ―は背中のスラスターを起動させて接近をする。青い機体は砲撃をするが彼女は盾を前に出してビームキャノンを吸収をして自身のパワーへと変化させてパワーゲートを通り腰部のビームサーベルを抜いて二機は驚いた様子になってるが……

「遅い!!」

アジ―はメインカメラと思われる場所にビームサーベルを突き刺した。二機はメインカメラにダメージを受けたのか先ほどまで動いていた行動が止まったのを見てアジ―は頭部が弱点だったのかと思う。

「なのは!!」

「は、はい!!スターライトブレイカー!!」

アジ―の声を聞いてなのははスターライトブレイカーを発動させて二機は爆発する。アジ―は着地をすると光だしてストライク達が見える。

「ふん」

ストライクはその様子を見ながら苦笑いをしているがあの二機はいったい誰が送りこんできたのだろうかと両手を組んでいるのを見てヴィータが近づいた。

「ストライクもしかして?」

「ええヴィータ殿先ほだからこの二機のことを考えていたのです。いったいどこの誰が……帰ってから知っている機体がいたら

連絡をします」

「わかったぜ」

任務が終えたのでストライク達は帰投をする。

一方でナカジマ家。ダブルエックスは空を見上げて何かをしている。スバルはダブルエックスが何をしているのか気になったので彼の傍に行く。

「ダブルエックス!!」

「うわ!!スバルちゃんか驚いたぜ……」

「何をしていたの?」

「月を見ていたんだよ」

「月?見えないよー?」

「……あーそうだったな悪い悪い」

ダブルエックスは謝りスバルは中へ入ったのを確認をしてダブルエックスは空を見上げる。

(なぜかこの世界にもサテライトシステムがあった。そして今、俺のコードを送ったらOKと出ている。しかも中継衛星まであるからいつでもサテライトキャノンが使える状態になってやがる……。だがサテライトキャノンは威力が高いから……こんな街中じゃ使えない。はあ……)

ダブルエックスはため息をしてサテライトシステムが使えるとは思ってもいなかったので驚きながらもため息が出てしまうのであった。

場所が変わり海鳴市任務を終えて帰ってきたストライクは知っているような機体を探しているとウイングゼロとデスサイズが前から来た。

「ようストライク」

「任務が終わったみたいだな?」

「そうだ二人とも確認したいことがあるんだ」

「俺達に?」

ストライクは二機に先ほど襲い掛かってきたMSの特徴などを話していると二機はお互いを見ている。

「ウイング」

「間違いない。ストライクそれは俺達の世界の機体だ」

「お前たちの？」

「ああ、青い機体はヴァイエイト、赤い機体がメリクリウスだ……だが……」

「だが？」

「その機体は俺が破壊して現存はしていないはずなんだよ……けれどもなんで？」

「わからん。いずれにしても二機が出てきてしかも高町 なのはのスターライトブレイカーをふさいだつてのは厄介だな……」

「ヴァイエイトとメリクリウス……か」

ストライクは部屋へ戻るとアジーが座っている。

「ストライクどうした？」

「あ、いえ……あの機体はウイング達の世界の機体だってことがわかりました。」

「ウイング達の……」

「……」

「ストライク一人で抱えるな……私やラフタ、三日月達もいるのだからな？」

「それに私や主はやて達もいる。」

「お帰りなさいリインさん」

「ああすまない。それで貴様はなぜパパを抱きしめている？」

「悪いなりイン、今回は私の勝ちだ」

「貴様!!」

ストライクはまたかーと思いつつながら苦笑いをするのであった。

自由の翼

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

蒼い翼を持つ機体フリーダムガンダムはため息をついていた。ストライクが普段使用をする訓練システムにハイマツトフルバーストを放ったが彼は着地をしても気分がすっきりしない。

「はぁ・・・・・・・・」

「どうしたんだフリーダム」

彼は声をしたので振り返るとストライクとアジール、リインフォースが立っている。

「ストライクにアジールさんにリインさんか・・・・・・・・ちよつとな・・・・・・・・」

「お前が元気ないなんて珍しいな」

「少しか俺はキラを守れたのだろうか・・・」

「どういうことだ？」

「俺はある戦いで大破をしまい最後まで戦いを見ることはできなかった。俺の後継機のストライクフリーダムが最後に戦ったらしいが・・・・・・・・俺は二度と起きることができないほどに・・・・・・・・大破をしてしまった・・・・・・・・」

「なら俺はどうしたらいいんだよフリーダム・・・・・・・・俺はアークエンジンジェルを守るために爆散をしてその後の戦いは知らないも当然だ。元気になれよ・・・・・・・・それにお前がいなかったらキラは最後まで戦うことはできなかっただろ？」

「・・・・・・・・ストライク悪いな」

「気にするなってそれじゃあ」

彼らは別れた後、フリーダムはふうといいながら歩いている。キヤプテンガンダム達の姿やオルガ達の姿を見ながら彼は落ち着くことにした。彼らもまた戦ってきた戦士たちだなど思いながら・・・・・・・・

「フリーダム」

「キラ・・・・・・・・」

彼は振り返るとかつて自身に乗りこんでいた青年キラ・ヤマトがい

たので彼は隣に座る。

「……………なんか変な感じだね？」

「それは俺もだ。なあキラ……………」

「なんだい？」

「すまない……………」

「え？」

「俺が意識さえあればフレイを失うことはなかった。それにお前だけ疲労させてしまったからな。俺はお前を守ったりできなかったからさ」

「それは僕だって同じだよ。君を二度も大破させてしまつて……………」
「俺は機械だ、いつかはボロが出ることもあるしなにせCE71のMSだ旧式なのは当然だ。だからこそ俺はお前が成長をした行動に反応することができなかつた。だから謝るのは俺だ……………すまん。」
お互いに謝っているので二人はふふと笑いだす。

「はっはっはっはなんだかお前と話しているとスッキリをしたよありがとうキラ……………」

「それは僕もだよありがとうフリーダム……………」

お互いに握手をしてフリーダムはスッキリをした顔になっていると何かの声が聞こえてきた。

「ん？」

「……………ああああああああああああああああああああ!!」

「な、なんだ!？」

「女の子が落ちてくる!?!ちい!!」

フリーダムは背中の中の翼を開いて落ちてきた女の子をキャッチしようとしたがその重さに驚いている。

「な、何!?!なんて重すぎる!!」

「フリーダム!!」

ジャステイスも駆けつけて女の子を支えているが二人はあまりの重さに驚いている。

「なんだよこれ……………」

「わからない。とりあえず地上へ降ろそう」

二人はゆつくりと着地をして女の子は目を開ける。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「今の音は？」

ストライク達も二人が着地をしたのを見て走ってきた。彼女は目をウルウルさせていた。

「ストライク!!」

「え!？」

「な!!」

女の人は走ってストライクに抱き付いてきた。ストライクもまさか女の人からいきなり抱き付かれるとは思ってもいなかったので驚いている。

「ストライクお前の知り合いなのか？」

「フリーダムにジャステイスも久しぶり!!」

「え!？」

フリーダムとジャステイスのことを知っているのには驚いているとストライクはんとよく彼女を見る。白い服に一部一部に赤い色があり巫女服のような服を着ているがだが彼女を見ていると懐かしい気分になるのはなんでだろうと考えている。

「・・・・・・・・君は？」

「まあ驚くよね？なんで私があなたたちを知っているなんて・・・・・・・・ちよつと待つてね?」

彼女は離れると光出して彼女の服などに何かが装着されて行く。両肩部には何かの発進カタパルトなどが装着されて後ろ部分もフライトユニットみたいになっておりその横部には砲塔が装着されている。

「嘘だろ・・・・・・・・」

「あなたは!？」

「アークエンジェルなのか!？」

「そう私の名前はアークエンジェルよ!!」

アークエンジェルと名乗った女性は笑顔で素晴らしいストライク達は驚くばかりであった。

アークエンジェル

ストライク side

私達の前に現れた女の子、アークエンジェル……まさか彼女がこの世界へ来るとはしかも私たちと違い擬人化つて奴ですかね？ 現在私たちは彼女を月村家を案内をしているところです。

そして現在は地下ドック、アークエンジェルとガンダムサイが収納をされており彼女は懐かしそうにアークエンジェルを見ている。

「うわー懐かしいわー私の体。まさかこうして自分の体を見ることになるなんて思ってもいなかったよ」

「まあそりゃあそうだろうな。てかなんでお前がここに？」

「あー戦いが終わってから戦争などは起こらなくてね。私自身も老朽化をしていたからそれで解体をされたのよ。それで気づいたら空においてフリーダムとジャスティスに支えてもらったって感じかな？」

そうですか、向こうの世界では戦いが終わったのですね。ではどうしてキラとアスランはこの世界へと来たのでしょうか？ それに関しては不明ですね……いずれにしても原因がわからないですがアークエンジェルが先に行ってしまうので私達も追いかけます。

「ストライクただいまー」

「「「お邪魔します!!」」」」

「おっす!!」

「お邪魔をするぞ?」

「おかえりなさいませすずか様、それに皆さまもいらっしやいませ」
「ストライクその人は?」

「この方は」

「私の名前はアークエンジェルって言うのよろしくね?」

「「「アークエンジェル!?!」」」

「あの船の名前の!?!」

「そんなに私変なこと言った?」

「いいえ言っていないと思うが……」

それからデュエル達も家へとやってきてアークエンジェルは驚い

ている。

「おいこの女はなぜ俺たちを見て驚いている？」

「なんか懐かしい気がするが気のせいかな？」

「バスター、お前は搭載されていたからな．．．こいつはアークエンジェル．．．俺達が足つきと呼んで攻撃をしていた船だ」

「何!?!」

アークエンジェルの方を見ると彼女は涙を流していた。

「ど、どうしたんだ？」

「あ、ごめんごめん．．．だってこうして五機が揃っているのを見て本来だったら敵対同士じゃないのって思ってたね．．．それでこの光景を見ていたら涙が出て来ちゃった」

「!!!」

私達五機は何も言えませんでした。私たち以上にアークエンジェルはつらかったのでしょうか．．．本来は自分に搭載されて運用される予定だった私たち、そのうち四機はザフトに奪取されて自分たちの敵として何度も戦いましたからね。

だから彼女自身は涙を流したのですね。

「なんかその悪かったな．．．」

「あ、ああ．．．」

「ええ．．．」

「大丈夫大丈夫．．．うんでもこうして皆がそろったのを見て私は安心をしたかな？」

とりあえずリインとアジーさんには色々と言話を話して現在私たちはアークエンジェルに案内をしているところをすずか様たちがお帰りになったのでアークエンジェルは装着をしてカタパルトハッチが開いた。

「いったい何が搭載されているの？」

「発進スタンバイ進路クリアどうぞ」

すると発進をしたのは私自身です。え？

「わ、私!?!」

「ストライクだー」

エールストライカーを装着をしている私が現れたのですが……小さくありません？ほかにもイージスやデュエル、バスター、ブリッツなども現れたのですが小さいですよ。

「うーん私が通常の大きさじゃないから搭載されているMSが小さくなったかもしれないよ。ほかにもフリーダムやジャスティスもあるし」

「僕たちもあるんだ……」

ほかの皆はアークエンジェルの搭載されている武装などをチェックをしています。オルガさん達もまさか船が人になるとは思ってもいなかったのに驚いていますね。

彼女はローエンジンを出したりゴッドフリートを出したり、バリアントを出したりと色々としてから解除をしてふうといっている。

ストライク side 終了

一方でギンガは訓練場でバリアージャケットを纏っている。さらにカラミティ、レイダー、フォビドゥンがそばに立っている。

「さーて早速だがユニゾンをするぞ」

「ユニゾン？」

「そ僕たちは今はギンガの使い魔みたいなものだからねー」

「俺達はお前と一つになることで俺達の力が使えるようになるって感じだね？」

「なるほど……それでは早速!!カラミティお力をお借りします!!」

「えつとなんだその掛け声？」

「いやユニゾンなんてできるとは思ってもいなかったからそれで……」

「まあいいか……おう!!」

カラミティが光りだしてギンガの中へと入っていき彼女のバリアージャケットが光りだしていきカラミティの幻影が合体をしている。

そして彼女の装甲にカラミティが使用をする武装が次々に装着される。彼女は目を開けて構える。

「す、すごい!!力がみなぎってくる!!」

『どうだギンガ?』

彼女はトータスブロックやシールドを持ちながら構えている。背部に装着されているシユラークを動かしたりと色々と楽しんでた。

「すごいすごい!!」

『だろ?さらに!!』

彼女のバリアージャケットが光りだしていくと今度は赤い装甲状態へとなりソードカラミティモードへと変わる。

『接近主体だ。俺はこうして装備などを変えることができるってことだ』

「すごい・・・」

カラミティが出てきて今度はフォビドウンが隣に立つ。

「じゃあ次は俺」

「フォビドウン、力をお借りします!!」

「はいはい」

フォビドウンが光りだしてギンガの中へと入っていき彼女のバリアージャケットが光りだしてフォビドウンの装備がされていく。

背部などが重いのかと思ったがあまり重く感じない。

『それをかぶってみろよ』

ギンガは言われたとおりにかぶるとモニターなどで前が見えるようになる。さらに背部ユニットなどが動いてこの状態でも攻撃することが可能なんだと・・・さらに飛んでみると高軌道タイプで鎌を構えてターゲットを切り裂く。そのまま背部ユニットを開けてギンガが出てくる。

着地をしてフォビドウンが幻影の姿で出てくる。

『さらに俺は水中モードができるんだぜ?』

光りだすと青い色に装甲が変わって背部ユニットなども変わっている。

「これが?」

『そそ水中でも追いかけることができるってわけ』

フォビドウンが出てきて最後はレイダーが隣に立つ。

「ぎーていくよギンガ!!」

「はい!!レイダー力をお借りします!!」

「はーい!!そーれ!!」

レイダーが入りこんでギンガのバリアージャケットが光りだしてレイダーの装備などが装備されて行く。だがツォーンは口なのだが頭部ユニットに何かが装備されている。

「これって?」

『ツォーンだけど流星にギンガの口からってわけにはいかないから頭部ユニットに装着させたわけ。さらに僕自身は空を飛ぶことができから浮いてごらん』

レイダーの言われたとおりに浮くイメージを浮かせると空を飛んでいる。彼女は変形を試してみた。背部ユニットが背面へとなり彼女は正面を向くとモニターが現れる。

両手などは固定されているが武装などはクローなどが展開されているので彼女はモニターを見て飛んでいる感じになる。

地面に着地をしてギンガからレイダーが出てきて改めて彼女はお札を言う。

「ありがとうカラミティ、レイダー、フォビドゥン……」

「気にするなっ」

「そうそう」

三機は素晴らしい彼女の肩に乗ったり頭の上に乗ったりする。さて場所が変わり海鳴市ビルドストライクは夜空を見ている。彼が見ている場所は人では来れない場所なのでこうしてゆつくりと空を見ていると近づく人物がいた。

「アークエンジェル……」

「やつほーストライク、って今はビルドストライクだっけ?隣いい?」

「ああ構わないよ」

ストライクの隣に座るアークエンジェル、彼女は空を見ている。

「本当綺麗な夜空。戦争をしていない世界なんてないと思っていた。」「俺も最初はそう思っていた。けど忍さま達に拾われてここで生活をして楽しいことばかりだよ。」

「ふふそうね……ねえストライク」

「なんです!？」

突然としてアークエンジェルが抱き付いてきた。ストライクは驚いているが彼女が震えているのを感じた。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさい」

「あ、アークエンジェル？」

「私のせいでああなたが……」

「そのことか、気にしていないよ。仲間たちを守るために爆散をしたんだ後悔はしていないよ」

「で、でも……」

「いいじゃないか、こうして巡り合えたんだ。もしかしたらドミニオンもこの世界にいるかもしれないよ?」

「だいたいけど……」

ジャンク屋

ここはミッドチルダにあるジャンク屋、ここでは何でも修理をしてくれる人物が12人の子ども？たちと一緒に住んでいるという噂がある。

その人物が今戻ってきた。

「ふうやれやれルー戻ったぞー」

するとドダダと足音が聞こえてきてオレンジの髪をした女の子が彼に抱き付く。

「ジュードーお帰りー」

「おっとプルか、ほかのみんなは？」

「ほかのみんなも来るよ!!」

するとどどどどと音が聞こえてきて彼に抱き付く。

「ジュードー!!」

「ジュードーだ!!」

「ジュードーお帰りなさい!!」

「どああああああああああああああああああああ!!」

彼に抱き付いているのはエルピー・プルほかのプルシリーズである。すると水色の髪をした女の子がやってきた。

「あーもうあんたたち!!まずはジュードーから離れなさい!!」

「もうルーはジュードーを独り占めするー」

「いいの夫婦なんだから!!ほらスリー、フォー、ファイブ、あんたたちもよ!!」

そういつてルーは彼女達をひよいひよいとはがしていきジュードーを起こす。

「悪いなルー」

「もうおかえりジュードー」

「ああ」

彼の名前はジュードー・アーシタ。かつてエウーゴでZZガンダムに搭乗をしてハマーン・カーンと戦った男である。その彼の傍にるのはルー・アーシタ。ジュードーの奥さんでもありエウーゴではZガンダ

ムに乗り戦った。

彼らは木星で結婚をして生涯を閉じたはずなのになぜかこの世界に転移をして若返っている。彼らの仕事は何でも屋というかジャンク屋である。

修理などは彼らがするので管理局員もここへ来ては調整などをしてもらっている。評判もいいので彼らはなかなかいい生活を送っているが……ジュドーたちは中へと入ると本を読んでいる人物が彼らの方を向く。

「おかえりジュドー、プル達にやられたみたいだな？」

「プルツーわかっていたなら止めてくれよ」

「あいつらが簡単に止めれるとでも思っているのか？」

「だよなー」

「だが不思議だ。」

「ん？」

「死んだはずの私達が再び生を得てジュドーと再会をした。私やプルだけじゃない全員でだ……」

「そうだな、俺も最初音が聞こえてみたら何事かと思ったらお前達が倒れていたからな。」

「さてそろそろマリーダが帰ってくるな？」

「ああ」

ドアが開いた音が聞こえて扉が開く。マリーダ・クルスである。

「ただいま戻りました。」

「おかえりマリーダ!!」

「ああプル姉さん……」

「……なんていうかさ、マリーダだけはほかのプルシリーズと違って大人みたいなんだよな……」

「てか大人よ。」

「えつとその……色々とありまして」

ジュドー達はマリーダの過去話は聞かないようにしている。彼女自身もあまり話したくない様子なので、彼は相棒のZZガンダムを見ている。

「なあZZ、お前もこの世界に来ているのはお前の力が必要ってことだろ？ 本当俺達をこの世界へ呼んだのは何者なんだか……」
ジユドーはそういいながらルーはご飯の用意をする。ほかのプルシリーズ達もルーの手伝いをしている中プルはジユドーに抱き付いている。

「なあプル」

「なーにジユドー」

「何だろうか……落ち着くんだよなー」

「私もだよジユドー」

「……ズルイ」

プルツーはジユドーがプルを抱きしめているのを見て頬を膨らませて素早く移動をしてプルをどけてジユドーに抱きしめてもらっている。

「ぷ、プルツー!!もうなんで邪魔をするの!!」

「うるさい!!いつもいつもプルばかり!!ジユドー!!私だってジユドーに抱きしめてもらいたいんだ!!」

つといつもならないプルツーがここまで言うのでジユドーは抱きしめてあげる。

「あー落ち着く……」

つとこのパターンなのでご飯ができたのでジユドーはプルツーとプルを連れて食事をするところへと移動をする。これがジユドー家の一日である。なおほかのプルシリーズ達も学校へと通っておりマリーダはその先生をしている。

さて場所が変わり海鳴市ではイオク・クジャンが再び現れて鉄華団及びストライクたちに襲い掛かってきた。

「またですか!!」

「もうしつこいわよ!!」

アリサはジャステイスを纏い蹴りを入れてレギンレイズを吹き飛ばす。ウイングゼロはビームサーベルを抜いて切りつける。

「……まだいるか……」

「もう!!多すぎるよ!!」

アリシアはアビスガンダムを纏い砲撃をして撃破していく。オルガ達もMSを纏い攻撃をしていきレギンレイズを撃破していくとドリルランスが突き刺さる。

「待たせてすまない」

「おのれ!!ダインスレイス部隊!!」

「イオクさま!!大変です!!」

「どうした!!」

「戦闘機にMSが撃破されています!!」

「なんだと!?!」

「いったいなんだろう……」

「ストライクあれを!!」

アジーの言葉を聞いてストライクたちは見ていると三機の戦闘機が攻撃をしている。するとコアファイター部分が変形をして上半身、下半身が合体をしてガンダムが誕生をする。

「ガンダムだと!!」

「いっけええええええええええええええええええええええ!!」

背部のユニットから翼が発生をしてそのままレギンレイズたちを切り裂いていく。ガンダムとシャアザクは彼を見て驚いていない。

「あれはV2じゃん」

「確かにだがガンダムよ彼が私たちの知っているV2じゃない可能性もある」

「あ、そうか」

V2ガンダムは光の翼で次々にMS達を撃破していき。イオクは撤退をする。

「なんて綺麗な翼なんだ……私のバエルよりは美しくないが……」

「はいはいマクギリス負けているからなバエルが」

「何を言うガエリオ!!我がバエルが負けるはずがない!!」

「いいからとつと帰るぞ。」

ガエリオはマクギリスを引っ張りジュリエッタはなのはと共に帰投をする。ストライクたちはV2ガンダムのところへと行く。

「大丈夫ですか？」

「ええ助かりました。私はビルドストライクと申します。」

「僕はV2ガンダムといます。なんでか知らないのですが目を覚ましたらこの世界にいて……」

「なるほど……（つまり私たちと同じようにこの世界へと来てしまったってことですか……だがなぜ？）」

ストライクは新たな仲間V2ガンダムという仲間を得たがなぜ自分たちはこの世界へとやってきたのかわからない……

ストライク調べる

海鳴市にの月村家、すずかは今日はストライクがいないことに気づいている。忍にストライクはと聞くと。

「ストライクは今日はミッドチルダで調べ物をするって言っていたわよ一人で言っているから。」

「あーだからアジーさん達が騒いでるのね?」

「パパああああああああああああああああああ!!」

「ストライクうううううううううううううううう!!」

二人は叫んでいるので見るとオルガが倒れているのを見て止めたけどやられたんだなと判断をする。

「止まるんじやねーぞ・・・・・・・・」

「オルガああああああああああああああああああああああ!!」

「急いで運ばないと!!」

「えつとどこに運ぶのですか!?!」

つとM1アストレイ達は慌てながら移動をする。さて場所が変わりミッドチルダのビルドストライクは考え事をしていた。

(なぜ自分たちがすずか様たちの世界へとやってきたのか・・・・・・・・それは何かの使命を受けたわけじゃないのに・・・・・・・・なぜ俺達はこの世界へ来ているのか・・・・・・・・)

ストライクは歩きながら考えているが街の中ではまずいと思い彼はスラストスターを展開をしてダツシユをする。彼は街の中を出るとスペキュラムストライカーを装着をしてビームライフルとシールドを構える。

「・・・・・・・・誰だ?俺の後をついてくるのは・・・・・・・・ちい!!」

ストライクはビームが来たので回避をする。だが彼は見覚えがあるのを見る。

(あれはドラグーン?しかも俺が見たことがある・・・・・・・・まさか!!)

「そのままかなのだよストライク!!」

「お前はプロヴィデンスガンダム!?!」

「はっはっはっはっは!!」

プロヴィデンスガンダムはドラグーンを展開をしてストライクに襲わせる。ストライクは回避を専念をしてドラグーンのビームを回避をする。

「く!!」

「はっはっはっは!!」

「この!!」

スペキュラムストライカーに装備されているミサイルを発射させるがプロヴィデンスガンダムはドラグーンを使いストライクが放ったミサイルを破壊をする。

「やはり上手くないかないか……」

「これでもくらうといい!!」

大型ビームライフルを構えてストライクに向けて放つ。ストライクはシールドでガードをするがあまりの威力に吹き飛ばされてしまう。

「ぐうぐうぐうぐうぐう!!」

衝撃を備えて着地をするが地面がえぐれてしまい、ストライクはなんとか態勢を整える。

「さてどうしたのかねストライク。」

「く……（やはりフリーダムとジャスティスと同等に作られているだけあるからな……核エンジンなどもあるからこんなところで撃破をしたら大変なことになる。）」

ストライクは色々と考えていると砲撃が放たれてプロヴィデンスガンダムは回避をする。

「ちい!!」

「今のは……」

「ストライク!!」

「アジーさん、リイン?それにフリーダムにジャスティス?」

「何とか間に合ったみたいだな」

「お前は!!」

「久しぶりだなフリーダム、ジャスティス……くつくつく貴様

達と再び戦えるとはな……………」

「ストライク、奴が……………」

「そうだ、奴がプロヴィデンスガンダム……………かつて俺が中破させられた敵です」

「あいつがパパを!!」

「アジーさん、リイン……………私に力を貸してください……………」

「……………本当は私は嫌だがストライクが言うなら……………」

「私もだパパが力を貸したいというなら私は力を貸す!!」

「ありがとうございます。」

ストライクの手にあジー、リインがつかんで抱きしめると光出してアジーを中心となったスタービルドストライクへと変わる。

「何?!!」

フリーダムたちは久々にスタービルドストライクを見た。彼女は目を開けてバックパックにオオトリを装着をして接近をする。

プロヴィデンスガンダムはビームサーベルを構えて攻撃をしようとしたがアジーは魔法陣を出してその中へと入る。

「何?!!どあ!!」

バックパック部分が爆発をして後ろの方を見るとアジーが現れたので驚いている。

『湖の騎士が使う旅の鏡の応用をさせてもらった。ストライク!!』

「アジーさん体を借ります!!はああああああああああ!!」

現在ストライクの人格となりプロヴィデンスガンダムは攻撃をするがストライクは腰部につけているビームサーベルを抜いてダッシュをしてプロヴィデンスガンダムの両手を切り裂いた。

「ぐお?!!」

「はああああああああああ!!」

そのまま連続して切りつけていきストライクの人格のアジーはとどめを刺すために大剣を抜いて構える。

「これで……………く!!」

「悪いがこいつをやらせるわけにはいかないんだよ!!行けよフアング!!」

アルケーガンダムが放つファングがスタービルドストライクア
ジューに襲い掛かる。

「パパ変わるぞ!!ブラッティーダガー!!」

リインに変わりブラッティーダガーでファングを撃破したがフ
リーダムたちは接近をして攻撃をするが、アルケーガンダムはGNバ
スターソードを抜いて二人を薙ぎ払った。

「うわ!!」

「さーて撤退だ!!」

アルケーガンダムは撤退をしたのを見てアジューは光りだしてスト
ライク、リインに分離をするがストライクは膝をついている。

「パパ!!」

「ストライク!!」

「大丈夫………です。少し……だけ疲れてる………だけ
ですから………」

「ジャステイス」

「ああ俺たちで連れて帰るとしよう」

二人はストライクを抱えてリインが転移魔法を使って月村家へと
戻る。

さらばガンダムフォース

ストライク達が襲われている中、キャプテンガンダムはガンダムサイのチェックをしている。修理などはストライク達が手伝ってくれたこともありいつでも飛び経つことが可能であるがネオトピアの位置がわからない以上動くことができない。

『キャプテン』

「どうしたライミさん？」

『通信が入っております。これは……ネオトピアです!!』

「すぐに繋げてくれ」

『了解です』

ライミが通信を開くとハロ長官が現れる。

『キャプテン!!無事だったのだな?』

「ハロ長官申し訳ございません。次元の影響でガンダムサイも壊れてしまい通信ができなかったのです。」

『君達全員が無事で何よりだ。』

「ハロ教官、私達は帰投をしようと思いましたがすぐに戻るのだけはお待ちになってよろしいでしょうか?我々がお世話になった人たちにお礼などを言いたくて」

『わかった。一週間後にまた会おう』

「了解」

通信を切りキャプテンはガンダムサイから降りてシユウト達がいるので声をかける。

「皆、先ほどネオトピアとの通信がとれた」

「では帰れるのか?」

「ああガンダムサイにザクレロゲートとの通信が可能となった。一週間後ここを立つことになる」

「なるほど、ここの人たちにお世話になったからな……」

キャプテンは忍たちに通信がつながり一週間後ここを去ることを伝えると忍は寂しそうに見ている。

「そう一週間後ここを去るのね……寂しくなるけどあなたたち

を待っている人がいるからね。私は止めないわ……」

「お世話になりました忍さん、あなた方がいなかったら私達は……」
「気にしなくていいのよ？ここにはたくさんのMSがいるからね。でもまた会えるのよね？」

「ええこの次元は登録をしましたのでまたいつか……」

それからストライクたちも帰投をしてキャプテンたちが一週間後ここを出発することが報告される。ストライク達も寂しそうにしていたが彼らにも帰る故郷があるからなと判断をしてお別れを会をすることにした。

ストライク side

キャプテンさん達が帰ることになり、私達は彼らを見送る会をすることになりドタバタしている。私もメイドとして彼らを送らないといけないのでほかのガンダム達に指示を出して働いてもらっています。

「はあ多いですね。爆熱丸さんがおにぎりがいいといえますからこうして作っていますがどれくらい食うのかわかりませんよ」

そういいながらおにぎりを握っていきたくさんできている。キャプテンさん達には色々と助けてもらっていましたがからね。忍さんなんかシユウト君が作ったものに驚きながらも二人は話しているのを見ていましたし本当に彼らが去った後が寂しいですね。ですがいつかは別れは来るものです。

「……………」

「ストライクどうしたの？」

「あ、いえお嬢様何でもありません。」

いけないいけない別のことを考えてしまっていた。いつかはすずかお嬢様たちとお別れをするかもしれないから……プロヴィデンスガンダム……まさか奴もこの世界へやってきているとは思ってもいなかった。いや自分がここにいる時点で奴もいると思わないとダメだったな。

キラとアスランも彼らには戻る世界がある。ならアジーさんもあのじゃないか？彼女はほかの皆さんと違い死んでいない……

だから彼女を待つ人がいる。それを考えると私は彼女を引き止めているだけじゃないのか？

「・・・・・・・・・・はあ・・・・・・・・・・」

駄目ですね。完全に弱くなりました。以前の自分ならこんなことを考えたりすることはなかったのに兵器として生まれてきた自分が人のように暮らしている。それが幸せなのかわかりません。ですが今言えることは兵器として生まれてきた自分もこの世界で暮らしているように・・・・・・・・・・人と共存をしているのを感じています。それが幸せと今はほこつてもいいでしょう。

ストライク side 終了

ガンダムフォースの面々と過ごして一週間というのはあつという間にたつ。月村家地下ドック、アークエンジェルの隣のガンダムサイは発進準備をしておりキャプテン達は旅たつ。

「お世話になりました忍殿」

「お世話になりました!!」

「私達も寂しくなるわね。この家も・・・・・・・・・・だけど忘れないでほしいわ。ここはあなたたちの第二の家と思ってもいいのだからね？」

「お前たちといた日々、拙者にとつても忘れるものではない!!」

「ああまた君達に会えることを祈る。」

そういつてゼロと爆熱丸達は乗りこんでいき最後にキャプテンも敬礼をしてガンダムサイの中へと入っていき扉が閉まる。ストライク達はアークエンジェルに搭乗をして彼らを最後まで見送ることにして二隻の船は地下ドックから発進をして飛びたつ。ストライク達はキャプテン達に敬礼をしてガンダムサイは発生をしたザクレロゲートの中へと入っていきネオトピアへと帰還をする。

「行ってしまったな」

「ええ、ですがまた会える気がします。」

「ストライク・・・・・・・・・・」

場所が変わりジェイル研究所

インパルスはビームライフルを構えてターゲットを撃破していた。現在彼が装備をしているのはデステイニーシルエツトである。高工

ネルギー砲を構えて発射をして撃破するとフラッシュエッジを構えてそれを投げつける。

クアットロはデータをとりながらインパルスが最近無理をしているんじゃないかと思ってしまう。

『クアットロターゲット追加を頼む』

「インパルスお兄様、今現在2時間続けてしております。少し休憩を」
『そうは言ってもらえないさ、お前らを守るためにもな……頼む』
「これで最後ですよ？」

クアットロは最後のターゲットを出してインパルスは背部のエクスカリバーを抜いて構えて突撃をしていく、彼女がいる場所にディイチ、トーレの二人が入ってくる。

「クアットロ、誰かシュミレーションをしているのか？」

「あ、インパルス兄さんだ」

「兄上が使っているのか？」

「ええ2時間も続けてね？」

「2時間も!？」

「無理をしているじゃないかな？インパルス兄さん」

「私も先ほど注意をしたばかりだけど聞いてくれないのよ」

3人はインパルスがエクスカリバーを使いターゲットを撃破したのを見てシュミレーションを止める。インパルスはシュミレーションが終わったのかと思いい武器を収納をして歩こうとしたが突然として意識がブラックアウトをして倒れる。

「兄上!!」

トーレ達は急いでインパルスのところへと行きジェイルがいる場所へ運ぶ。一方でジェイルたちはダブルオーやインパルスのために武器などを作っていた時にトーレ達が入ってきた。

「うわ!!びつくりをしたどうしたんだい？」

「父さん!!兄上が!!」

「インパルス君がどうしたんだい？」

「突然として倒れてしまつて……それで急いで運んできたんです」

「わかった。すぐに調べるとしよう。デイエチ、インパルス君をそこに寝かせてくれ」

「わかった」

デイエチはそういいながらインパルスを寝かせるとジェイルはすぐに彼にケーブルなどをつなげてモニターを見ながら彼の状況を調べている。

「ふーむ各関節が赤ゲージになっているな、すぐにパーツ交換を行わないとね。しかしインパルス君がここまで関節を無理に動かしているなんて気づかなかった。最近になってだよこんなことになったのは。」

「私達も兄上が最近無理をしているような感じがしているのです。」

「ふむ……彼が目を覚ましたら話をするとしよう」

インパルスの思い

「は!!」

インパルスは起き上がり辺りを見ていた。自分は確かシユミレーション室で訓練をしていたがなぜベットの上で寝転んでいるのだと考えていると扉が開いてウーノが入ってきた。

「ウーノ?」

「目を覚ましたみたいですねお兄様」

ウーノはホツとしているのでインパルスはもしかして自分は倒れてウーノたちにここまで運ばれたということになるなど判断をしてお礼を言う。

「すまんウーノ迷惑をかけたな」

「…………お兄様、なぜあなたはそこまで無理をするのですか? 皆にはあれだけ言って自分は…………私達はそこまで頼りにならないのですか?」

「それが違う、ウーノ悪いが皆を呼んでくれなぜ俺が無茶をしたのか話をするよ」

「わかりました」

ウーノは全員を呼びに行きインパルスは拳を握りしめているとジエイルを始め全員が駆けつけてきた。

「インパルスにい大丈夫!?!」

「ウエンデイ大丈夫だ。さてお前達は気になっていたな…………なぜ俺があそこまで必死になっているのかを、俺はある夢を見てしまった。お前らが殺されてしまう夢をな」

「!!」

「敵はわからないがお前達が血だらけになって倒れていて俺は自分の無力を感じてしまった。最初ここで過ごしている時はそんなことはなかった。だが長く住んでいてお前達に本当の意味で家族つてのを守りたくなつたんだ。俺は俺は…………」

「兄上…………」

「お兄様」

インパルスは拳を握りしめながら震えていたのでそこにセツテが彼の左手を包んでいた。

「セツテ？」

「私達は強くなります!! 兄様と共に!!」

「そうだな、我々も同じだ兄上。」

「トーレ……」

「だなそんな夢あたしたちで破ってやるぜ!!」

「その通りっす!!」

彼女たちの決意をした言葉を聞いてインパルス自身はふふと笑い彼女たちが成長をしていくのを楽しみにしながらあのよう夢にならないように自分も頑張るとしようと思いを固める。

一方で場所が変わり海鳴市では？

「パパー……」

いつも通りにリインフォースが抱き付いてきているのでストライクは苦笑いしながら仕事をしていた。アジーはぎりぎり歯ぎしりをしていて仕事をしているのでイライラしながら仕事をする。

「……」

キラとアスランもその様子を見ながら仕事をしていた。主に機械関連の仕事になるが忍の手伝いをしていた。

ストライクは背中にリインフォースを乗せながら仕事を続けており彼自身はもう気にしないことにして仕事に集中をしていた。その前に一度リインフォースを降ろしてからメイドストライカーを装着をしてまたリインフォースを上に乗せて上部のが動きだしてリインに指示を出す。

「リイン、悪いのですが上の窓の部分お願いします」

「わかった!!」

彼女はストライクに言われたとおり窓をふいており、ストライクはゆっくりと移動をしながら窓を吹いていた。

そこから食事をする時間となり彼の隣をアジー、リインフォースが座りご飯を食べている。

ストライク達はご飯を食べていたが何かを感じて突然として立ち

あがりすずかと忍はいったい何があつたのかと追いかけていくと
アークエンジェルが収納されている格納庫付近で爆発が発生をして
いた。

みるとイオク・クジャン率いる部隊が攻撃をしていたのである。

「ここに奴らの船がある!!ここで轟沈させてくれるわ!!」

すると砲撃が命中をしてイオク・クジャンはいったい何事かと思て
いるとアークエンジェルが動いておりゴットフリート、バリアントな
どが放たれてMSは回避をしていると砲撃などが飛んできて撃墜さ
れて行く。

「な。なんだ!?!」

「おりゃああああああああああああああああ!!」

「ぐふふうふうふうふうふうふうふう!!」

ストライクの蹴りが命中をしてイオク・クジャンは持っているライ
フルをストライクに放つが実弾をストライクが効くはずがなくそこ
にバルバトスなどを纏った三日月達も到着をしてイオク・クジャンは
おのれーといい撤退をする。

「なんとか脱しましたが・・・・・・アークエンジェルが格納されてい
る場所がばれてしまいましたね」

ストライクはアークエンジェルが格納されている場所が開いてい
たので困つたなと思いつつどうするかと考えていると忍が笑つて
いい考えがあるわといいストライク達は首をかしげていると忍は
アークエンジェルを移動するように言い彼女にお願いをしてアーク
エンジェルは移動を開始をする。その場所は先ほどの場所よりも移
動されており格納されて行く。

「まあ私が念のために作っておいた第二格納庫ね」

全員が思ったこの人いったい何者なんだろうと、一方でストライク
は両手組んで考えていた。なぜイオク・クジャンがこの場所がわ
かったのだろうか。

「どうしたストライク?」

「いいえ一体誰がこの場所をばらしたのかと・・・・・・疑っている
わけじゃないんです考えれることは一つ偵察機がいるって可能性が

ありますね」

はあとため息をつきながらストライクは頭を抱えながら新たな問題を解決をする必要があるなど

ストライクの一日

朝 4時、ビルドストライク、アジー、リインフォーアインスの部屋。

「.....」

ビルドストライクは目を覚まして起き上がり、彼は部屋を出ていく。月村家のメイドとして働いているストライクは毎日この時間に起きて窓掃除などをしている。彼は機械のため疲れることはないが忍は休みを与えているため仕事をこなしている。

今日の彼の予定は朝7時半頃にすずかと共に中学校へ向かうことになっている。護衛のため彼はストライカーの調整を行っていた。

「さて今日はジェットストライカーですずかお嬢様をバス停近くまで飛んで行く感じですね。」

ストライクは整備を完了させるとほかの機体やオルガ達が起きてきたので挨拶をする。

「おはようございます皆さま。」

「ストライク、お前早いな。」

「メイドとして当然のことですよ。」

ストライクは素晴らしいメイドストライカーを装備をして掃除などを開始をする。それからほかの人たちも起きてきてすずかが学校に行く時間となったのでストライクは護衛として一緒に学校へと向かう。ジェットストライカーを装着をしてすずかを抱えて空を飛んでいる。

「やっぱリストライクがいると空を飛んでいるって感じがしていいかも。」

「すずか様もフリーダムを纏えば飛べますよね?」

「まあね。ストライクこちら辺で。」

「了解です。」

ストライクは言われたところに着地をして学校まで歩いていく、彼女達が学校に到着後はアリサの家にお邪魔をしているガンダムとシャアザクに託してストライクは街の方を歩いている。

実はしのぶからずかを送った後は仕事を休んでいいといわれていた。彼は街を歩きながら挨拶をする人たちにお辞儀などをしてから彼は歩いていき大きな木の傍へと来ると座る。

「……………自分がこの世界へとやってきてからだいぶ経ったな。ずか様に拾われて月村家でメイドとして働いてなのは様やフェイト様たちと魔法との出会い、モビルスーツの仲間たちに敵、この世界は色々があるが俺達が今までしてきた戦争ってのがないほどに平和だ。」

ストライクは目を閉じてヘリオポリスの初めての戦いでマリユールとキラが乗りこんだが自分のOSはまだ不完全のため迫りくるジンに対してキラはOSを書き換えて奴らと対等をする事ができるようになった。

だがそれはキラ自身が戦争に巻き込まれてしまうことなる。俺は意識などないからキラに対して声をかけたりすることができない。

「……………はあ……………」

ため息が出た。ロボットのなのにな……………フリーダムからキラが心や体がボロボロになったと聞いたときは自分のせいで彼はそうなってしまったと心の中で思ってしまった。

「……………姿もあの時から変わったからな。ビルドストライクへと変わりパワーアップしてなのは様たちのサポートをしておりますが……………まさか奴がいるとは思ってもいなかった。プロヴィデンスガンダム……………かつて戦い敗れた自分。絶対に負けるわけにはいかない。」

俺は立ちあがりスペキュラムストライカーを装着をして上空を飛び続けて大気圏を突破をして宇宙へとやってきた。

「静かだな……………宇宙上であいつらと戦ったなんてどあ!!」

突然として攻撃が来たので何事かを見るとデュエル、バスター、ブリッツ、そしてイーゼスが武器を装着をして来ていたのでどうやら先ほどの攻撃はデュエルってことか。

「でええええええええええい!!」

「仕方がない。付き合ってやるよ!!」

スペキュラムストライカーからビームサーベルを抜いてデュエルが振り下ろすビームサーベルを受け止める。

「もらった!!」

「おっと。」

バスターから放つ攻撃をデュエルを蹴り入れてから上空へと回避をする。

「はああああああ!!」

「であああああああ!!」

イージスが振り下ろすビームサーベルをシールドで受け止めるとサンダーサートが放たれたのでイーゲルシュテンで破壊する。

俺たちは少し動いてから武器などをしまっていた。

「やはり動かないとなまっちまうぜ。」

「全くだ。」

「だがお前たちはどうやって宇宙まで?」

「ん。」

イージスが指をさした方角を見るとアークエンジェルがいたのでなるほどなどあれで宇宙に上がったのだなど判断をする。それからアークエンジェルへ帰還をして俺達は宇宙から地上の方へと移動をする。

家の方へと戻ってきた私はすずか様たちが楽しそうに話しているのを見てホッとしていた。やはりこの平和な姿を見ているのが一番ですね。

さーて皆さまにお茶を入れて入りますか。

「みなさーんお茶ですよー」

ストライクメイド行きまーす!!

宇宙でイージス達と戦ったストライクはアークエンジェルに搭乗をして地上の月村家へと戻った。

それから数日後なのは達と共にストライクは任務へと向かったのだが……なのは達は苦笑いをしながらストライクに質問をすることにした。

「ねえストライクさん。」

「なんででしょうか？」

「どうしてメイドストライカーなんですか？」

普段ならスペキュラムストライカーなどを装備をするはずなのにメイドストライカーを装着をしていたので彼は気にしないで欲しいと言われて歩いていく。

やがて目的の場所についてストライクはまず何かをメイドストライカーから出したのでヴィータを見るとフライパンだった。

「待てなんでフライパンなんだ？」

「まあここは私におまかせを!!」

メイドストライカーのスラスタが起動をしてストライクは持っているフライパンで入口煮立っている人達の頭を殴った。

「ええええええええ!!」

さらにもう一人にもフライパンで叩いて気絶させる。息をしているので問題ないですねと判断をして先に入って進んでいく。

「おいおいあのフライパン、どれだけ硬いんだよ。」

「さあ?」

ヴィータとなのはは追いかけていく中ストライクはフライパンで敵が放った攻撃をガードをしていくと砲撃が放たれたのでフライパンでガードをしようとしたが穴が空いたのを見て前の方を見ると2体のガンダムが立っていた。

「どうやら僕達以外のガンダムがいるみたいだよ兄さん。」

「そのようだな。」

(別の世界のガンダム?見たことがないな……背部にハサミを

持ったガンダムにもう一体は砲撃が強い機体とみました。」

ストライクはメイドストライカーを解除をしてイーターストライカーを装着をしてビームライフルとシールドを構えて発砲をすると二体のガンダムは動き出して一体のガンダムの両手が変形をしてクロービームを放つ。

ストライクはシールドでガードをするともう一体がハサミでストライクの両手を挟み込んできた。

「な!!」

「僕のアトミックシザースの前で動けると思うな? さあ兄さん!!」

「ああこれで終わらせる!!」

「そうはさせるかああああああああああ!!」

「何!?!」

ヴィータがアイゼンで前のガンダムに攻撃をするとストライクを押さえ込んでいたガンダムにも攻撃が当たり緩んだのを確認をしてストライクは背負い投げでもう一体のガンダムを投げ飛ばした。

「く!!」

「アシュタロン大丈夫か?」

「なんとかね……まさか魔導師たちがいるとは思ってもいなかったよ兄さん。」

「その通りだ。ここは撤退をするとしよう。」

「あなた達は!!」

「私はガンダムヴァサゴ。」

「僕はガンダムアシュタロンだよ。また会うと思うよ異世界のガンダム。この次は必ず僕達が倒してみせるよ!!」

アシュタロンが変形をした上にヴァサゴが乗り二体のガンダムは離脱をする。

(ガンダムヴァサゴにガンダムアシュタロン……また知らないガンダムがこの世界へと現れた。ん?ガンダム反応?)「なのは様、ヴィータさん、この先にガンダム反応があるようなので見てきてもらいましょうか?」

「さっきのとは違う反応なのか?」

「ええ、私の知らないガンダム反応みたいですね。」

三人は先に進んでストライクが反応があつた場所に到着をすると頭部に海賊のドクロの機体が鎖で繋がれているのを見つけた。

ストライクたちは警戒をしながら進んでいきガンダムを触つていた。

「……機能停止をしておりますね。鎖を切ってみましょうか？」
ビームサーベルを使い鎖を切りガンダムを連れて帰ることにした。

ドクロのガンダム

「あーマイフライパンが……」

「「いやそこかよ!!」」

ストライクは前回の時にアシユタロン、ヴァサーゴの二体との戦いで専用のフライパンに穴を開けられたシヨックが大きいため落ち込んでいたがイーゼス、フリーダム、ジャステイスの三体はツツコミを入れる。

現在アークエンジェル内にある整備室にて髑髏がついたガンダムをじーっと見ていた。機能は停止をしており調べているところである。

「……やはり俺達が使用されているのとは違う素材みたいだ。おそらく別世界のガンダムタイプと言った方がいいだろう。まあ付け加えればV2らと同じかもしれないな。」

イーゼスが調べた結果を報告をしてストライクは穴が空いたフライパンを持ちながら近づいてくる。

「とりあえずイーゼス、これ治せない?」

「新しいの買ってもらえ。」

ストライクのフライパンに関してイーゼスは忍に買ってもらえといい彼自身もあんまりだが承知をする。

「とりあえずまずはこいつだな? 起動をさせるが念のために武器を構えておいてほしい。何をするのかわからないからな。」

「わかった。」

ストライクは穴の開いたフライパンをじーっと見ている中イーゼスは機能停止をしているガンダムを起動させるためにスイッチを入れる。

電撃が走りツインアイが点灯をした。全員が構えていると姿が消えてストライクは立ちあがり相手が振り下ろすビームサーベルを穴が空いたフライパンで受け止めようとしている。

だが出力的な問題なのかフライパンの方が押されていた。

(くーなんていう出力なのでしょうか!!このままでは!!)

「パパ！」

「リイン!?」

「ユニゾンをしてパワーを!!」

「わかりました!その方がいいですね!!」

「ユニゾンイン!!」

リインフォースがストライクの中に入り出力などが上がって相手のガンダムの方は押されていく。

「であああああああああああああ!!」

だが先にフライパンの方が切れてしまいストライクは後ろの方へと下がりフリーダム、ジャスティス、イージスはビームライフルを放つが相手のガンダムはマントを装備をしてガードをする。

「ビームをガードをした!?!」

「フォビドウンみたいな奴みたいだな。」

ストライクの方はフライパンを捨ててストライカーをチェンジさせて突撃をする。グシオンストライカーを装着をしてライフルを装備をして発砲をする。

相手のガンダムは回避をしてビームガンを放ち攻撃をしてきた。ストライクはブラツティードaggerを放ち相殺をする。

(さてリイン、とりあえず彼を大人しくさせたいのですが……)

何かありませんか?)

(そうだね、シャマルの鎖を使えばいいかと……)

(そうだね、とりあえず!!セット!)

(了解!!)

リインに指示を出してストライクはスペキュラムストライカーへと装備を変えて飛びあがりビームサーベルを抜いて切りかかる。相手の方はビームシールドを展開をしてガードをするがストライクが仕掛けた鎖が発生をして両手両足に絡ませる。

「!!」

「さーて少し大人しくしてもらいました。さてあなたの名前などを言った方がいいですよ?」

「クロスボーンガンダムX1だ」

「クロスボーンガンダムX1さんですか？それでどうしてあなたは暴れたのでしょうか？」

「木星帝国の奴らの基地かと思ったから。」

「まあモビルスーツがいたらそりや驚くわな。」

全員が納得をしてリインもストライクの中から現れた。いずれにしてもガンダムがこんなにいるとは……まだいるのかな？と思いつつ、ストライクは考えるのであった。

またやってきた人物

月村家、ビルドストライクは新しく仲間になったクロスボーンガンダムX1号機のデータをとっておりそれを新たなストライカーとして使用できないかと制作を開始をしていた。

その隣をアジールとリインフォースが見ていた。

「ストライク、今度のストライカーはどのような形になるんだ？」

「そうですね。クロスボーンガンダムさんの武装などをベースに作る感じですね。接近主体で少し私の体の構成が変わる感じです。」

「パパの？」

「ええ、両手のソードストライカーのように装備されるブランドメーカーに背部バックパックにクロスボーンガンダムさんの武装が入った感じですね。両肩部にはクロールアンカーが装備される感じです。」

「ならバックパックはバルバトスのように設置ができるタイプにするのか？」

「そうですね。」

つと色々な話をしながらストライクは新しいストライカーを作っていく。一方で場所が変わりミッドチルダにある「ジャンク屋アーク」ではジユドーがチェックをしているとため息をついた。

「はあ………」

「ジユドー・アーシタ。」

「またあんたかい？クロノ・ハラオウン殿？」

「あなたほどの腕を見過ぎすほど僕は甘くないですよ？」

「答えは変わらないさ。俺は時空管理局には入らないってね。やるのは勝手だ。だが管理局に入ってからまでやることじゃない。」

「………そうですね、また来ます。」

そういつてクロノは去っていく。プルスリーがじーつと見ておりジユドーに声をかける。

「ジユドー、良かったの？」

「いいって、俺はエウーゴで戦った時に色々とな。」

「まあそれを言ったら私たちだってグレミーのために戦ってきたもの

だからね。プルとプルツー、マリィダが羨ましいよ。」

「今は、こうしているのだからいいだろ？プルフォーたちは？」

「他は今はジユドーが養子をしてくれたモビルスーツ？でいいのかな？それを纏って訓練をしているよ？」

「そうか、いやーZガンダムとかZZガンダムってそういうえば俺のZは？」

「それなら……プルが纏って戦っているよ？」

「まじで!？」

ジャンク屋の地下室でZZを纏っているプル。

「プルプルプルプルー……」

「おい！プル！なんでお前がジユドーのZZを纏っているんだ！」

「いいじゃない！私乗ったことあるもくん！」

「そういうことじゃないだろうが！」

プルツーとプルが言い争いをしているのをほかのメンバーはジユドーが用意をしてくれたMSをチェックをしている。

「ジユドーが用意してくれたモビルスーツって色々あるね！」

「ああ私はこの海賊ガンダムがいいかな？」

プルファイブがいい、プルシックスはとなりのガンダムマークIIを見ながらほかの姉妹達も機体を見ていた。

百式、Zガンダム、メタス、ZIIなど様々なモビルスーツをジユドーは作っていた。それを纏えるようにしていたのでプル達も様々なモビルスーツを纏うことができるのである。

さて場所が変わり月村家ではストライクがいったん休憩をしており新しいストライカーを見ながら彼は現れたプロヴィデンスガンダムなどのことを思いだしながらこれからこのことを考えるのであった。